# 本郷鶴楽遺跡

西毛広域幹線道路(高崎西工区)社会資本総合整備事業に伴う 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

-第2分冊・本文編2-

2023

群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

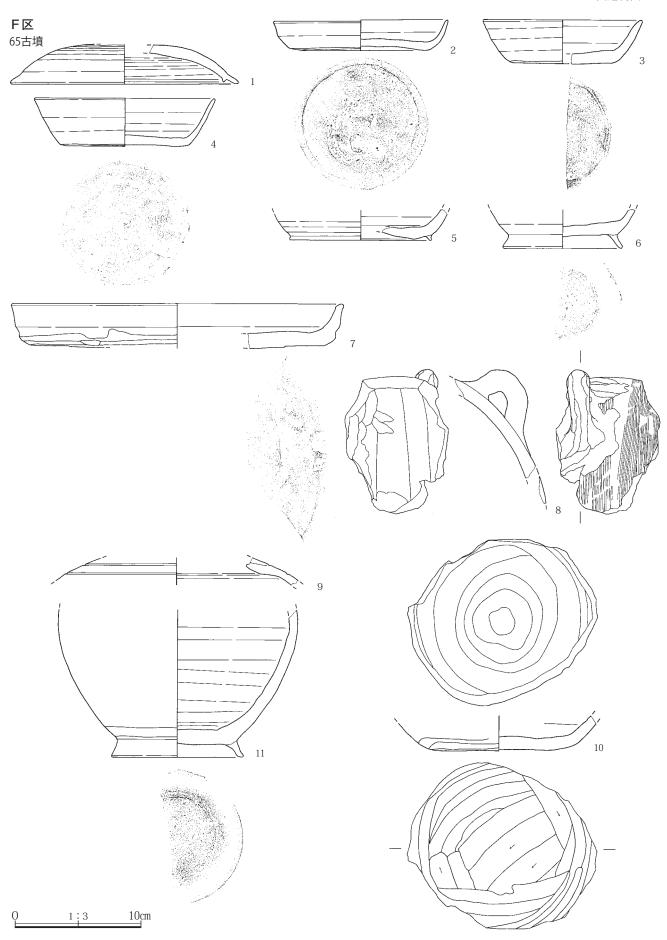
# 本郷鶴楽遺跡

西毛広域幹線道路(高崎西工区)社会資本総合整備事業に伴う 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

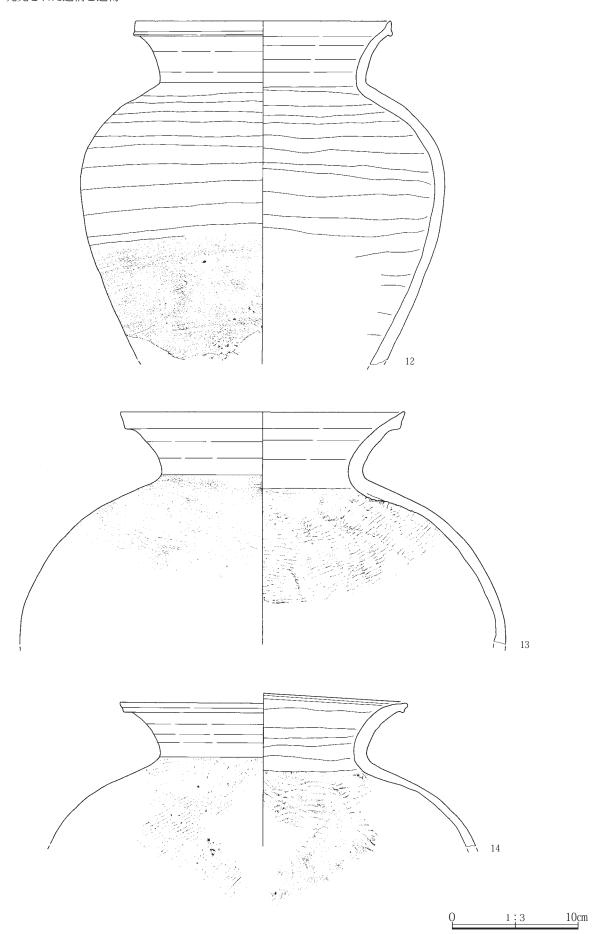
-第2分冊・本文編2-

2023

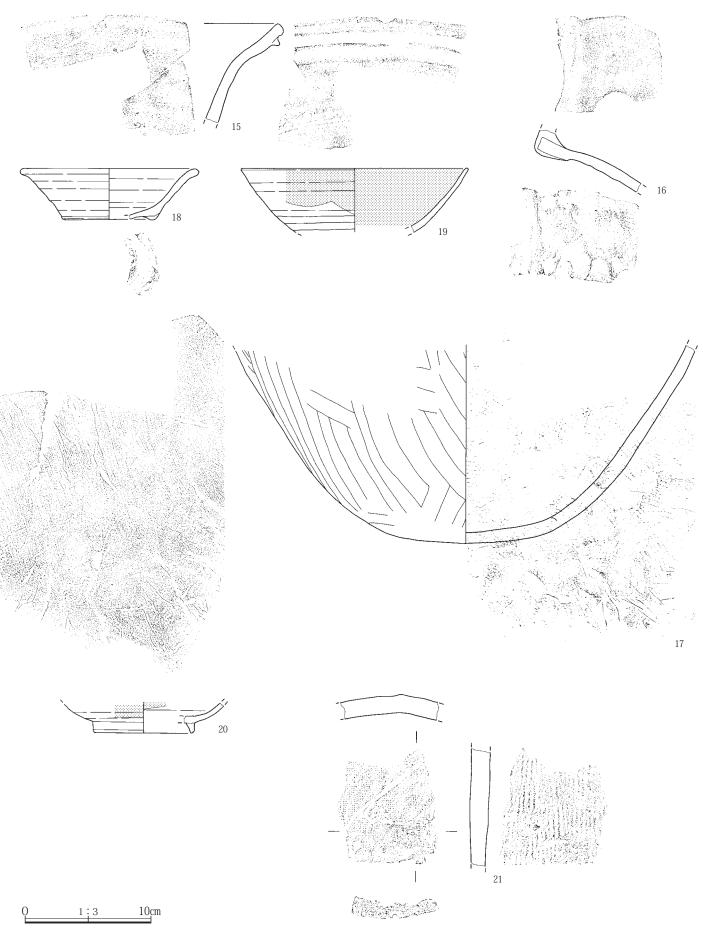
群 馬 県 高 崎 土 木 事 務 所 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



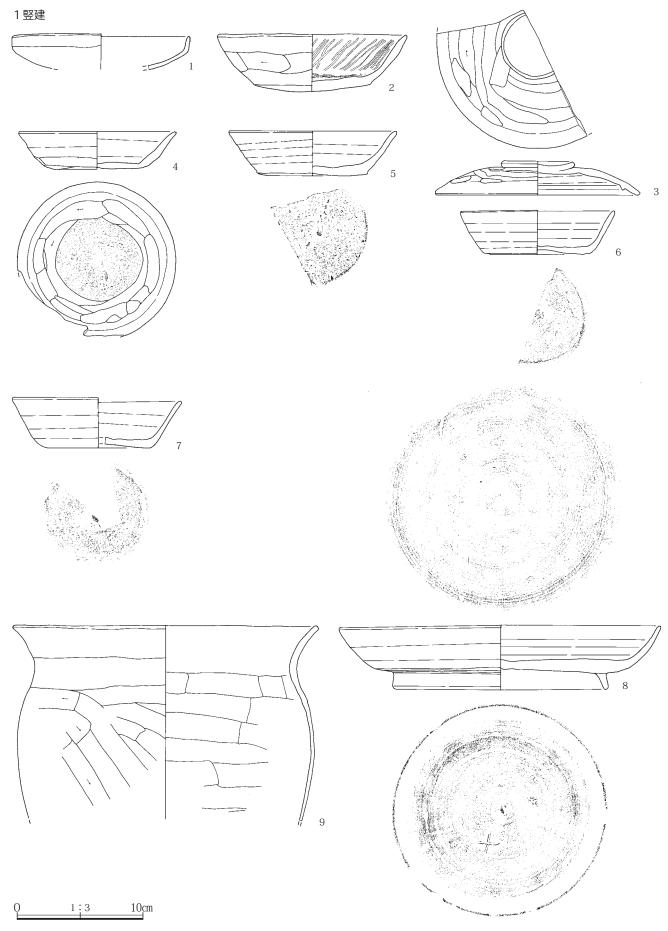
第347図 3面 F区65号古墳出土遺物(1)



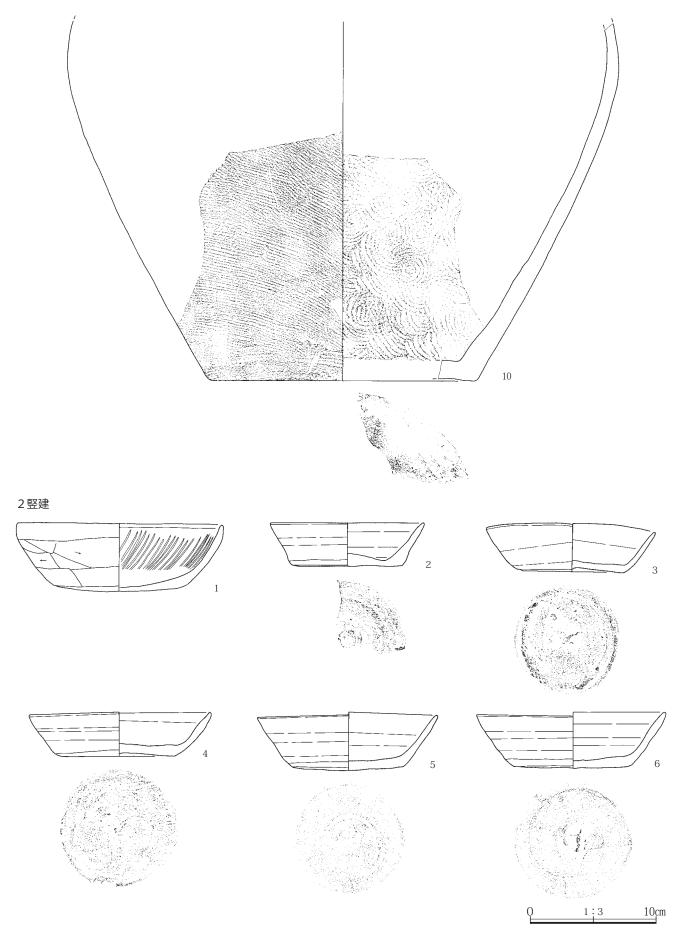
第348図 3面 F区65号古墳出土遺物(2)



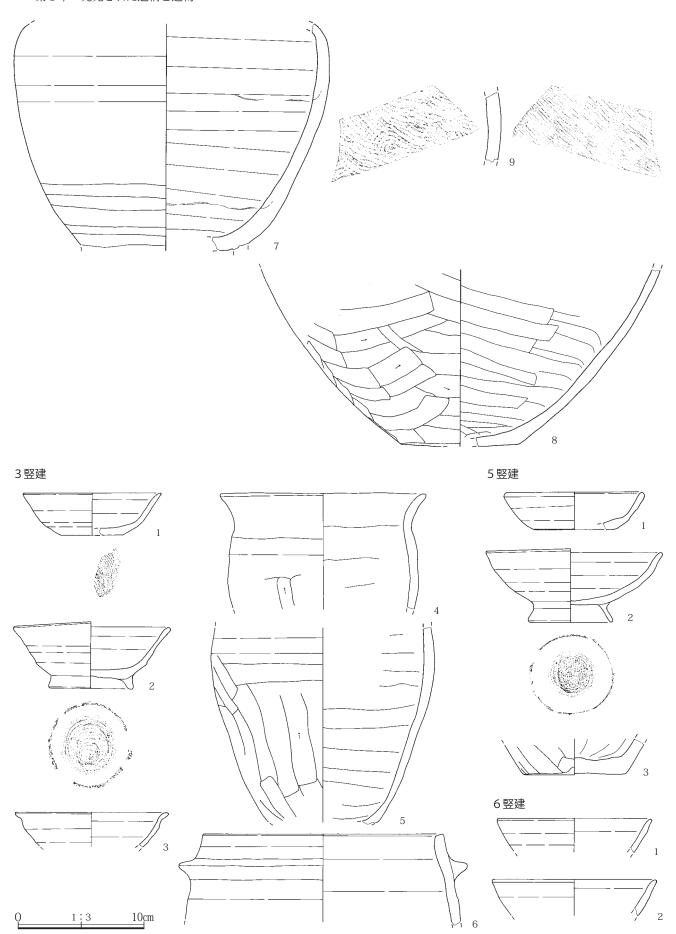
第349図 3面 F区65号古墳出土遺物(3)



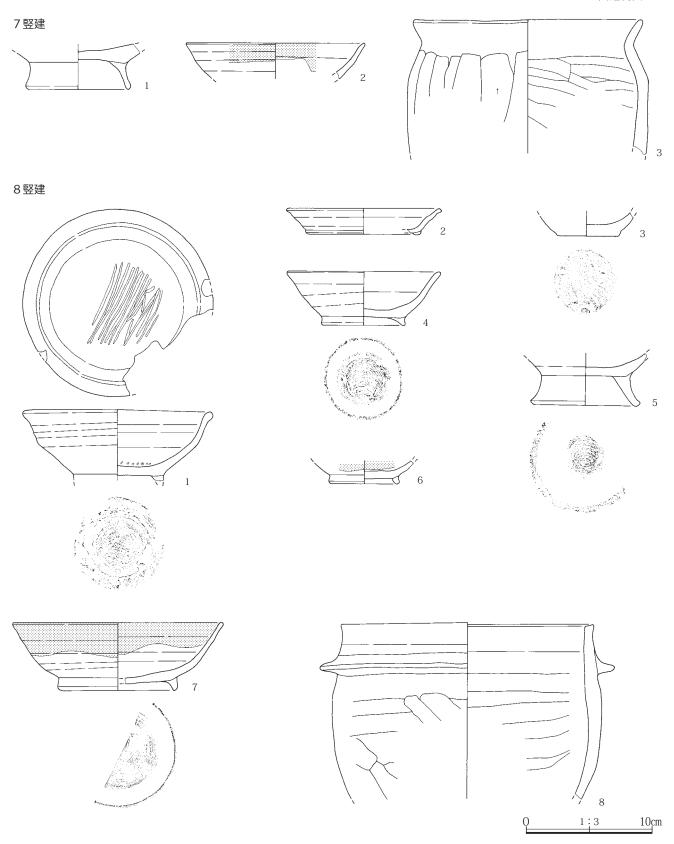
第350図 3面 F区1号竪穴建物出土遺物(1)



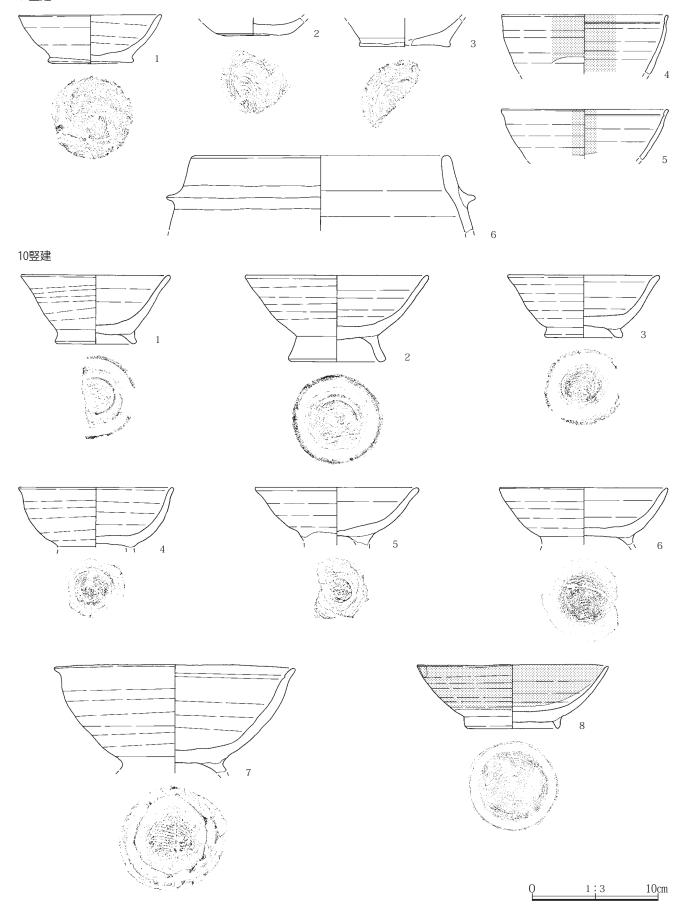
第351図 3面 F区1号竪穴建物(2)·2号竪穴建物出土遺物(1)



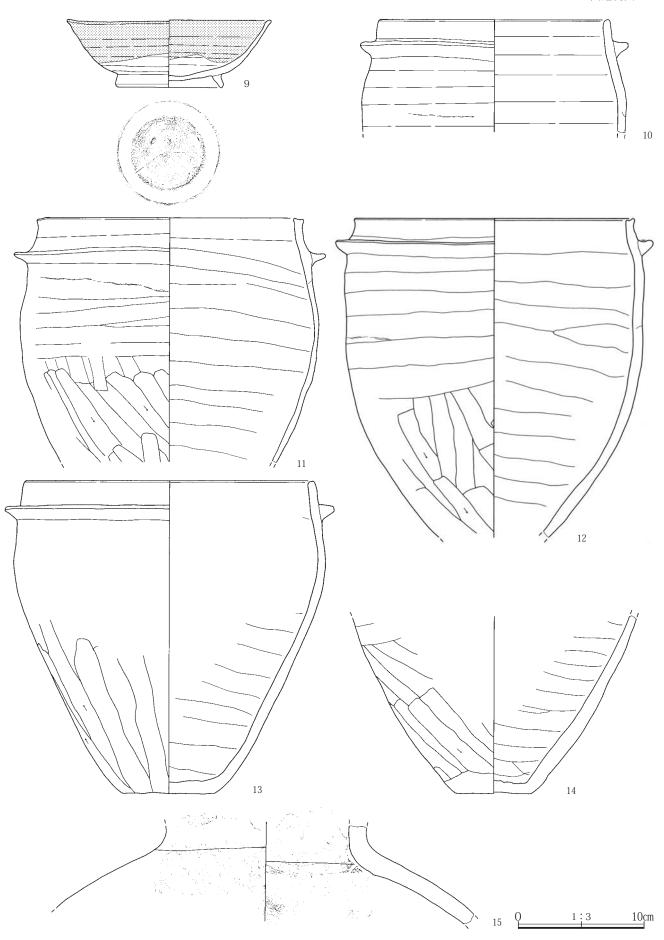
第352図 3面 F区2号竪穴建物(2)・3・5・6号竪穴建物出土遺物



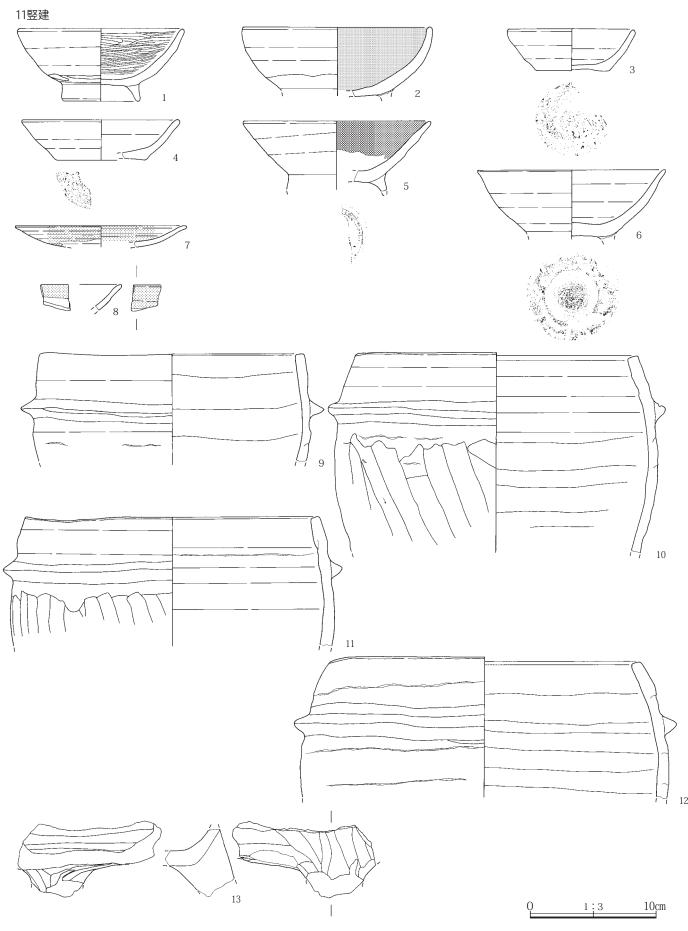
第353図 3面 F区7・8号竪穴建物出土遺物



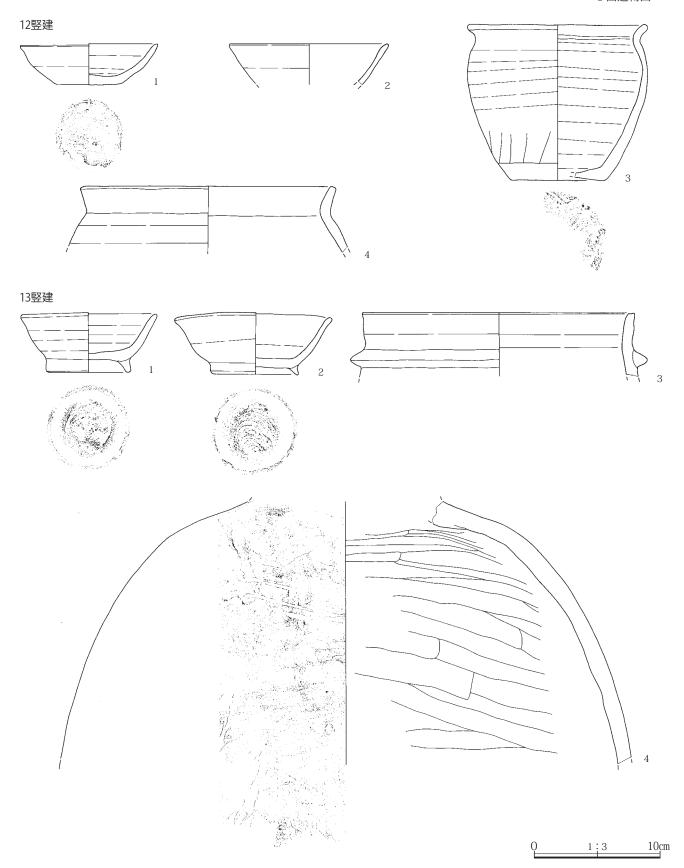
第354図 3面 F区9号竪穴建物、10号竪穴建物出土遺物(1)



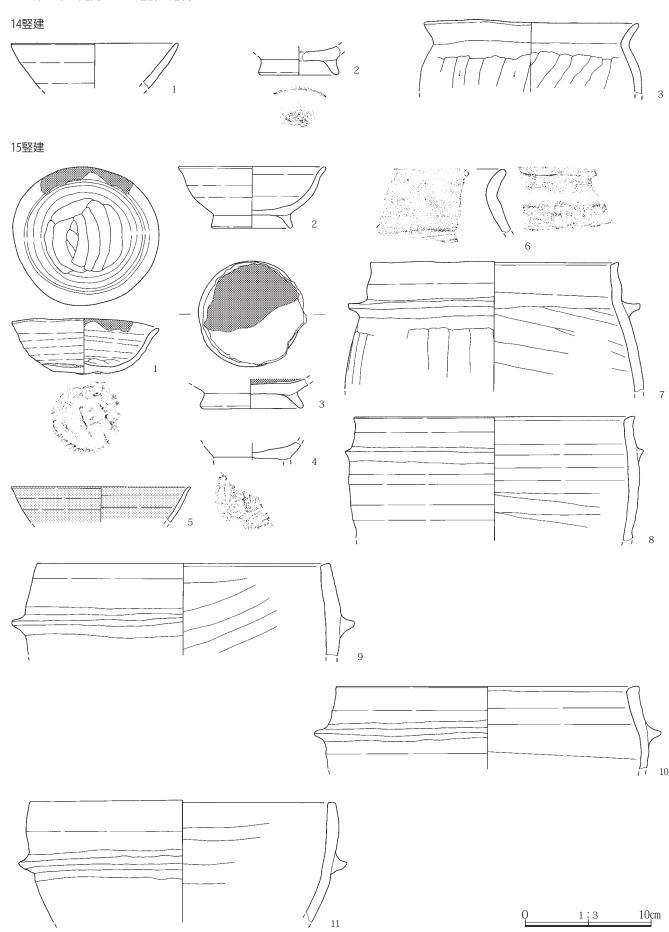
第355図 3面 F区10号竪穴建物出土遺物(2)



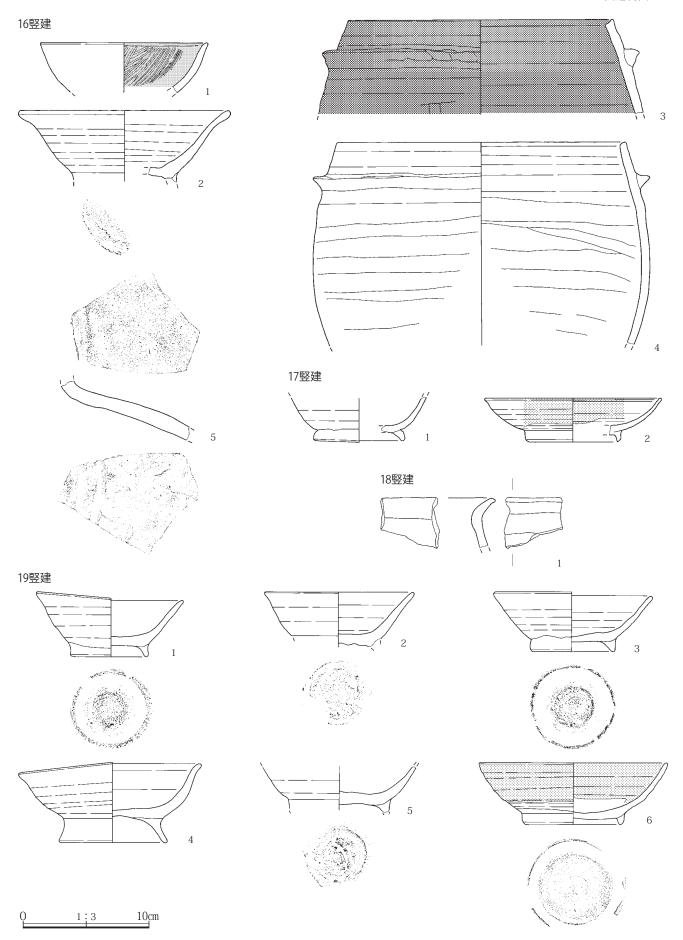
第356図 3面 F区11号竪穴建物出土遺物



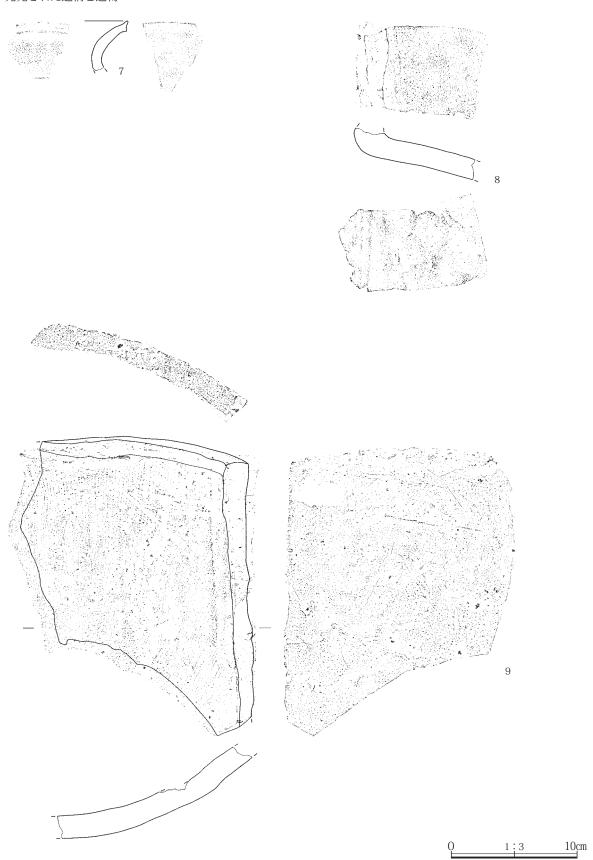
第357図 3面 F区12·13号竪穴建物出土遺物



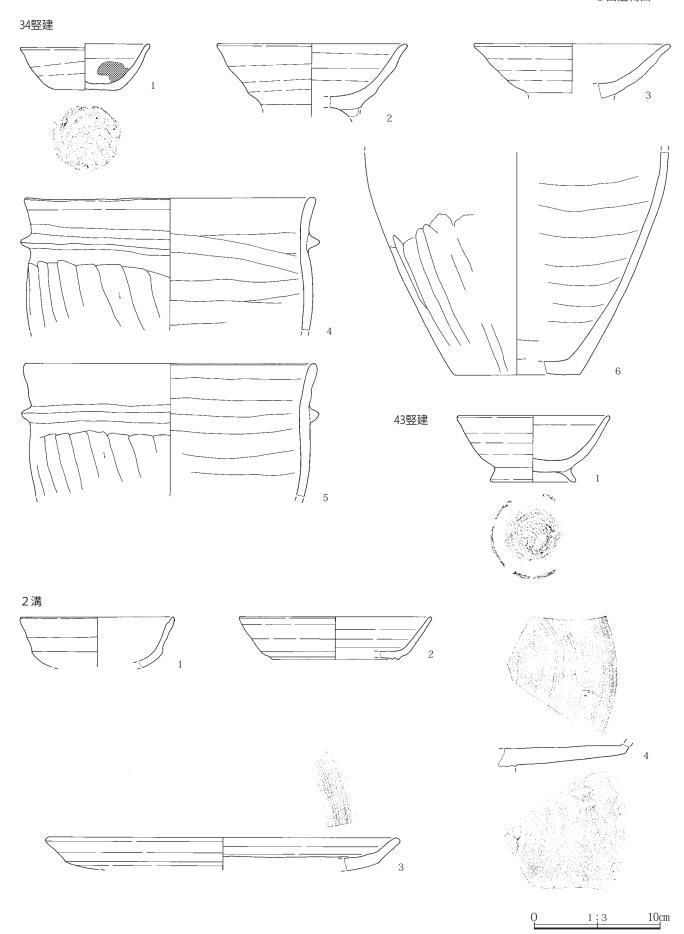
第358図 3面 F区14·15号竪穴建物出土遺物



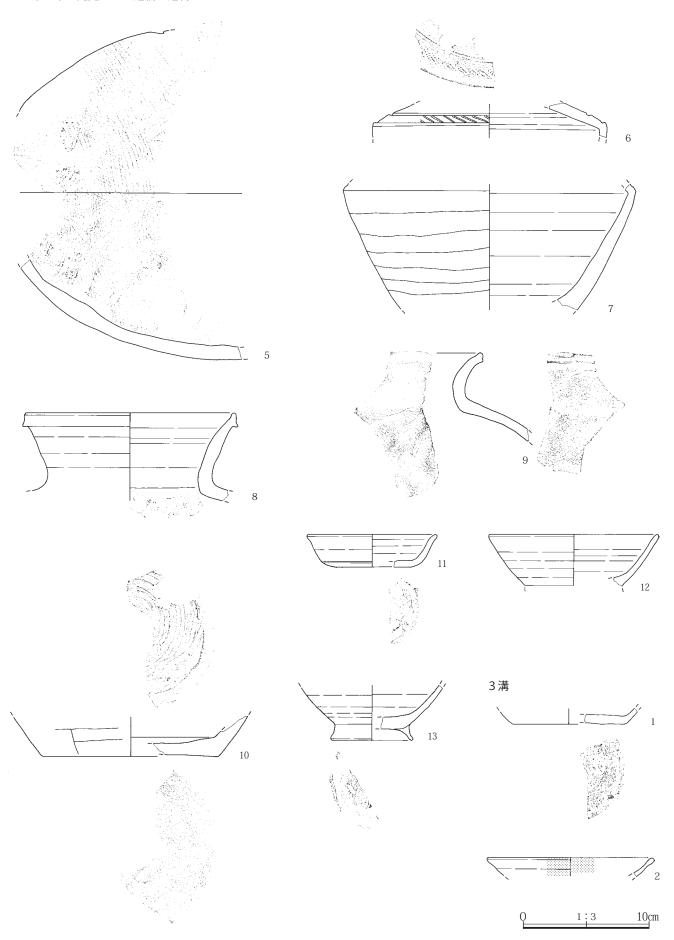
第359図 3面 F区16~18号竪穴建物、19号竪穴建物出土遺物(1)



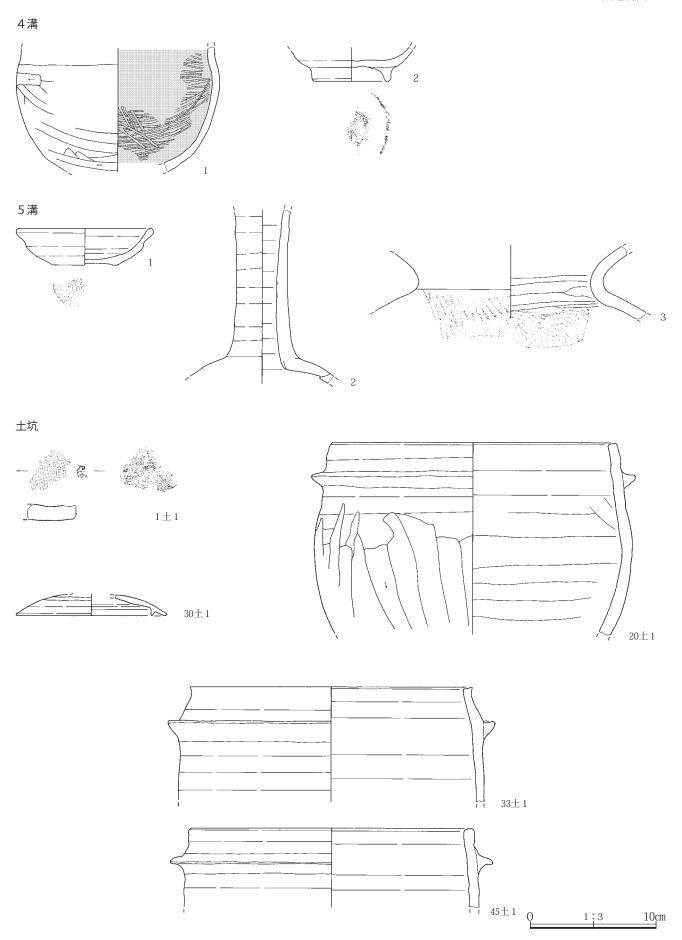
第360図 3面 F区19号竪穴建物出土遺物(2)



第361図 3面 F区34・43号竪穴建物、2号溝出土遺物(1)

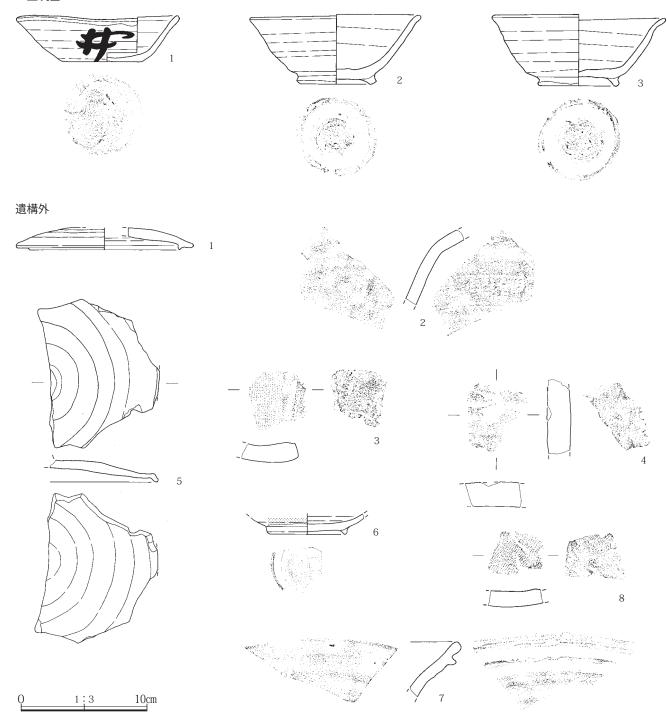


第362図 3面 F区2号溝(2)・3号溝出土遺物

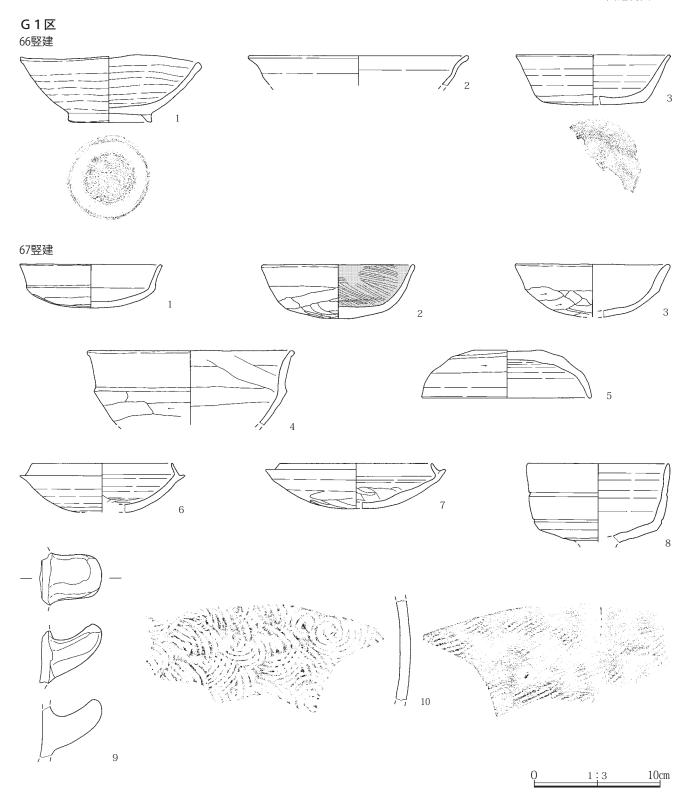


第363図 3面 F区4・5号溝、1・20・30・33・45号土坑出土遺物

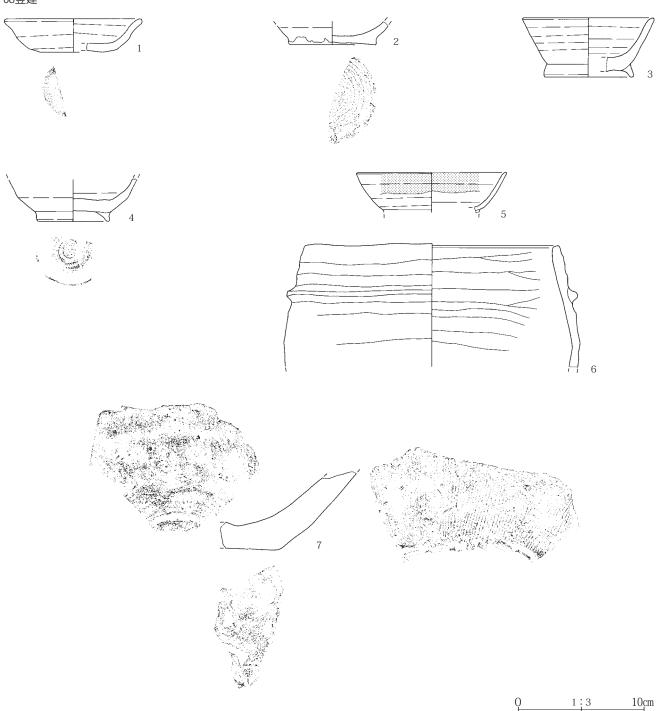
# 2土坑墓



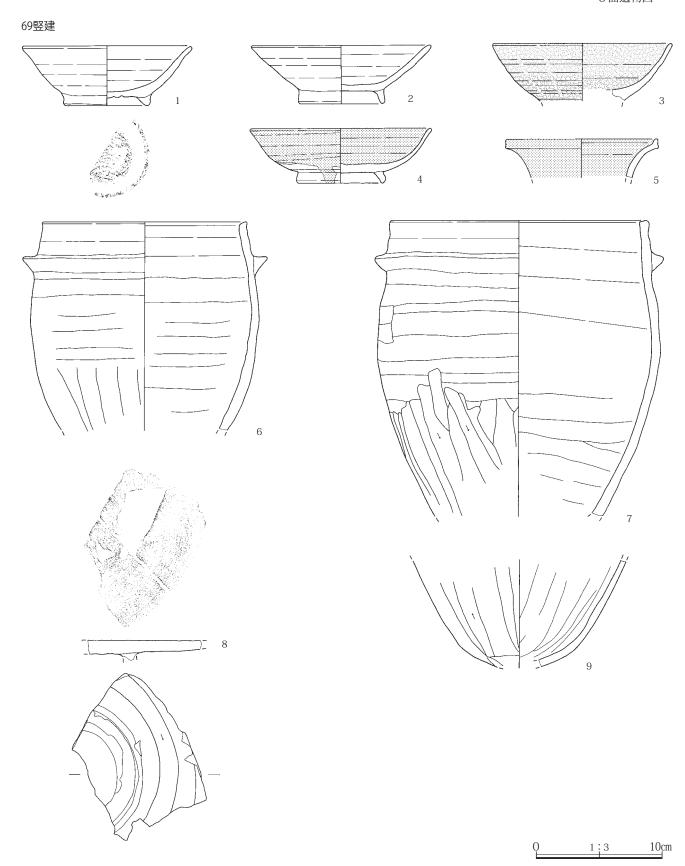
第364図 3面 F区2号土抗墓、遺構外出土遺物



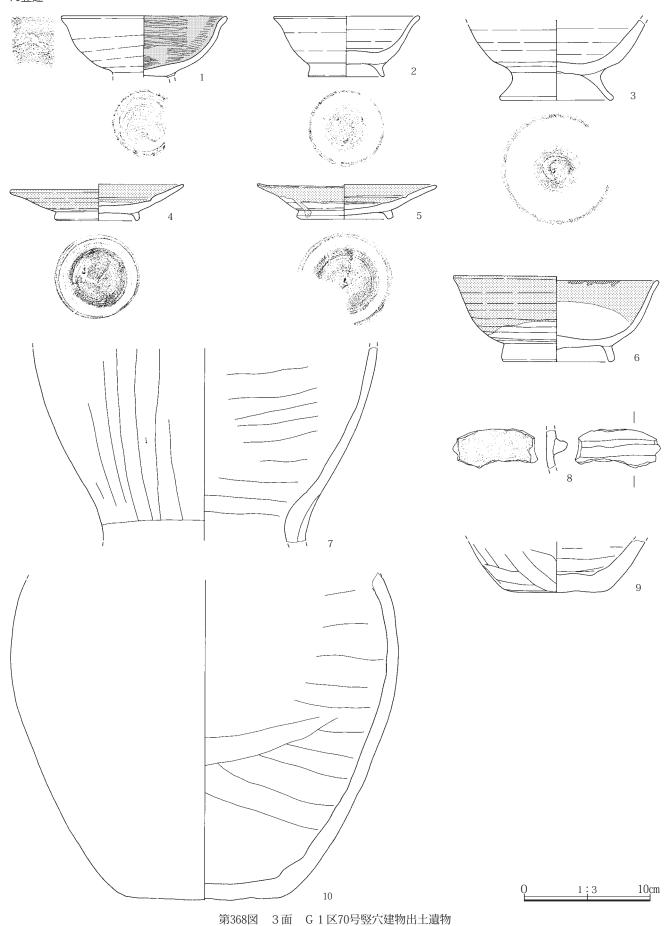
第365図 3面 G1区66·67号竪穴建物出土遺物



第366図 3面 G1区68号竪穴建物出土遺物

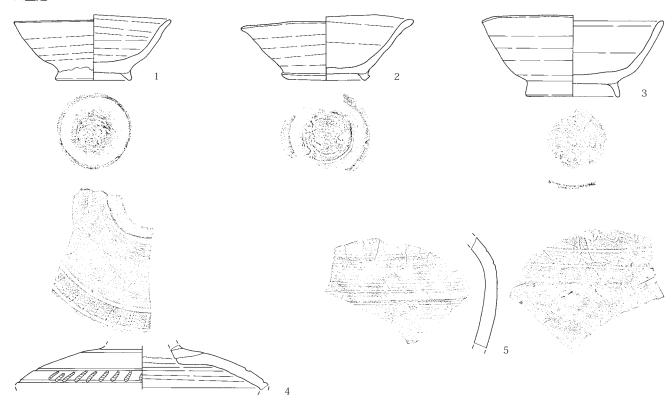


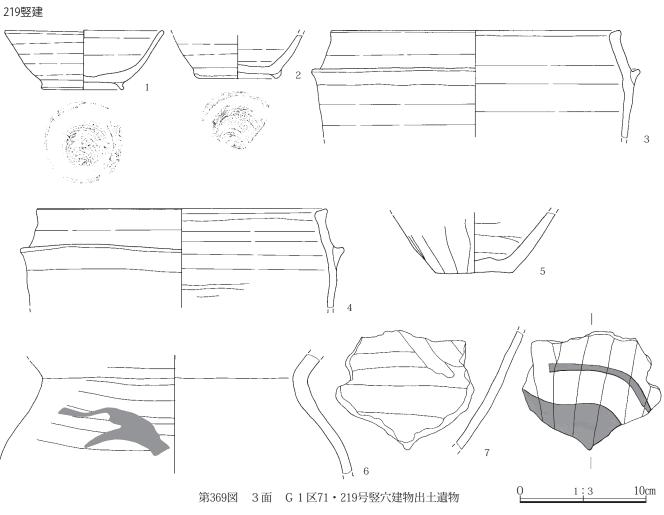
第367図 3面 G1区69号竪穴建物出土遺物

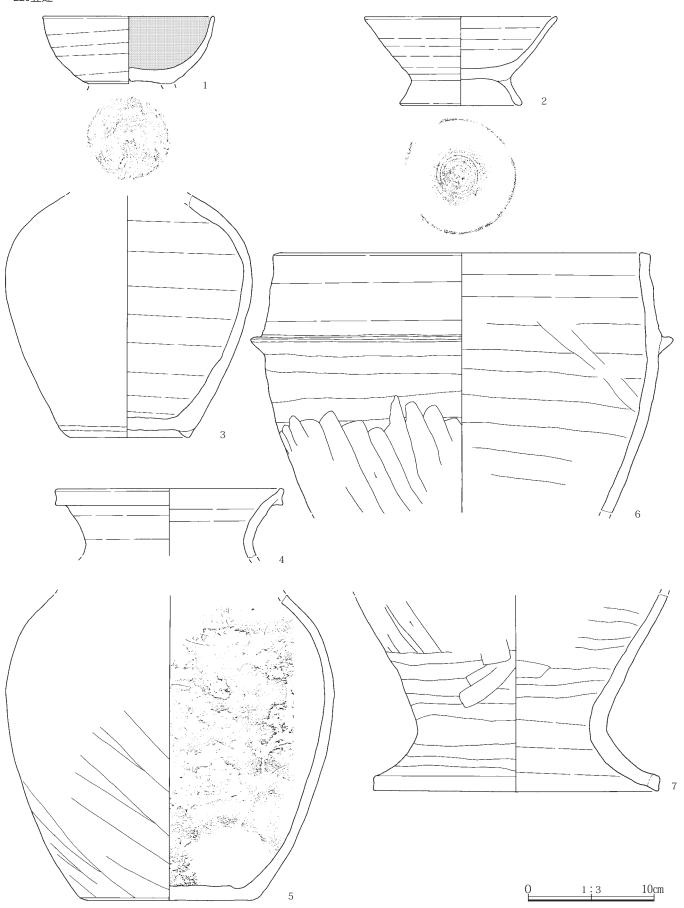


544

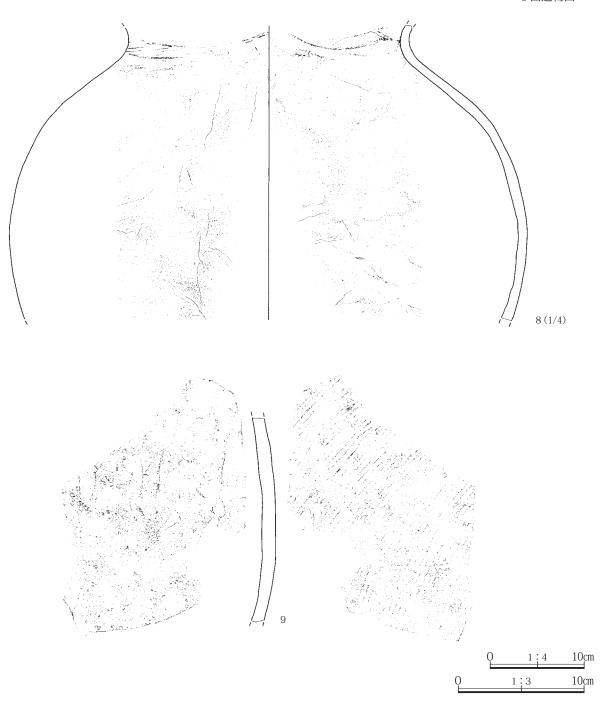
71竪建



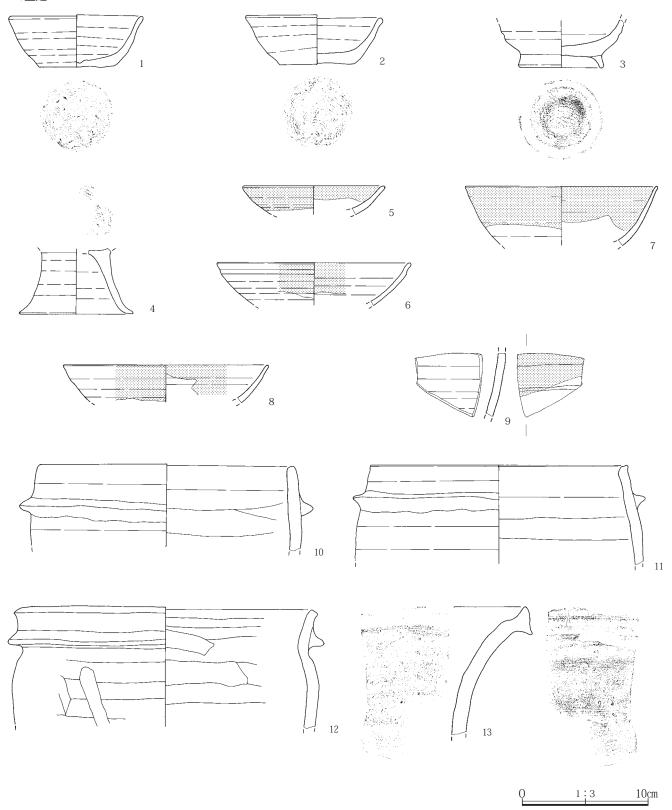




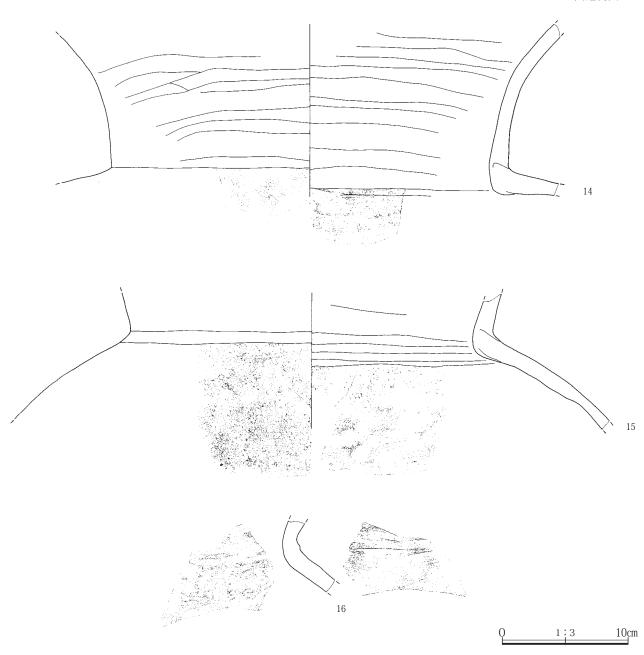
第370図 3面 G1区220号竪穴建物出土遺物(1)



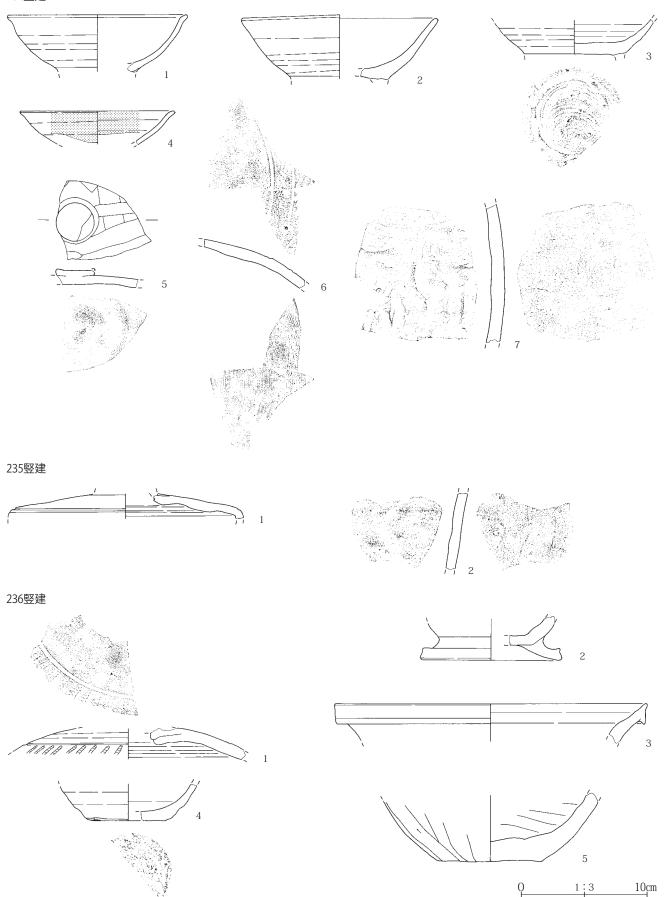
第371図 3面 G1区220号竪穴建物出土遺物(2)



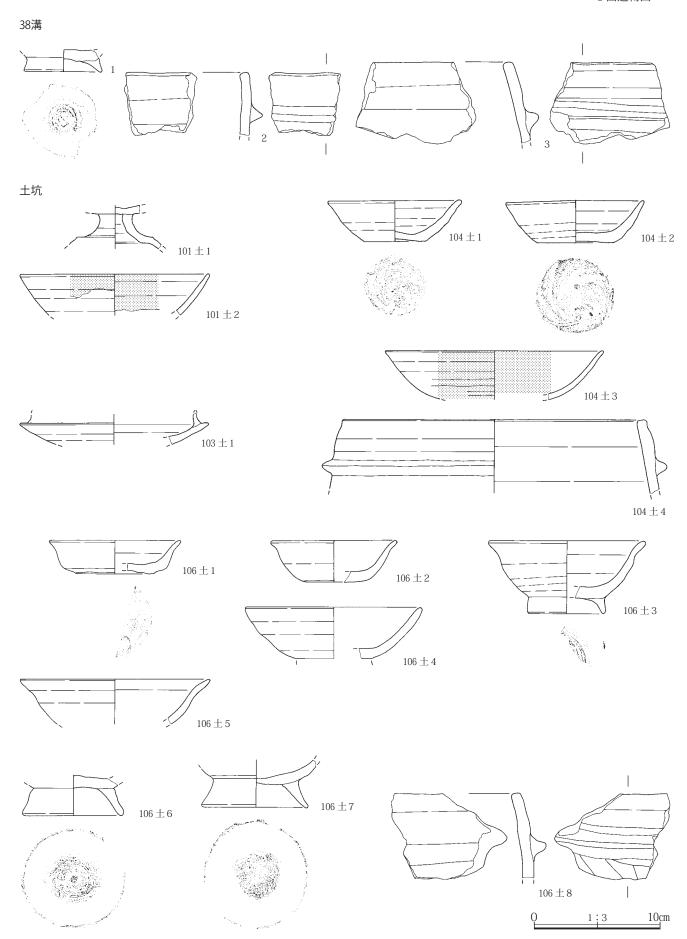
第372図 3面 G1区228号竪穴建物出土遺物(1)



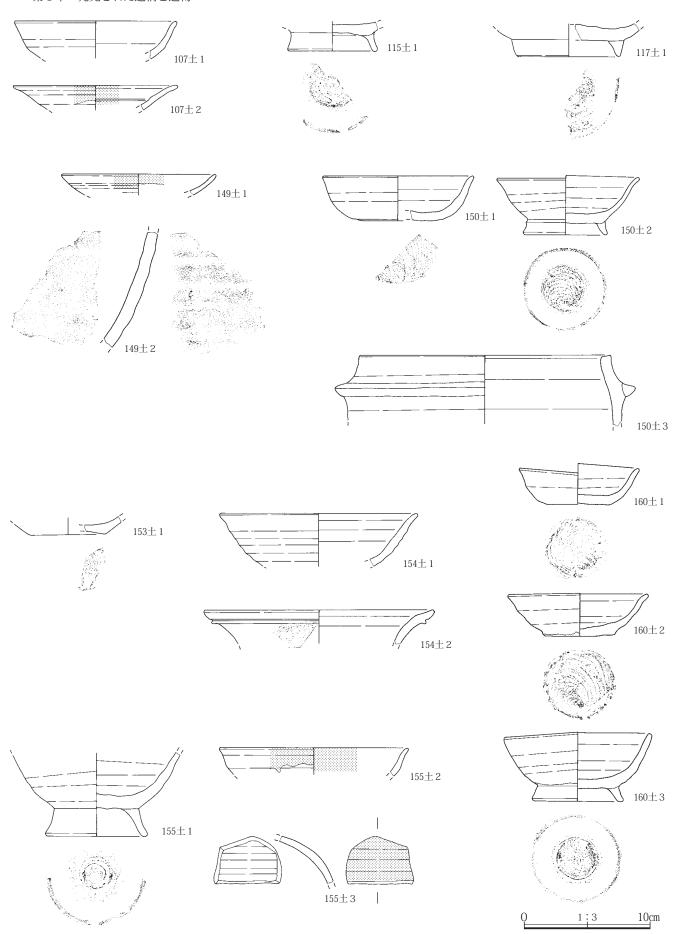
第373図 3面 G1区228号竪穴建物出土遺物(2)



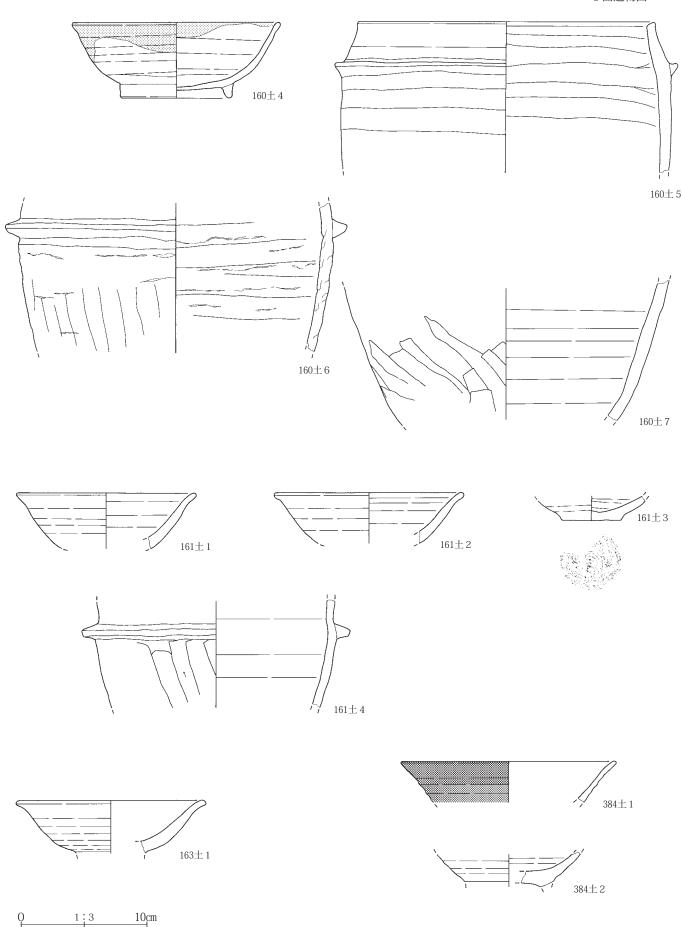
第374図 3面 G1区234~236号竪穴建物出土遺物



第375図 3面 G1区38号溝、101・103・104・106号土坑

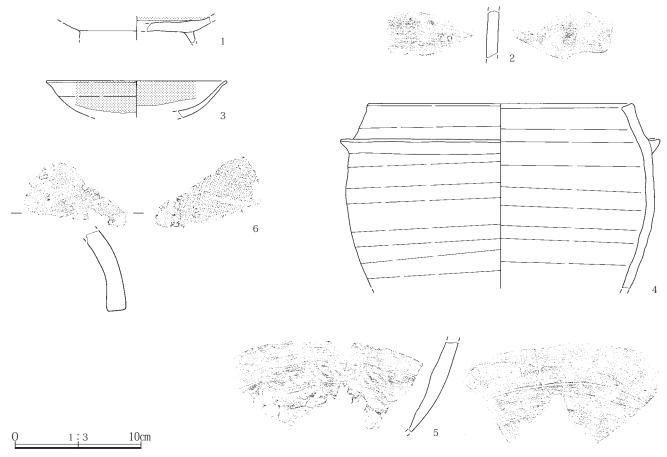


第376図 3面 G1区107・115・117・149・150・153~155号土坑・160号土坑出土遺物(1)

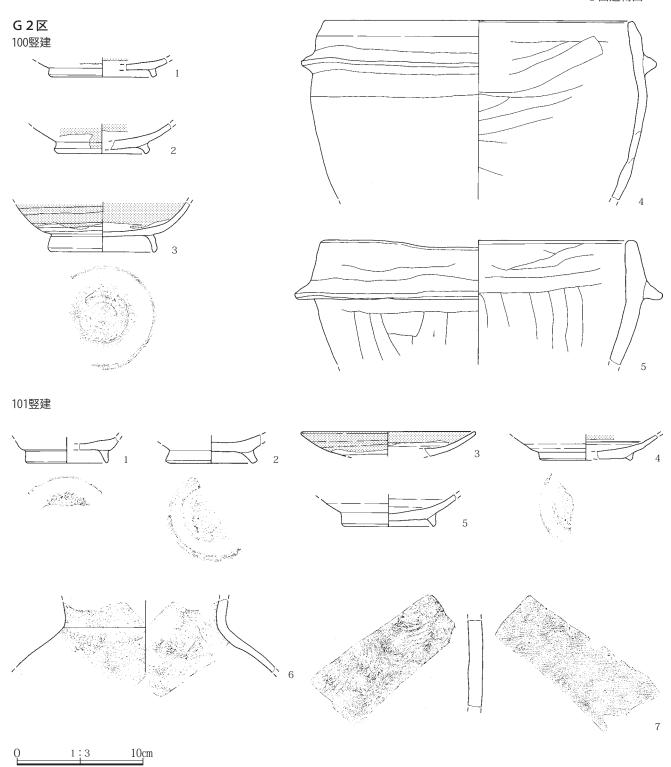


第377図 3面 G1区160号土坑(2)・161・163・384号土坑出土遺物

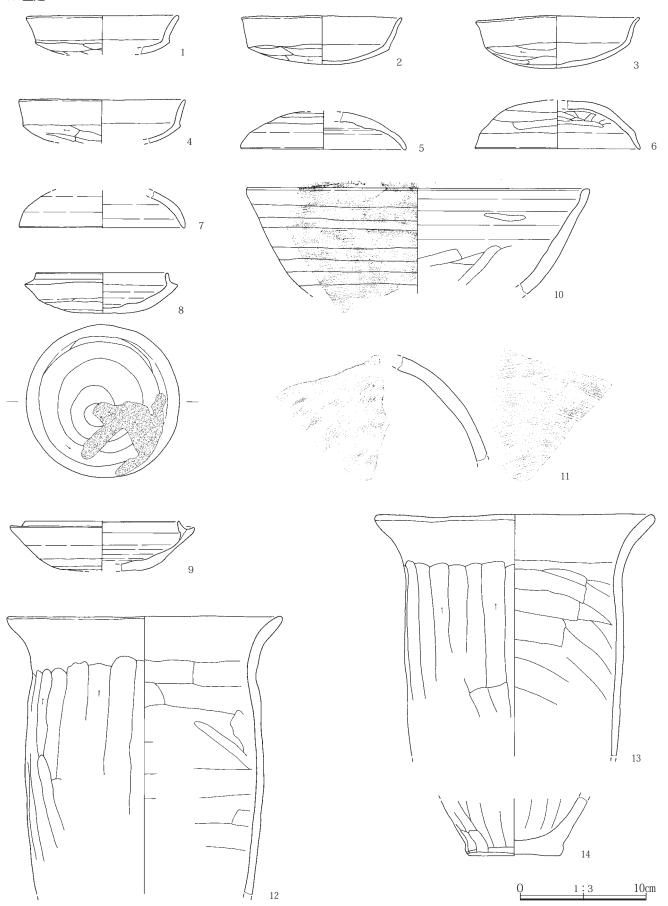
# 遺構外



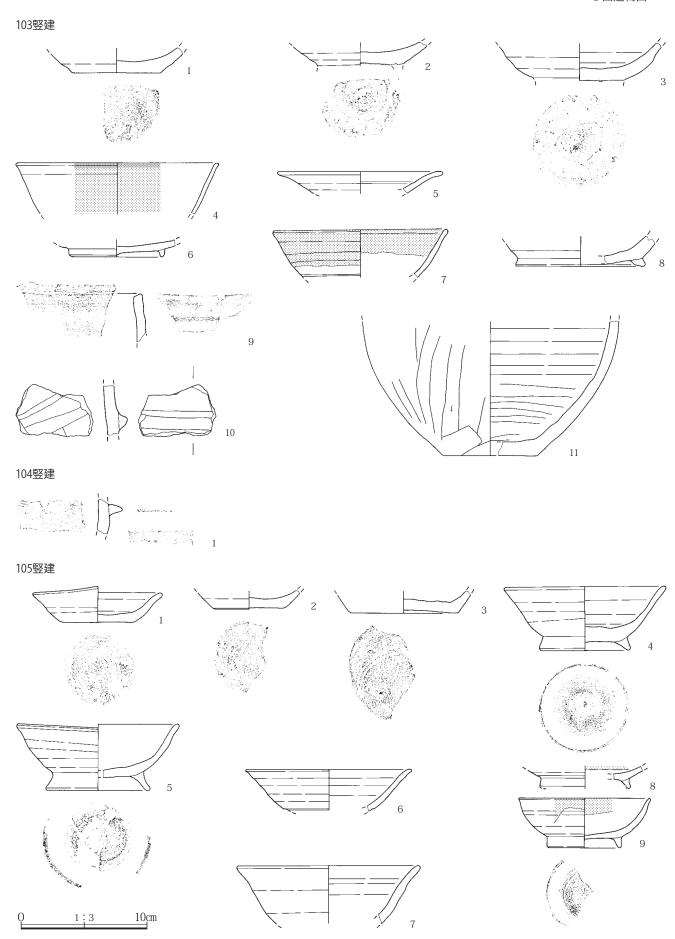
第378図 3面 G1区遺構外出土遺物



第379図 3面 G 2 区100·101号竪穴建物出土遺物

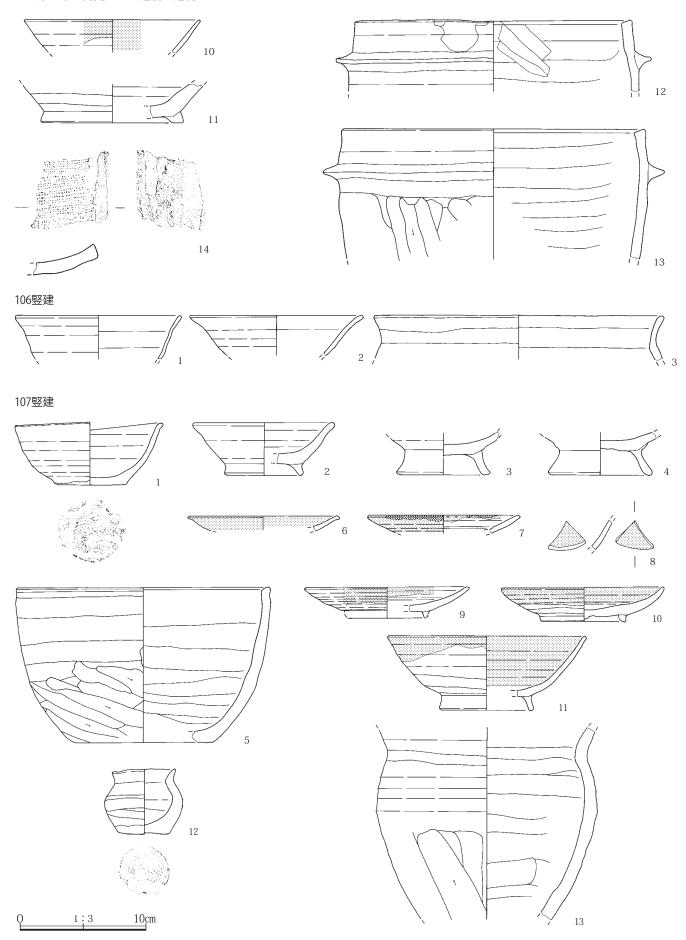


第380図 3面 G2区102号竪穴建物出土遺物

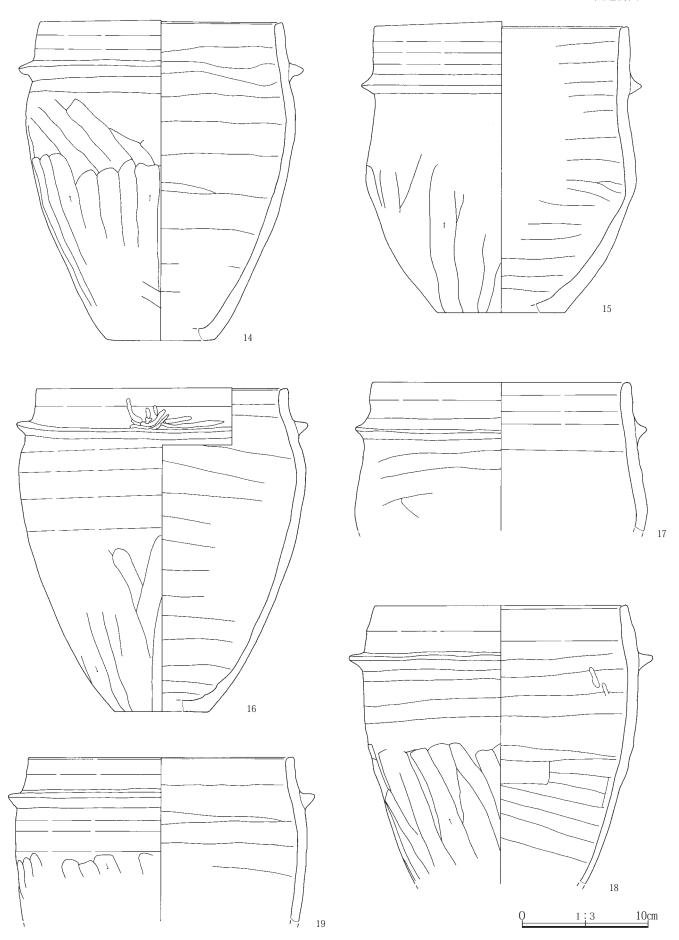


第381図 3面 G 2 区103・104号竪穴建物・105号竪穴建物出土遺物(1)

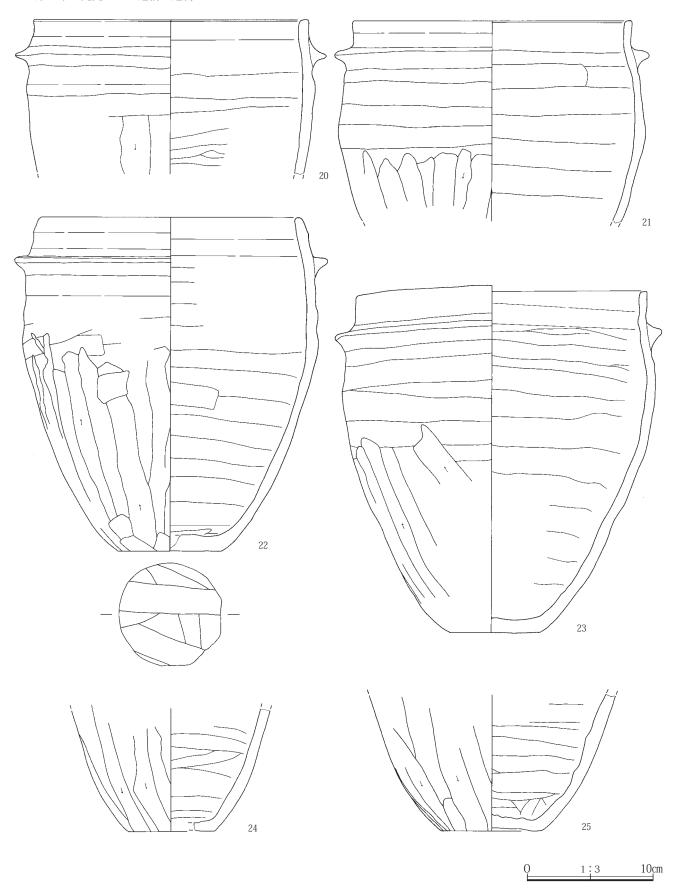
# 第3章 発見された遺構と遺物



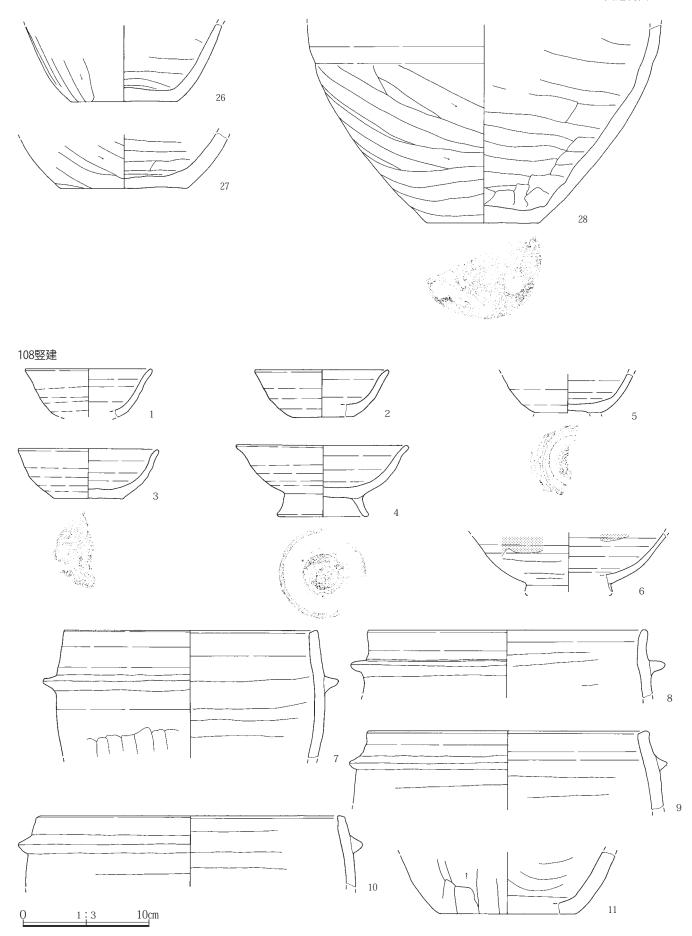
第382図 3 面 G 2 区105号竪穴建物(2)・106号竪穴建物・107号竪穴建物出土遺物(1)



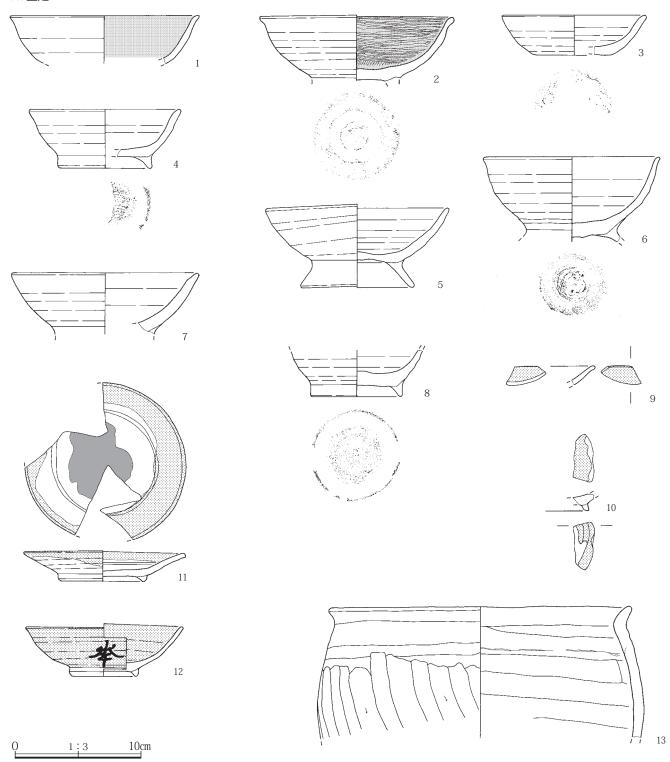
第383図 3面 G2区107号竪穴建物出土遺物(2)



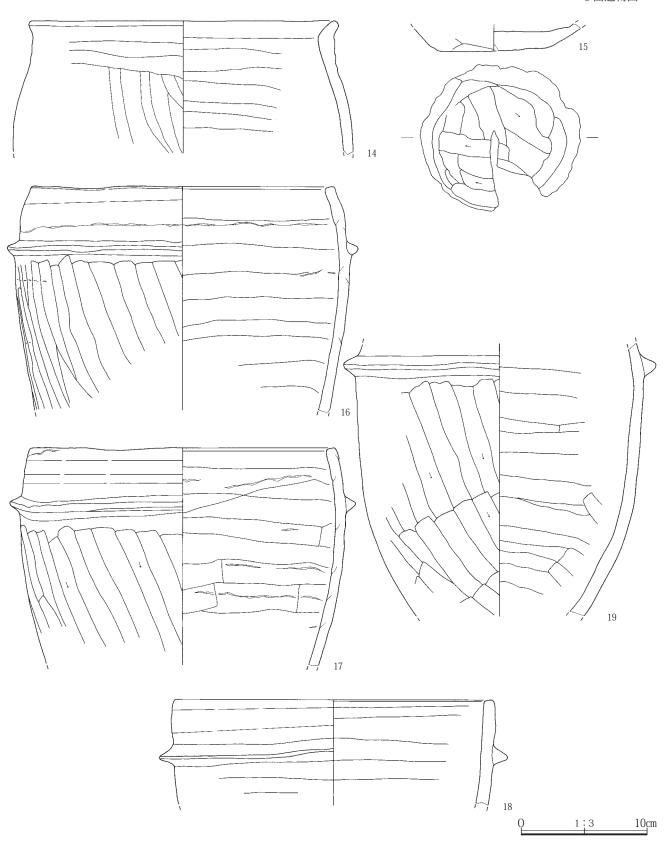
第384図 3面 G2区107号竪穴建物出土遺物(3)



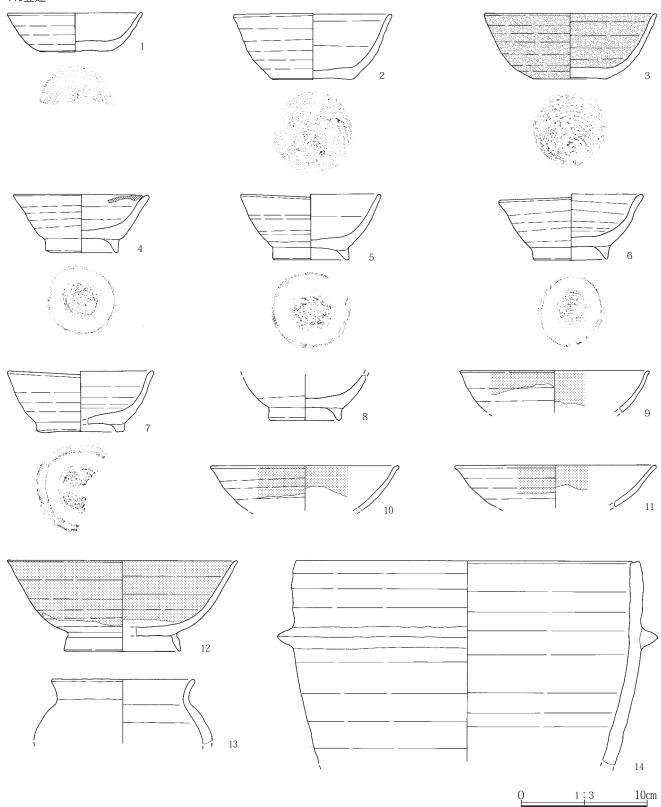
第385図 3面 G2区107号竪穴建物(4)·108号竪穴建物出土遺物



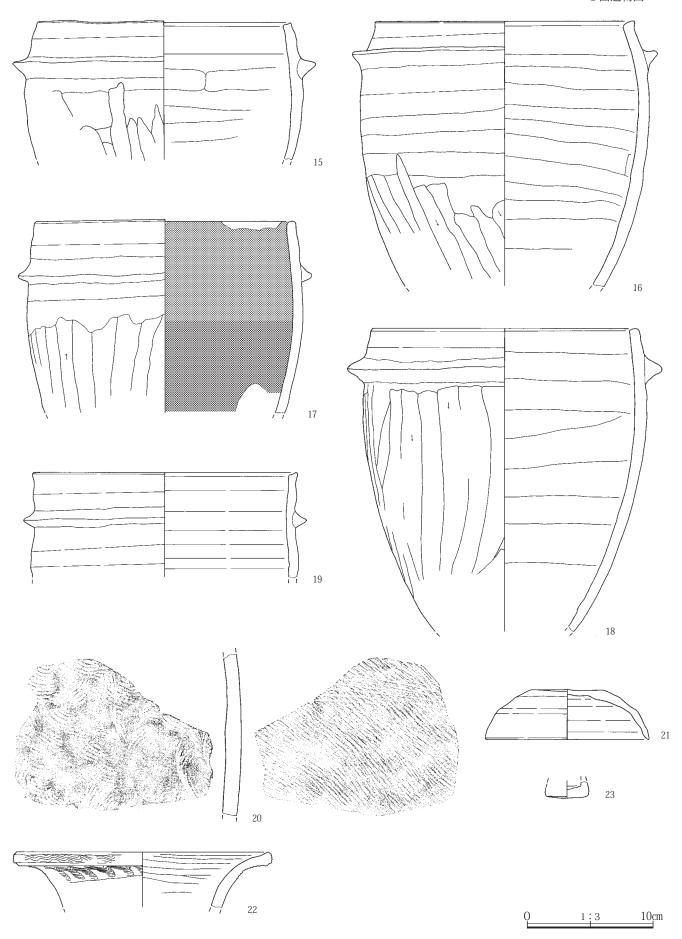
第386図 3面 G2区109号竪穴建物出土遺物(1)



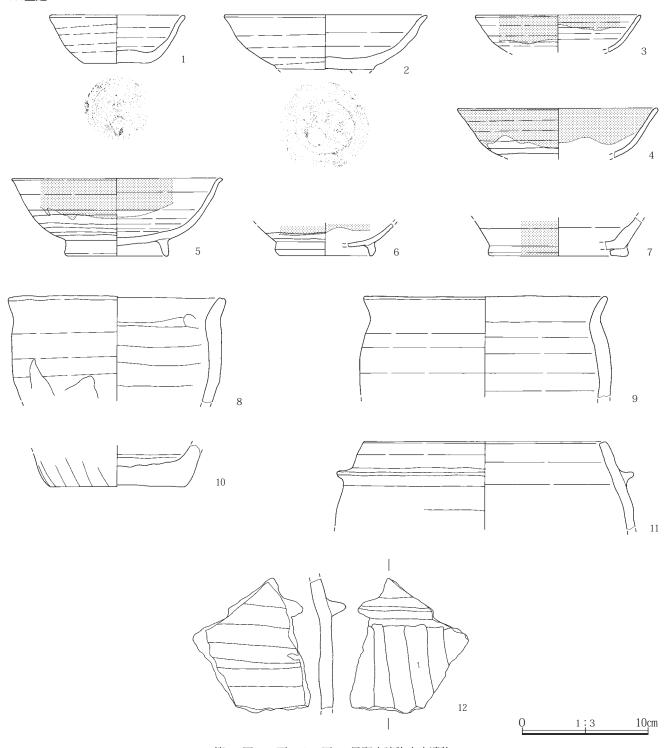
第387図 3面 G2区109号竪穴建物出土遺物(2)



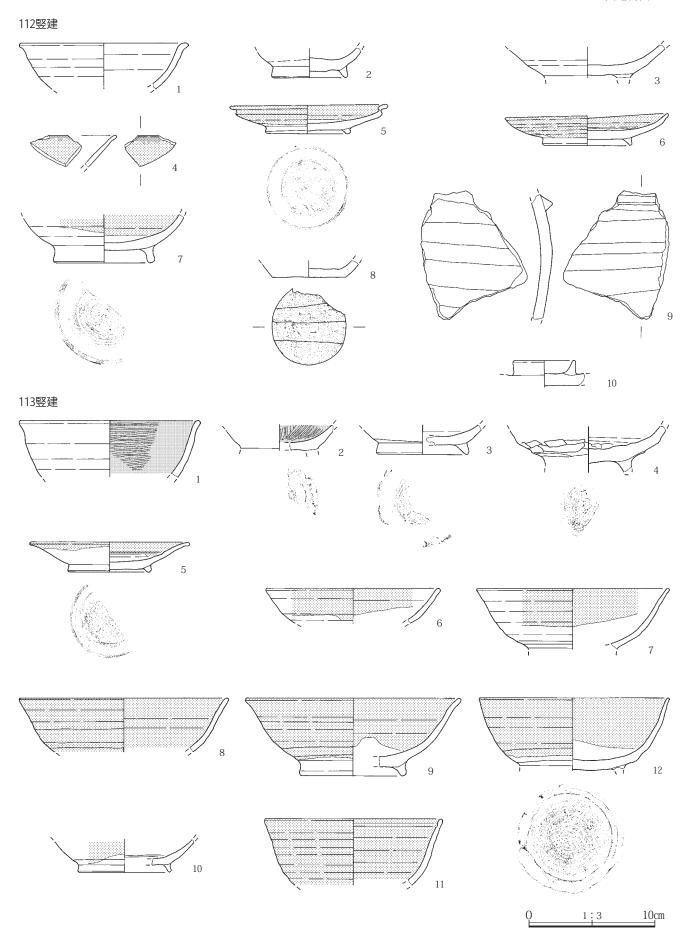
第388図 3面 G2区110号竪穴建物出土遺物(1)



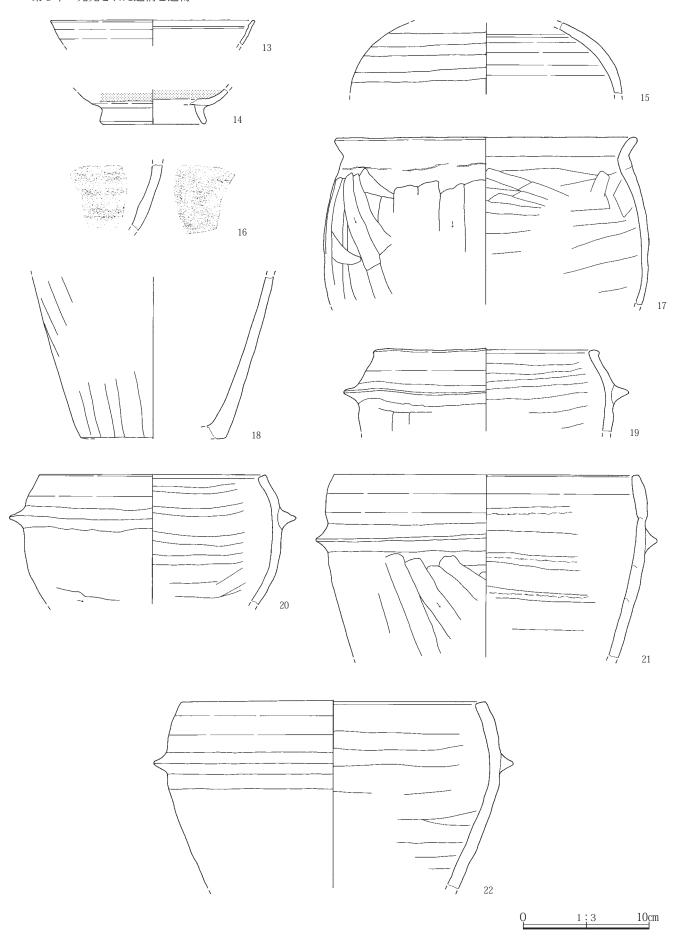
第389図 3面 G2区110号竪穴建物出土遺物(2)



第390図 3面 G2区111号竪穴建物出土遺物

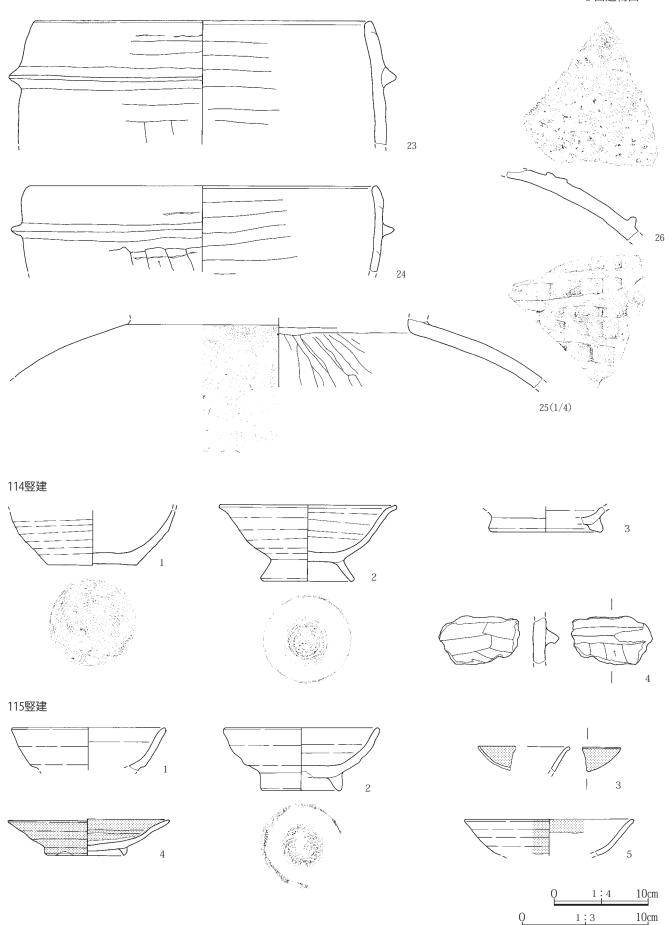


第391図 3面 G2区112号竪穴建物・113号竪穴建物出土遺物(1)



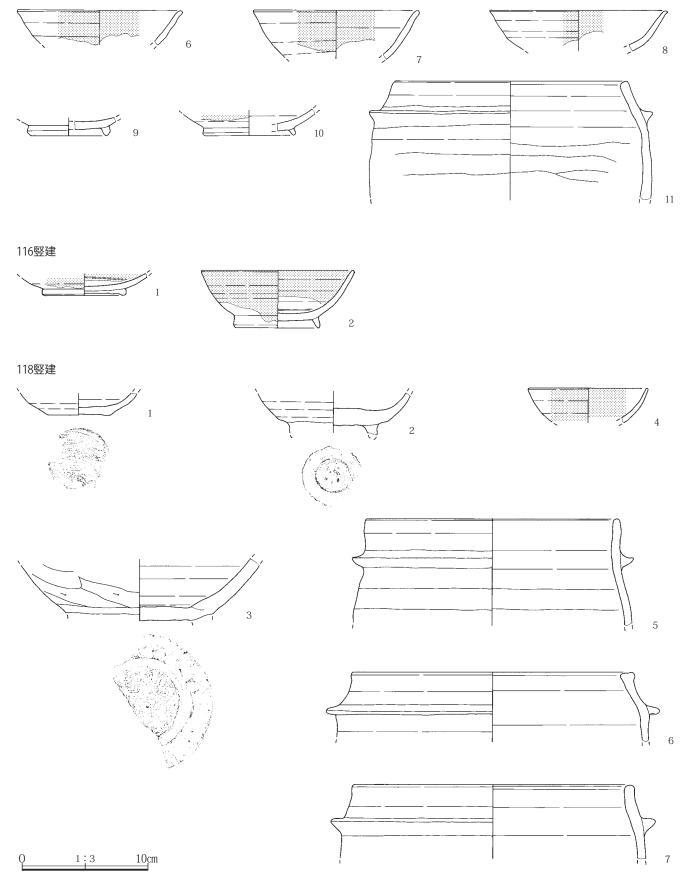
第392図 3面 G2区113号竪穴建物出土遺物(2)

# 3面遺物図



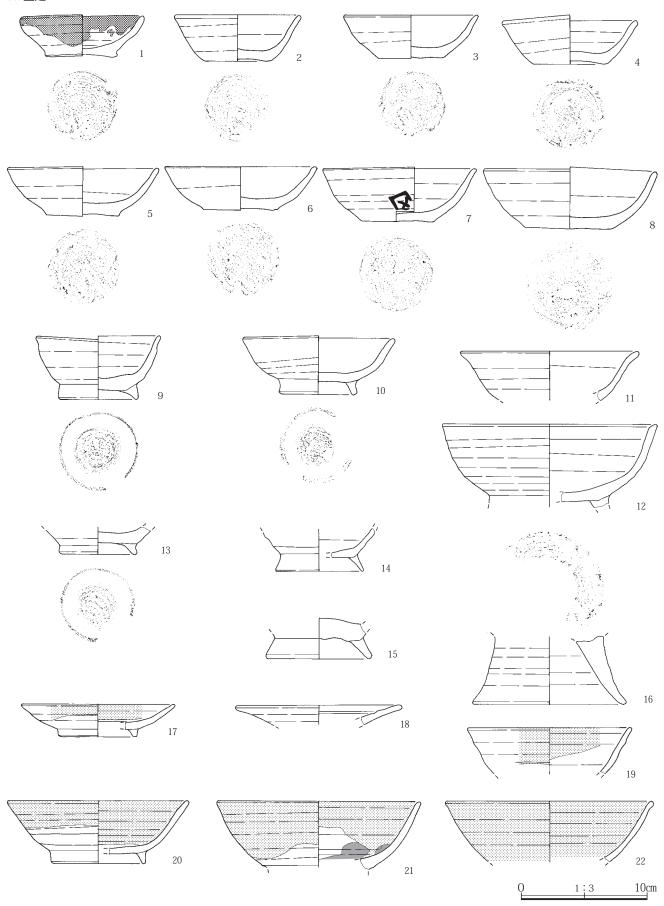
第393図 3 面 G 2 区113号竪穴建物(3)・114号竪穴建物・115号竪穴建物出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

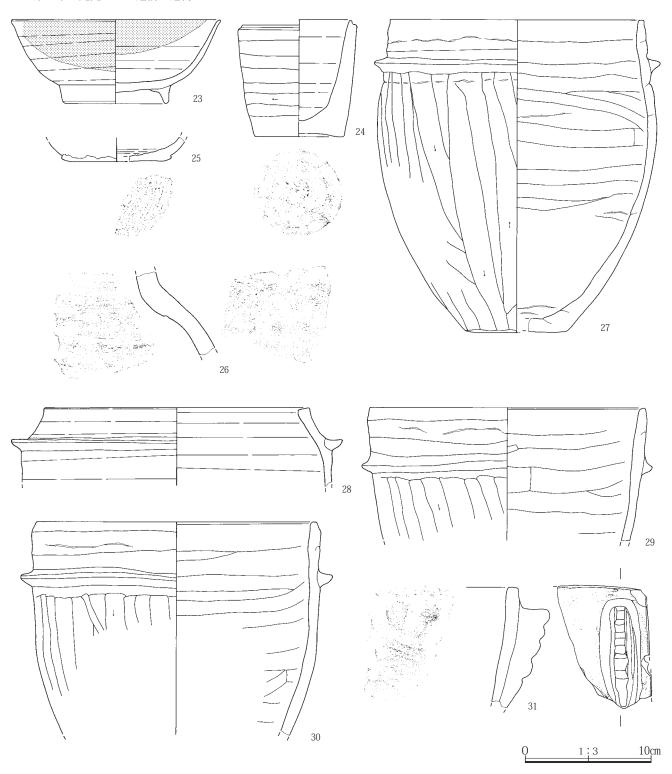


第394図 3面 G2区115号竪穴建物(2)・116・118号竪穴建物出土遺物





第395図 3面 G2区119号竪穴建物出土遺物(1)

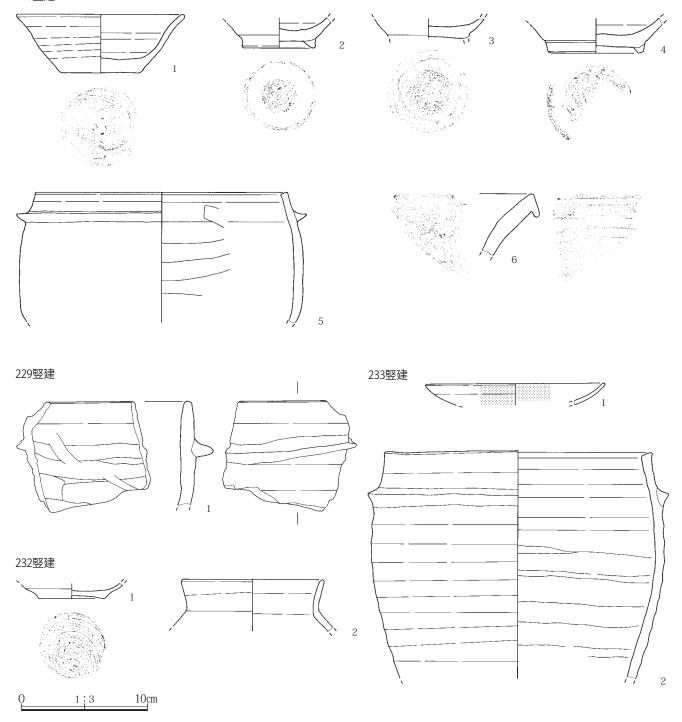


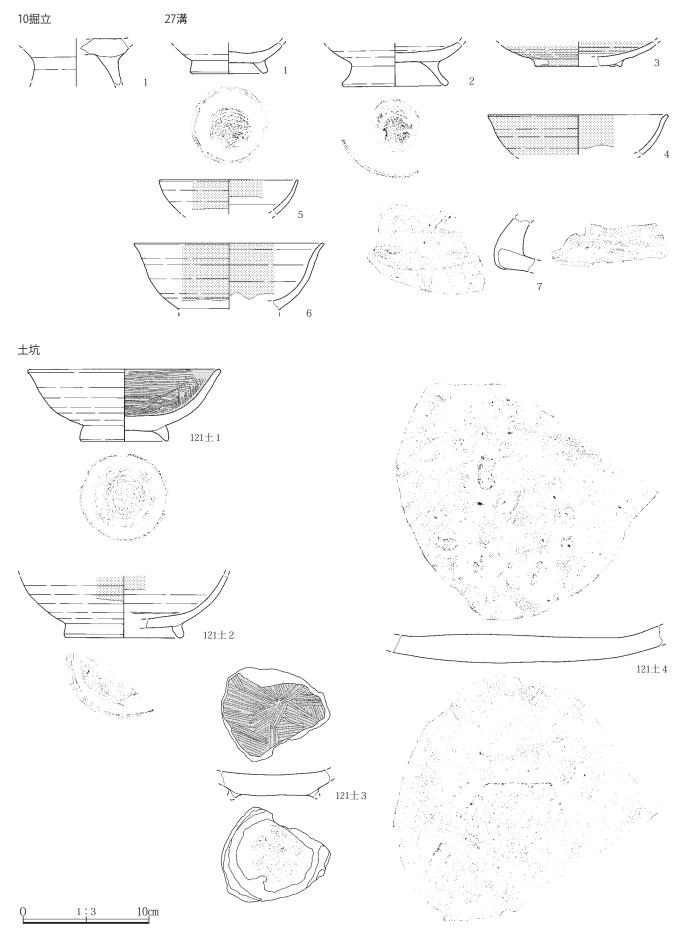
第396図 3面 G2区119号竪穴建物出土遺物(2)

# 138竪建 139竪建 140竪建 217竪建

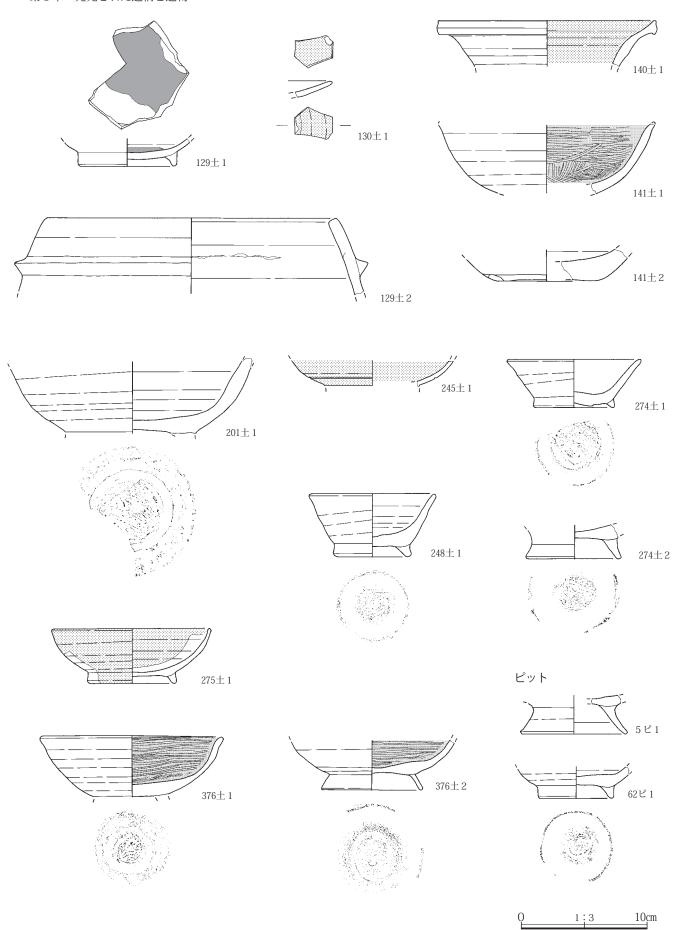
第397図 3面 G 2 区138~140·217号竪穴建物出土遺物

10cm

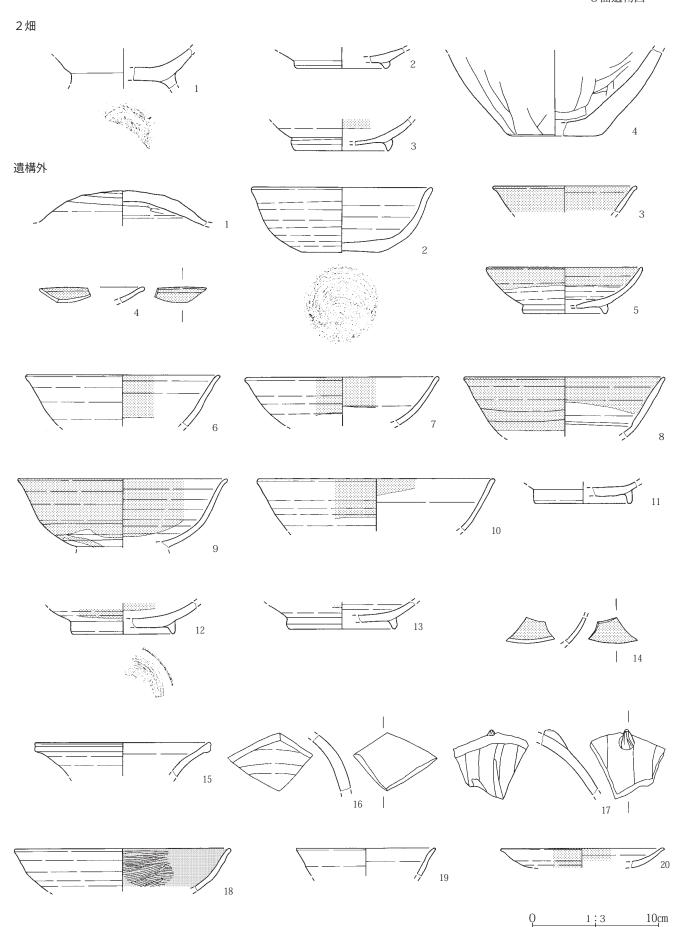




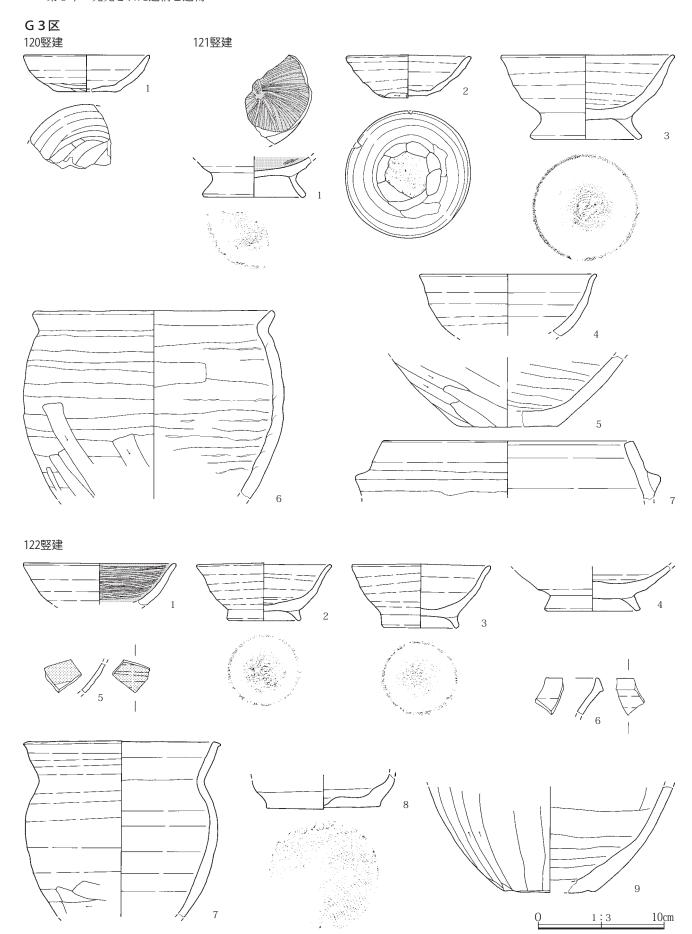
第399図 3面 G2区10号掘立柱建物、27号溝、121号土坑出土遺物



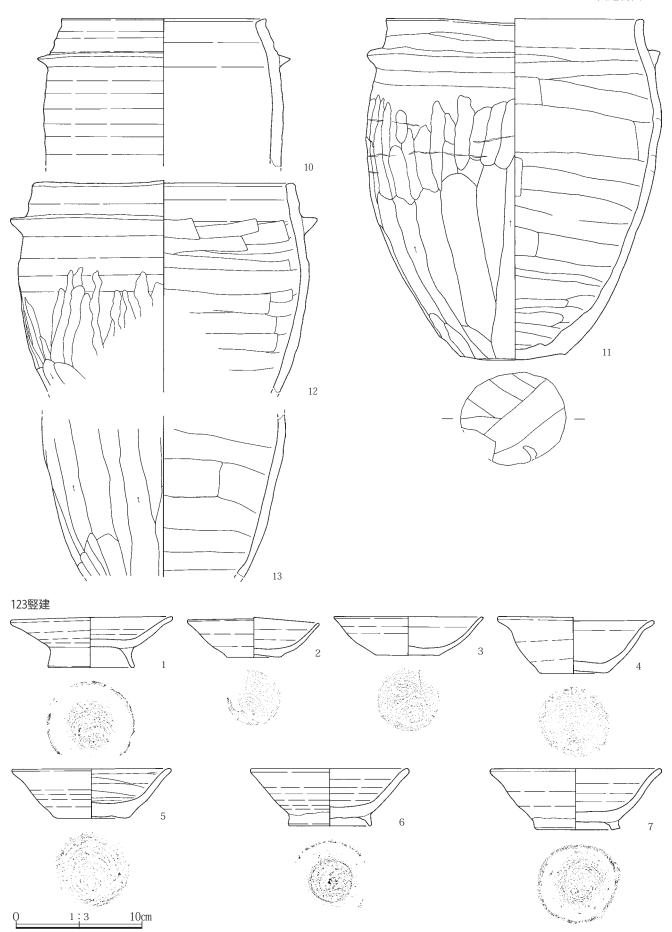
第400図 3面 G 2 区129・130・140・141・201・245・248・274・275・376号土坑、5・62号ピット出土遺物



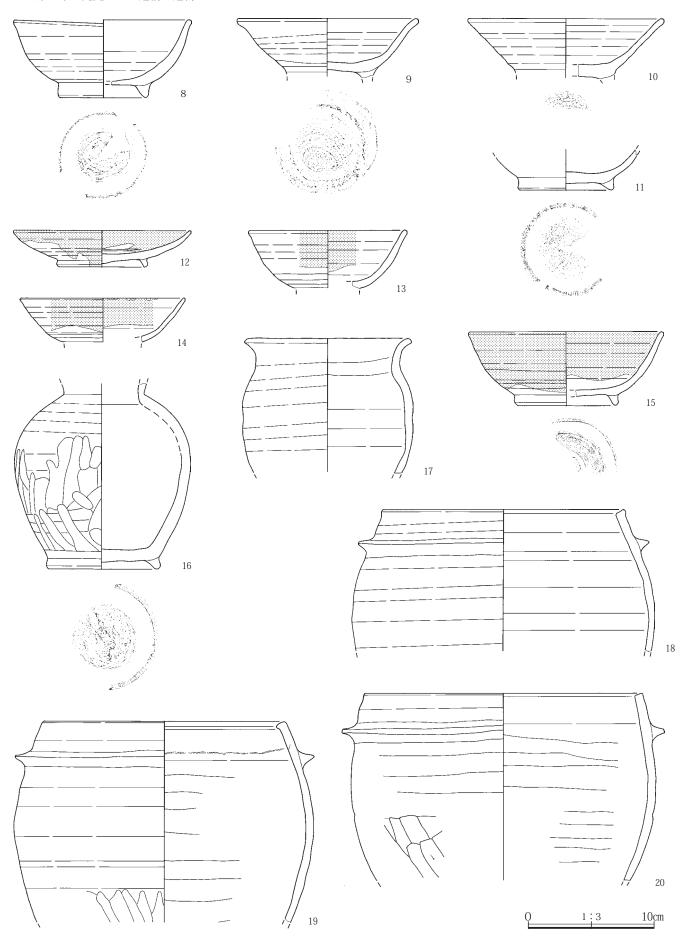
第401図 3面 G2区2号畑、遺構外出土遺物



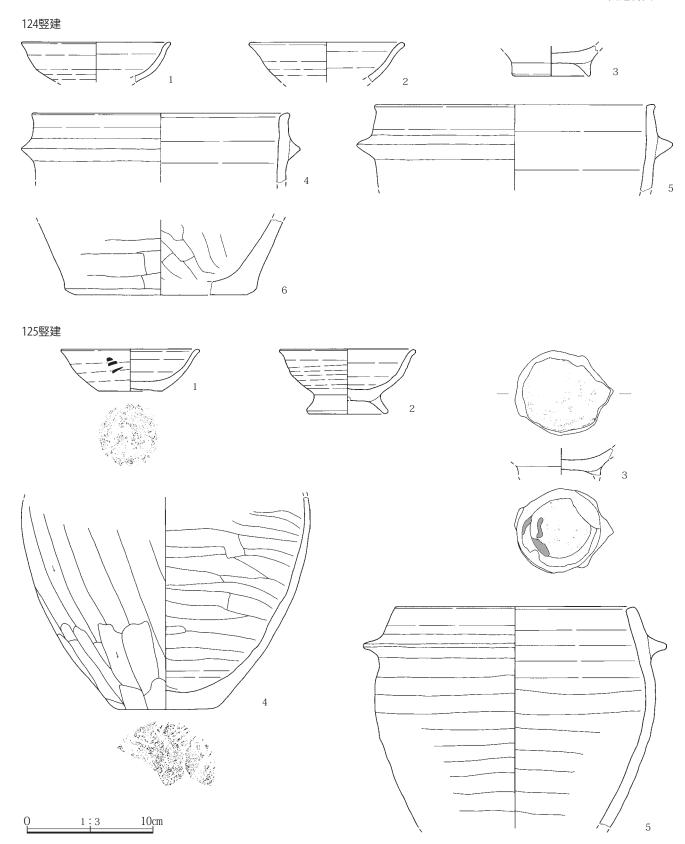
第402図 3面 G 3 区120·121号竪穴建物·122号竪穴建物出土遺物(1)



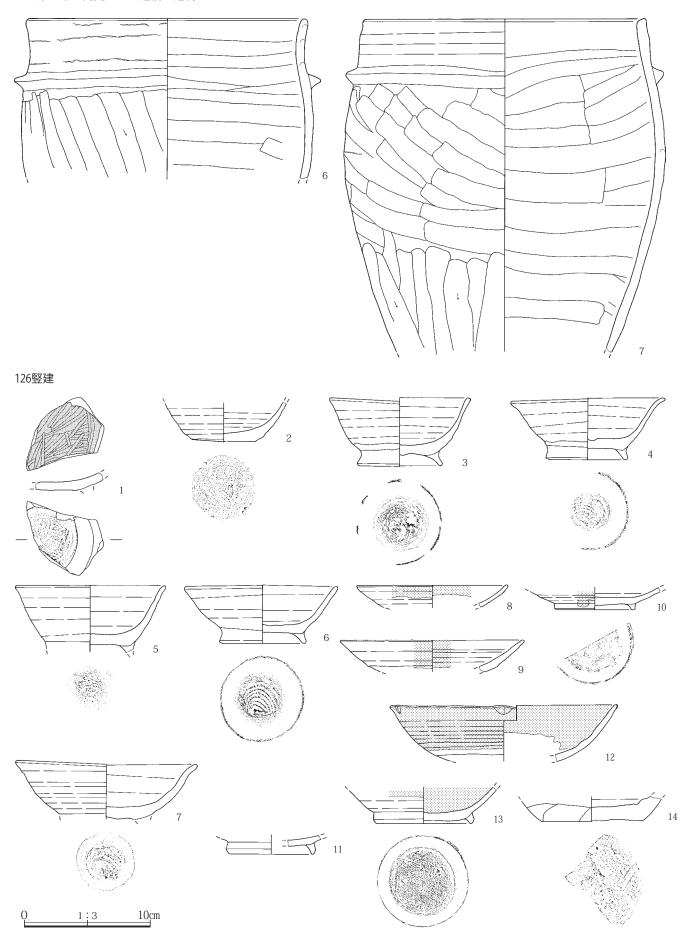
第403図 3面 G3区122号竪穴建物(2)·123号竪穴建物出土遺物(1)



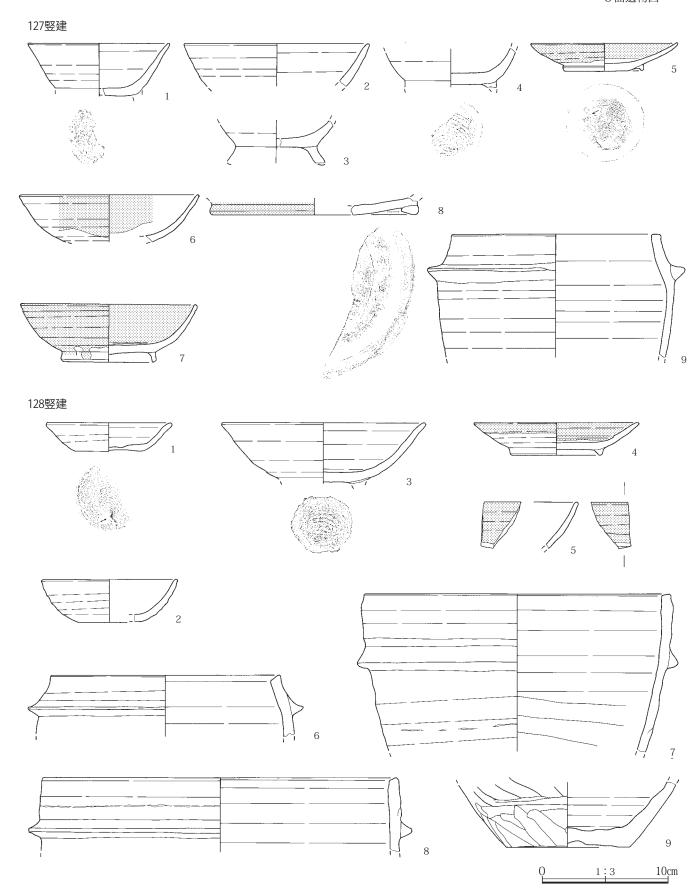
第404図 3面 G3区123号竪穴建物出土遺物(2)



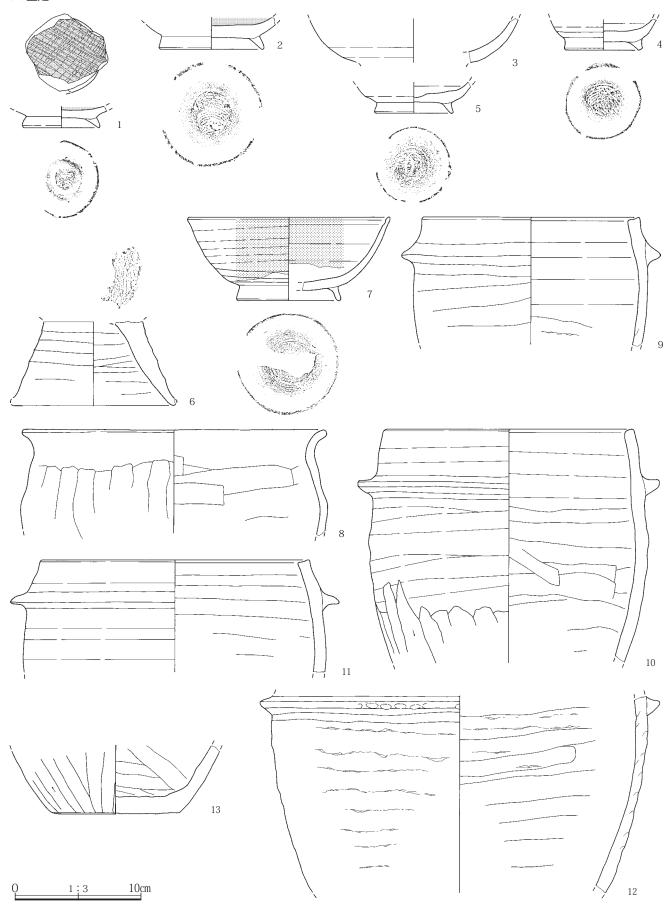
第405図 3面 G 3区124号竪穴建物・125号竪穴建物出土遺物(1)



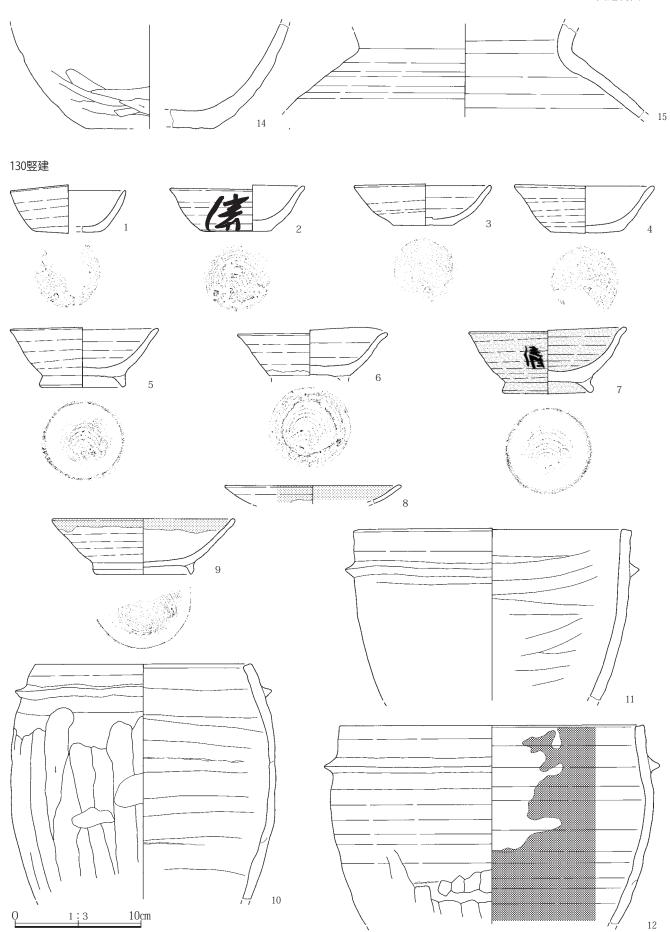
第406図 3面 G3区125号竪穴建物(2)·126号竪穴建物出土遺物



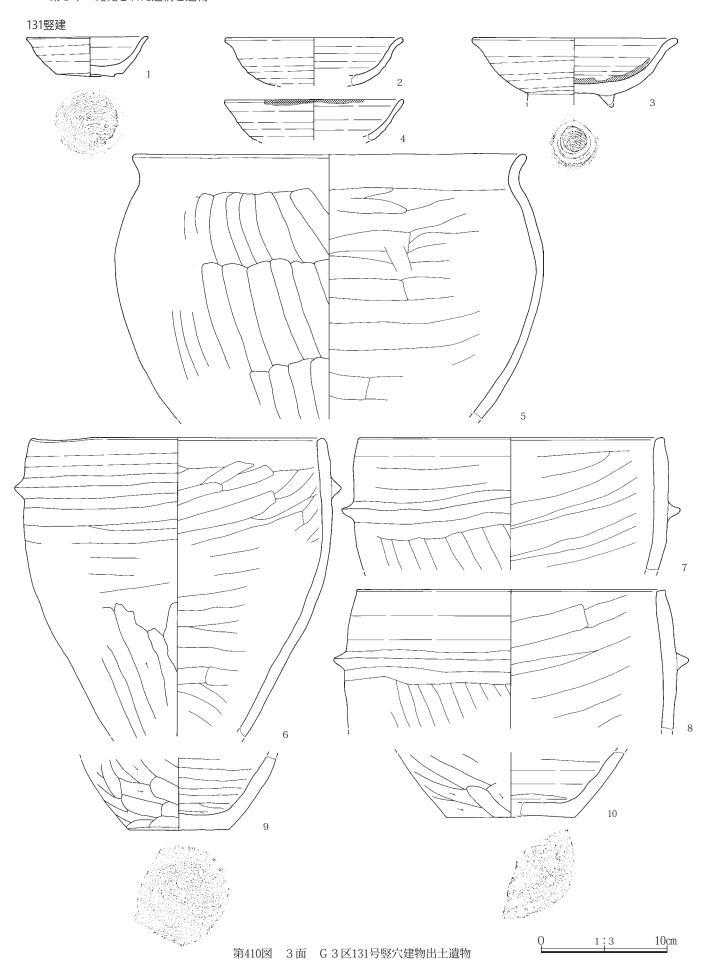
第407図 3面 G 3区127·128号竪穴建物出土遺物

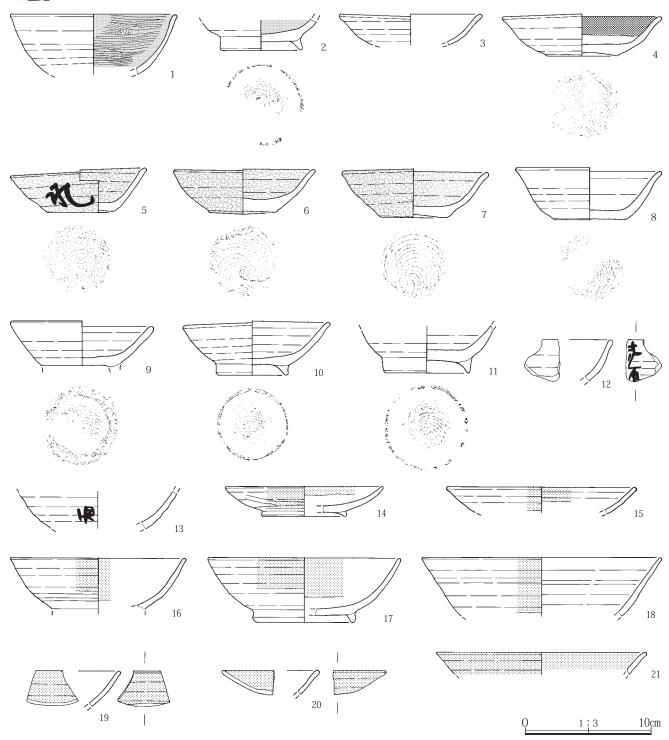


第408図 3面 G3区129号竪穴建物出土遺物(1)



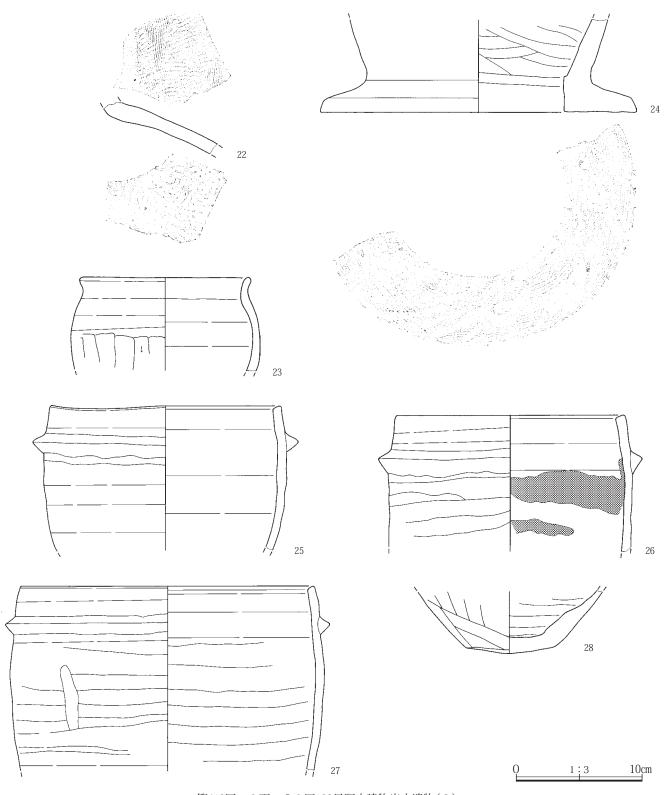
第409図 3面 G3区129号竪穴建物(2)·130号竪穴建物出土遺物



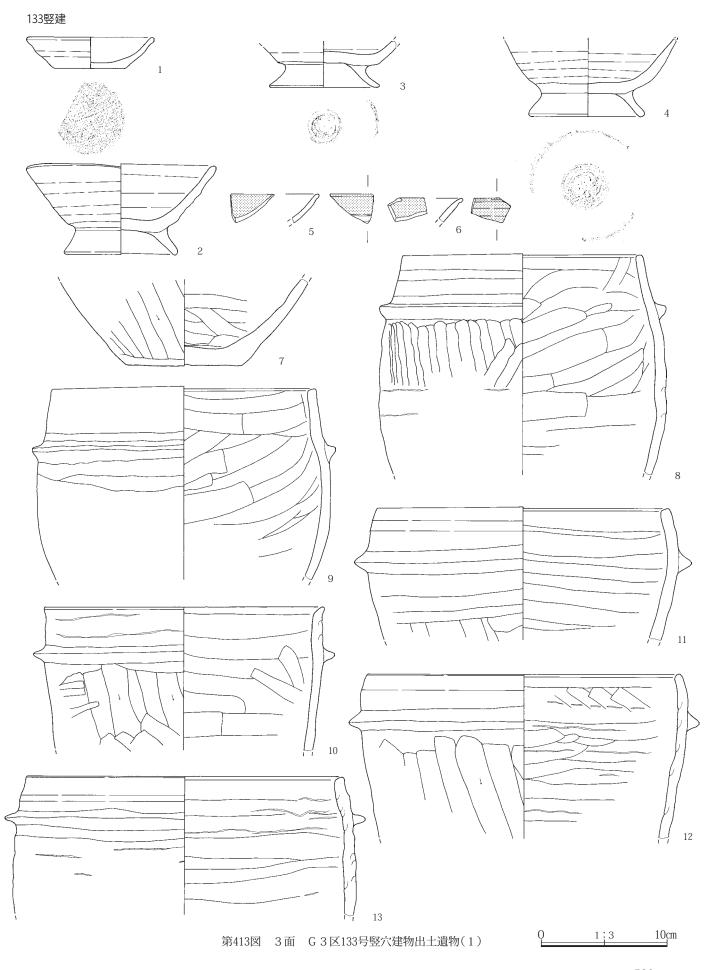


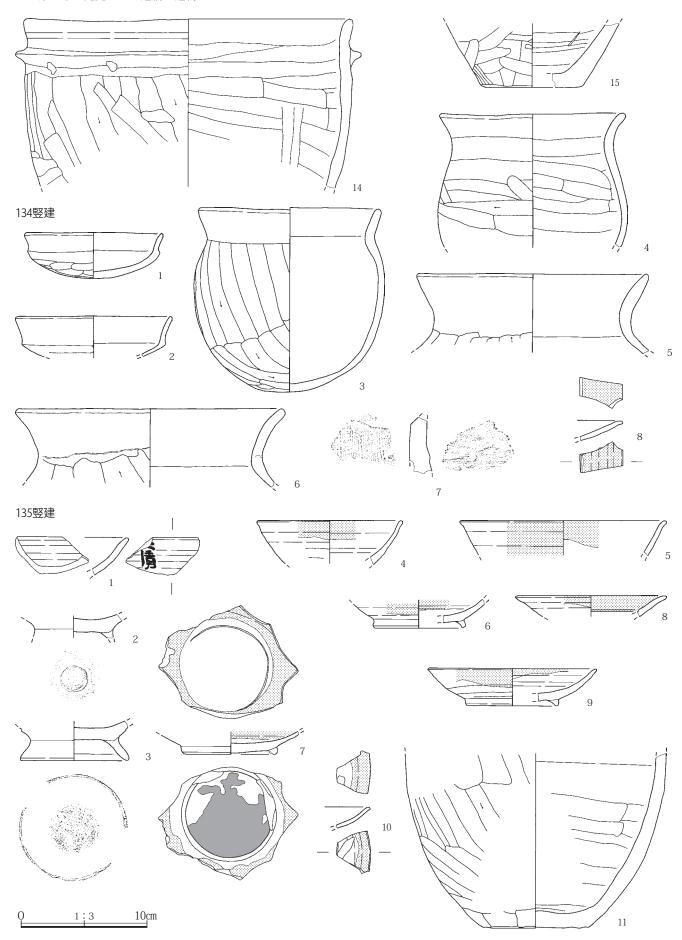
第411図 3面 G3区132号竪穴建物出土遺物(1)

# 第3章 発見された遺構と遺物

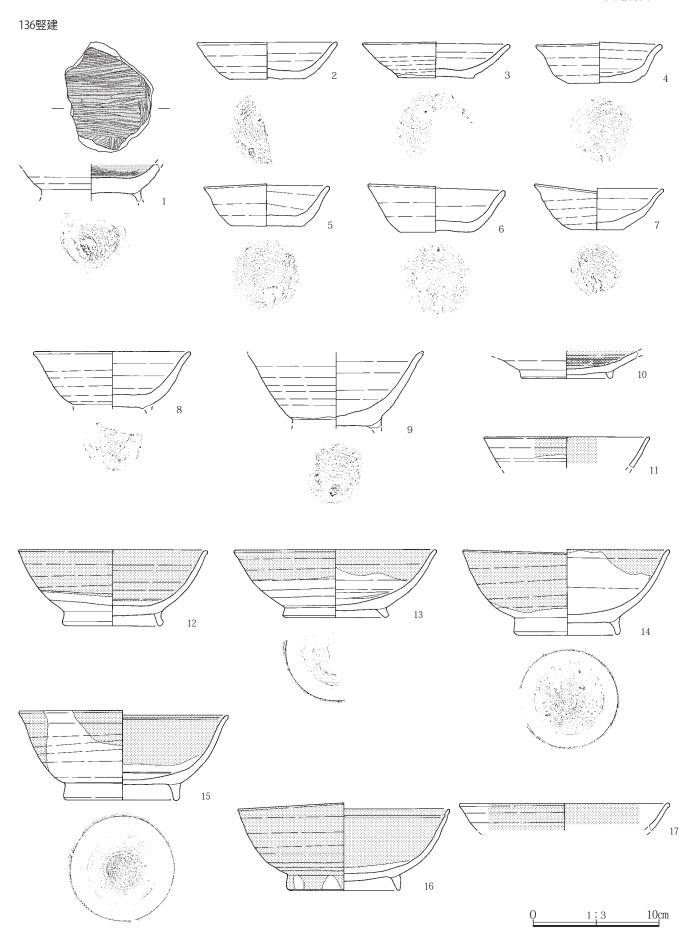


第412図 3面 G3区132号竪穴建物出土遺物(2)

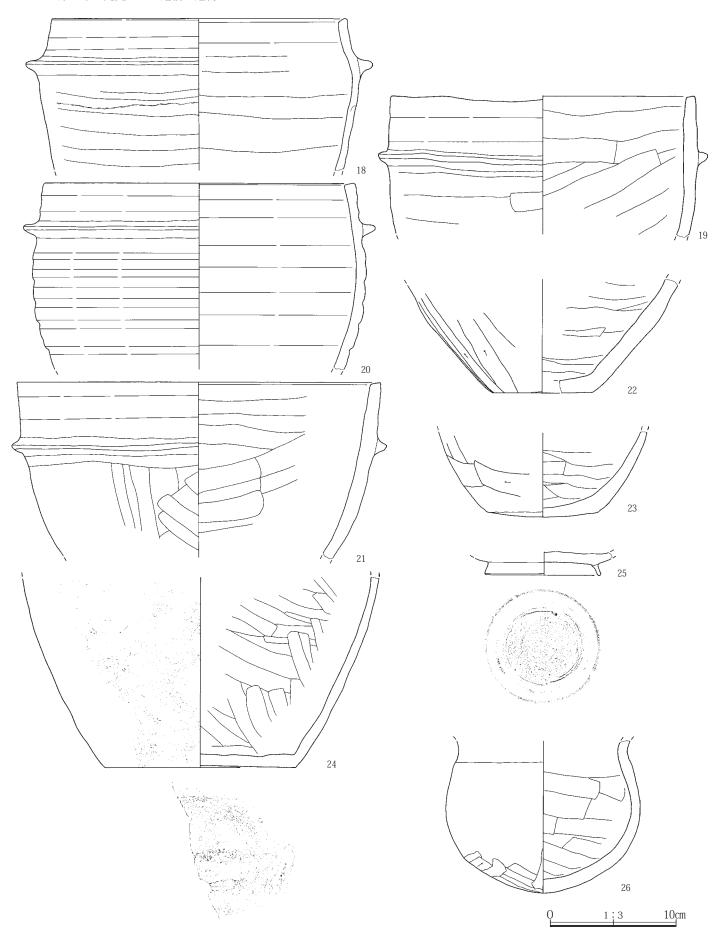




第414図 3面 G3区133号竪穴建物(2)・134・135号竪穴建物出土遺物

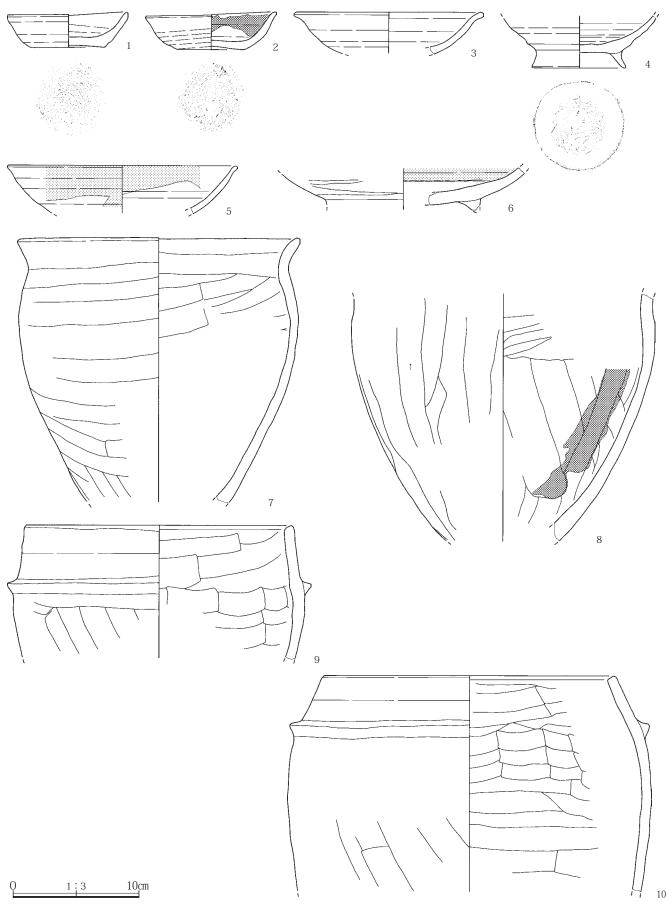


第415図 3面 G3区136号竪穴建物出土遺物(1)



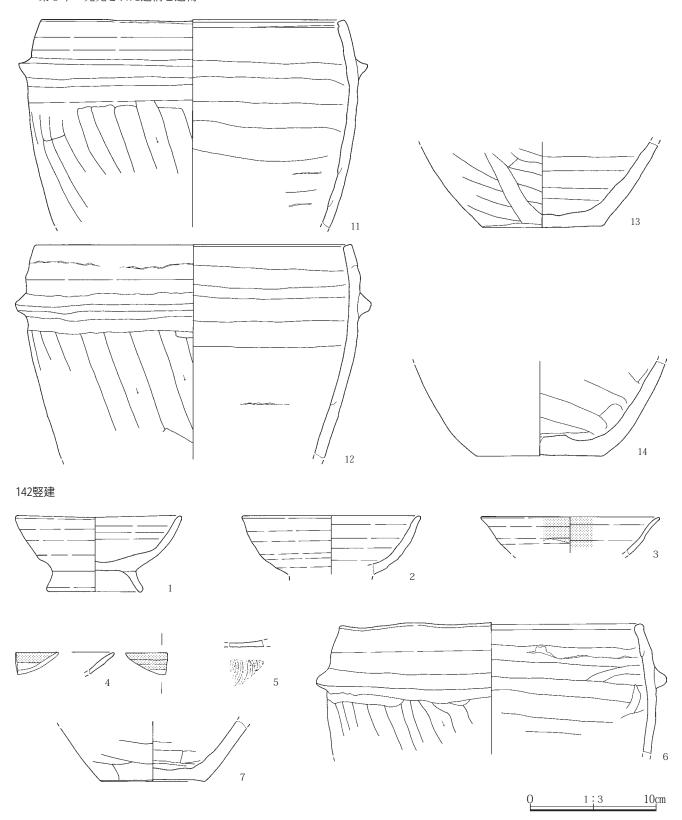
第416図 3面 G3区136号竪穴建物出土遺物(2)



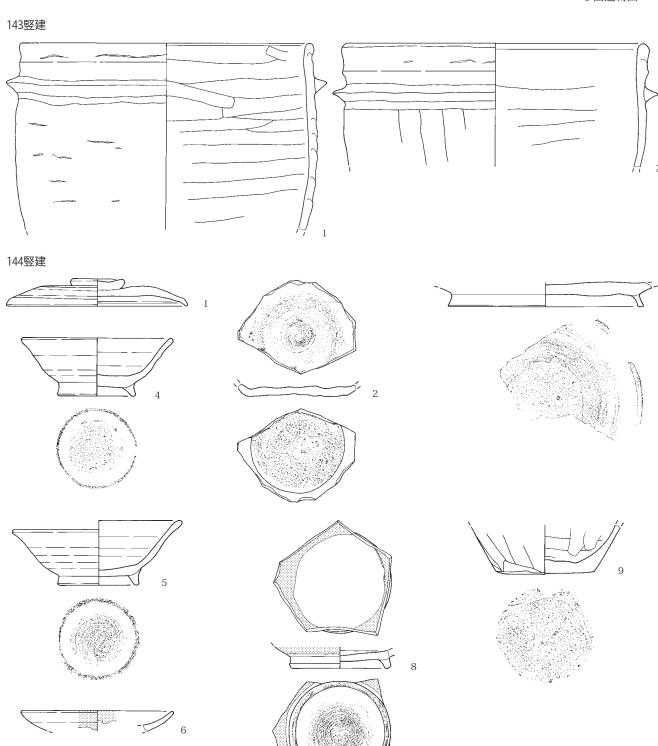


第417図 3面 G3区141号竪穴建物出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



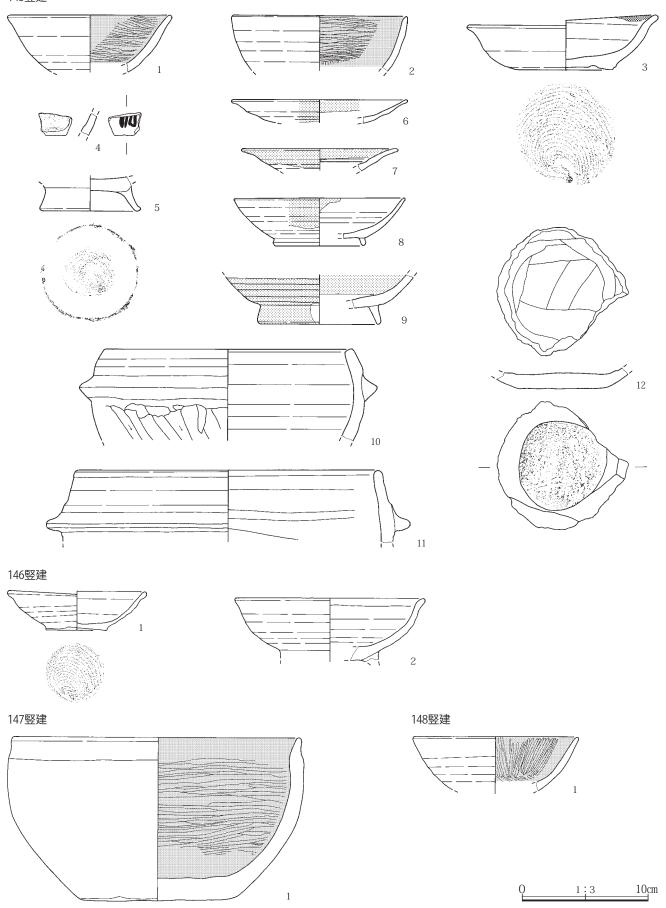
第418図 3面 G 3区141号竪穴建物(2)·142号竪穴建物出土遺物



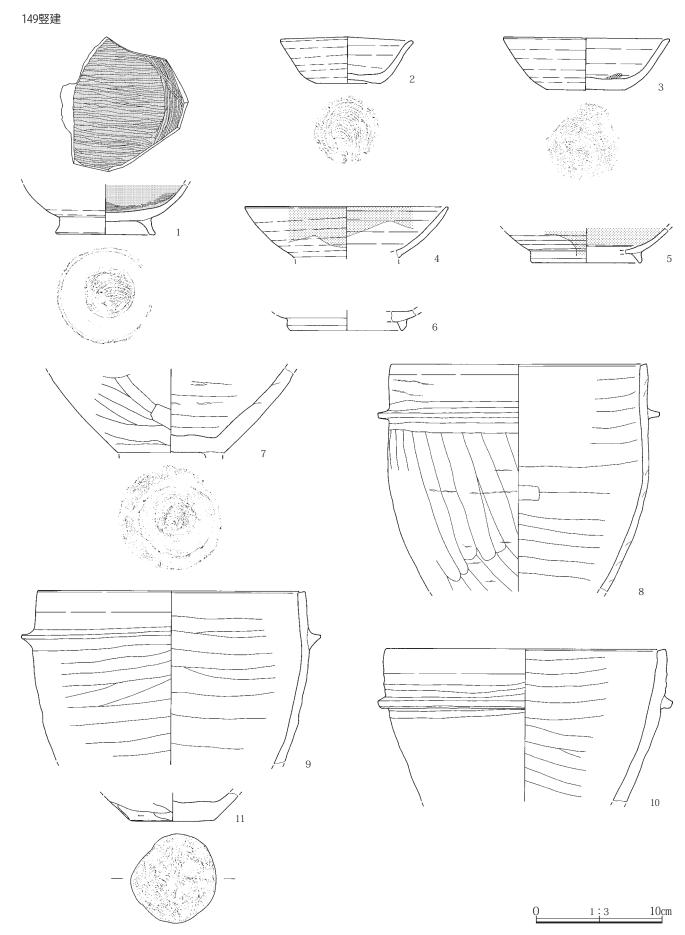
第419図 3面 G 3 区143·144号竪穴建物出土遺物

10cm

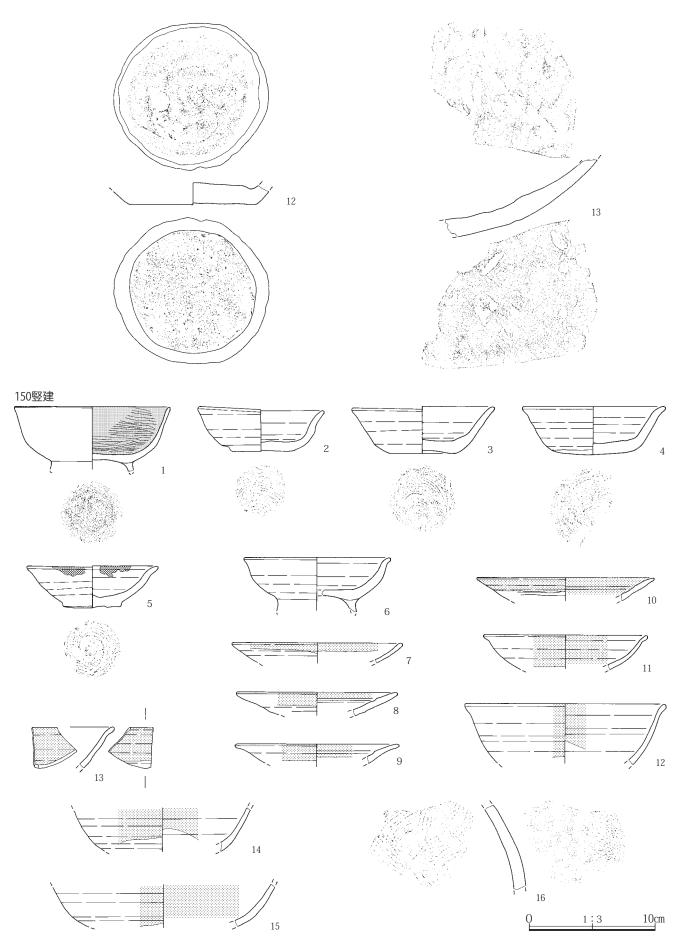
1:3



第420図 3面 G 3区145~148号竪穴建物出土遺物

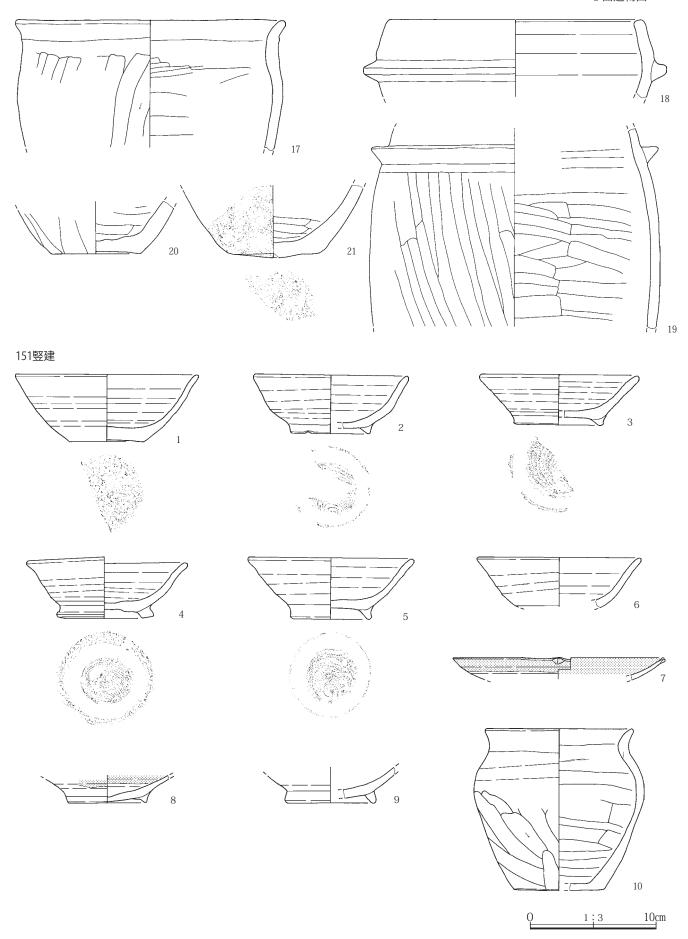


第421図 3面 G3区149号竪穴建物出土遺物(1)

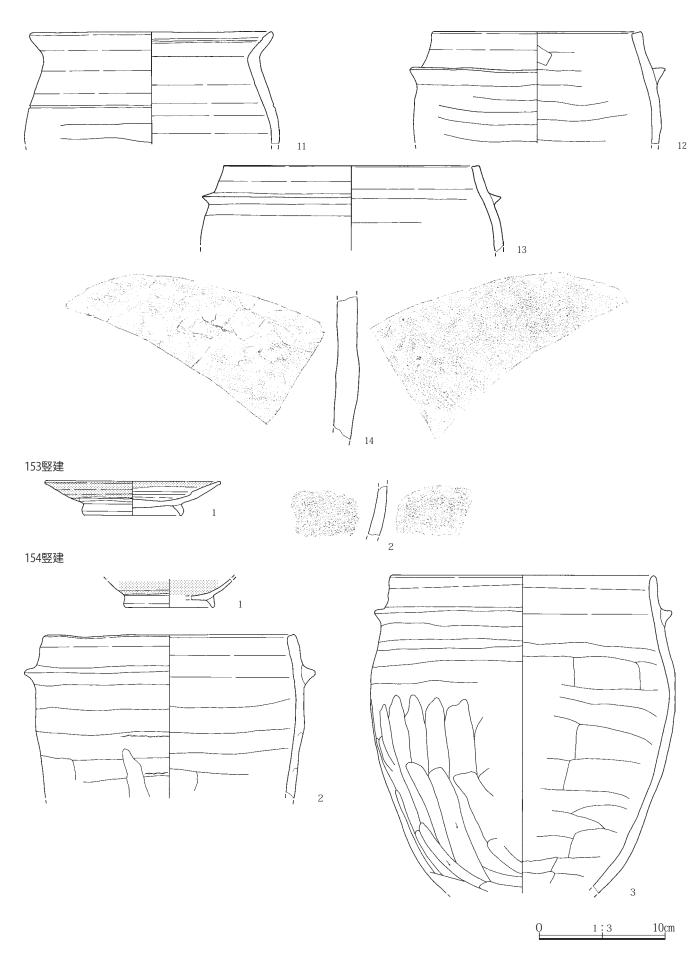


第422図 3面 G3区149号竪穴建物(2)·150号竪穴建物出土遺物(1)

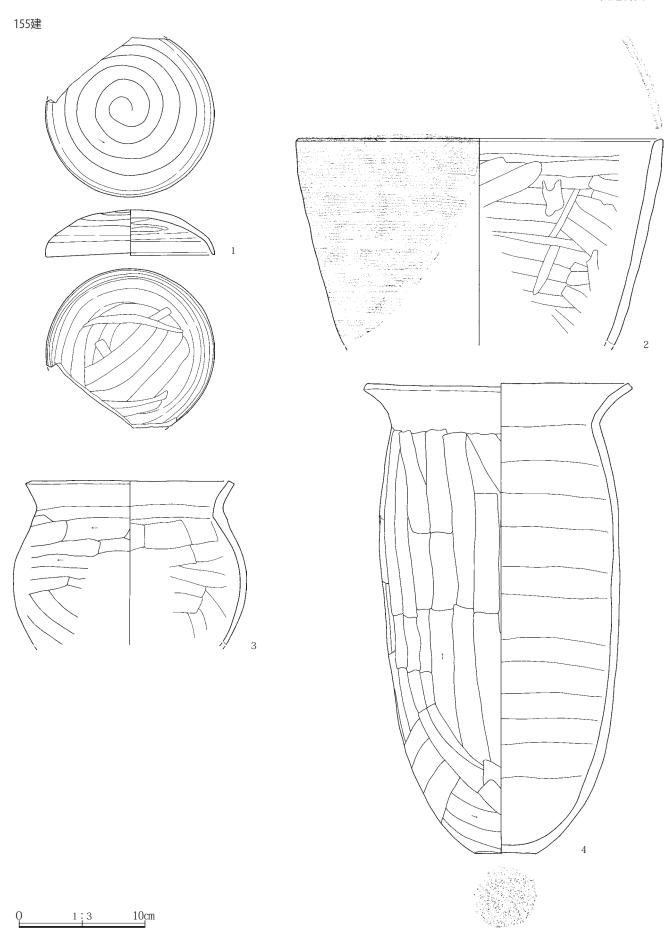
# 3面遺物図



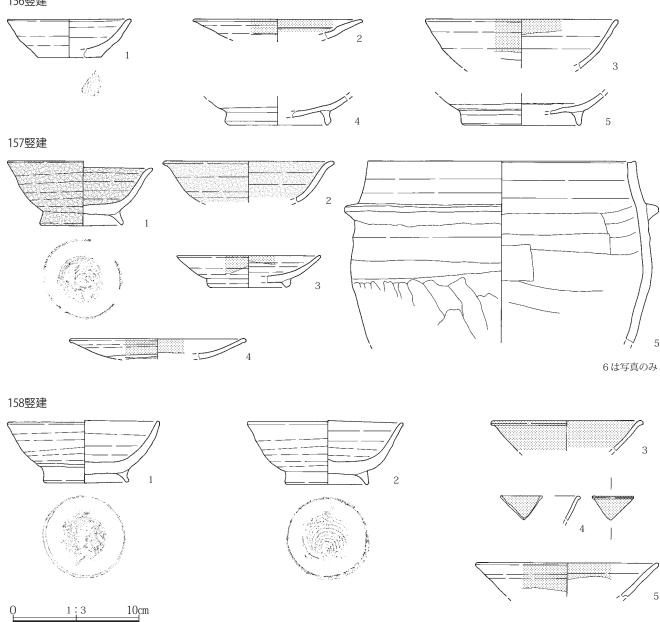
第423図 3面 G3区150号竪穴建物(2)·151号竪穴建物出土遺物(1)



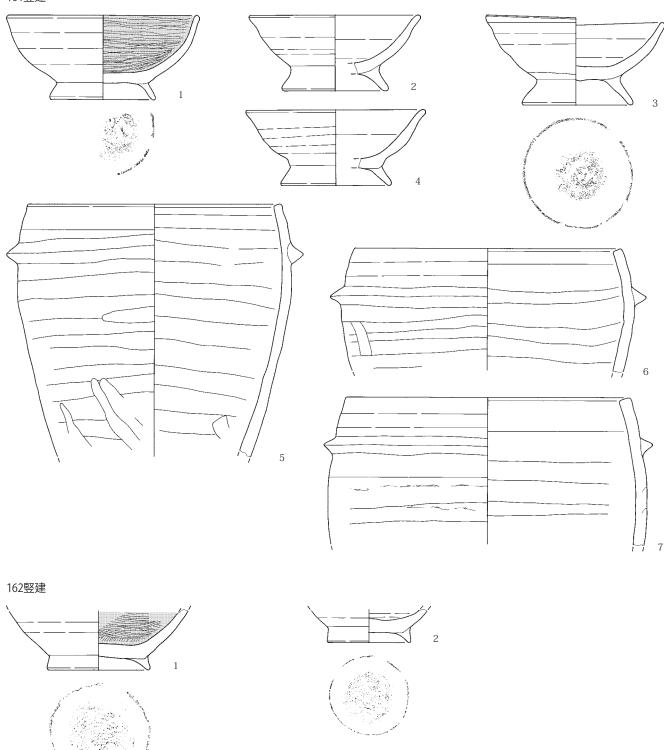
第424図 3面 G 3 区151号竪穴建物(2)・153・154号竪穴建物出土遺物



第425図 3面 G3区155号竪穴建物出土遺物



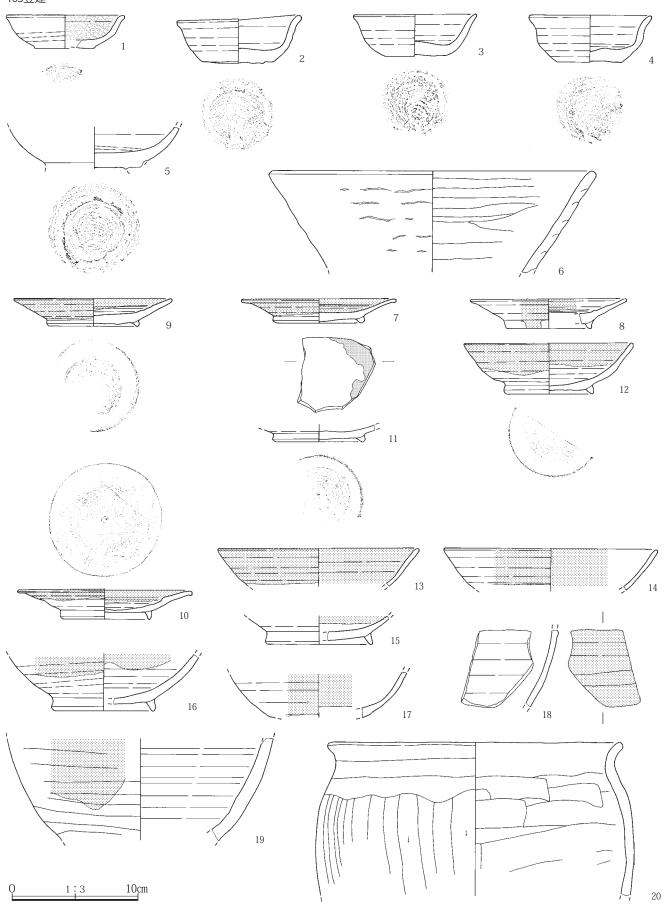
第426図 3面 G 3区156~158号竪穴建物出土遺物



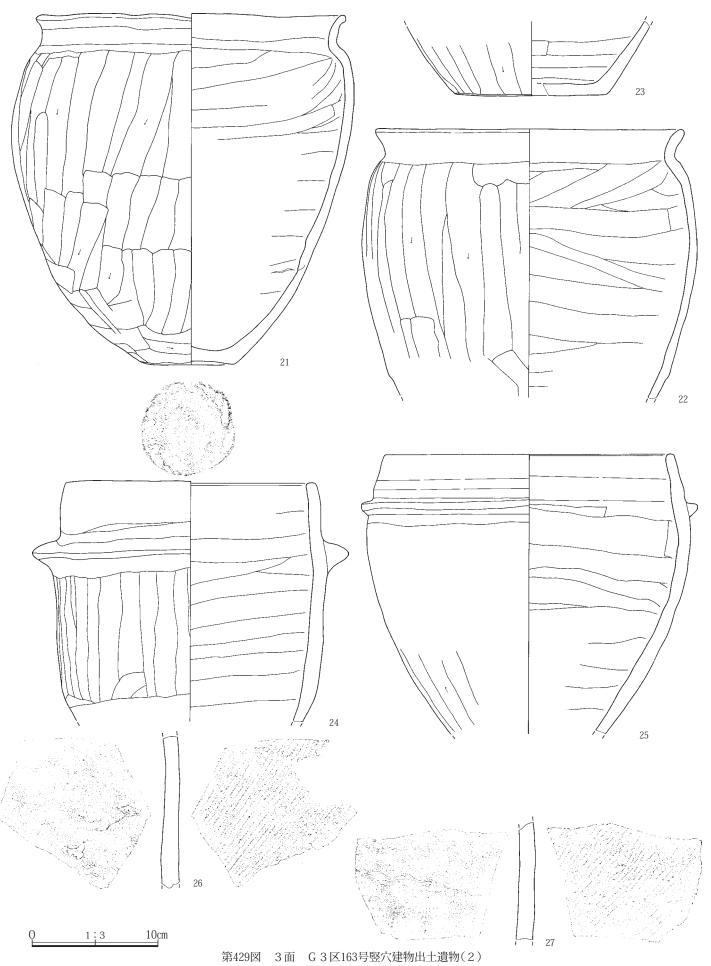
第427図 3面 G 3区161·162号竪穴建物出土遺物

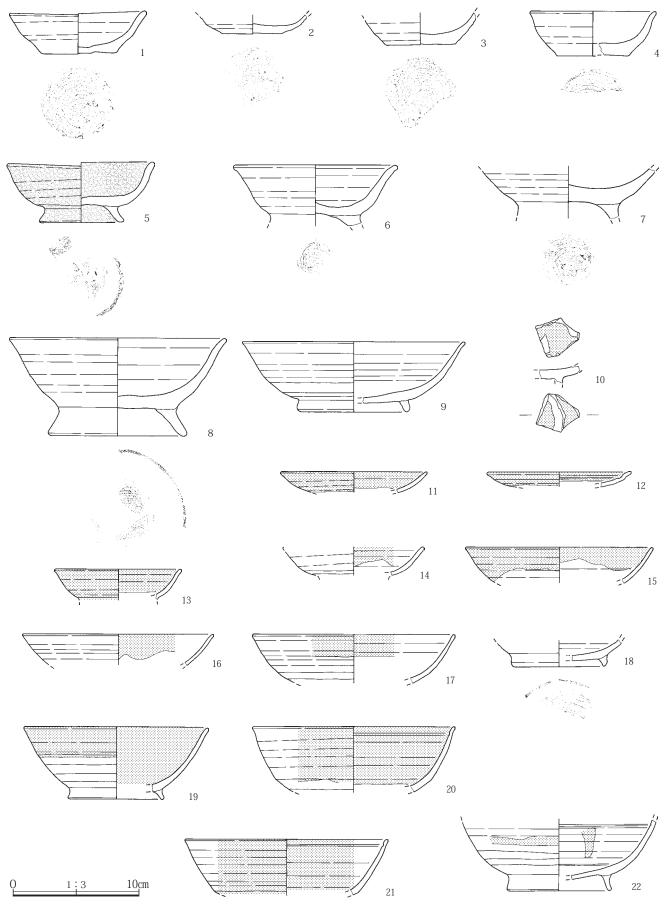
10cm

1:3



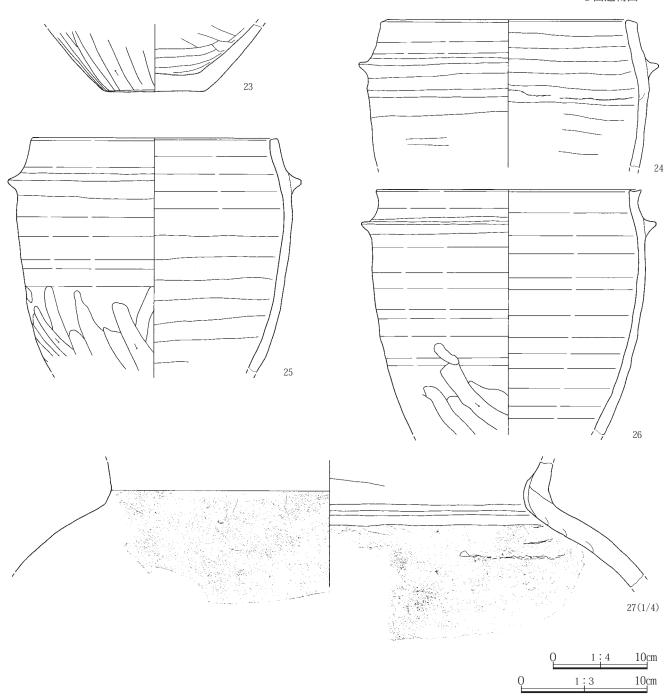
第428図 3面 G3区163号竪穴建物出土遺物(1)



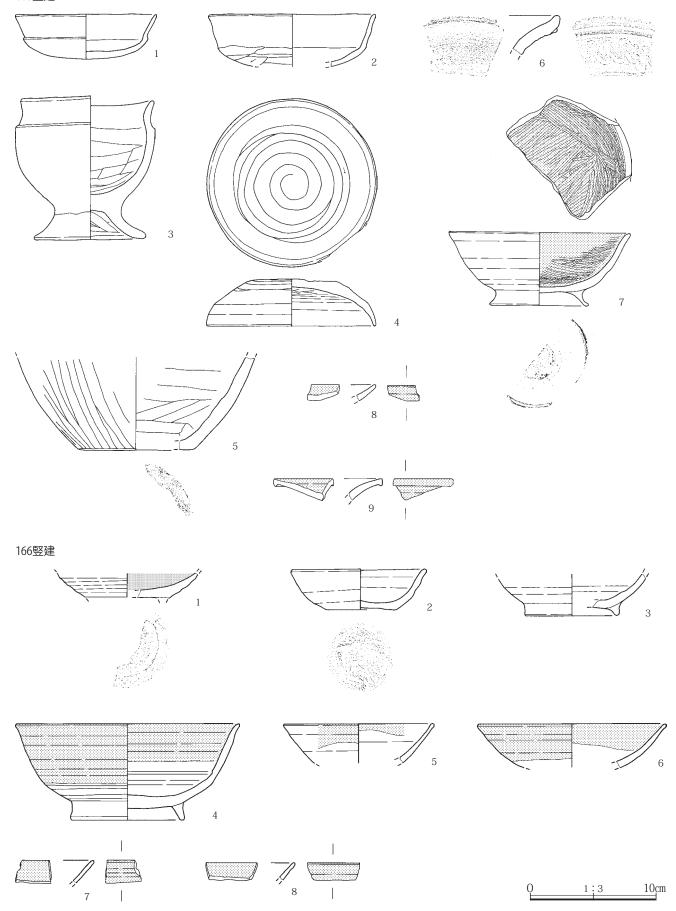


第430図 3面 G3区164号竪穴建物出土遺物(1)

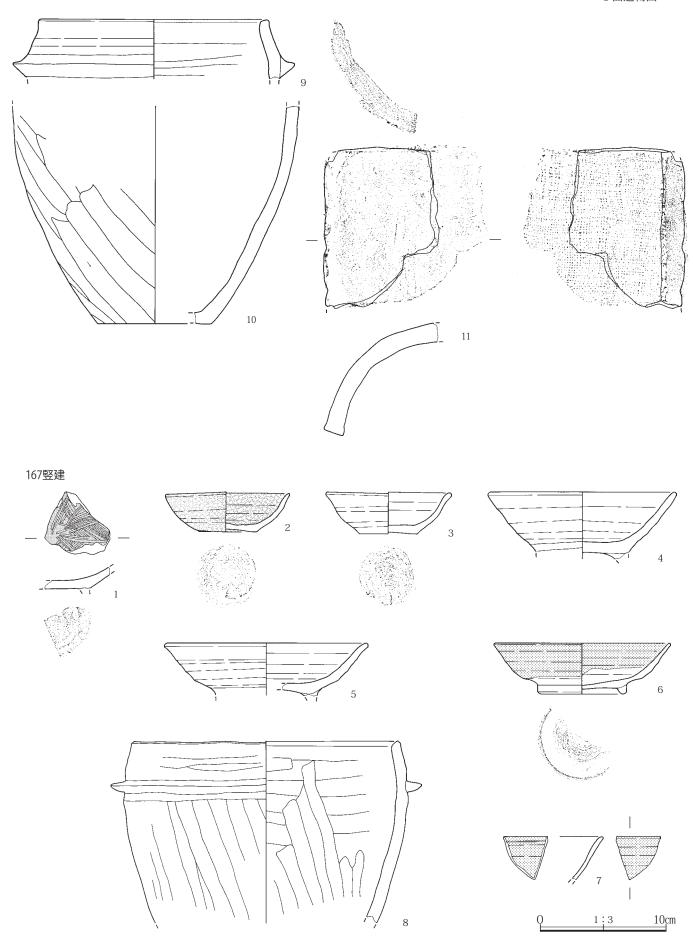
# 3面遺物図



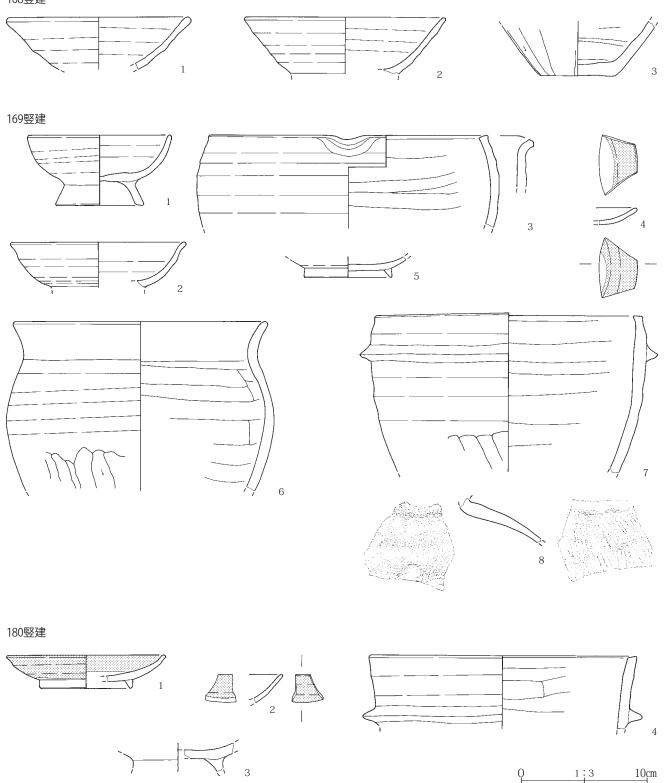
第431図 3面 G3区164号竪穴建物出土遺物(2)



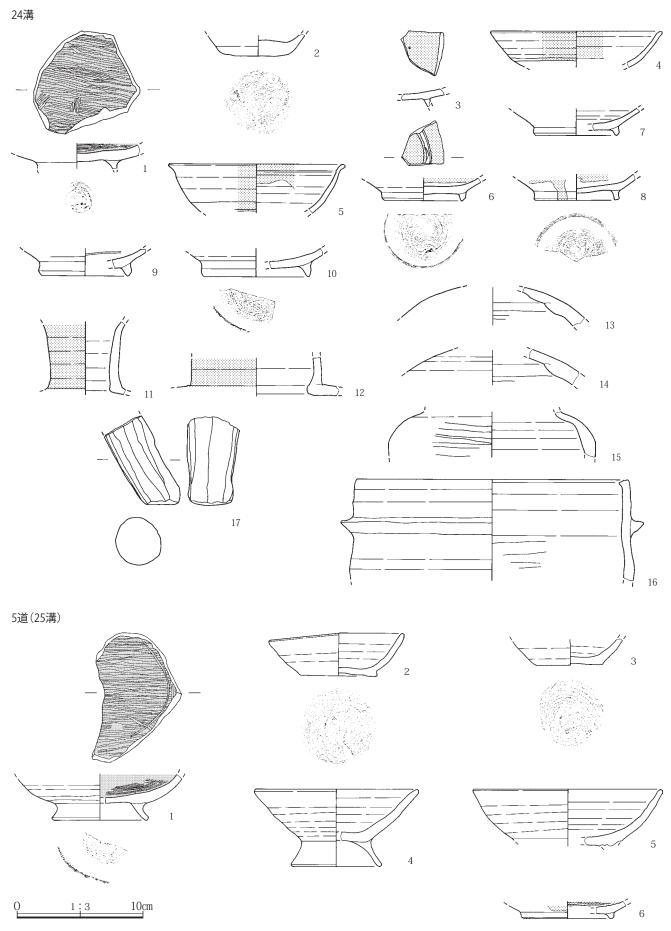
第432図 3面 G3区165号竪穴建物・166号竪穴建物出土遺物(1)



第433図 3面 G3区166号竪穴建物(2)·167号竪穴建物出土遺物

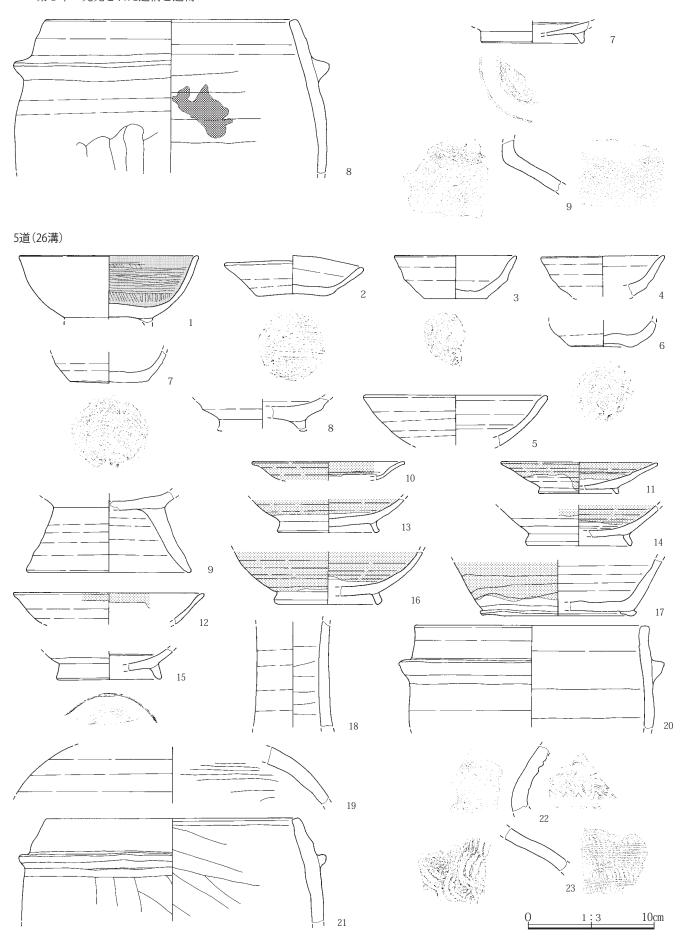


第434図 3面 G 3 区168·169·180号竪穴建物出土遺物

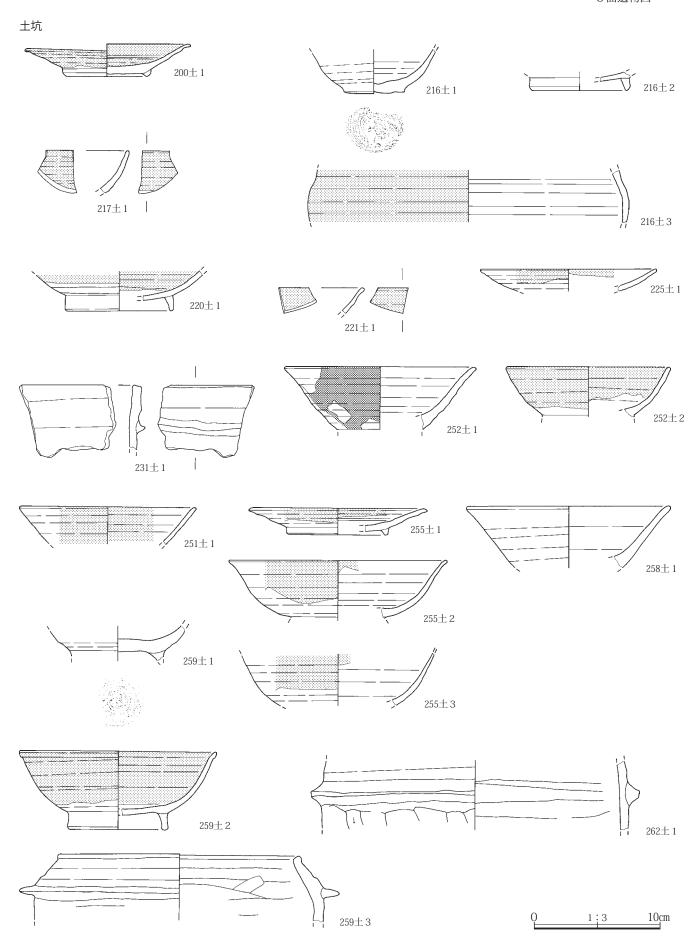


第435図 3面 G 3区24号溝・5号道(25号溝)出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

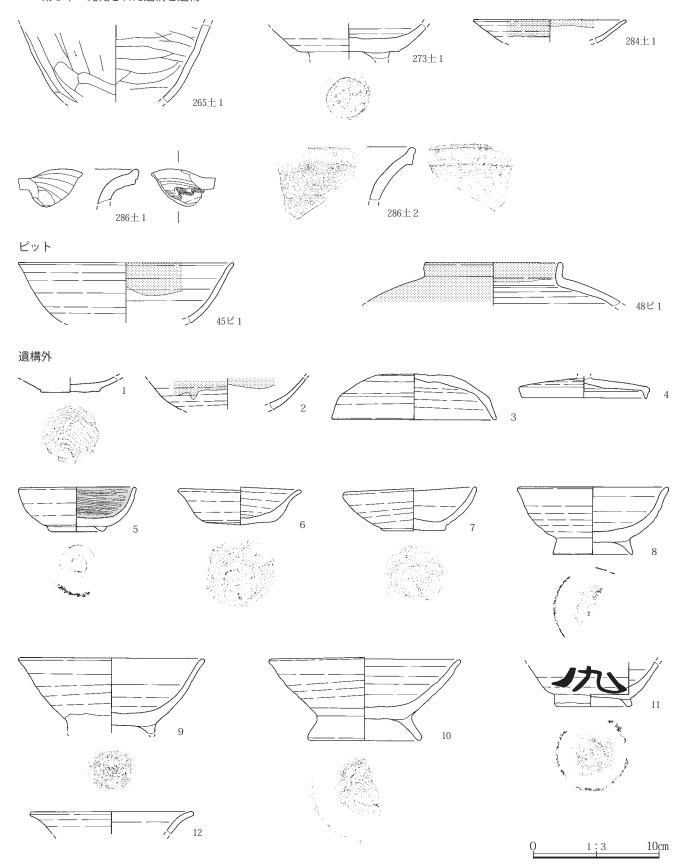


第436図 3面 G 3 区5号道(25号溝)(2)·26号溝出土遺物



第437図 3面 G 3区200・216・217・220・221・225・231・251・252・255・258・259・262号土坑出土遺物

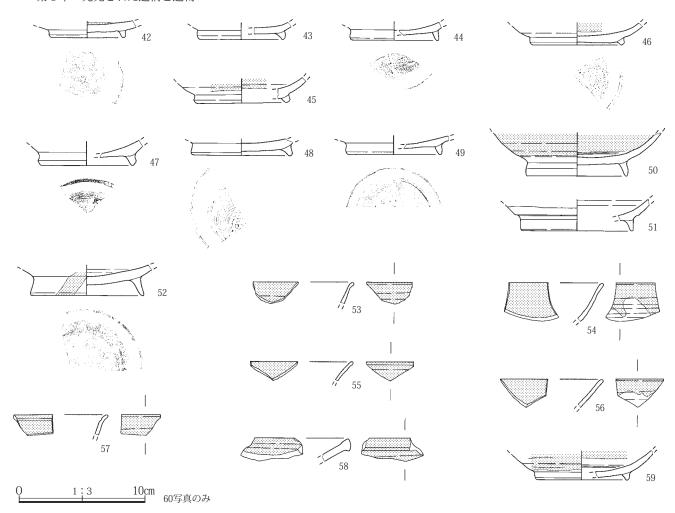
# 第3章 発見された遺構と遺物



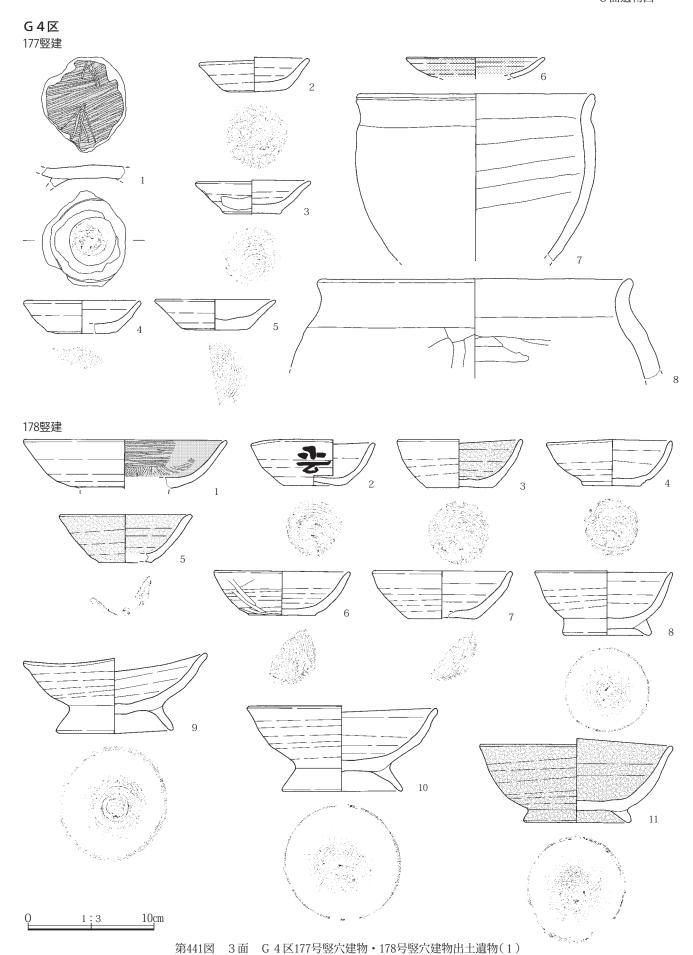
第438図 3面 G 3区265・273・284・286号土坑、45・48号ピット、遺構外出土遺物(1)

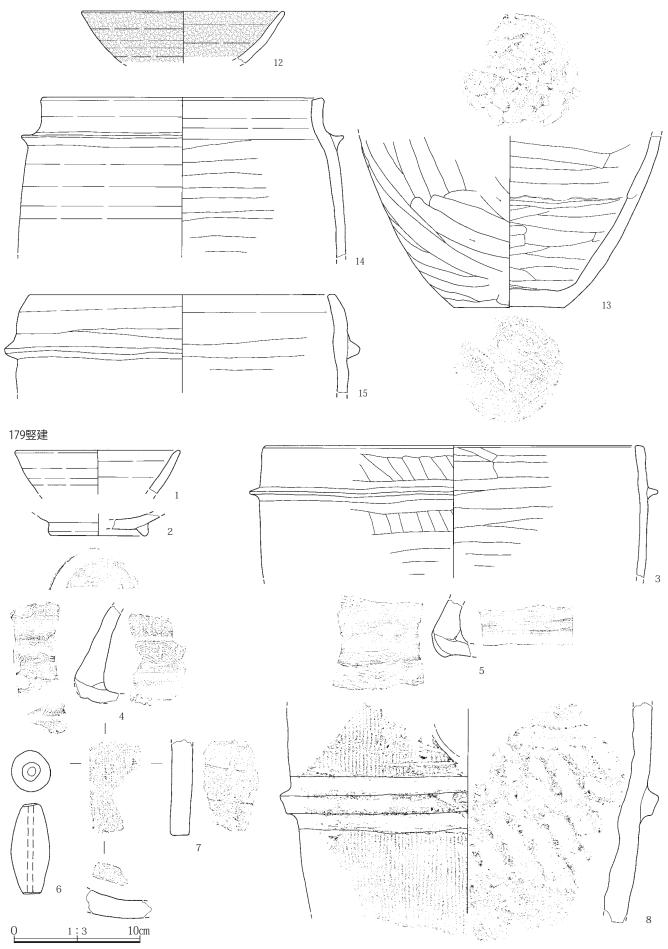
第439図 3面 G3区遺構外出土遺物(2)

# 第3章 発見された遺構と遺物



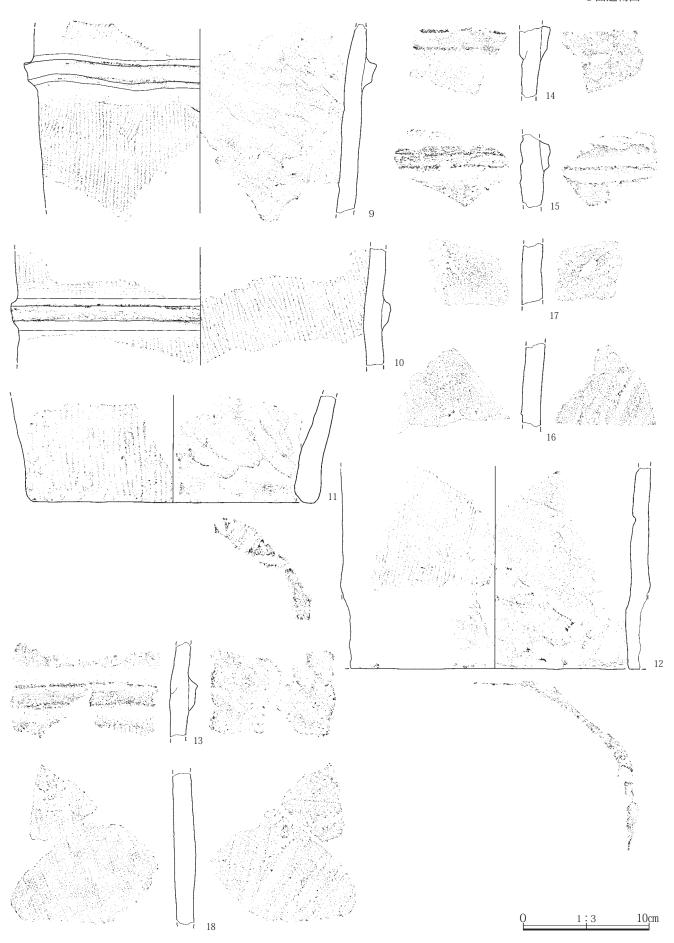
第440図 3面 G3区遺構外出土遺物(3)



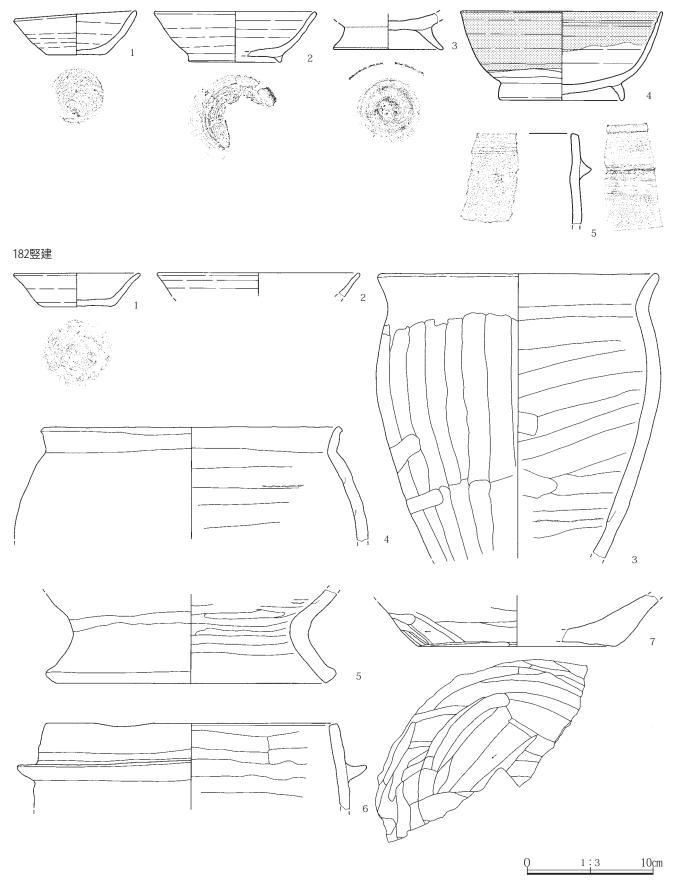


第442図 3面 G4区178号竪穴建物(2)·179号竪穴建物出土遺物(1)

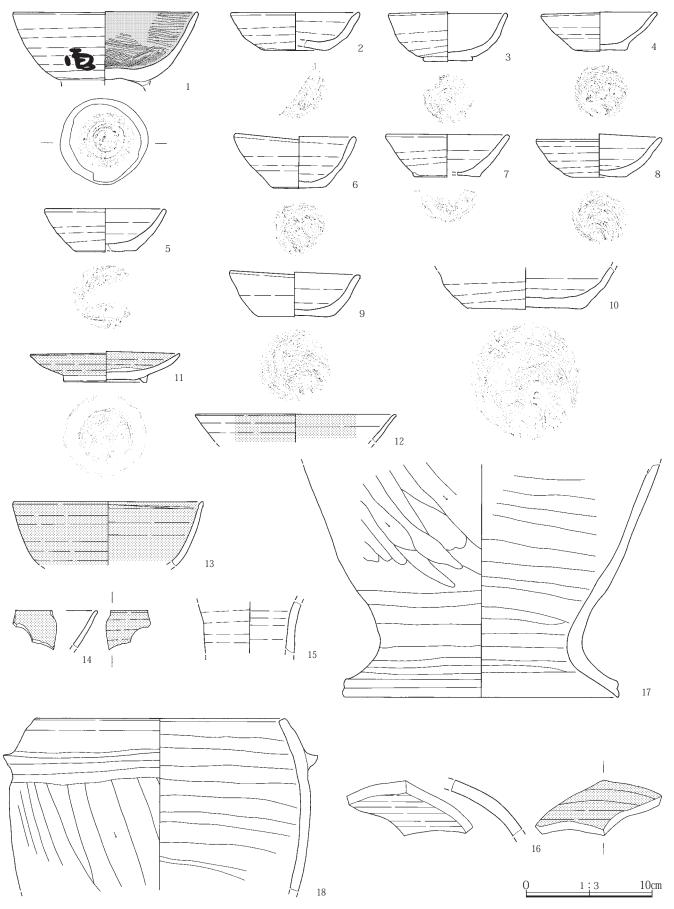
618



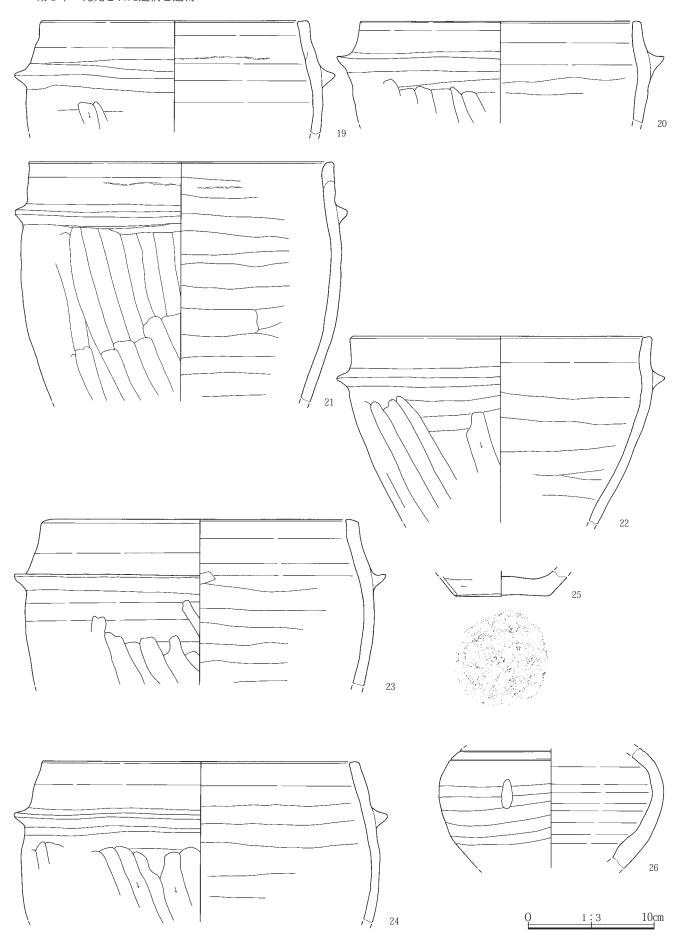
第443図 3面 G4区179号竪穴建物出土遺物(2)



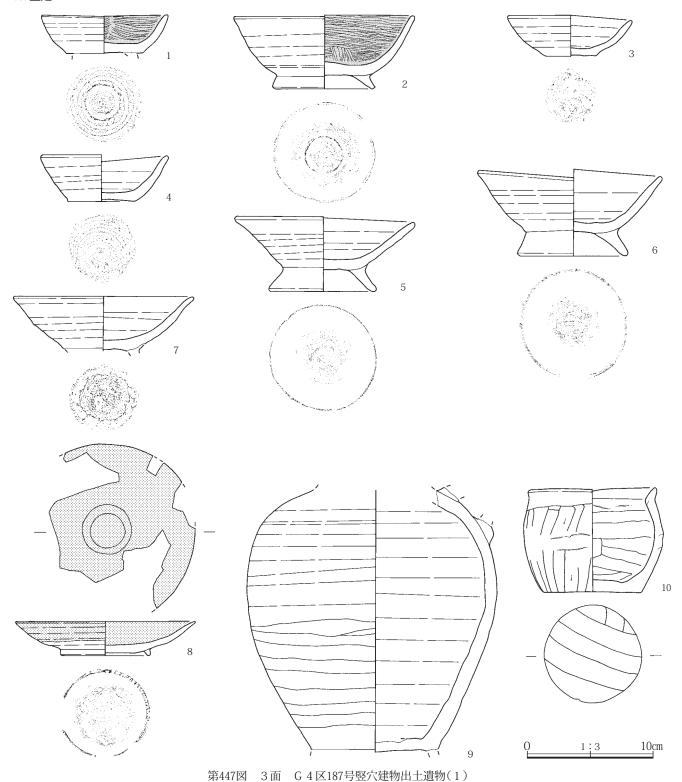
第444図 3面 G 4 区181·182号竪穴建物出土遺物

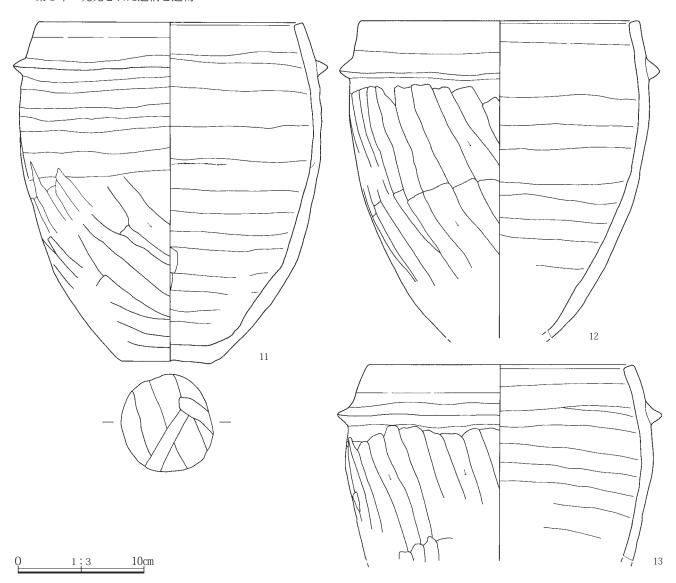


第445図 3面 G4区185号竪穴建物出土遺物(1)

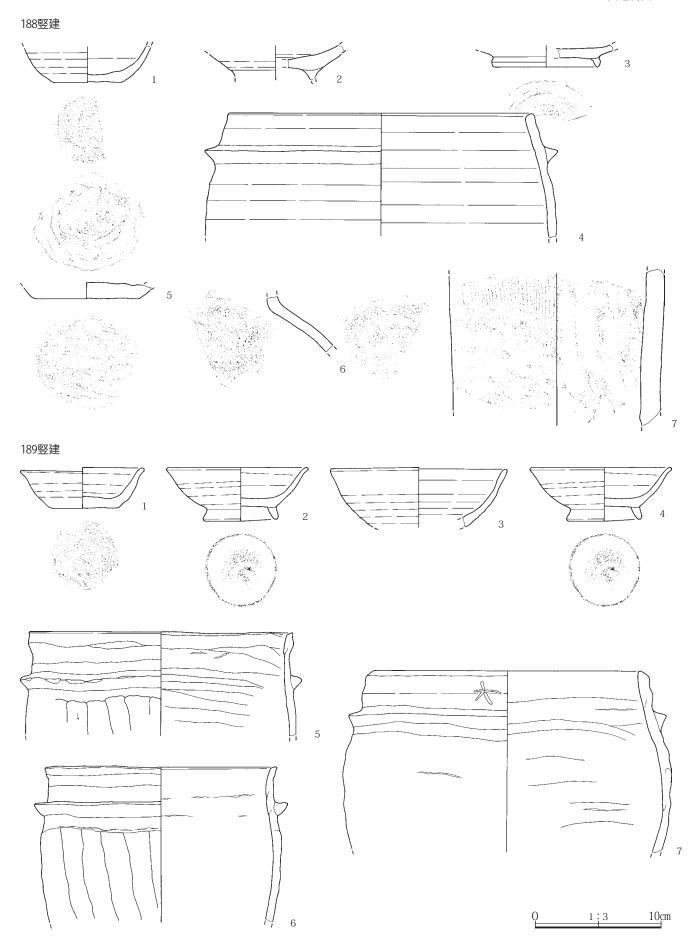


第446図 3面 G4区185号竪穴建物出土遺物(2)

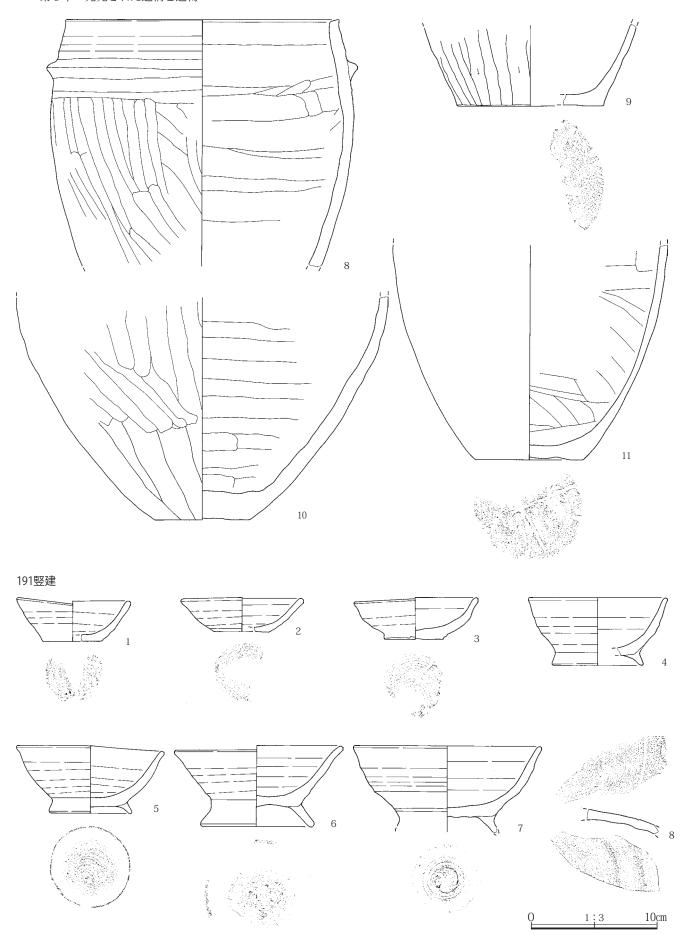




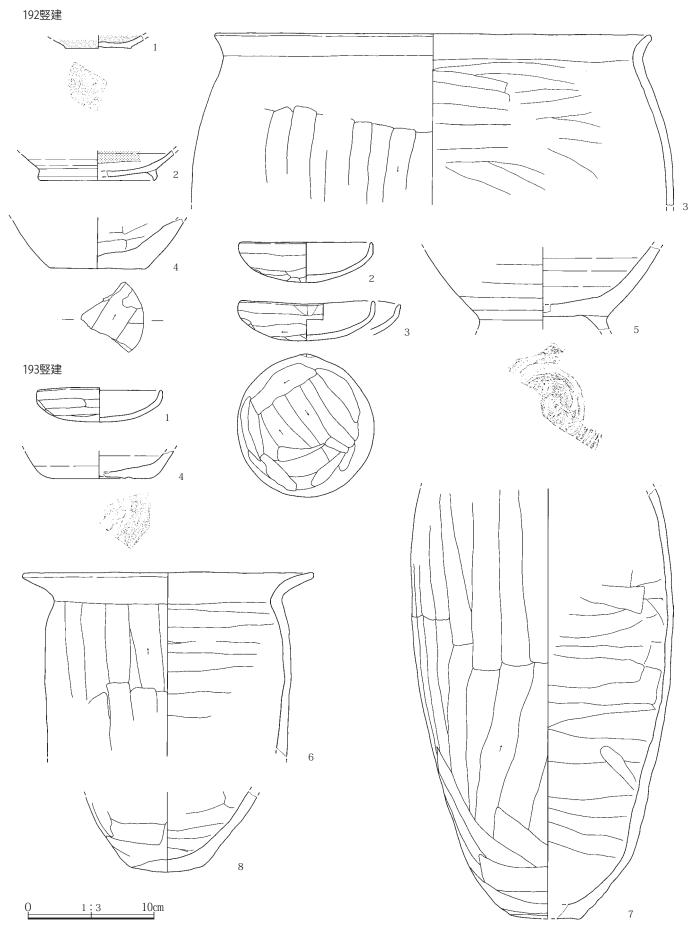
第448図 3面 G4区187号竪穴建物出土遺物(2)



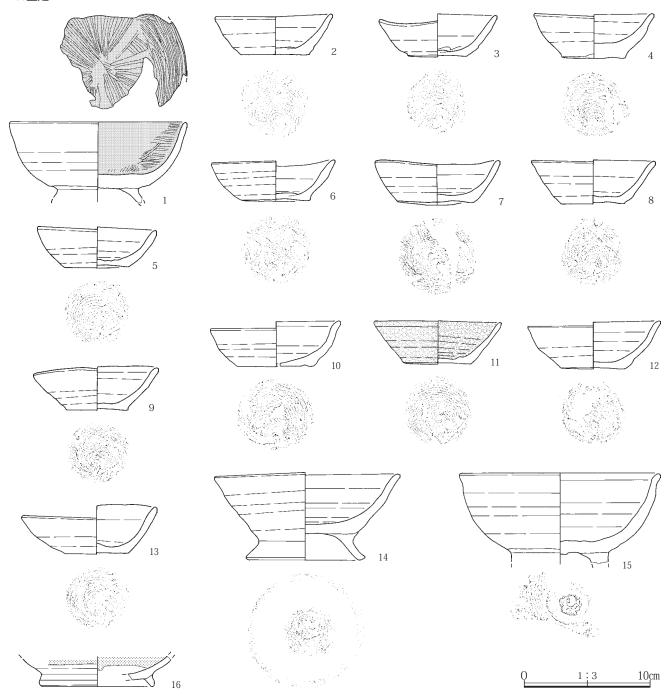
第449図 3面 G4区188号竪穴建物・189号竪穴建物出土遺物(1)



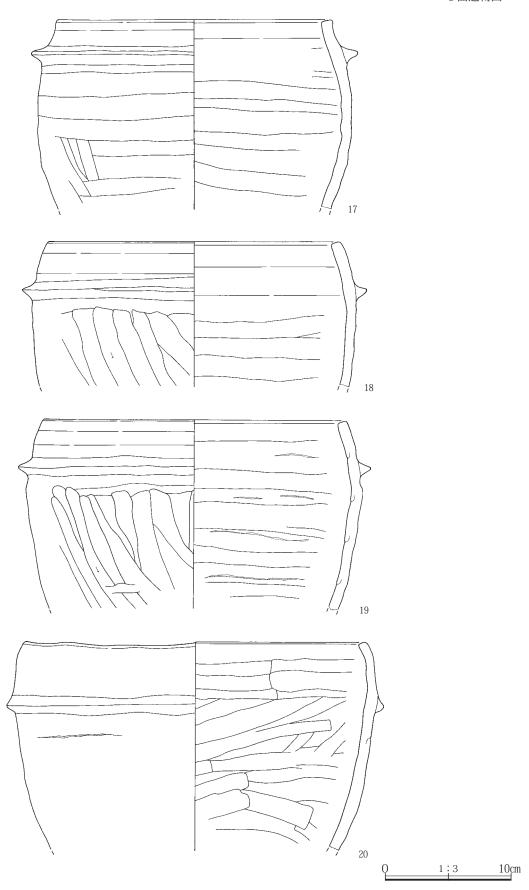
第450図 3面 G4区189号竪穴建物(2)·191号竪穴建物出土遺物



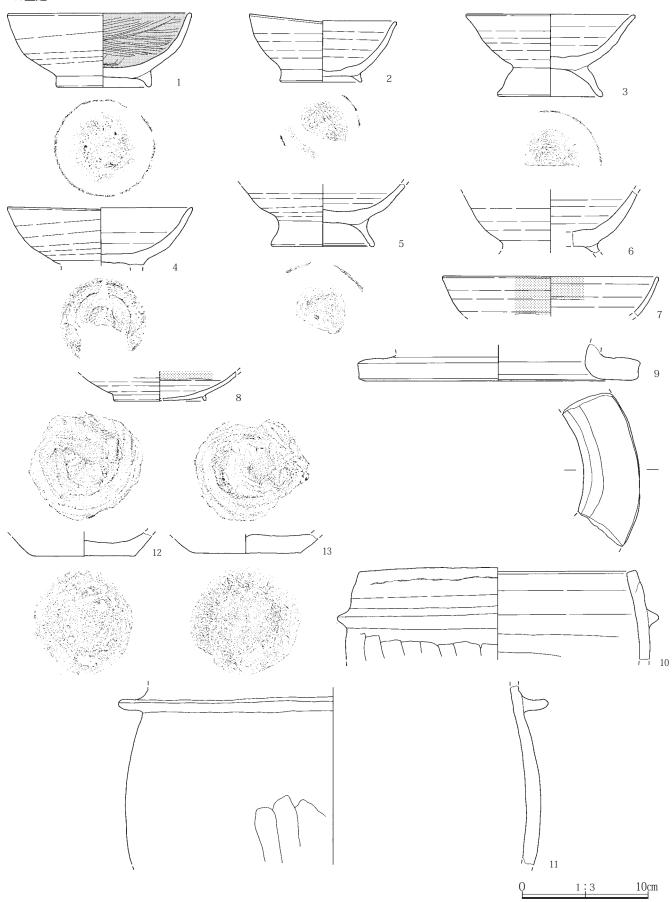
第451図 3面 G 4 区192·193号竪穴建物出土遺物



第452図 3面 G4区203号竪穴建物出土遺物(1)

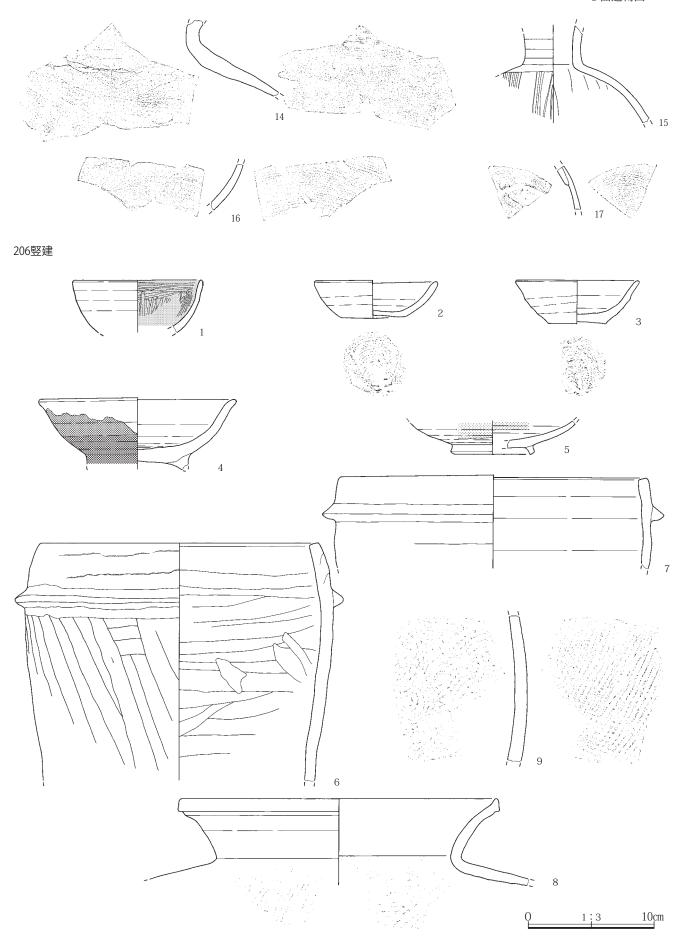


第453図 3面 G4区203号竪穴建物出土遺物(2)

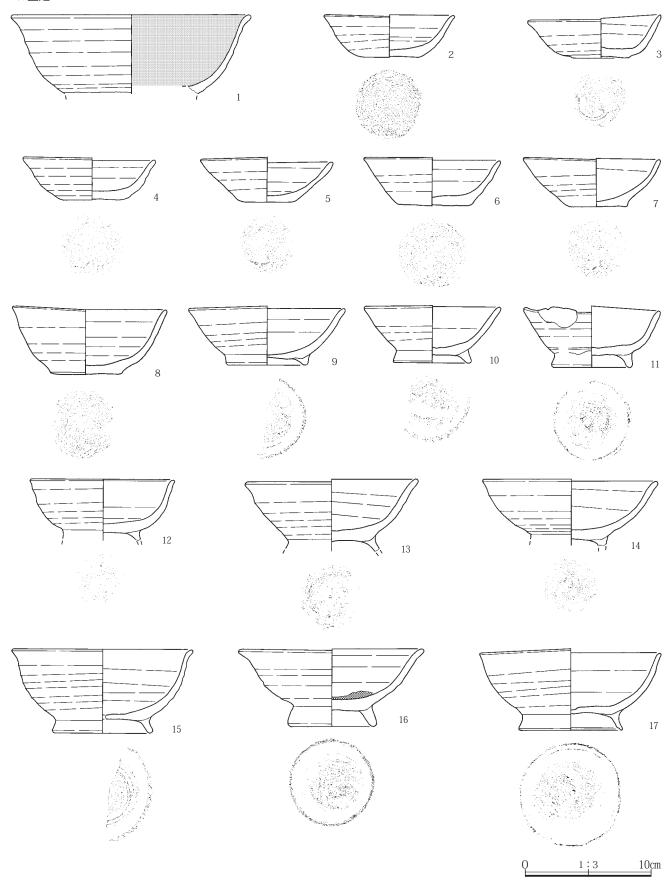


第454図 3面 G4区205号竪穴建物出土遺物(1)

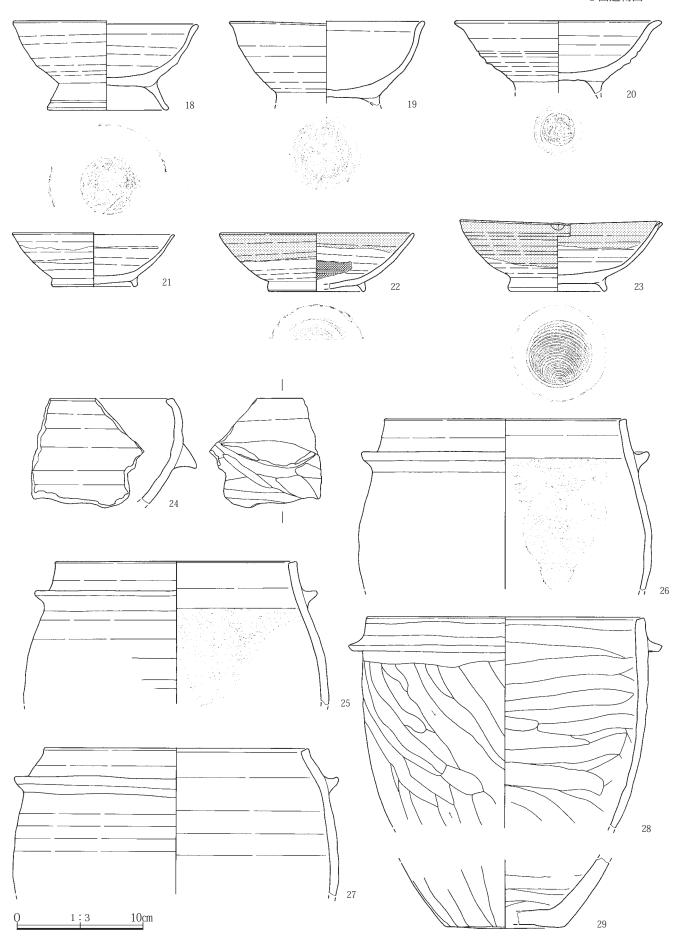
# 3面遺物図



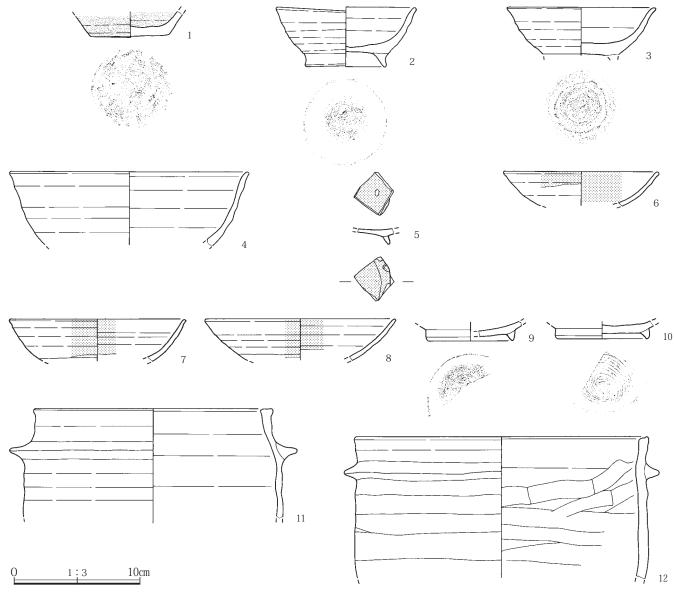
第455図 3面 G4区205号竪穴建物(2)・206号竪穴建物出土遺物



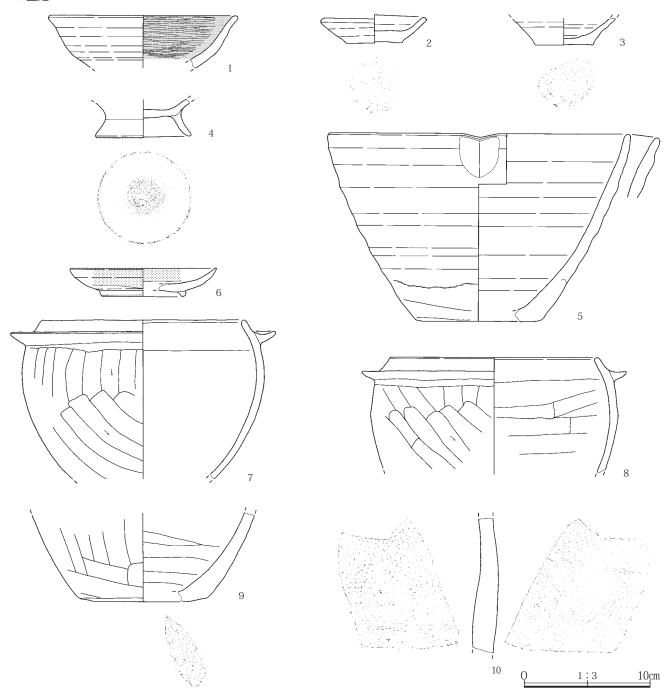
第456図 3面 G4区207号竪穴建物出土遺物(1)



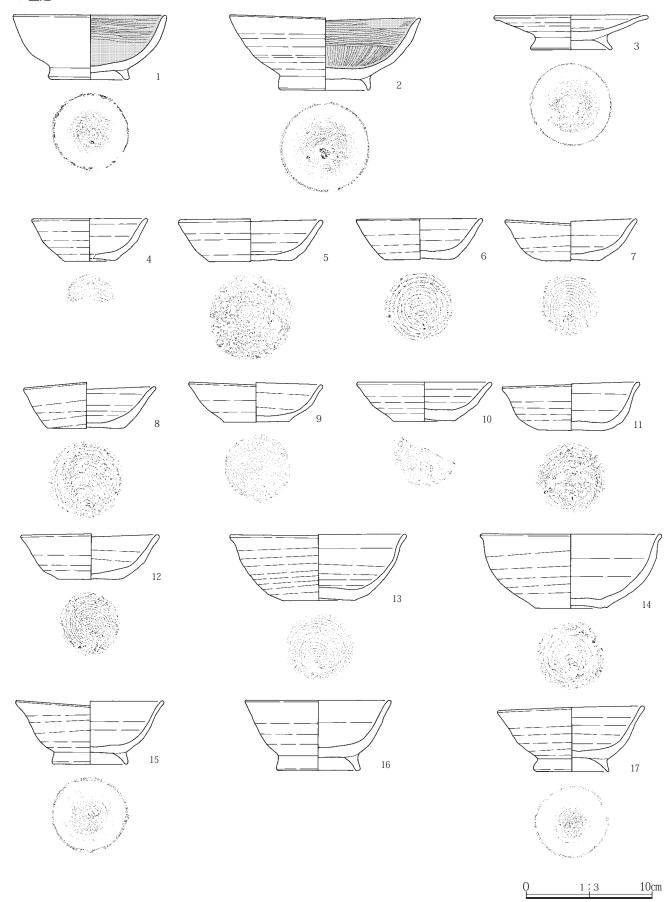
第457図 3面 G4区207号竪穴建物出土遺物(2)



第458図 3面 G4区208号竪穴建物出土遺物

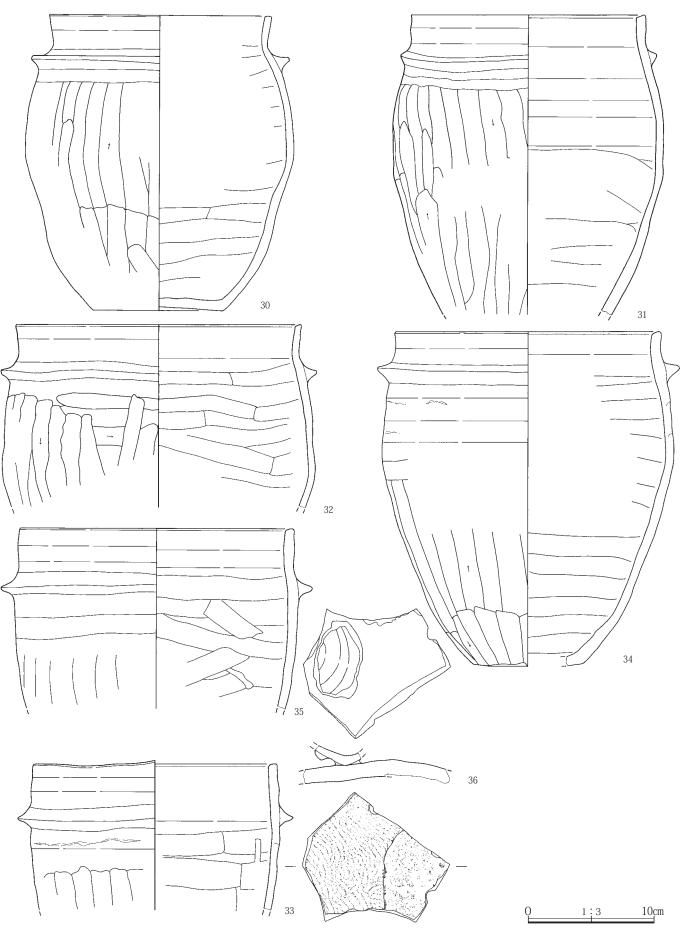


第459図 3面 G4区211号竪穴建物出土遺物

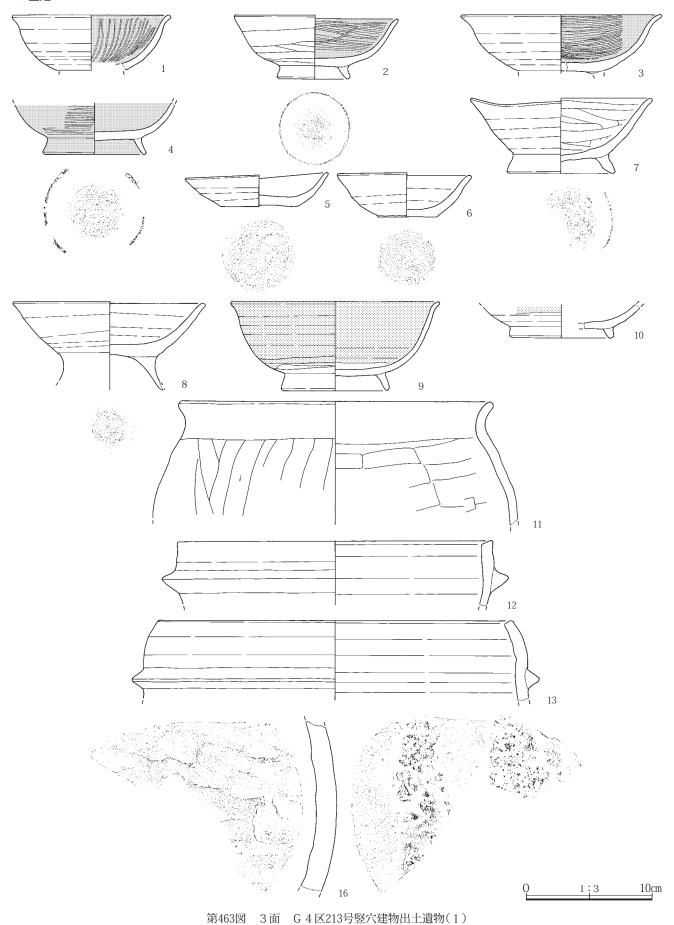


第460図 3面 G4区212号竪穴建物出土遺物(1)

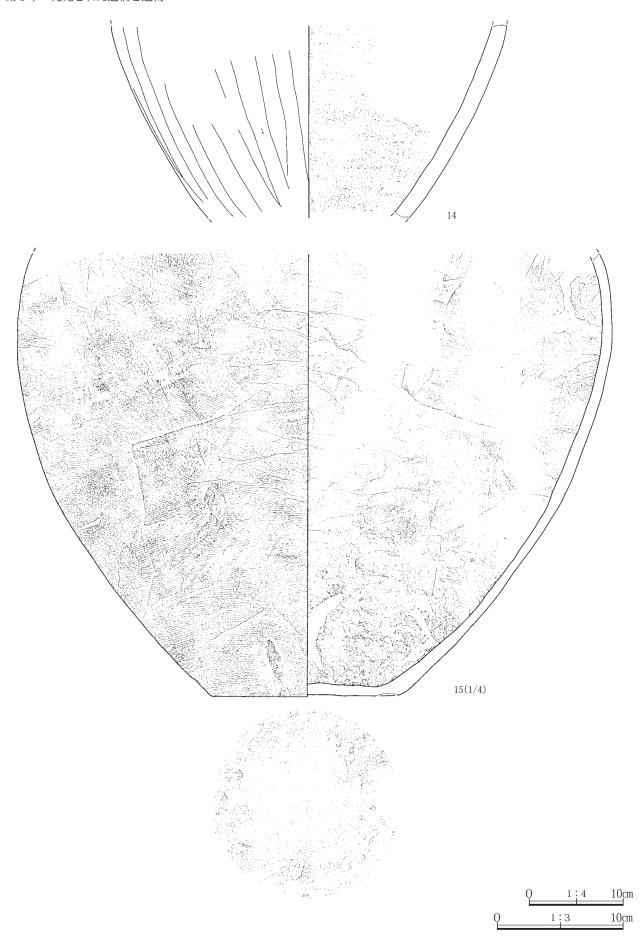
第461図 3面 G4区212号竪穴建物出土遺物(2)



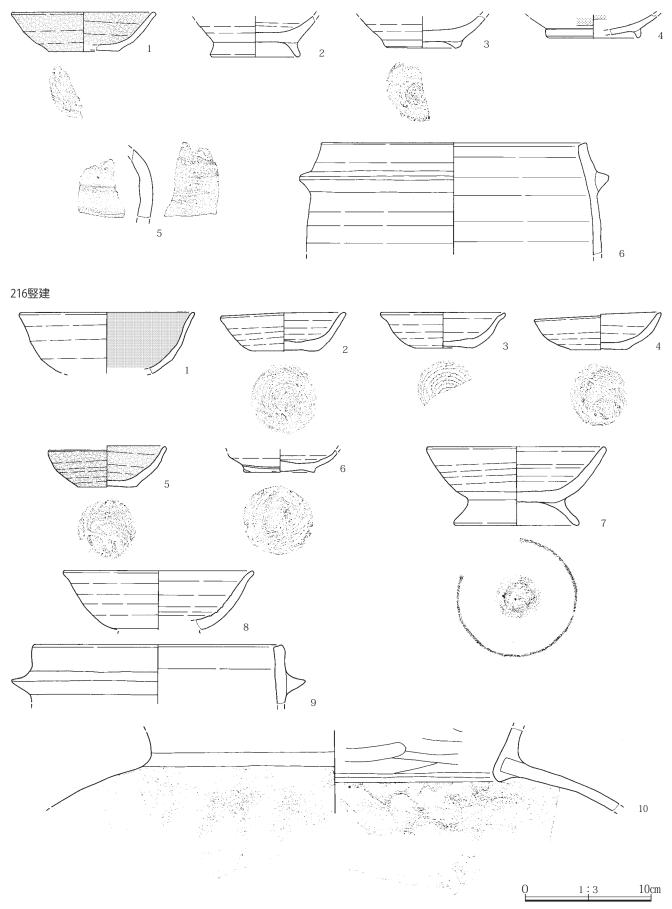
第462図 3面 G4区212号竪穴建物出土遺物(3)



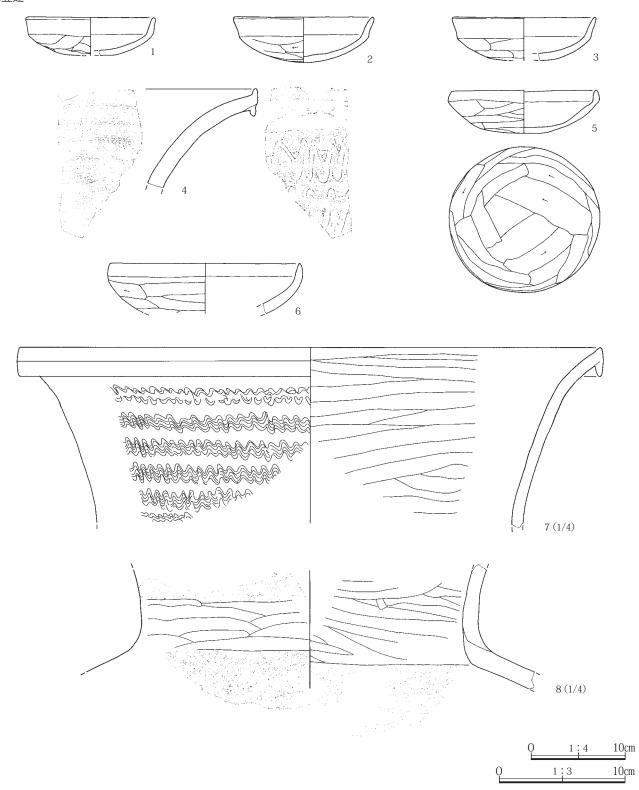
639



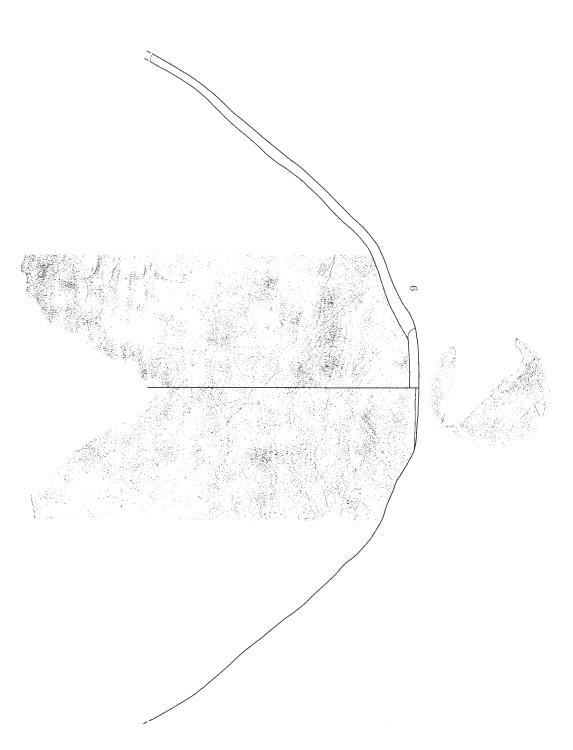
第464図 3面 G4区213号竪穴建物出土遺物(2)

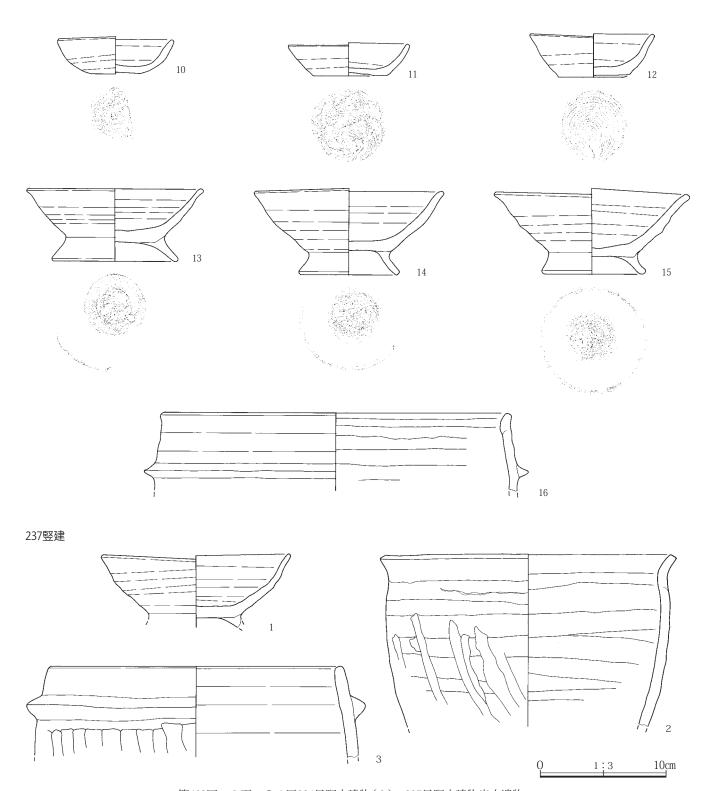


第465図 3面 G 4 区214·216号竪穴建物出土遺物

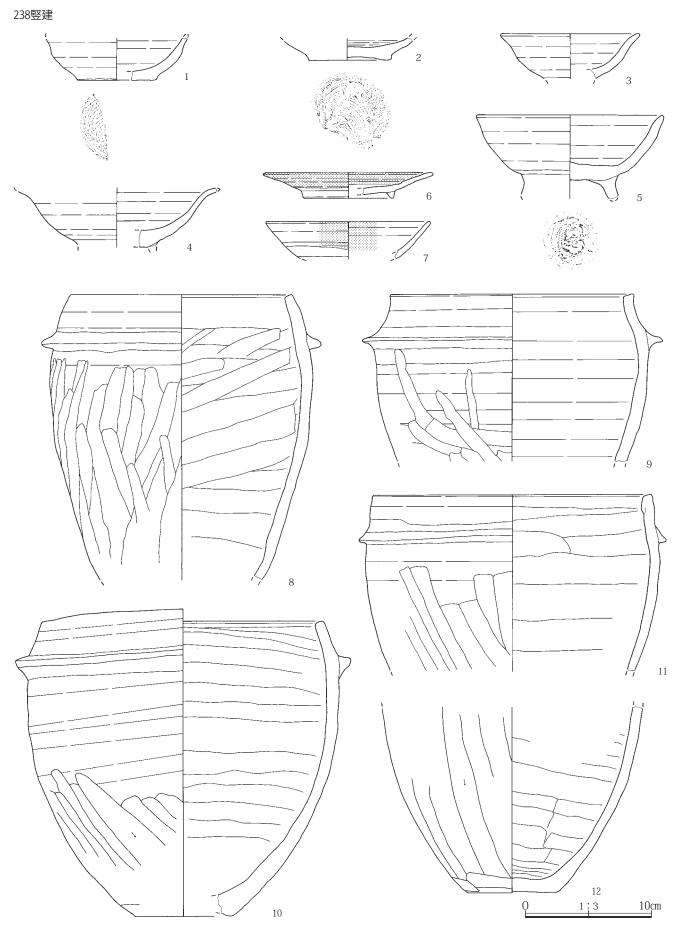


第466図 3面 G4区224号竪穴建物出土遺物(1)

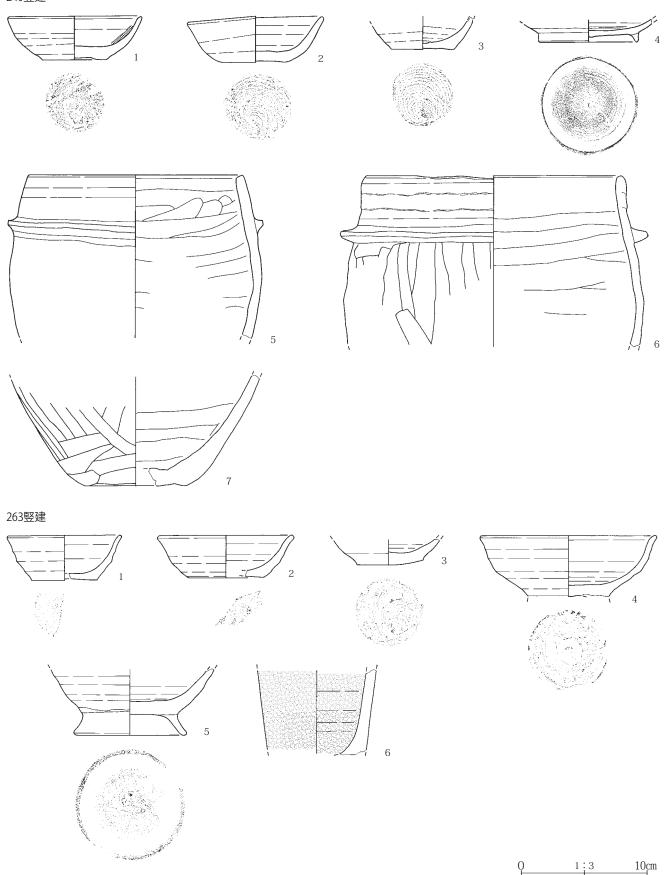




第468図 3面 G4区224号竪穴建物(3)・237号竪穴建物出土遺物

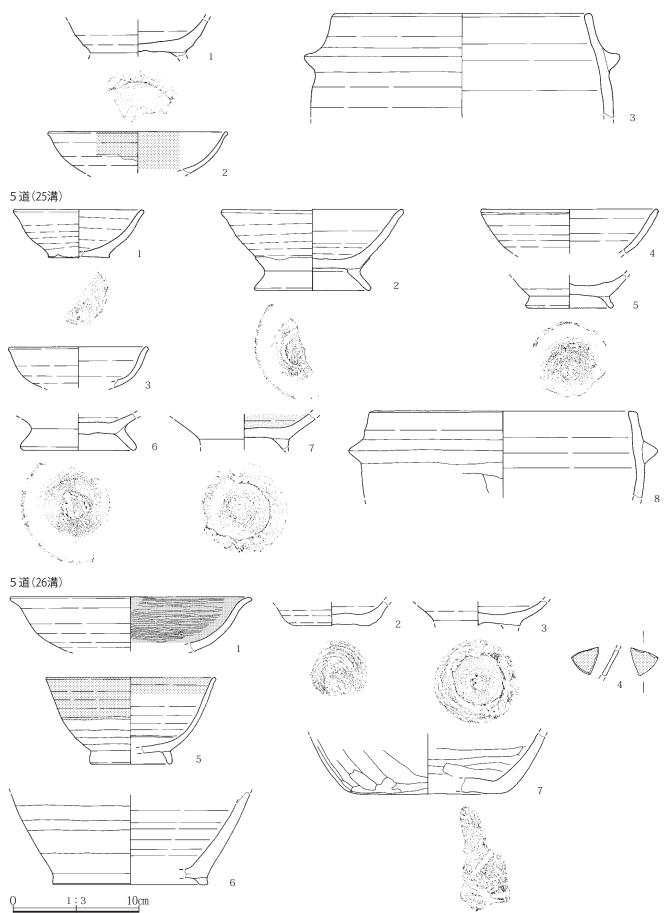


第469図 3面 G4区238号竪穴建物出土遺物

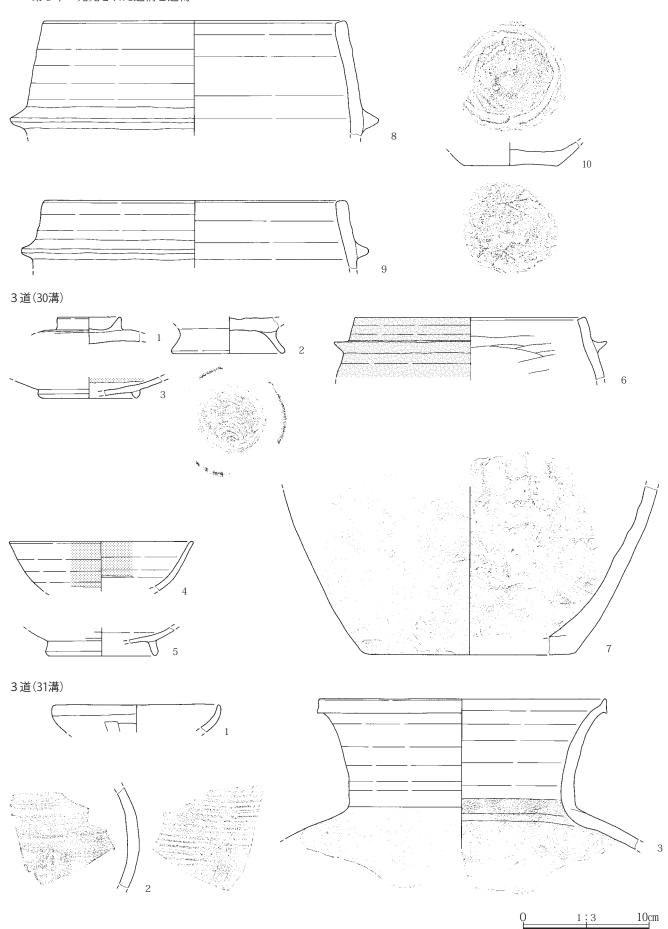


第470図 3面 G 4 区240·263号竪穴建物出土遺物

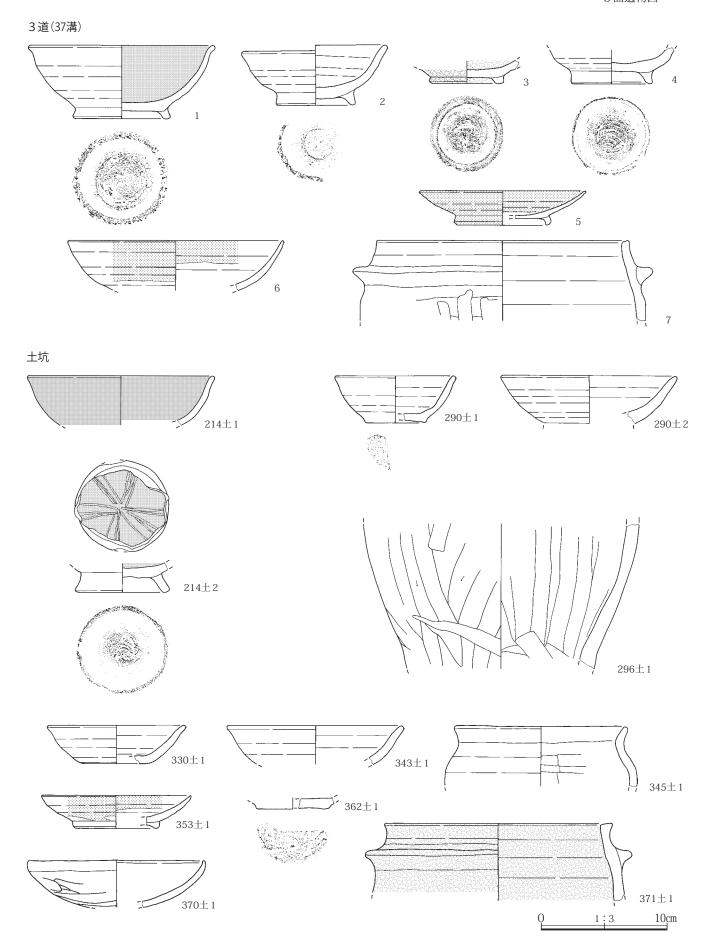
# 2竪穴状



第471図 3 面 G 4 区2号竪穴状遺構、5号道(25号溝・26号溝)出土遺物(1)

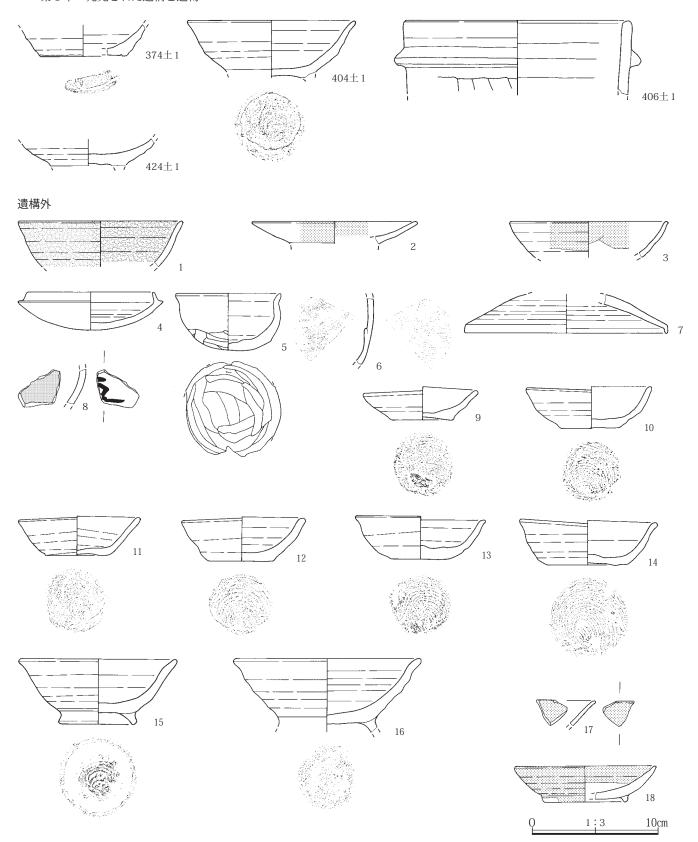


第472図 3面 G4区5号道(26号溝)(2)・3号道(30・31号溝)出土遺物



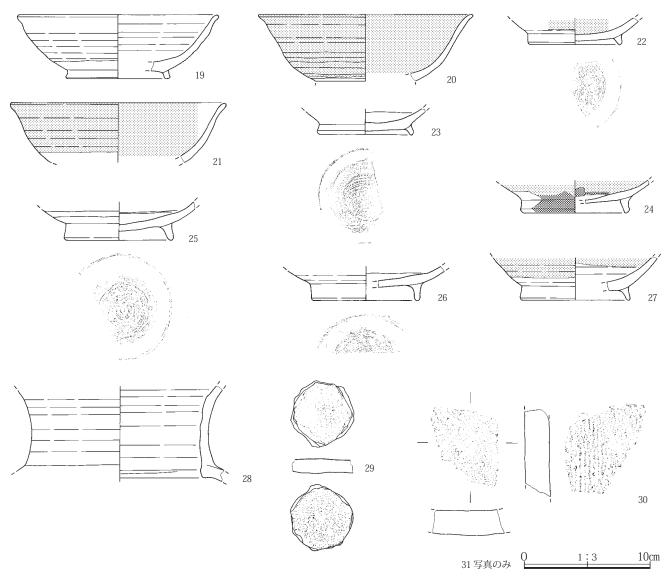
第473図 3面 G4区3号道(37号溝)、214・290・296・330・343・345・353・362・370・371号土坑出土遺物

# 第3章 発見された遺構と遺物



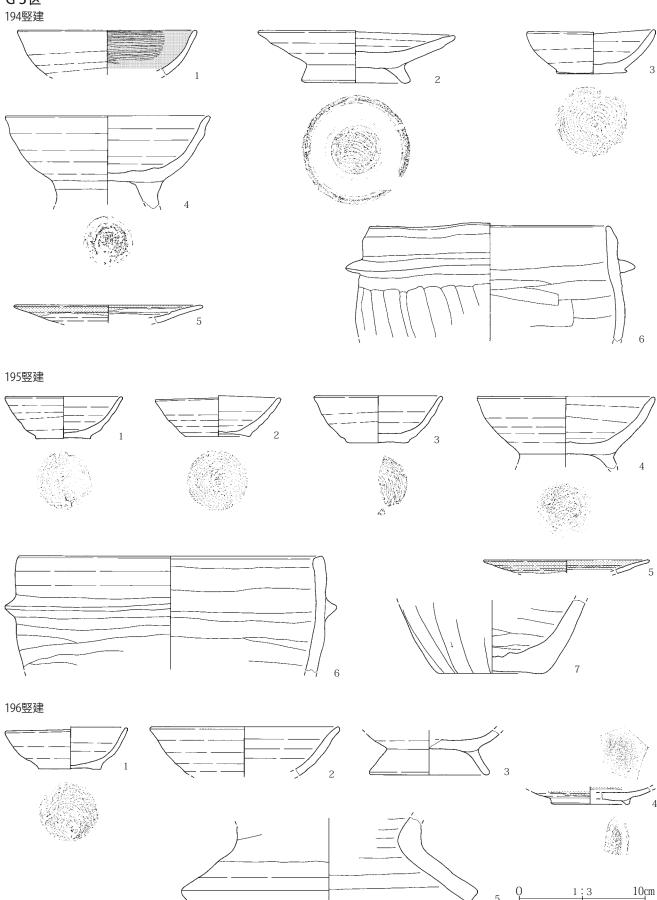
第474図 3面 G4区374・404・406・424号土坑・遺構外出土遺物(1)

# 3面遺物図

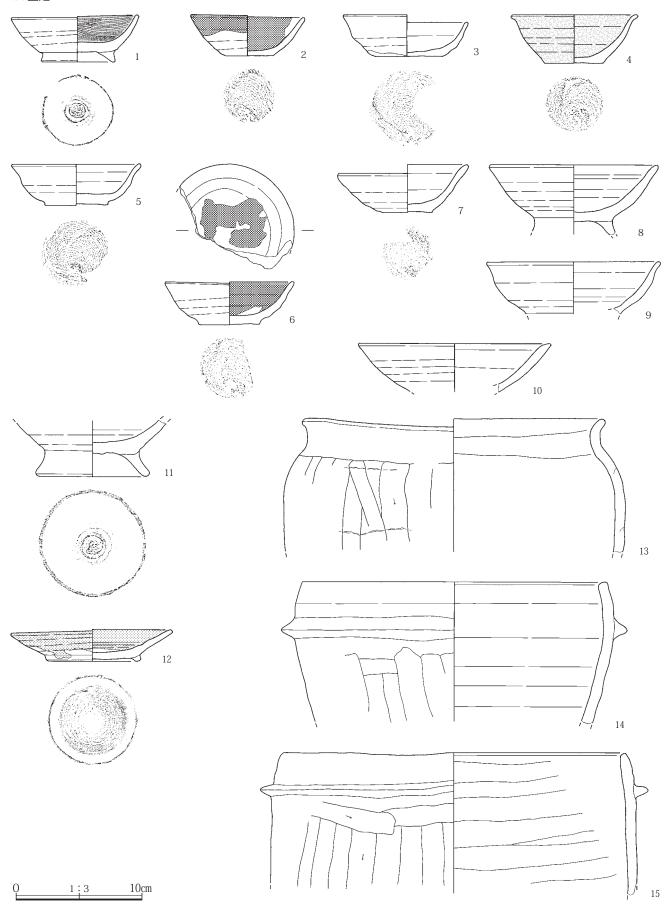


第475図 3面 G4区遺構外出土遺物(2)

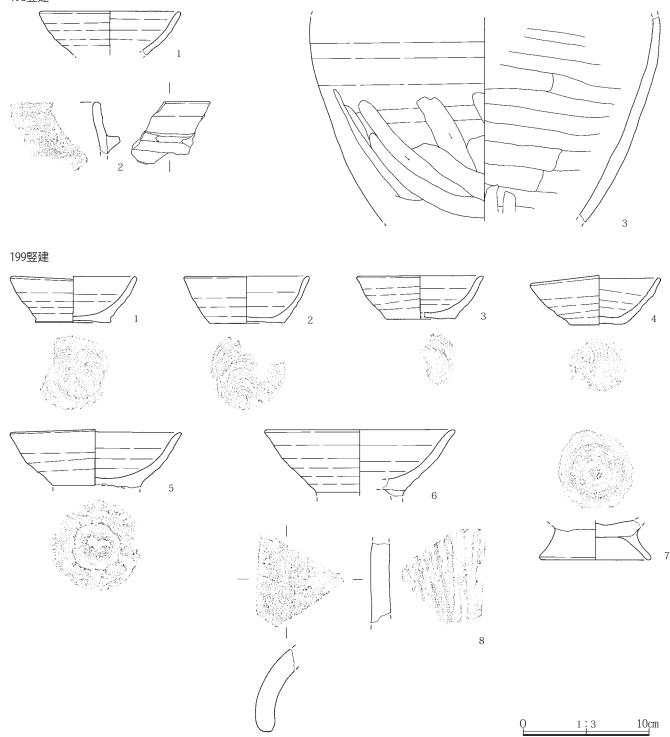
# G 5区



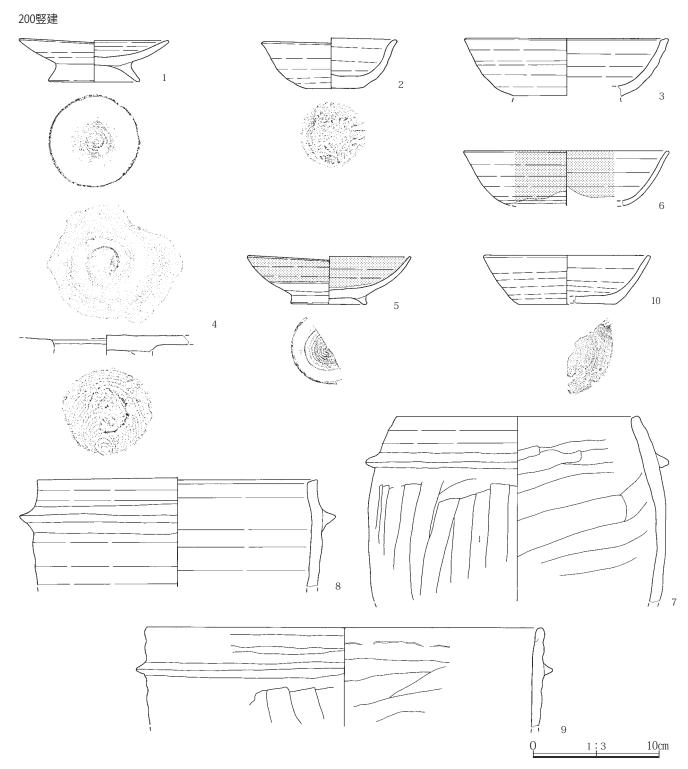
第476図 3面 G5区194~196号竪穴建物出土遺物



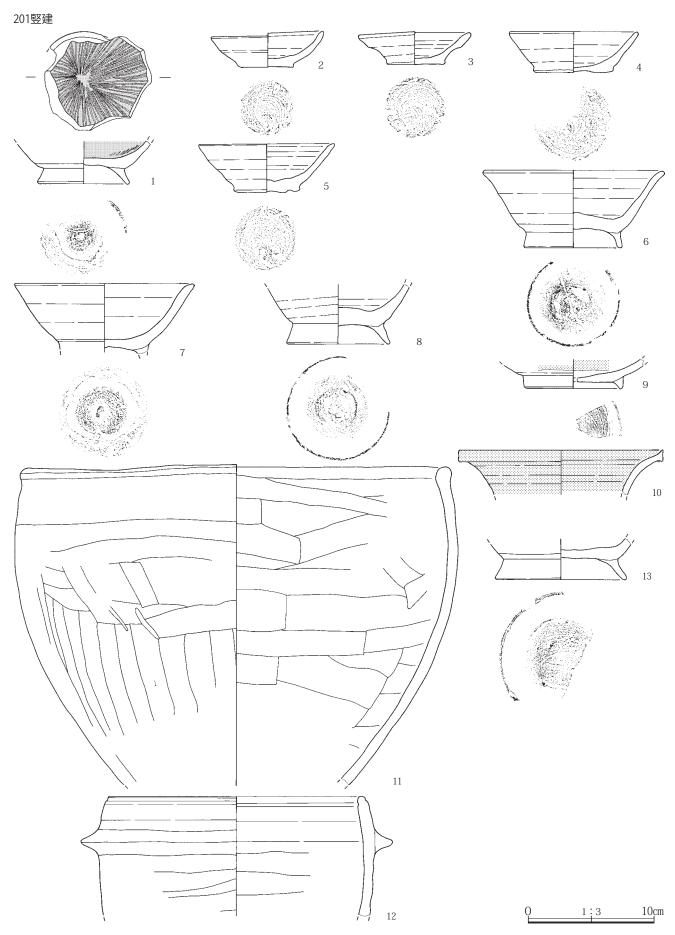
第477図 3面 G5区197号竪穴建物出土遺物



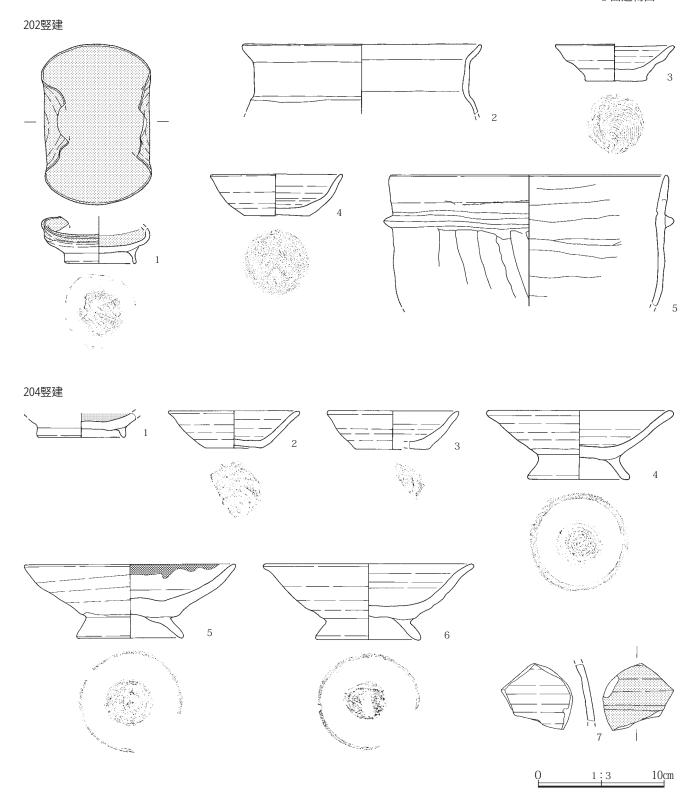
第478図 3面 G 5 区198·199号竪穴建物出土遺物



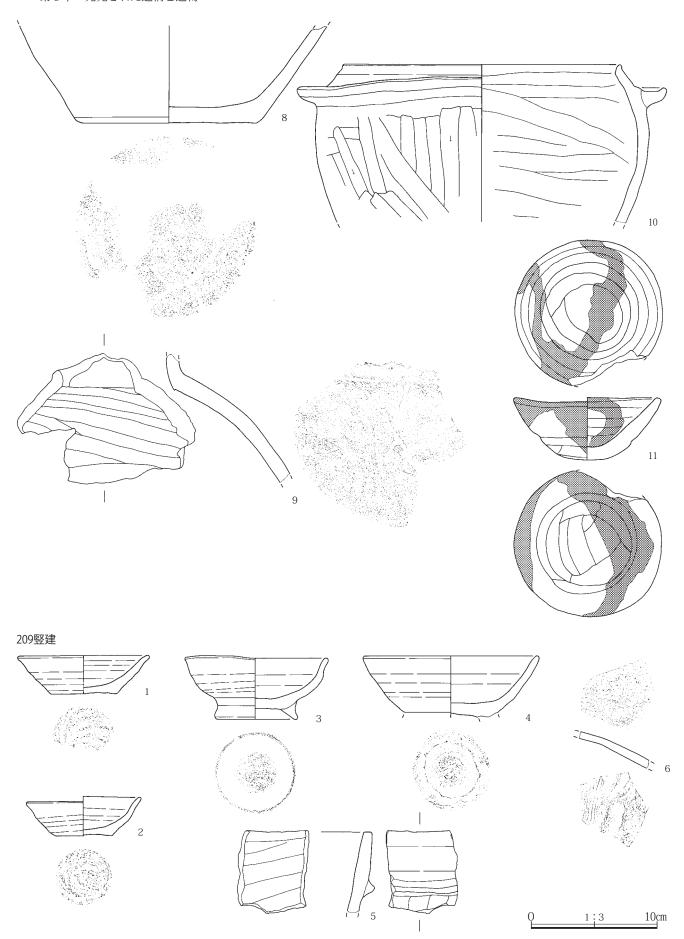
第479図 3面 G 5区200号竪穴建物出土遺物



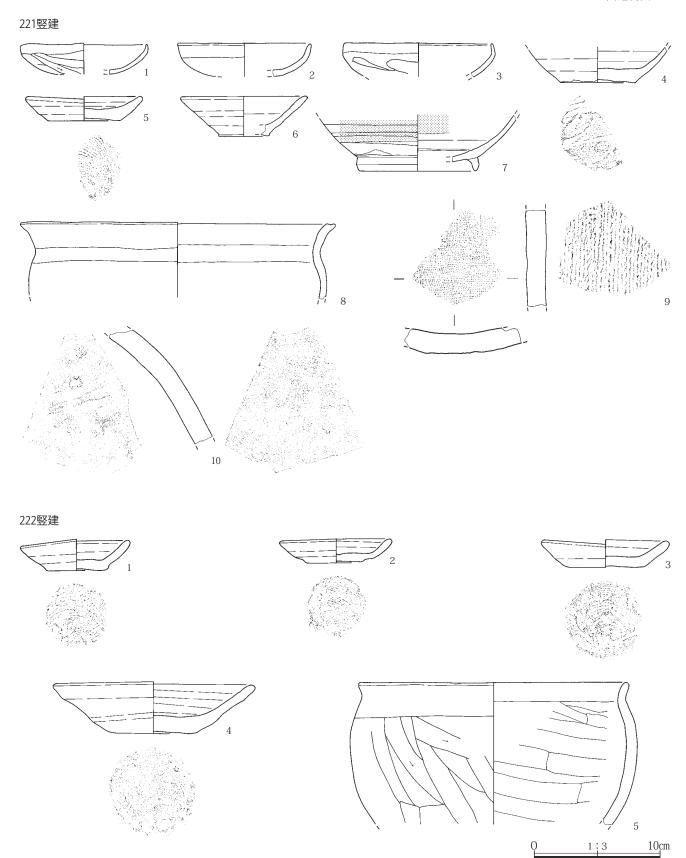
第480図 3面 G5区201号竪穴建物出土遺物



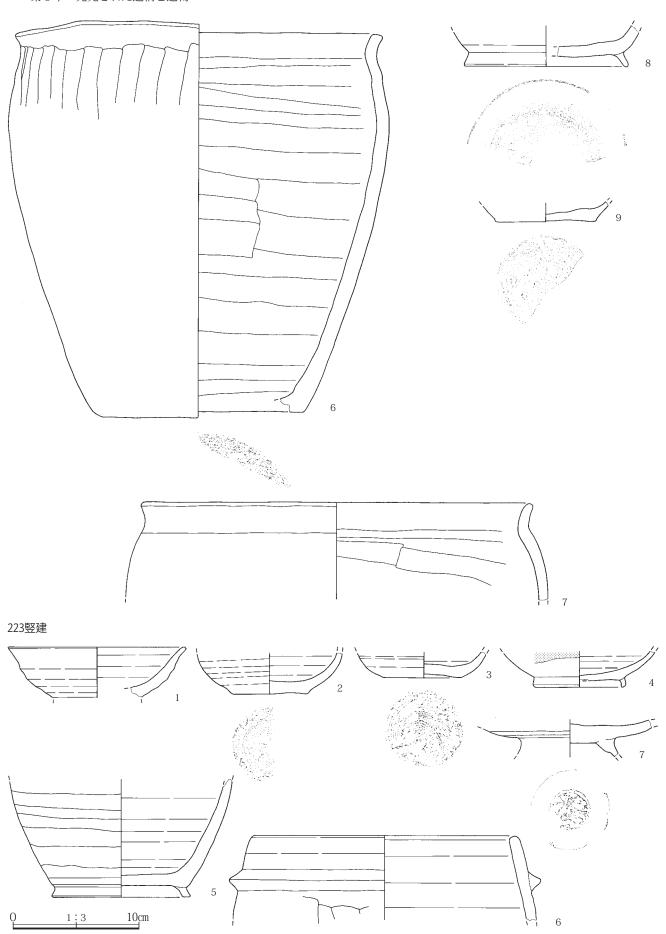
第481図 3面 G5区202号竪穴建物・204号竪穴建物出土遺物(1)



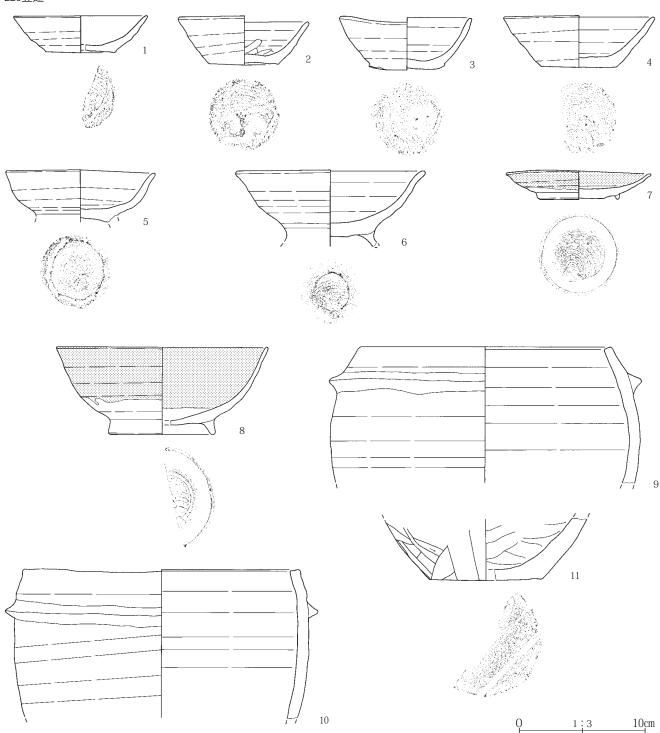
第482図 3面 G5区204号竪穴建物(2)·209号竪穴建物出土遺物



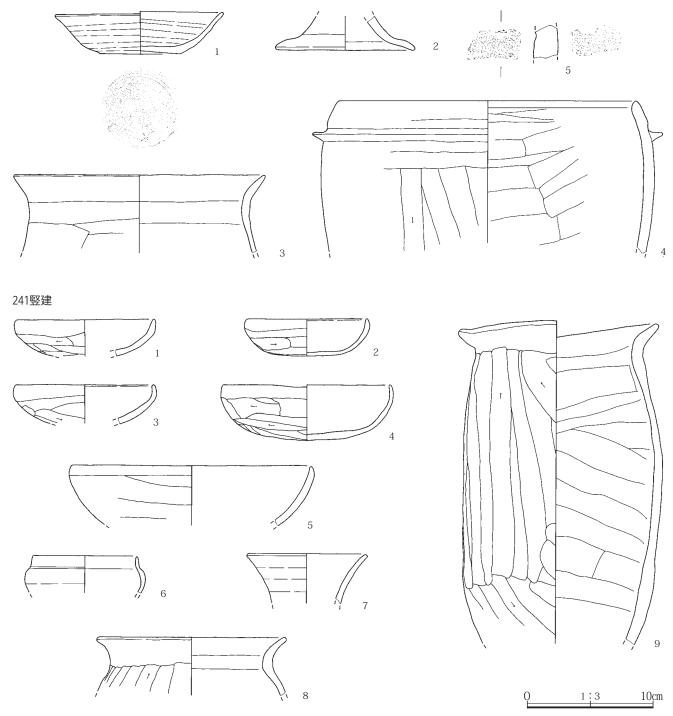
第483図 3面 G5区221号竪穴建物・222号竪穴建物出土遺物(1)



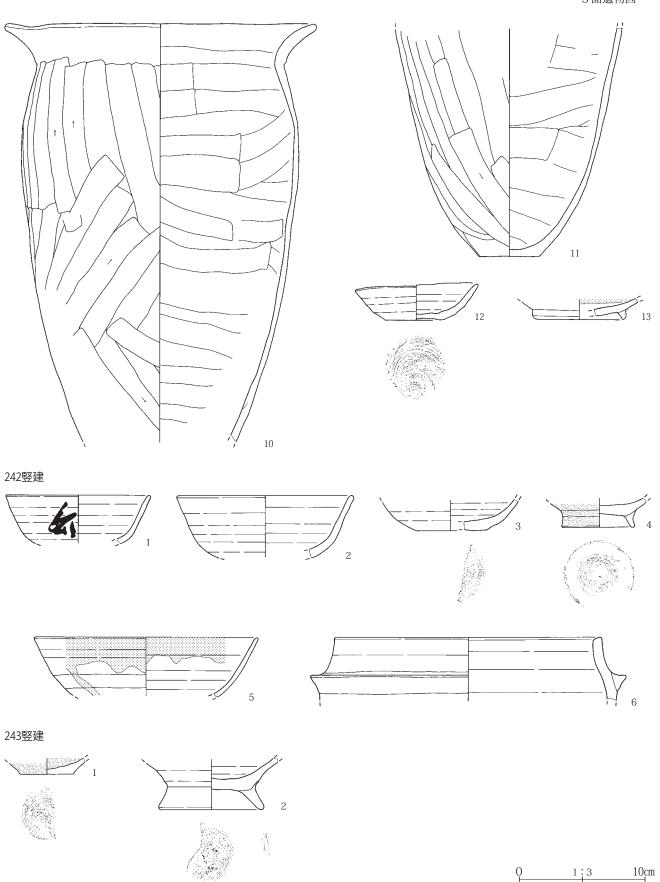
第484図 3面 G5区222号竪穴建物(2)·223号竪穴建物出土遺物



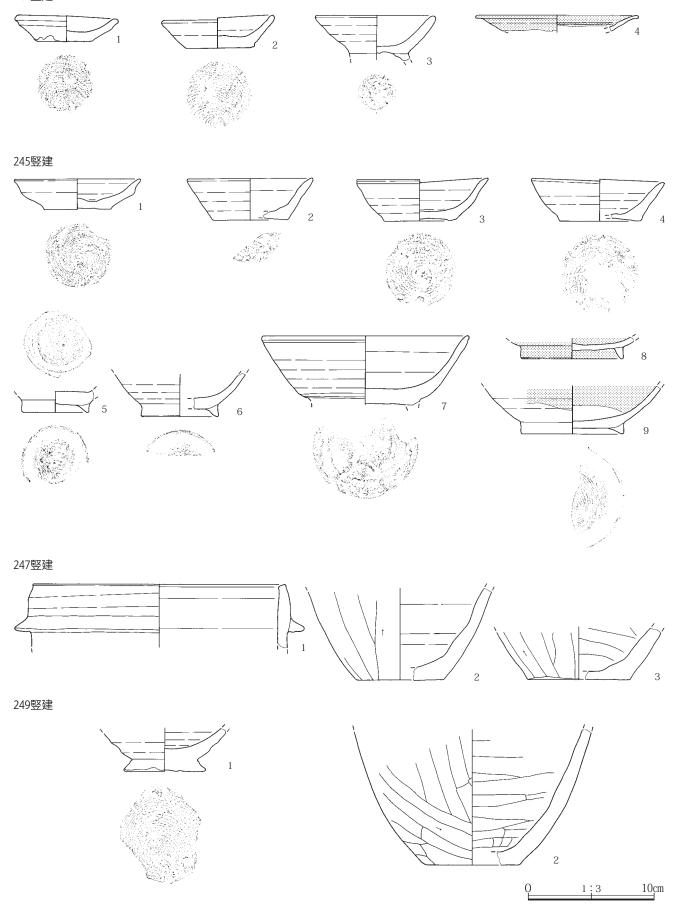
第485図 3面 G5区226号竪穴建物出土遺物



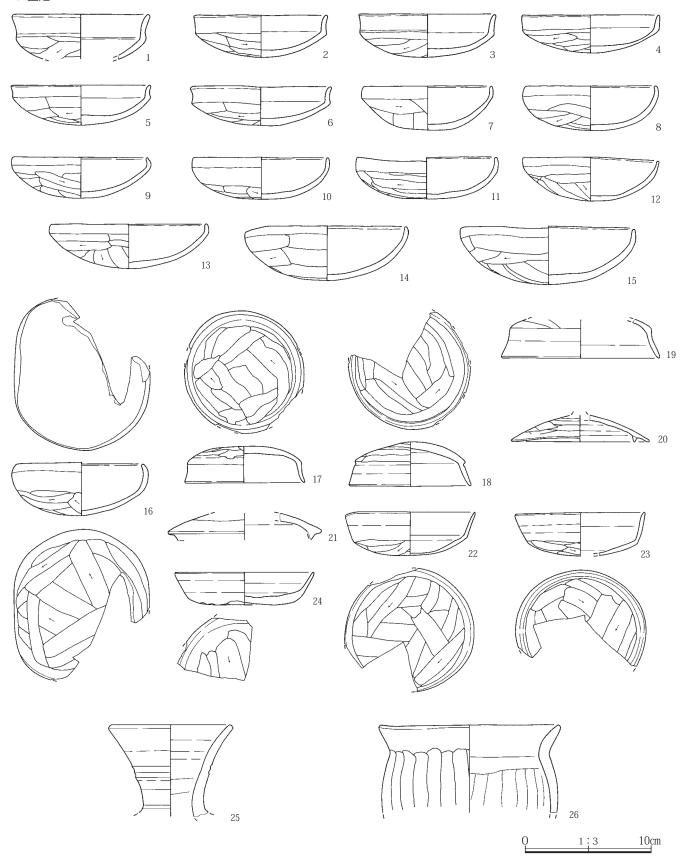
第486図 3面 G5区227号竪穴建物・241号竪穴建物出土遺物(1)



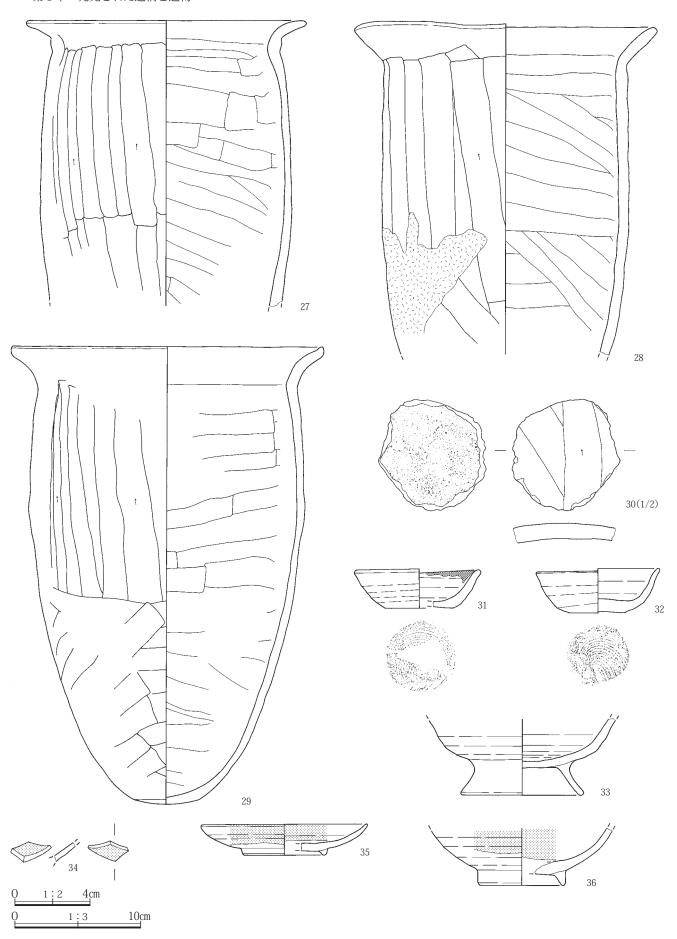
第487図 3面 G 5 区241号竪穴建物(2)・242・243号竪穴建物出土遺物



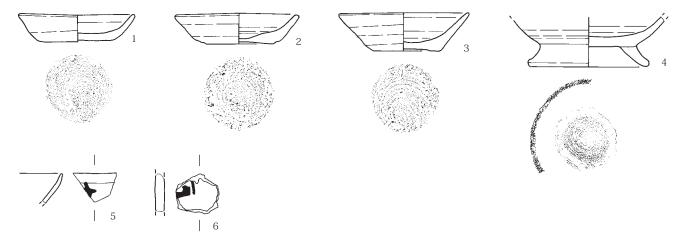
第488図 3面 G 5 区 244 · 245 · 247 · 249 号竪穴建物出土遺物



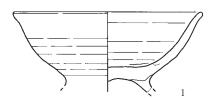
第489図 3面 G5区254号竪穴建物出土遺物(1)

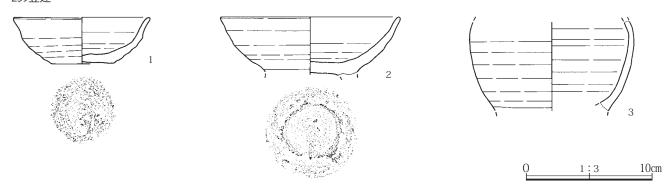


第490図 3面 G5区254号竪穴建物出土遺物(2)



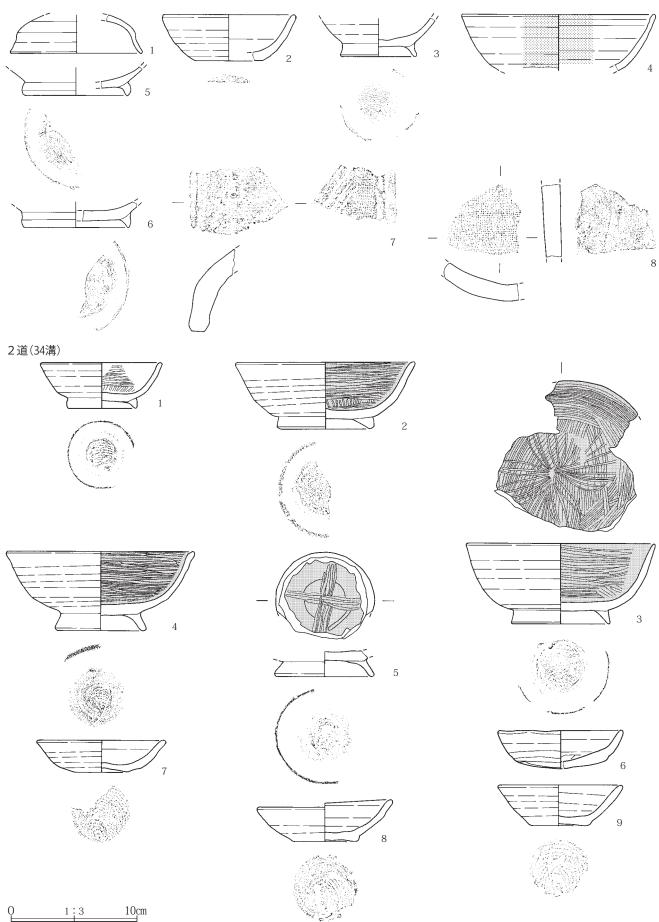
# 256竪建





第491図 3面 G 5 区255・256・259号竪穴建物出土遺物

# 2道(33溝)



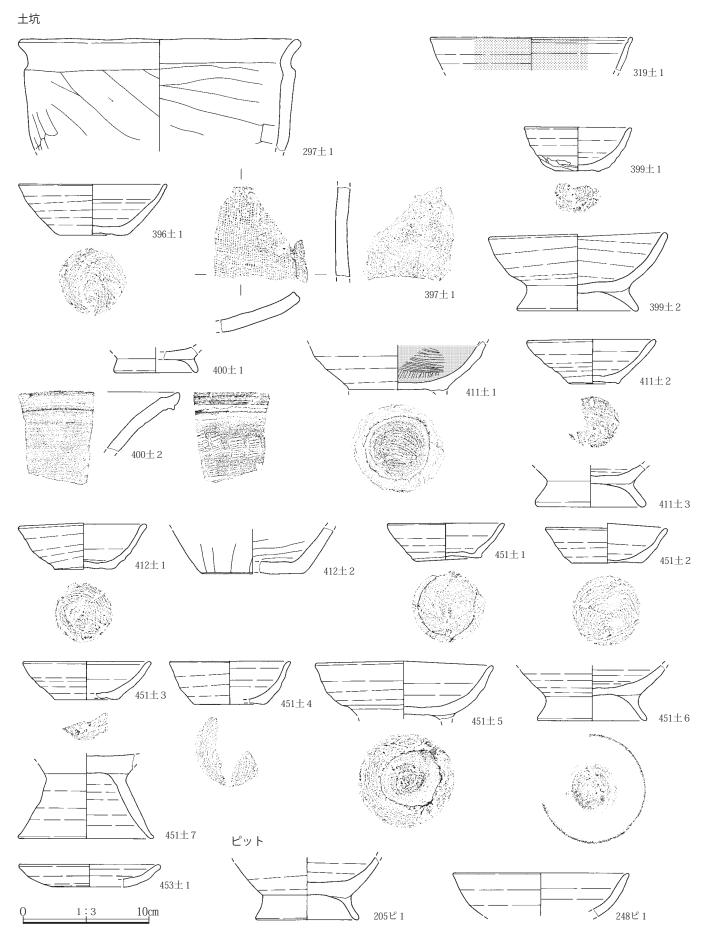
第492図 3面 G5区2号道(33号溝・34号溝)出土遺物(1)

# 3面遺物図 19 6道(35溝)

第493図 3面 G5区2号道(34号溝)(2)·6号道(35号溝)出土遺物

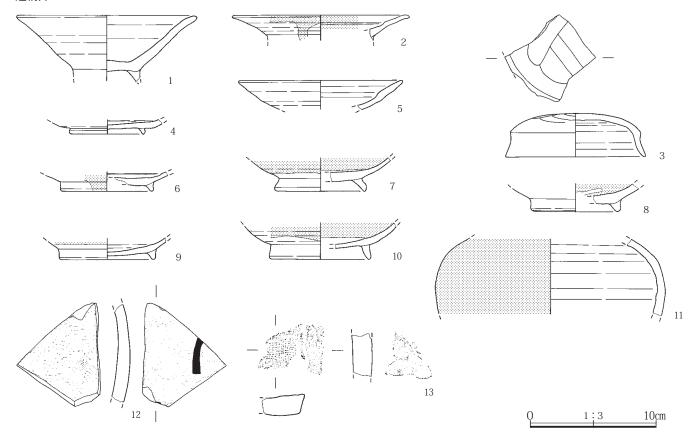
10cm

1:3



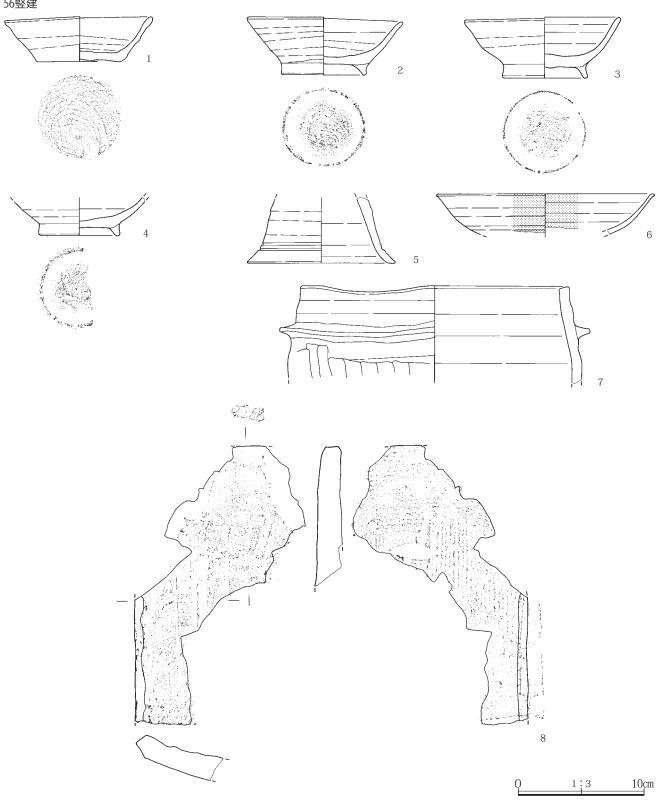
第494図 3面 G 5区297・319・396・397・399・400・411・412・451・453号土坑、205・248号ピット

# 遺構外

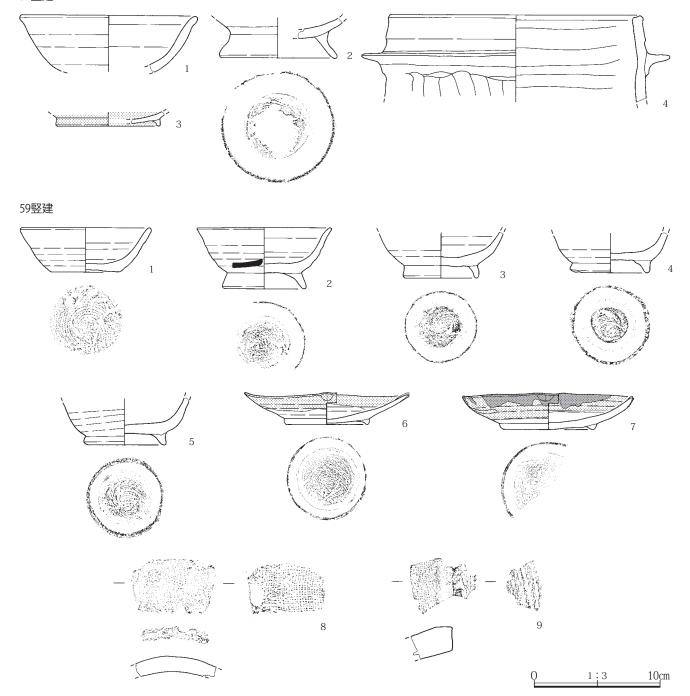


第495図 3面 G5区遺構外出土遺物

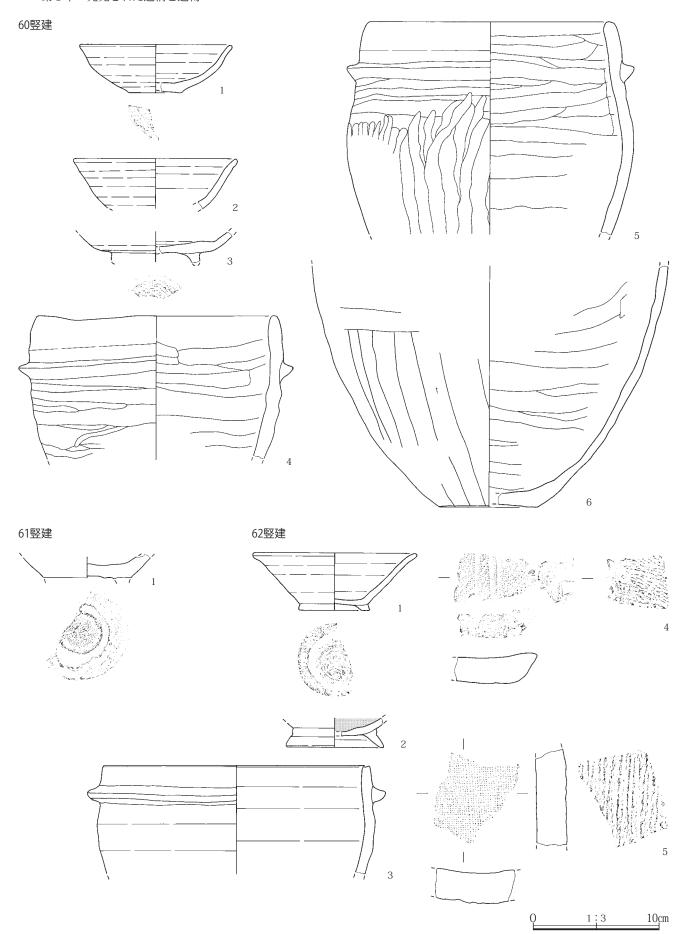
### H区 56竪建



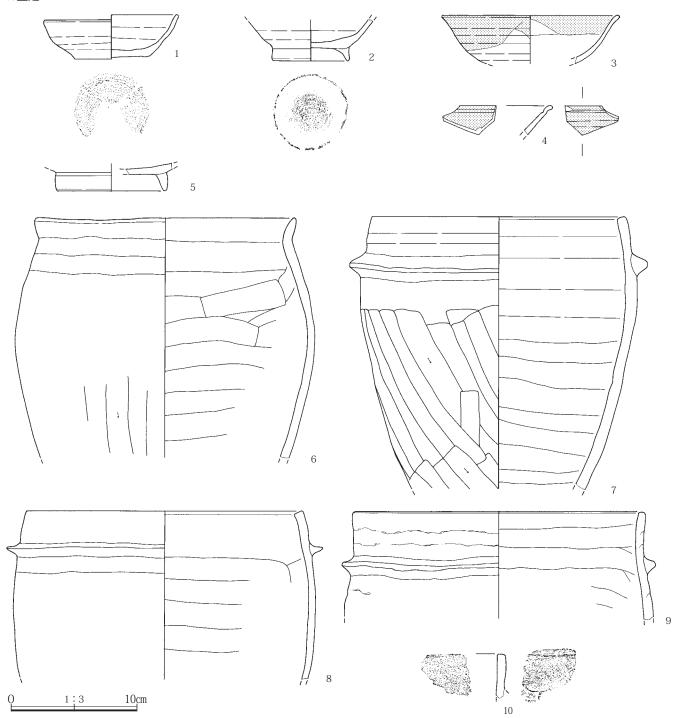
第496図 3面 H区56号竪穴建物出土遺物



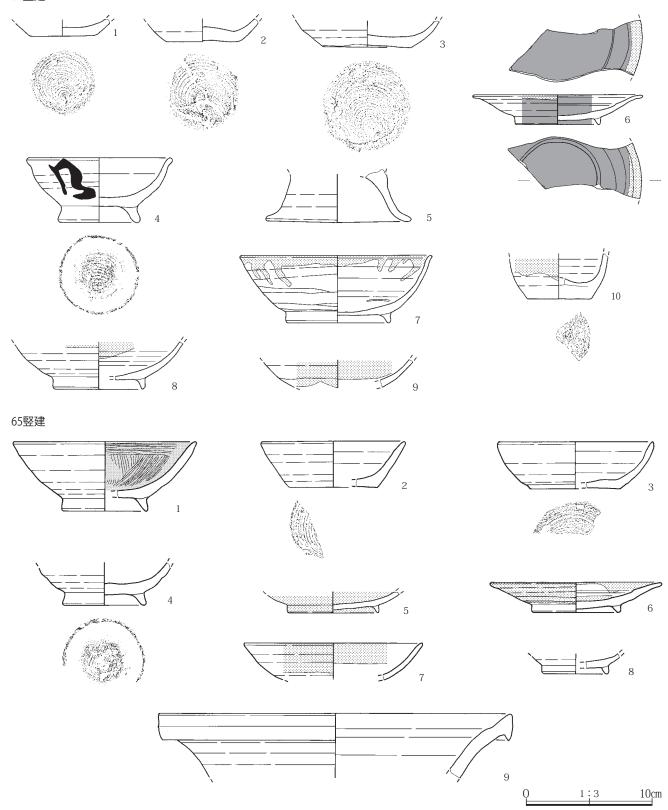
第497図 3面 H区57・59号竪穴建物出土遺物



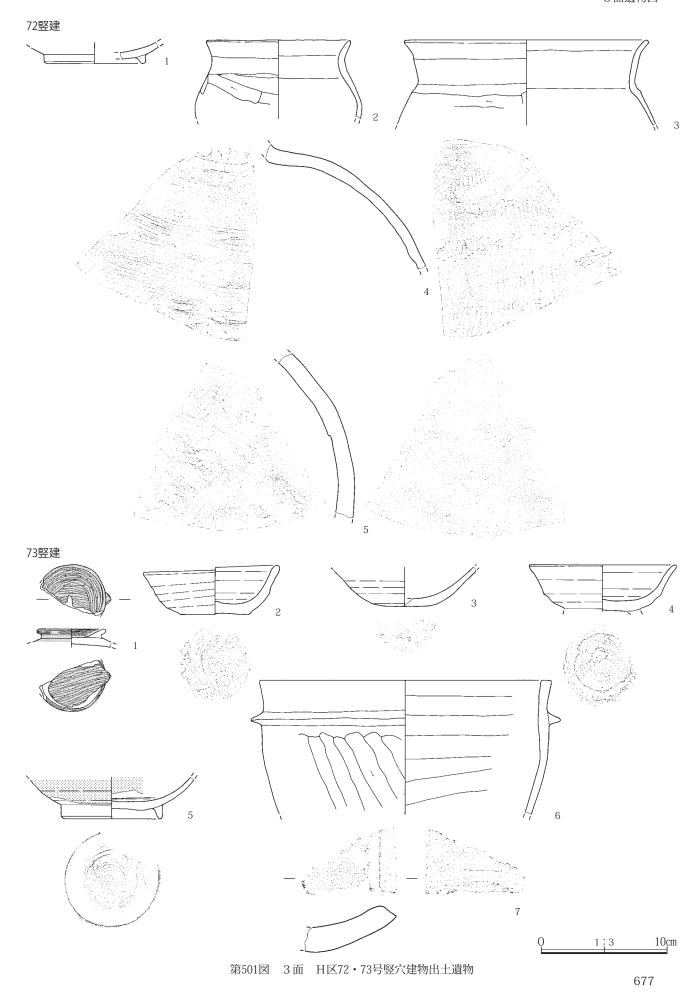
第498図 3面 H区60~62号竪穴建物出土遺物

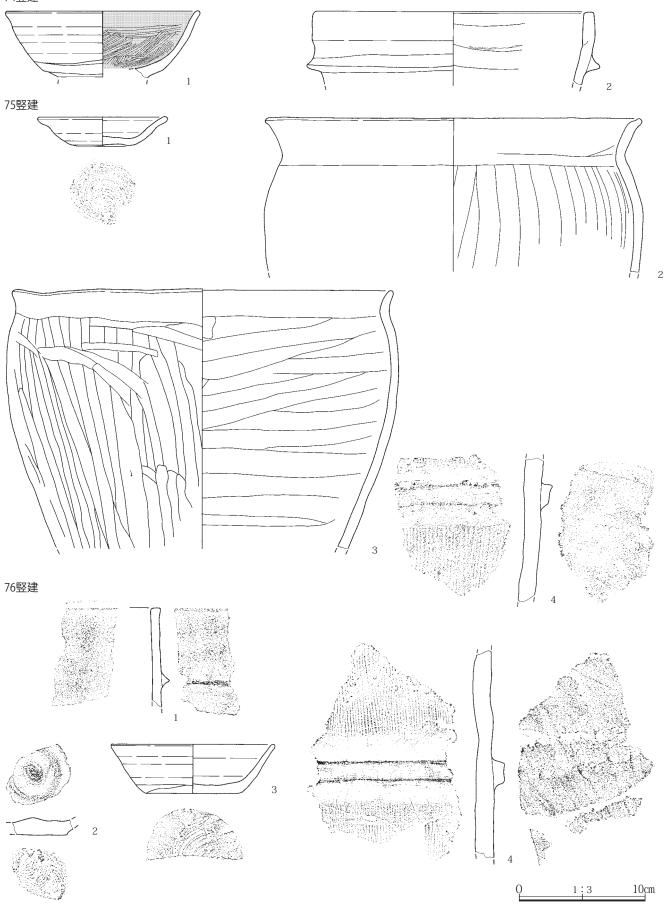


第499図 3面 H区63号竪穴建物出土遺物

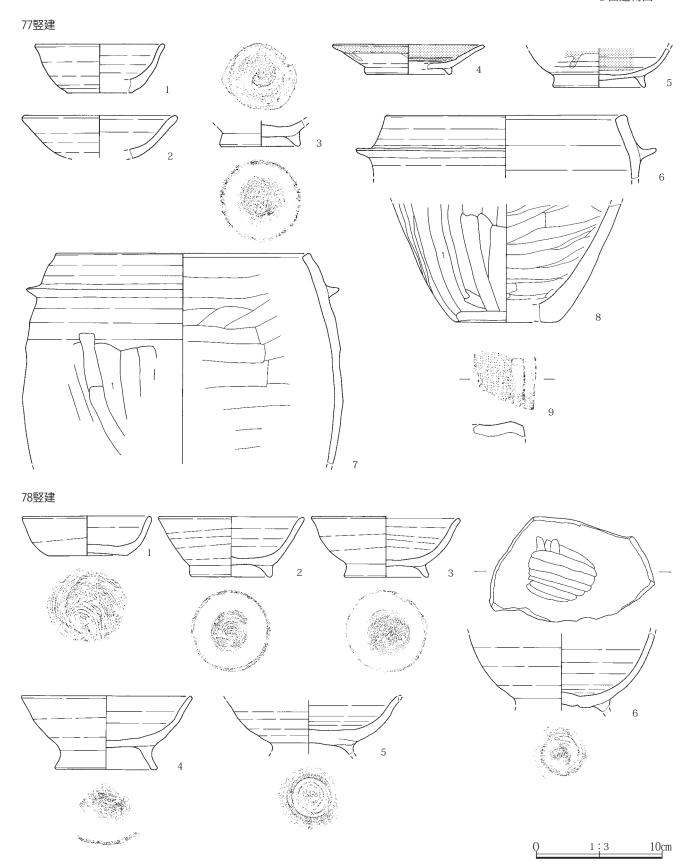


第500図 3面 H区64·65号竪穴建物出土遺物



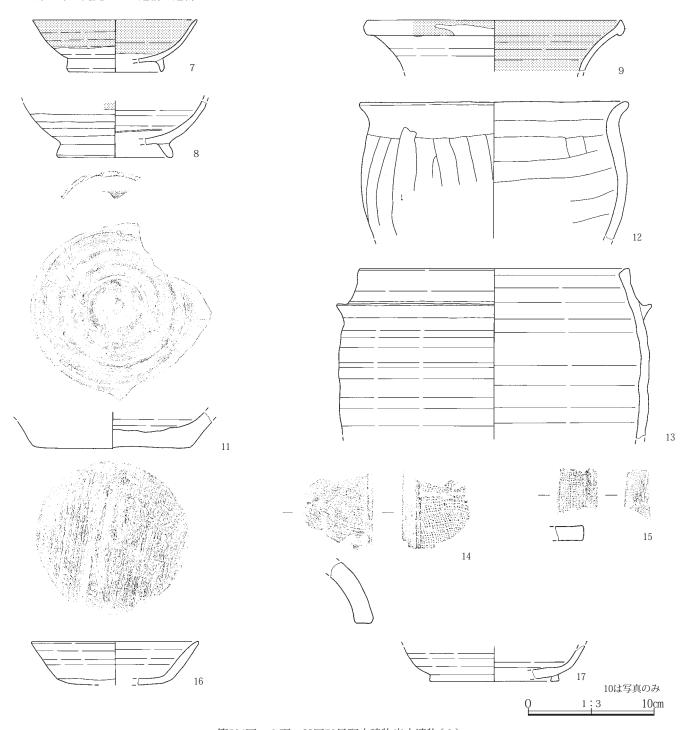


第502図 3面 H区74~76号竪穴建物出土遺物

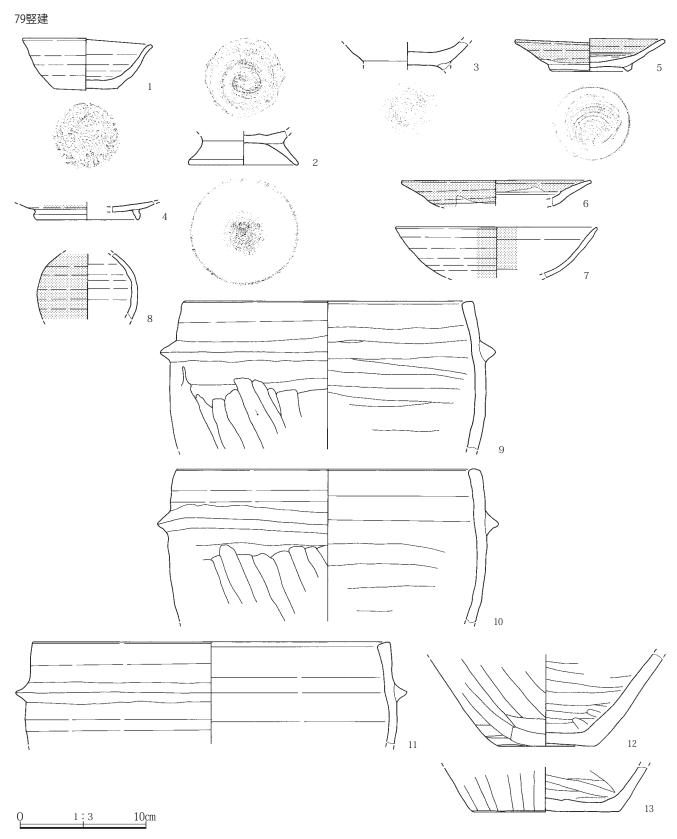


第503図 3面 H区77号竪穴建物·78号竪穴建物出土遺物(1)

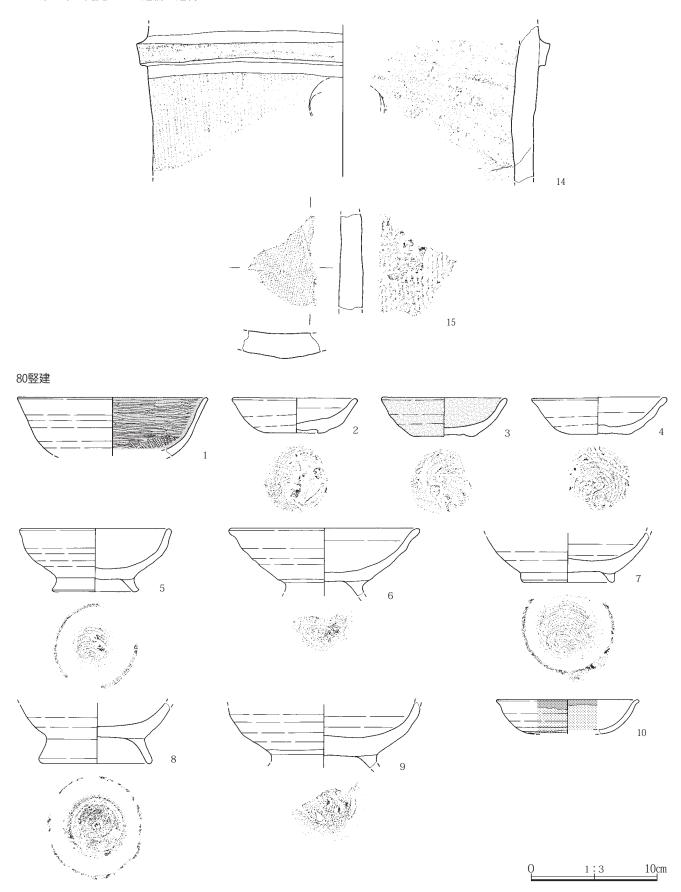
第3章 発見された遺構と遺物



第504図 3面 H区78号竪穴建物出土遺物(2)

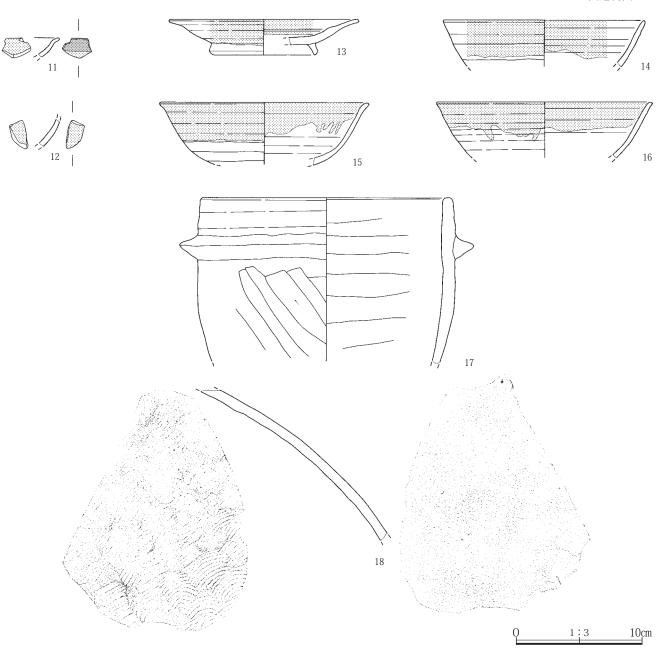


第505図 3面 H区79号竪穴建物出土遺物(1)

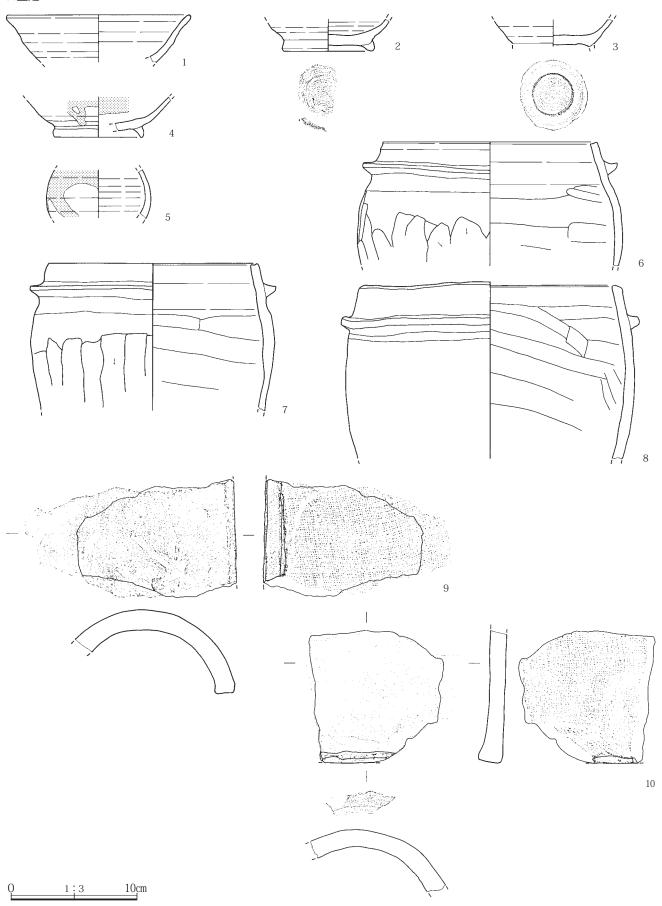


第506図 3面 H区79号竪穴建物(2)・80号竪穴建物出土遺物(1)

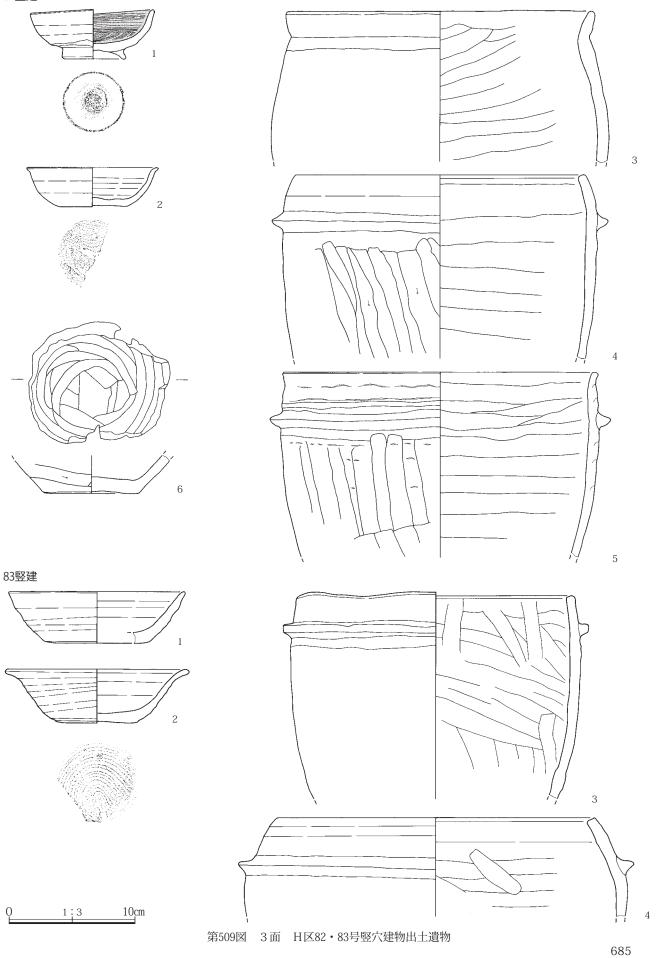
# 3面遺物図

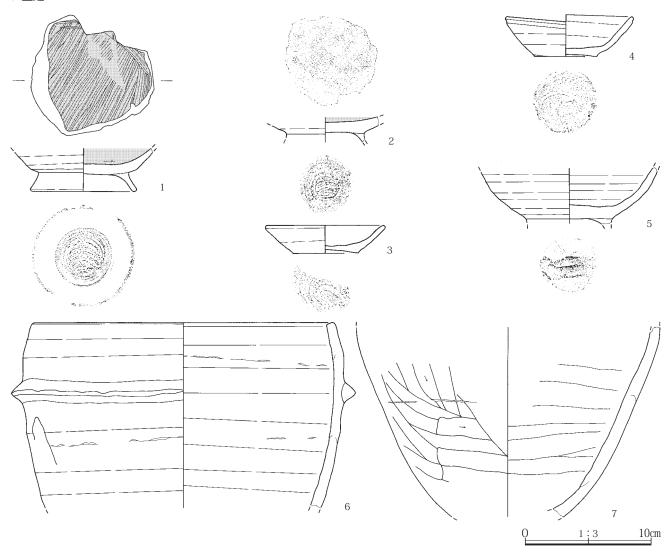


第507図 3面 H区80号竪穴建物出土遺物(2)

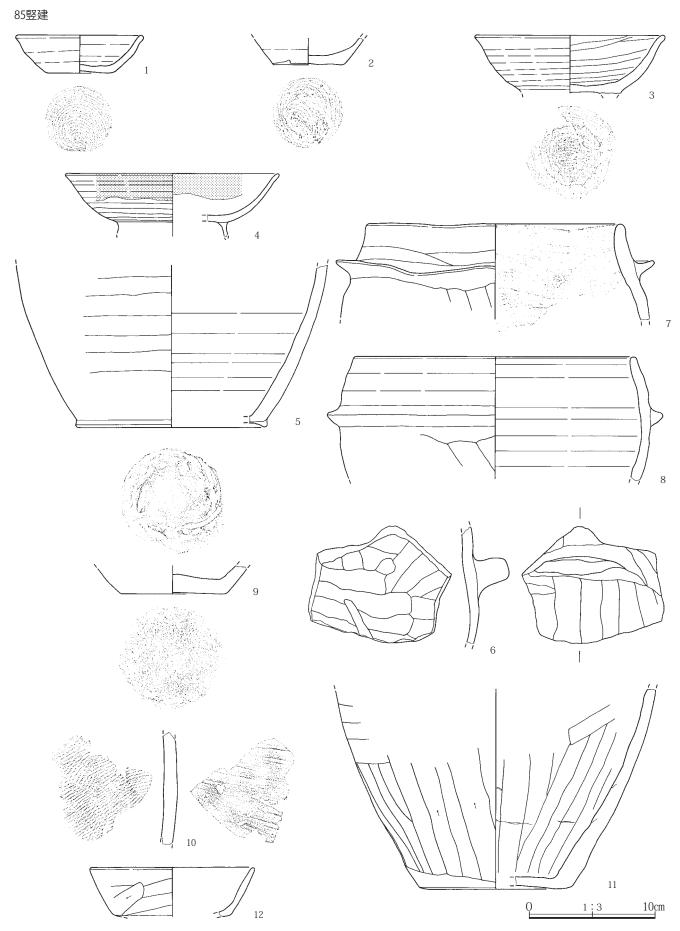


第508図 3面 H区81号竪穴建物出土遺物

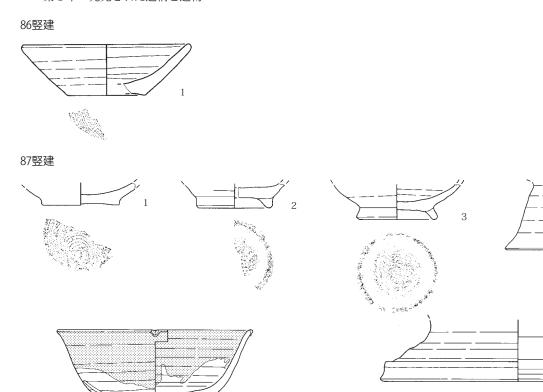


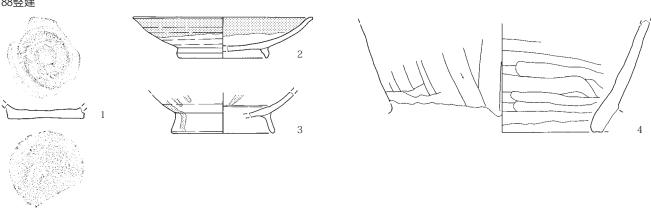


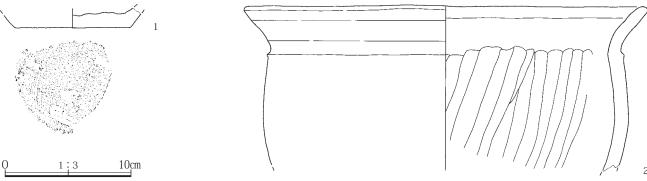
第510図 3面 H区84号竪穴建物出土遺物



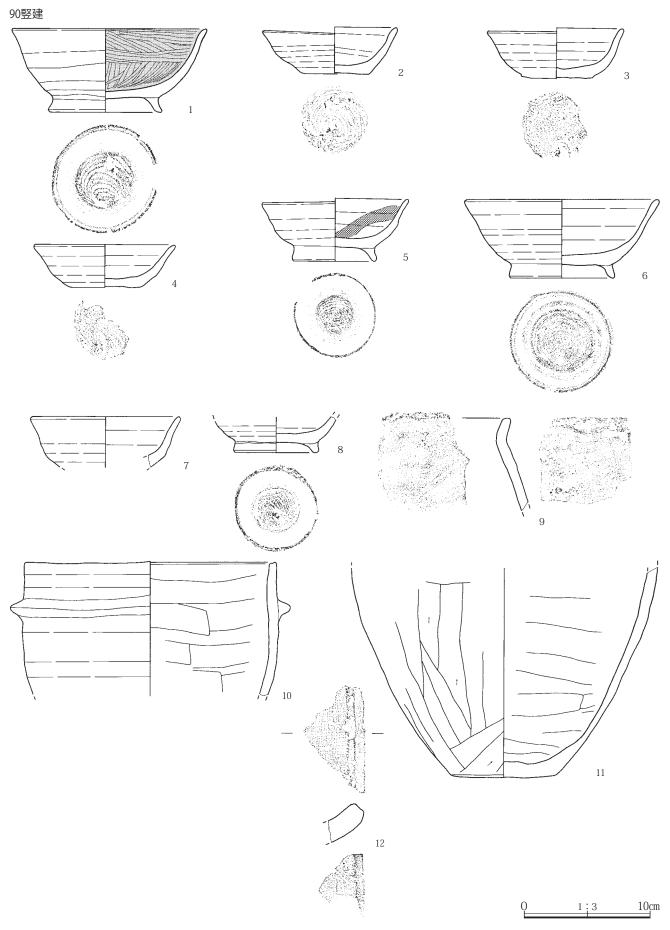
第511図 3面 H区85号竪穴建物出土遺物



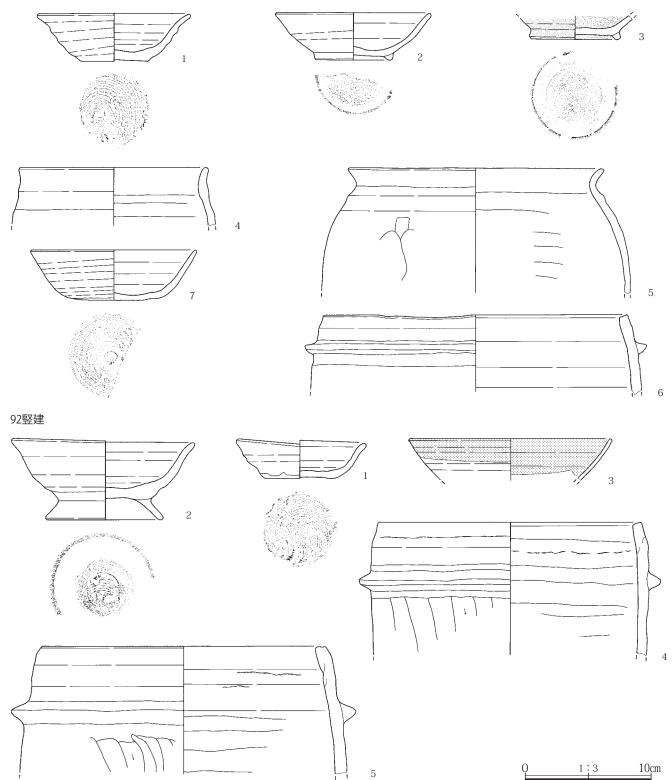




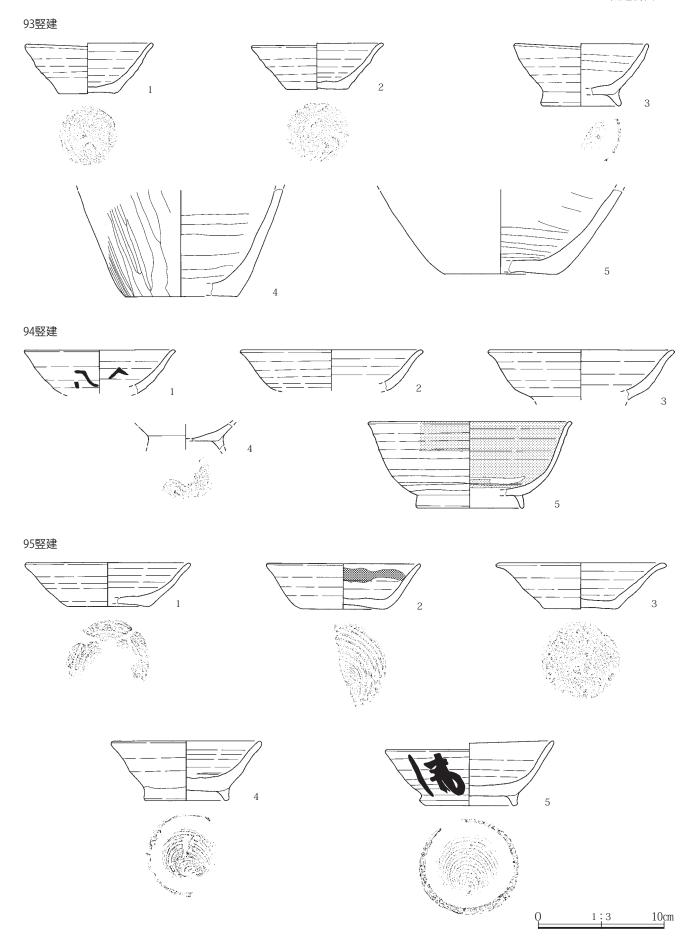
第512図 3面 H区86~89号竪穴建物出土遺物



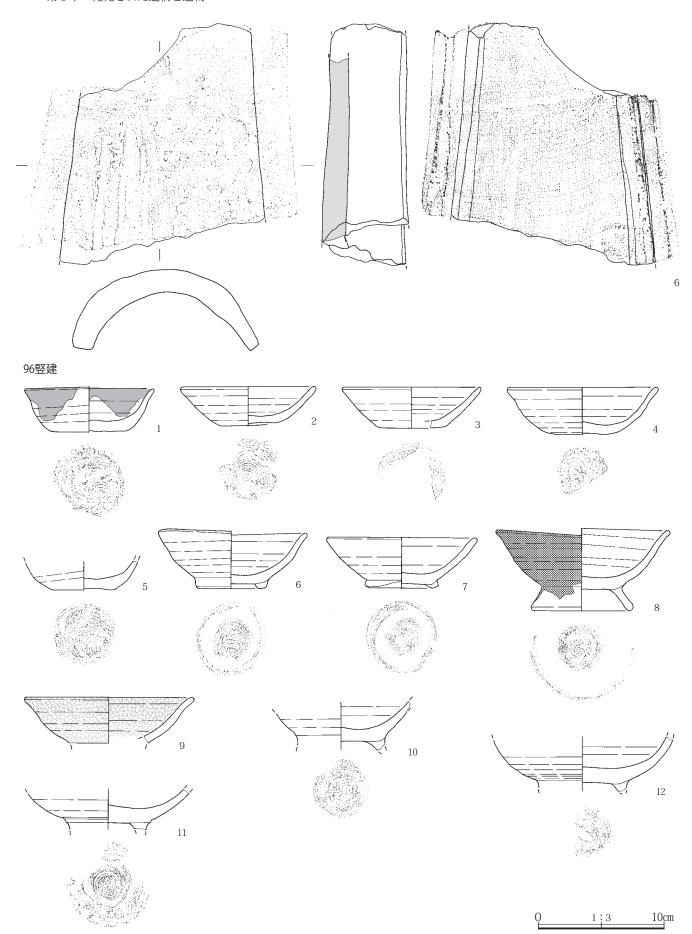
第513図 3面 H区90号竪穴建物出土遺物



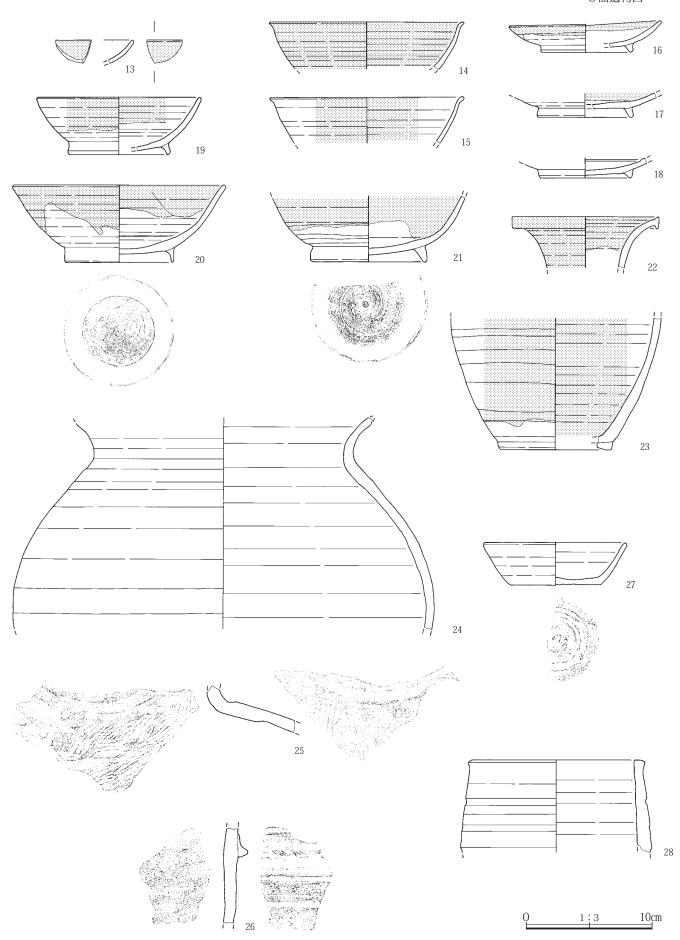
第514図 3面 H区91・92号竪穴建物出土遺物



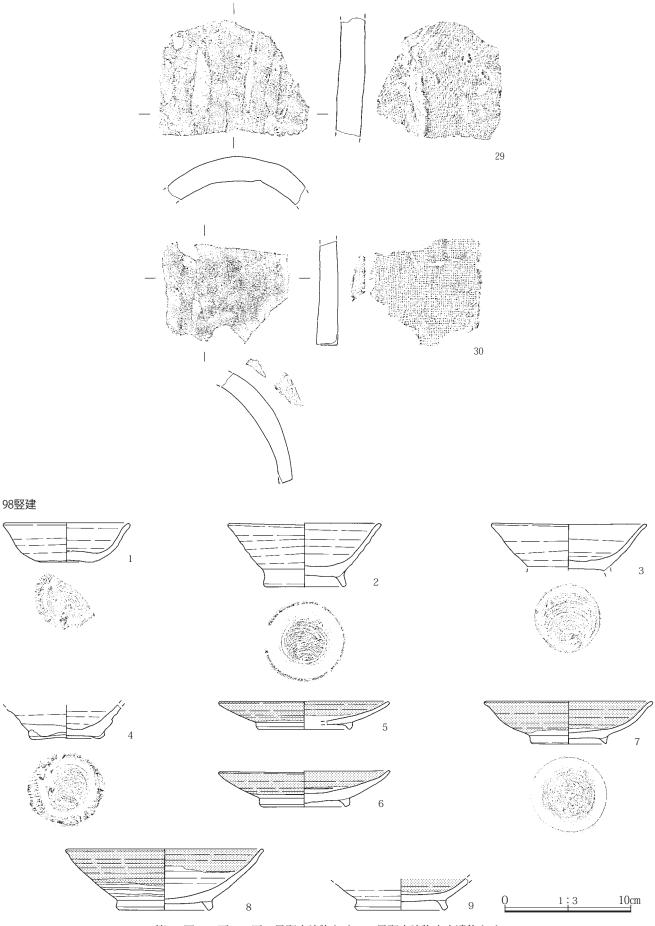
第515図 3面 H区93・94号竪穴建物・95号竪穴建物出土遺物(1)



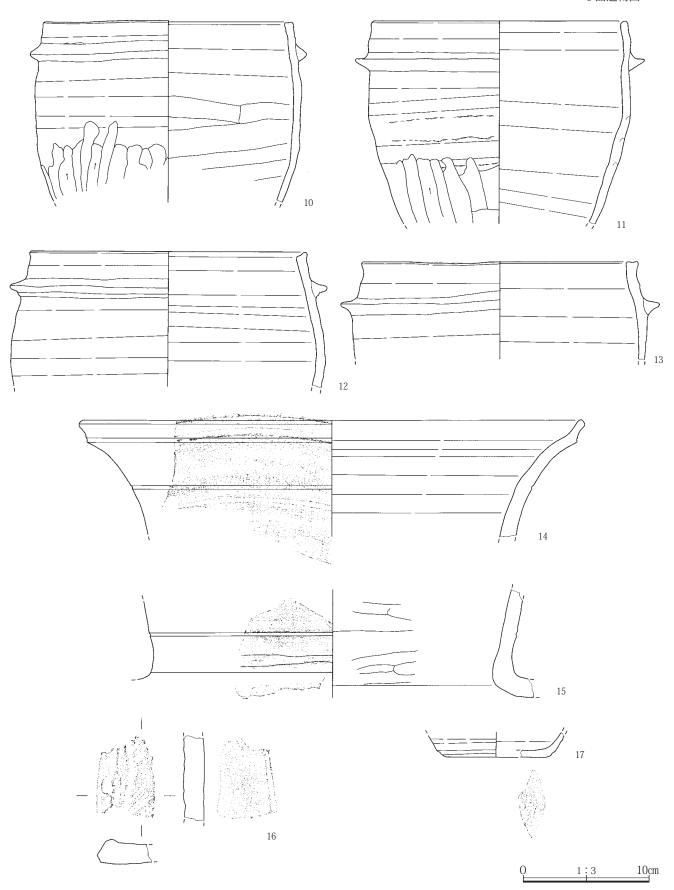
第516図 3面 H区95号竪穴建物(2)·96号竪穴建物出土遺物(1)



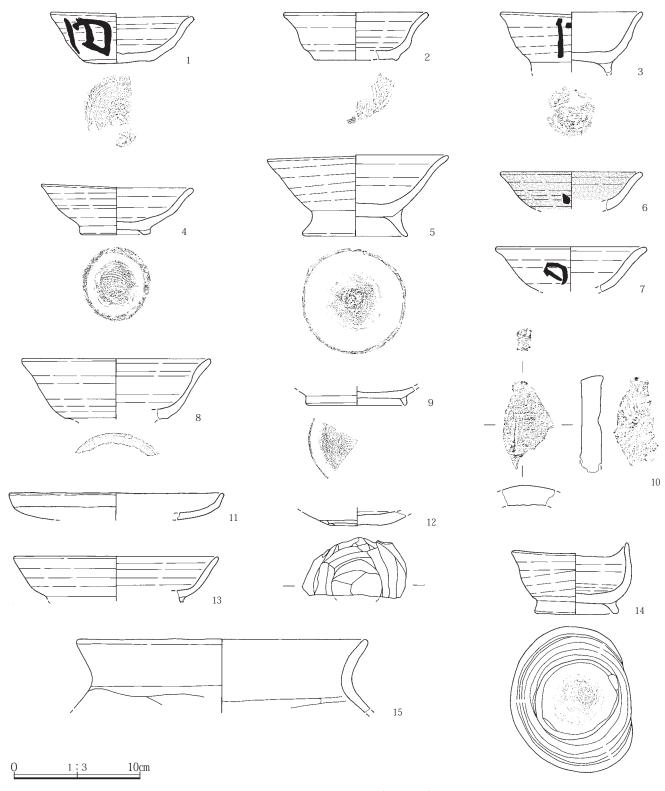
第517図 3面 H区96号竪穴建物出土遺物(2)



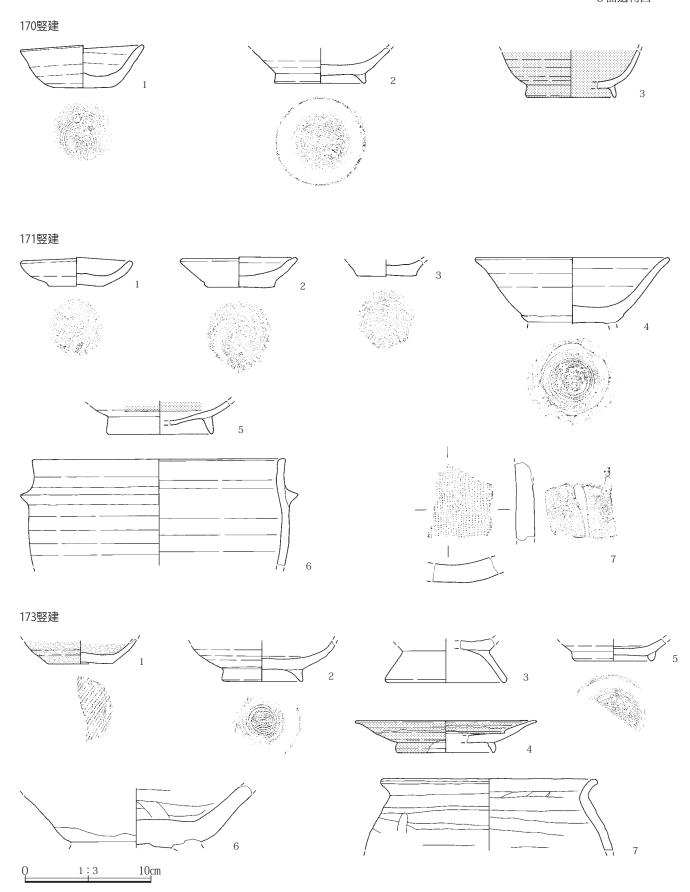
第518図 3面 H区96号竪穴建物(3)·98号竪穴建物出土遺物(1)



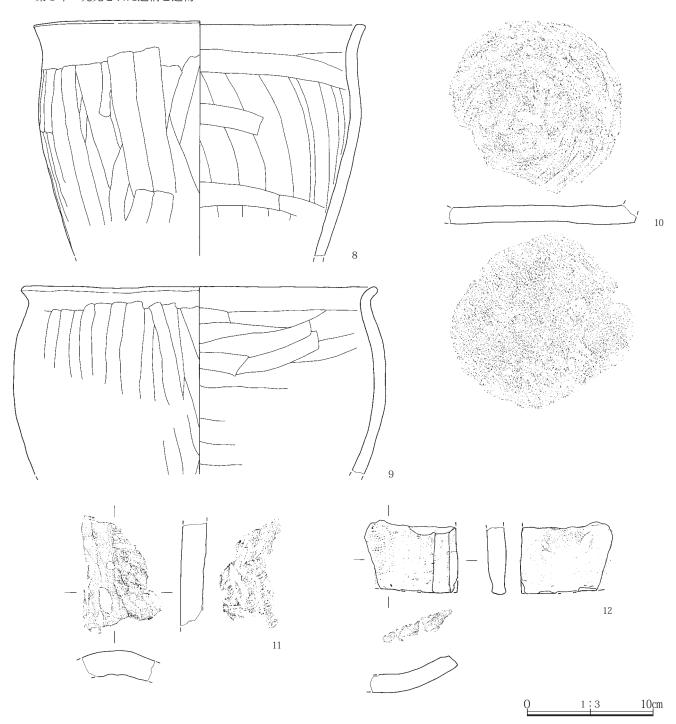
第519図 3面 H区98号竪穴建物出土遺物(2)



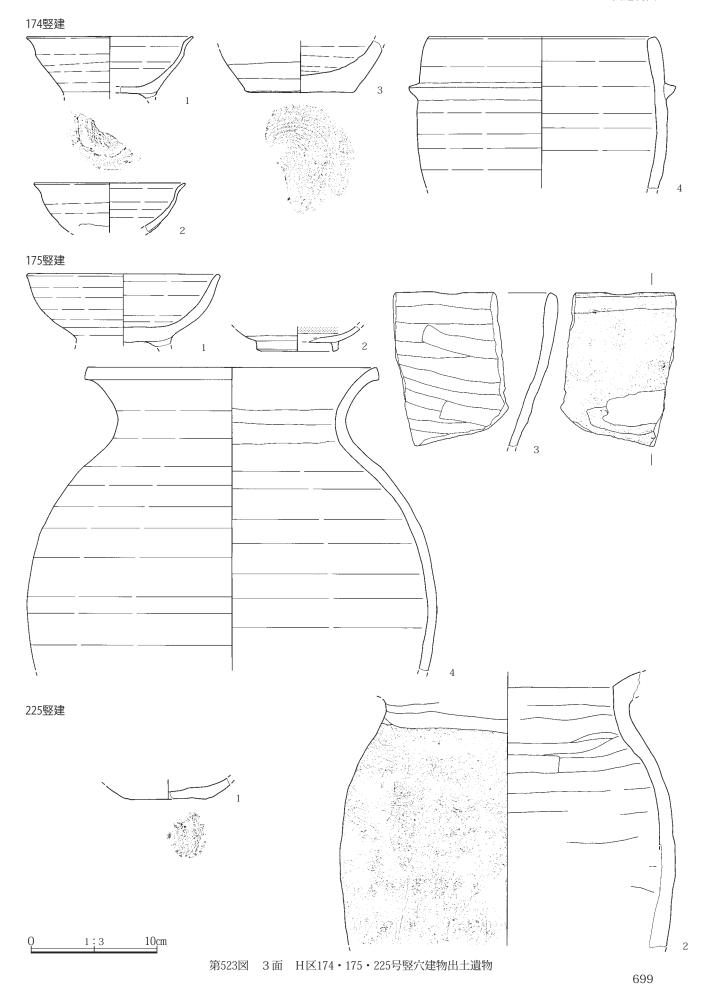
第520図 3面 H区99号竪穴建物出土遺物



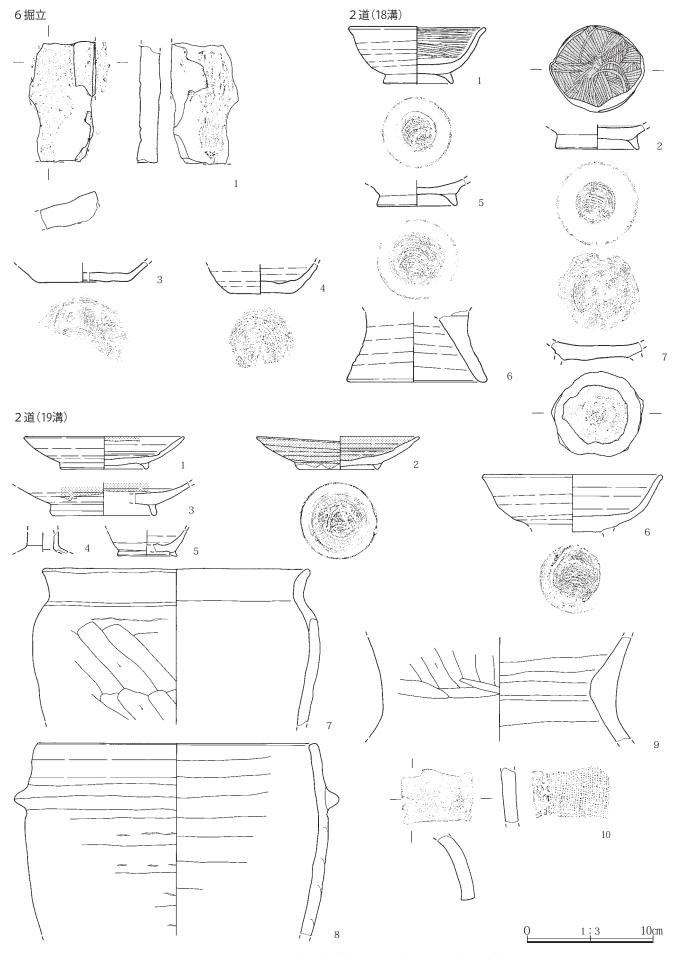
第521図 3面 H区170・171号竪穴建物・173号竪穴建物出土遺物(1)



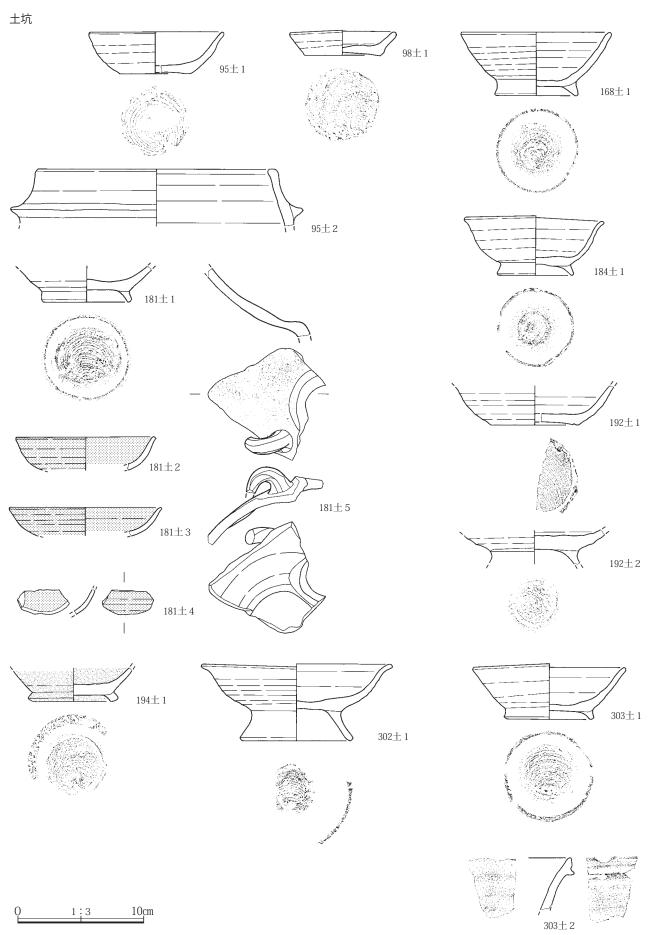
第522図 3面 H区173号竪穴建物出土遺物(2)



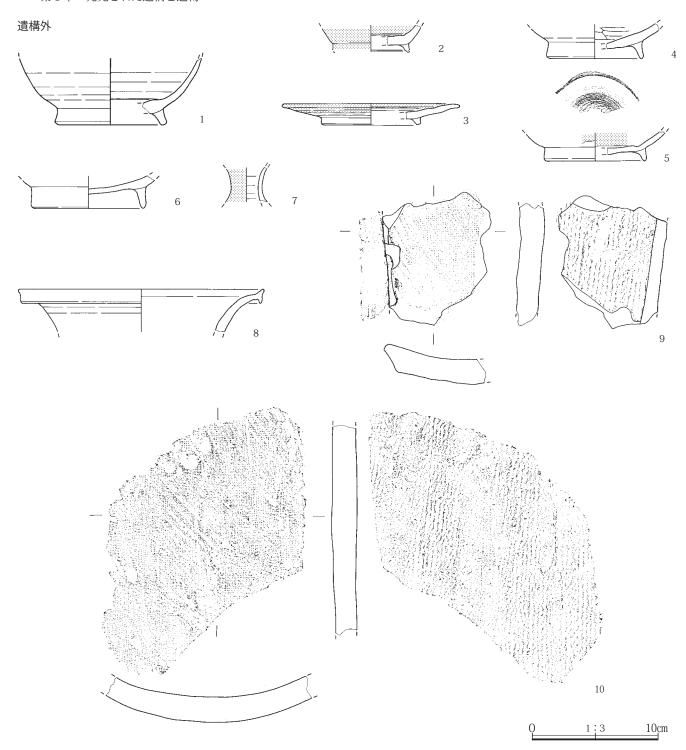
700



第524図 3面 H区6号掘立柱建物、2号道(18·19号溝)出土遺物



第525図 3面 H区95・98・168・181・184・192・194・302・303号土坑出土遺物

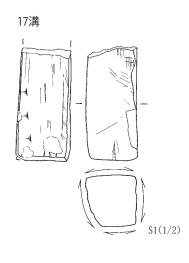


第526図 3面 H区遺構外出土遺物

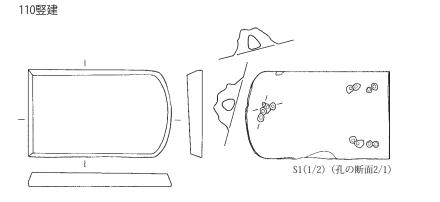
# 

G 2区

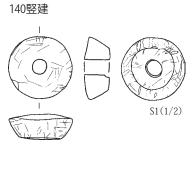
219竪建

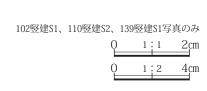






13竪建S1写真のみ

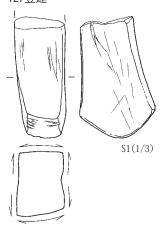


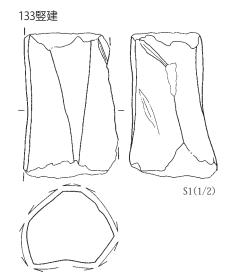


第527図 3面 F・G1・G2区古墳時代以降出土石器・石製品(1)

# G 3区

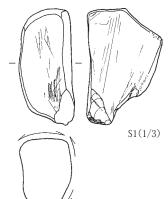
127竪建

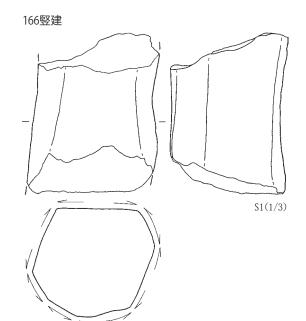






# 147竪建





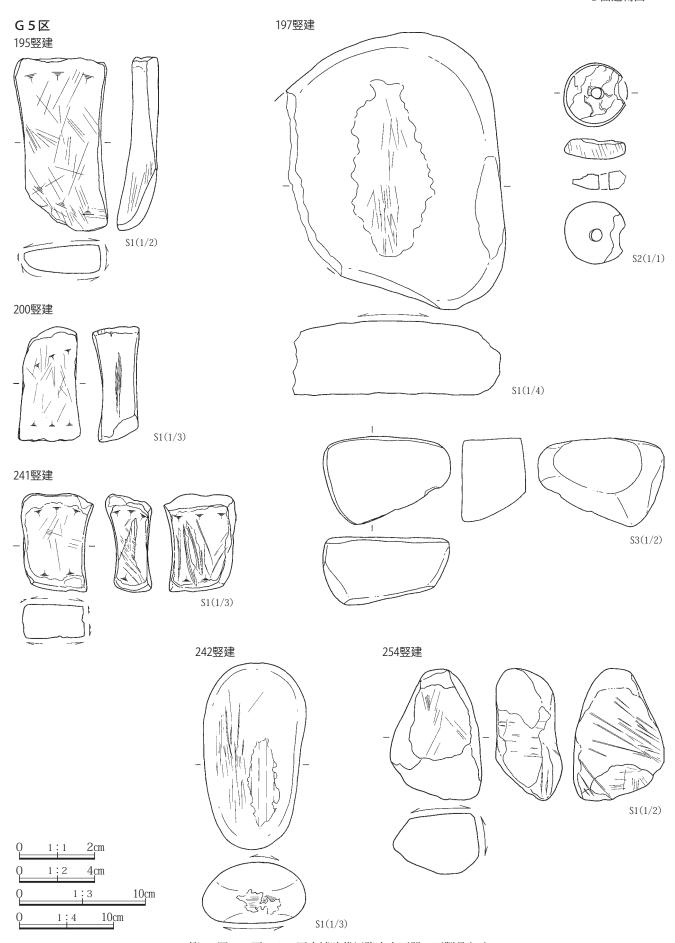
126竪 建S1・151竪 建S1 写真のみ

# G 4区



178竪建S1、179竪建S1、193竪建S1・S2 写真のみ

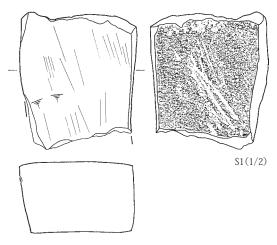




第529図 3面 G5区古墳時代以降出土石器・石製品(3)

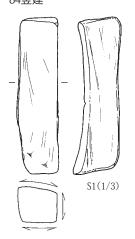
# 第3章 発見された遺構と遺物

# 395土

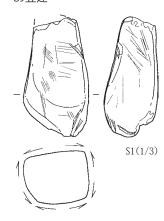


199竪建S1、200竪建S2、201竪建S1、212竪建S1、221竪建S1、227竪建S1、241竪建S2・S3、243竪建S1・S2、244竪建S1、254 竪建S2写真のみ

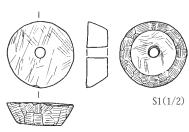




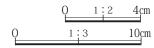
# 89竪建



# 6掘立



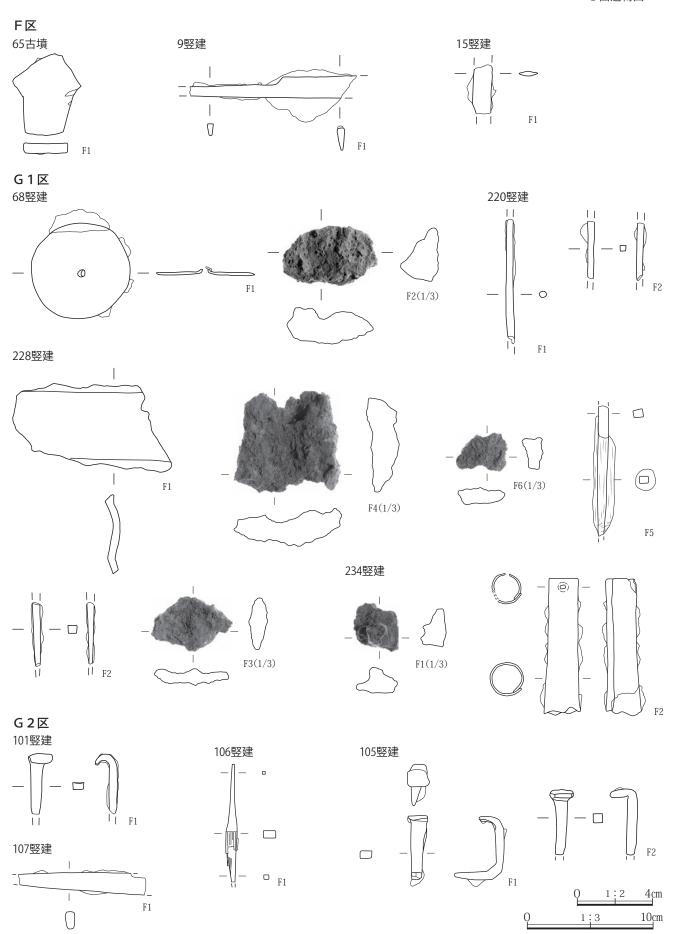
78竪建S1、80竪建S1、84竪建S2、 92竪建S1、96竪建S1写真のみ



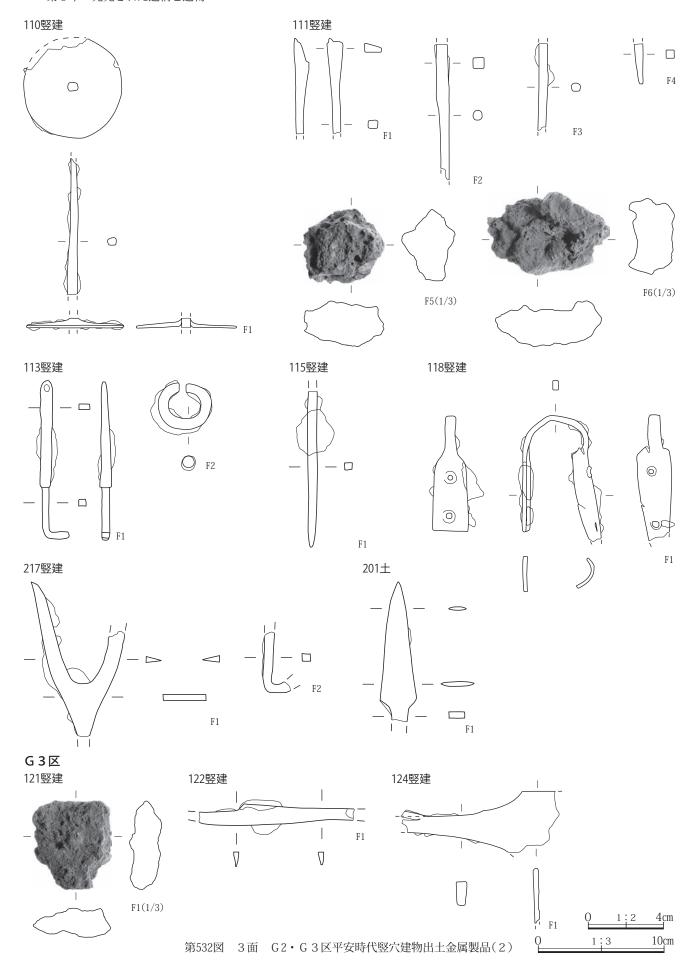
# 遺構外

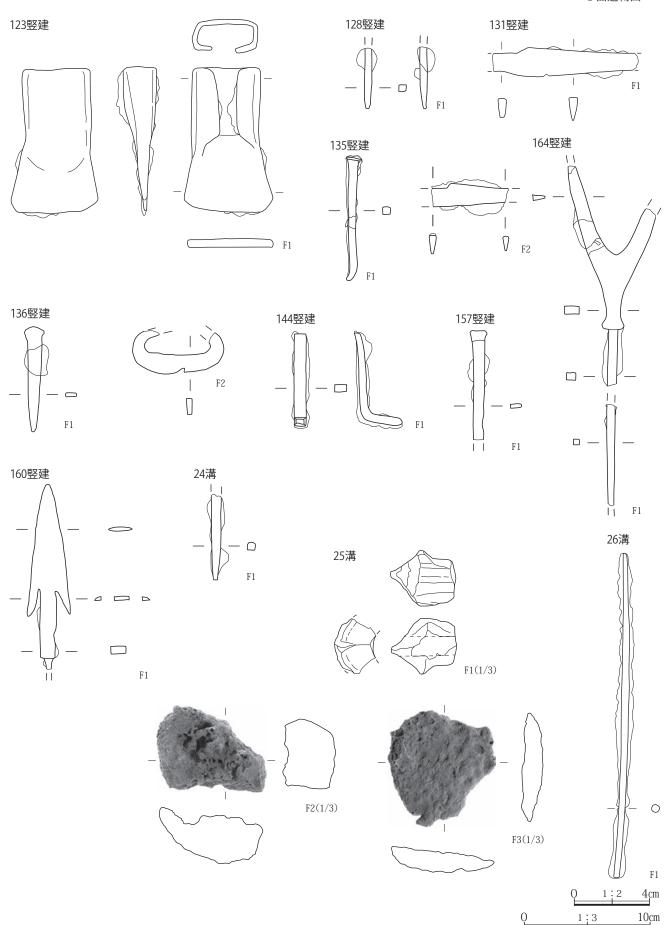
S1・S2・S3写真のみ

第530図 3面 G5·H区古墳時代以降出土石器·石製品(4)

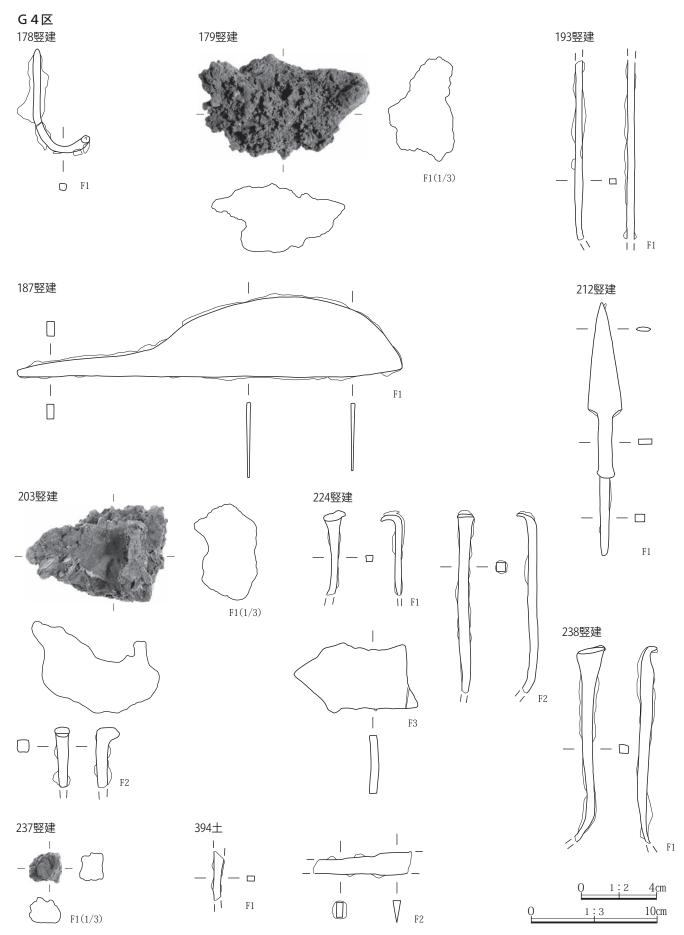


第531図 3面 F·G1·G2区平安時代竪穴建物出土金属製品(1)

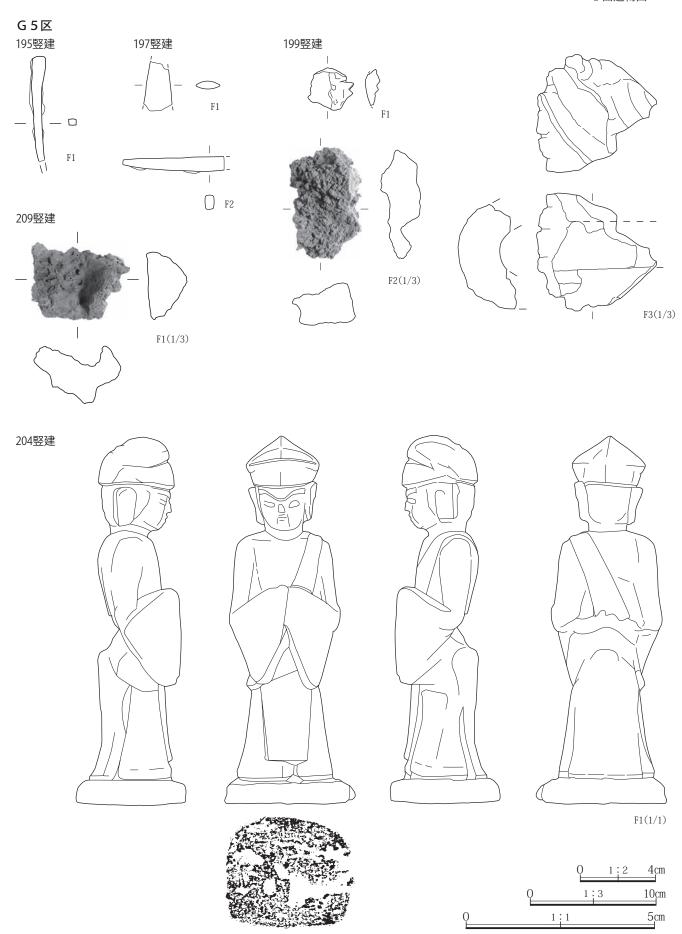




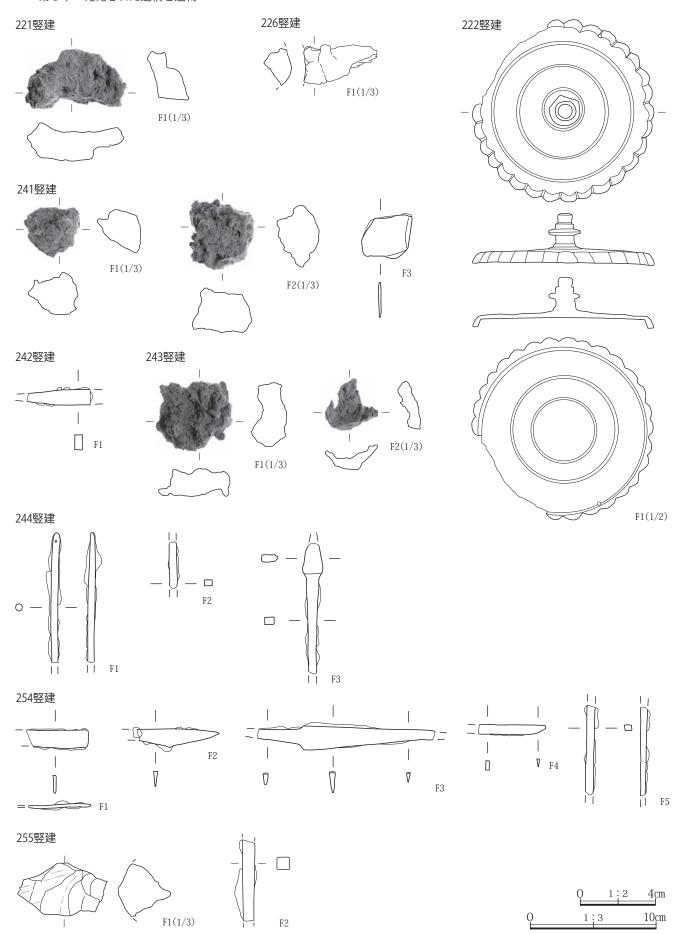
第533図 3面 G3区平安時代竪穴建物出土金属製品(3)



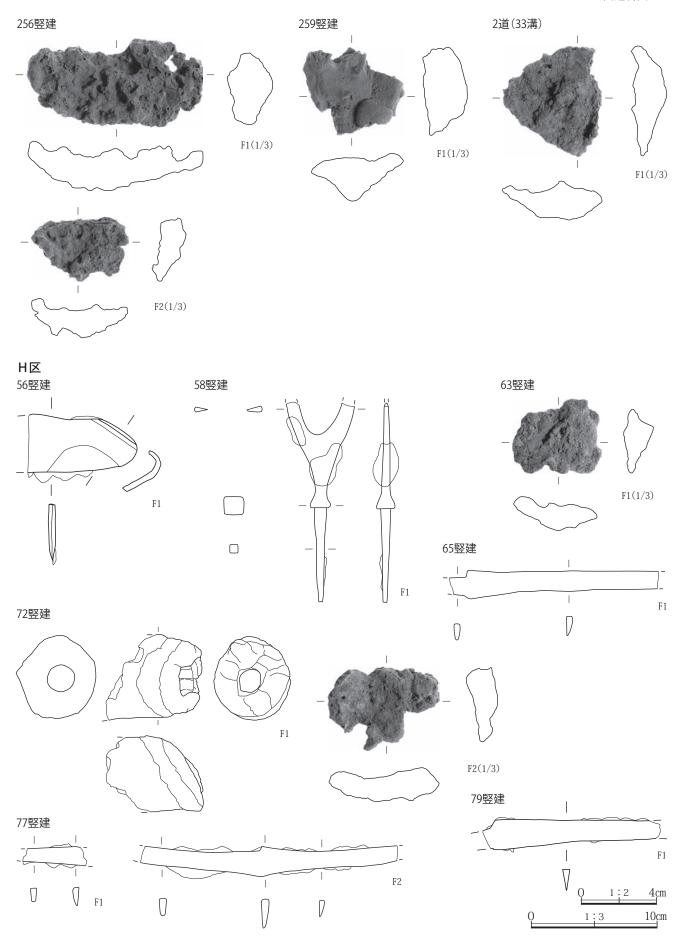
第534図 3面 G4区平安時代竪穴建物出土金属製品(4)



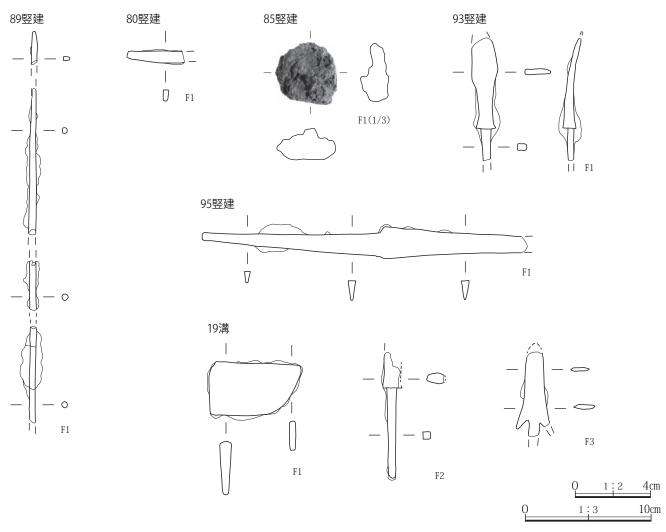
第535図 3面 G5区平安時代竪穴建物出土金属製品(5)



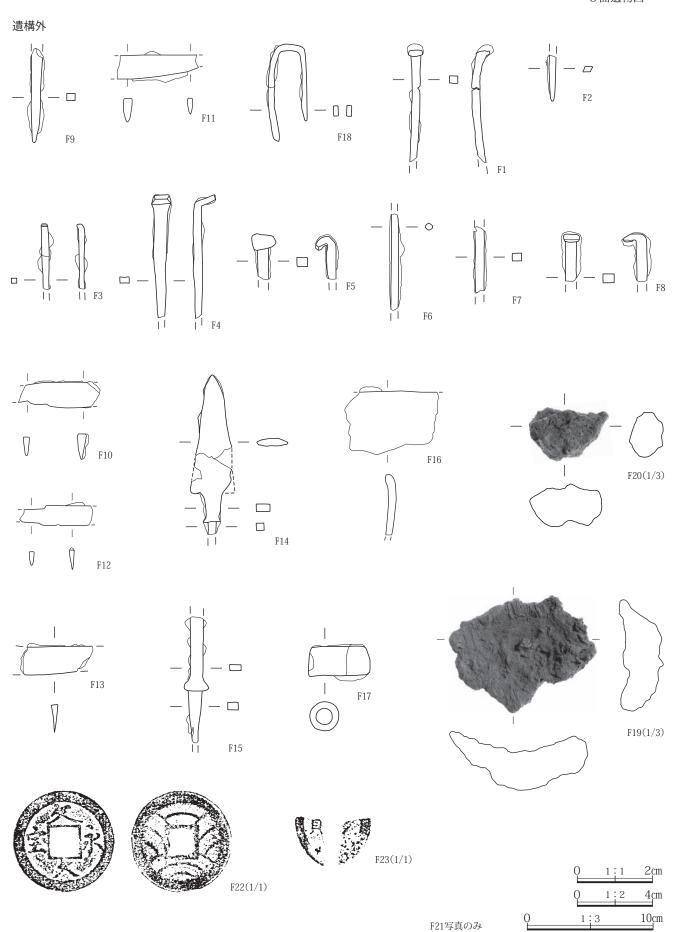
第536図 3面 G5区平安時代竪穴建物出土金属製品(6)



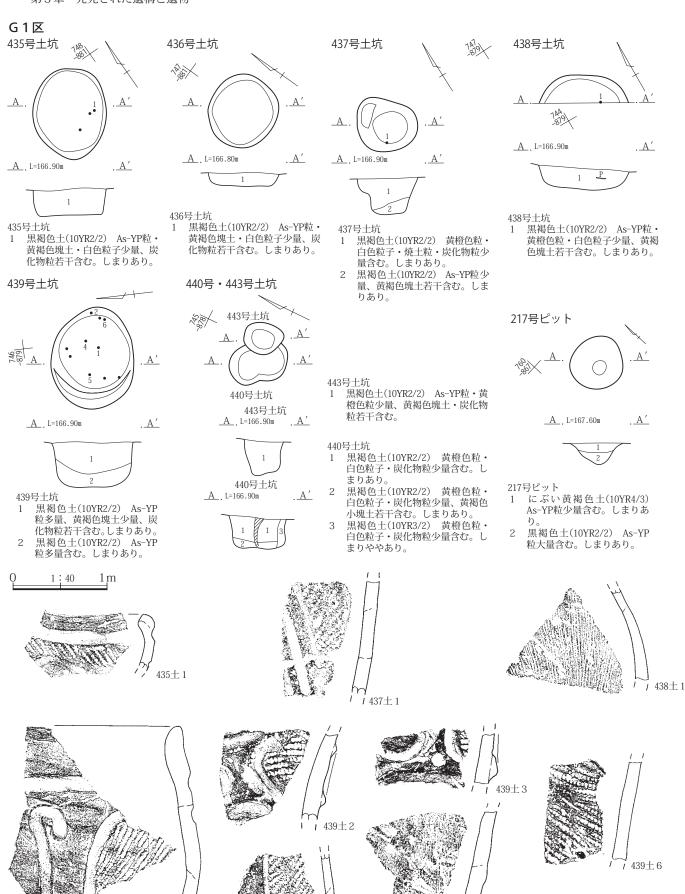
第537図 3面 G5·H区平安時代竪穴建物出土金属製品(7)



第538図 3面 H区平安時代竪穴建物出土金属製品(8)



第539図 3面 G3・G4・G5・H区遺構外出土金属製品



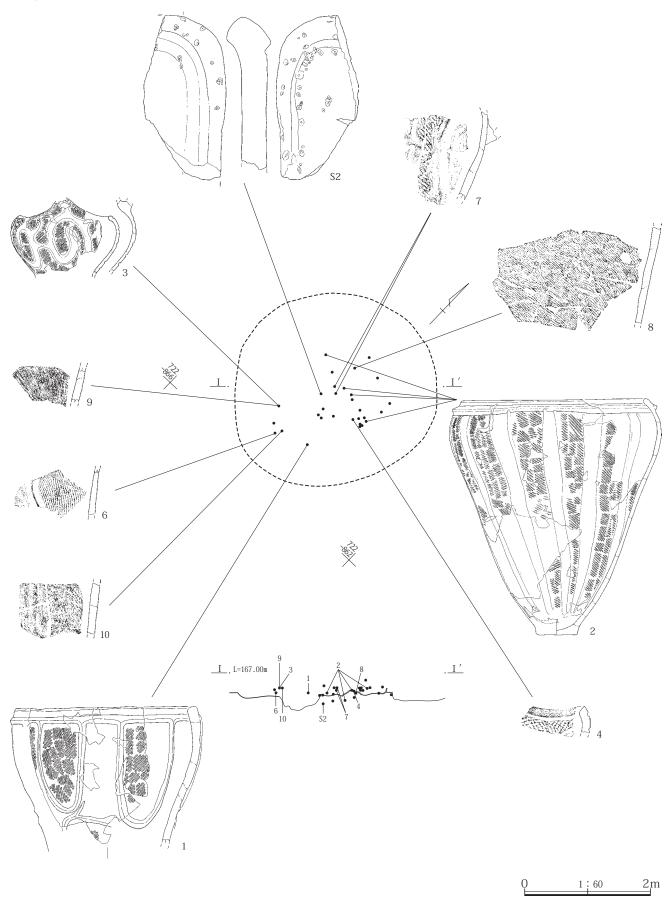
第540図 4面 G1区435~440・443号土坑、217号ピット、435・437・438・439号土坑出土遺物

439土4

/ 439±5

10cm

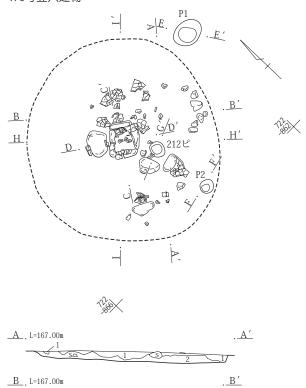
/ 439土1



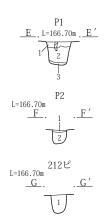
第541図 4面 G2区176号竪穴建物遺物出土状況

# 第3章 発見された遺構と遺物

# 176号竪穴建物



176号竪穴建物A-A'・B-B' 1 黒褐色土(10YR2/3) 白色粒子粒を含む。ローム粒をごくわずか含む。 2 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・白色粒子粒をごくわずか含む。



 P 1 E-E'

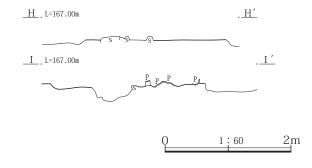
 1 黒褐色土(10YR3/2)
 白色粒子・黄褐色粒若干含む。しまりややあり。

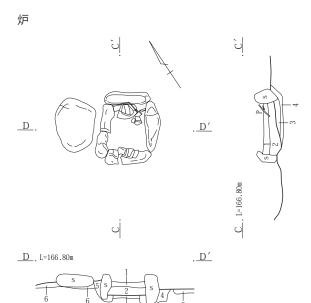
 2 黒褐色土(10YR2/2)
 As-YP粒多量、ローム塊土若干含む。しまりあり。

 3 黒褐色土(10YR2/2)
 As-YP粒大量含む。しまりややあり。

黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色粒若干含む。しまりあまりなし。 暗褐色土(10YR3/3) As-YP粒若干含む。しまりあまりなし。

212ピ(4面)G-G' 1 黒褐色土(10YR2/2) ローム塊土・黄褐色粒若干含む。しまりあまりなし。



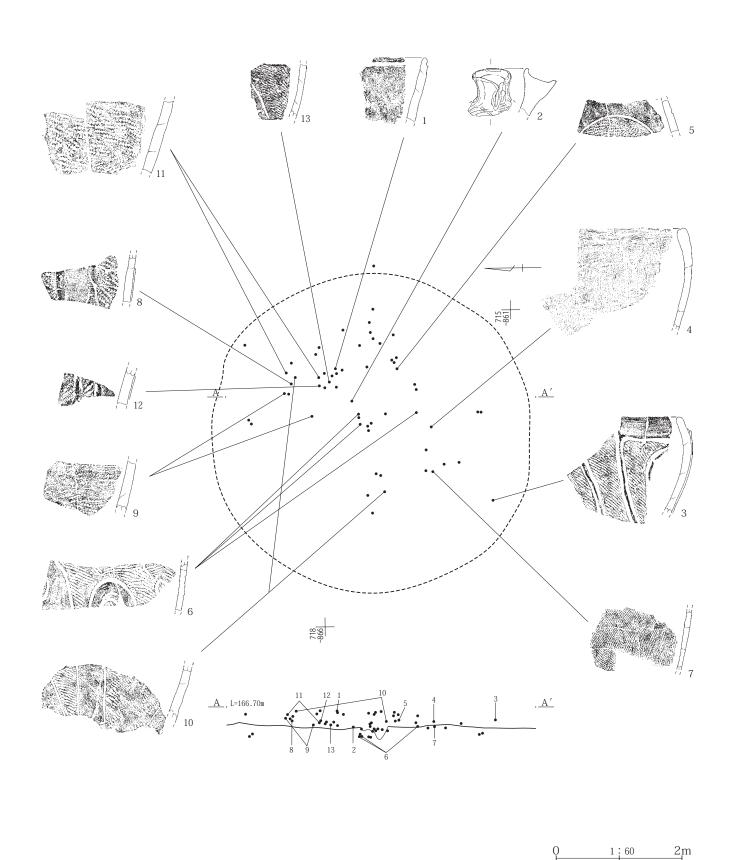




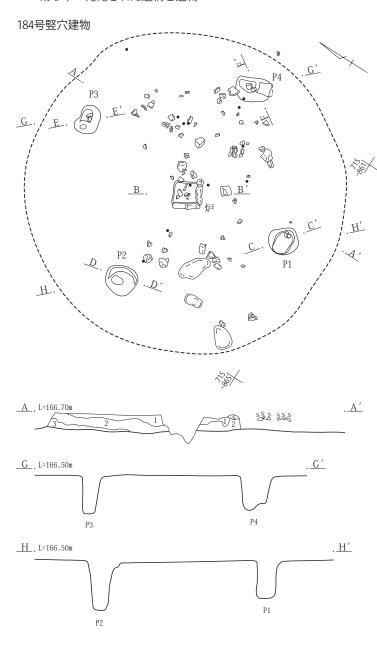
炉C-C'•D-D' |-C' · D-D' |
| 黒褐色土(10YR2/2) | 白色粒子・黄橙色粒若干含む。しまりややあり。| 白色粒子・黄橙色粒・炭化物粒若干含む。しまりややあり。| 白色粒子少量、焼土粒・黄褐色粒若干含む。しまりあり。| 日色粒子少量、焼土粒・黄褐色粒若干含む。しまりあり。| 白色粒子・黄橙色粒若干含む。しまりかやあり。| 白色粒子・黄橙色粒若干含む。しまりあまりなし。| 白色粒子少量、黄褐色粒若干含む。 3 4 5

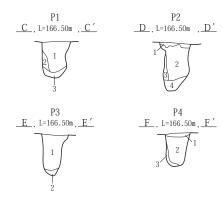


第542図 4面 G2区176号竪穴建物



第543図 4面 G2区184号竪穴建物遺物出土状況





# P 1 C-C'

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色粒・白色粒子少量、ローム塊土 若干含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒少量含む。しまりあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量含む。しまりあり。

### P 2 D-D'

- 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子若干含む。しまりあまりなし。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・As-YP塊土少量含む。しま りあり
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量含む。しまりややあり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒若干含む。しまりあま りなし。

### P 3 E-E'

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・白色粒子少量含む。しまり あり。
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒若干含む。しまりあまりなし。

# P 4 F-F

- 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子・黄橙色粒若干含む。しまり ややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、ローム塊土若干含む。 しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量含む。しまりあり。

### 184号竪穴建物A-A'

- 黒褐色土(10YR2/3) ローム土・ローム粒・白色粒子粒をわ 1 ずか含む。
- 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・白色粒子粒をわずか、大粒
- のローム粒・白色粒子粒をごくわずか含む。 暗褐色土(10YR3/4) ローム土を多く、ローム塊を含む。ローム粒・白色粒子粒をわずか、As-YP粒をごくわずか含む。





<u>B</u>

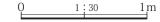


.<u>B′</u> <u>B</u>. L=166.50m

# 炉掘り方 В′

# 炉B-B'

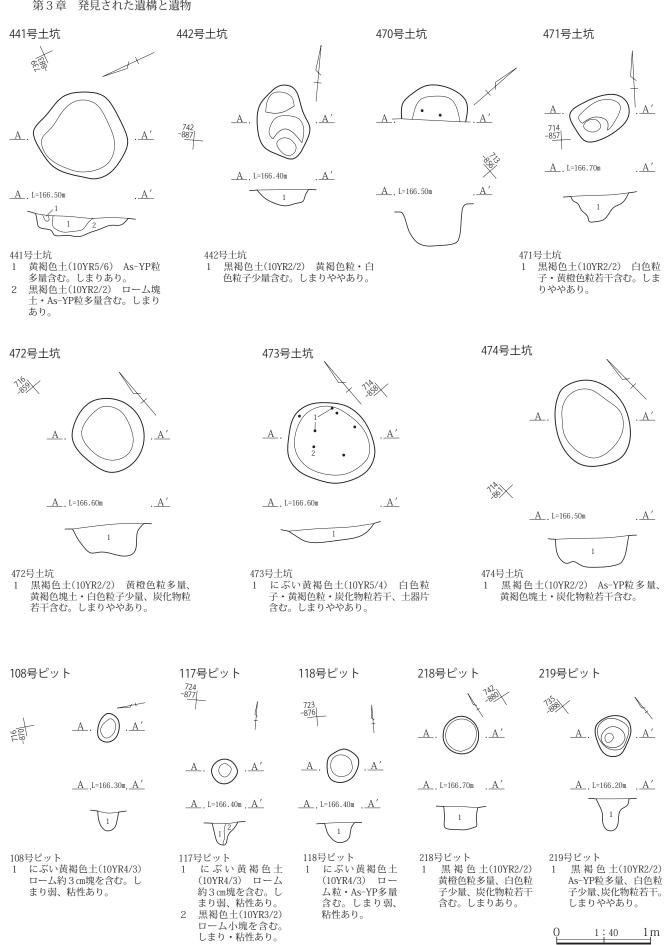
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・白色粒子・焼土粒少量、炭化物粒若干含む。し まりややあり。
- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP粒少量含む。しまりややあり。
- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子若干含む。しまりややあり。



第544図 4面 G2区184号竪穴建物

# P1 \_C\_. L=166.60m .\_C' 261号竪穴建物 調査区外 P3 <u>D</u>.L=166.60m. <u>D'</u> 208土 470土 208土 В В′ Р3 .<u>E</u>′ <u>E</u>.L=166.60m 1/2/1 P1 P 1 C-C' 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒少量、白色粒子・炭化 物粒若干、土器片含む。しまりあり。 1/2 P 2 D-D' 101竪建 101竪建 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒若干含 - 灬恂出工(10YR2/ む。しまりあり。 P 3 E-E' 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・炭化物粒少量含む。 しまりあり。 <u>A</u>. L=167.30m <u>A</u> .<u>B′</u> <u>B</u>. L=166.60m 表土 6 3 3 101竪建 261号竪穴建物A-A'•B-B' 表土 1 耕作土・埋め土 2 As-B混入土 3 As-C混入黑色土 470土 AS-UBCASHELL 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子・黄橙色粒少量含む。しまりややあり。 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色粒少量、白色粒子若干含む。しまりあまりなし。 黒褐色土(10YR3/2) 黄橙色粒多量、黄褐色塊土・炭化物粒若干含む。 4 1:60 2m

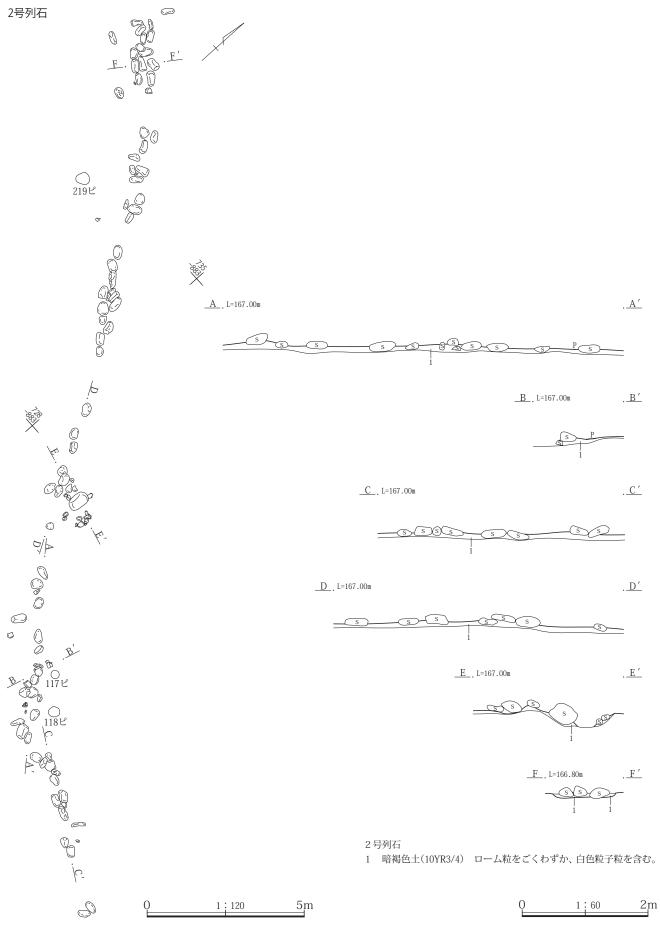
第545図 4面 G 2 区261号竪穴建物



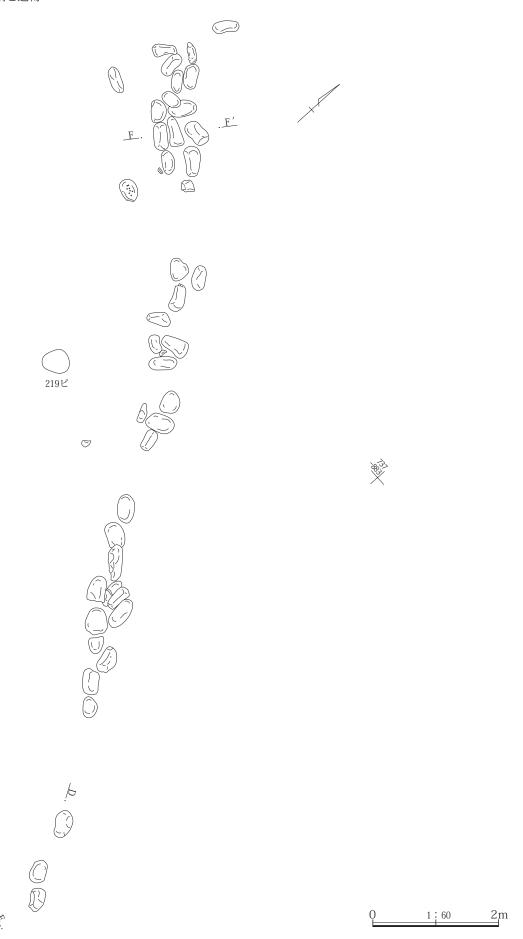
第546図 4面 G2区441・442・470~474号土坑、108・117・118・218・219号ピット

1 m

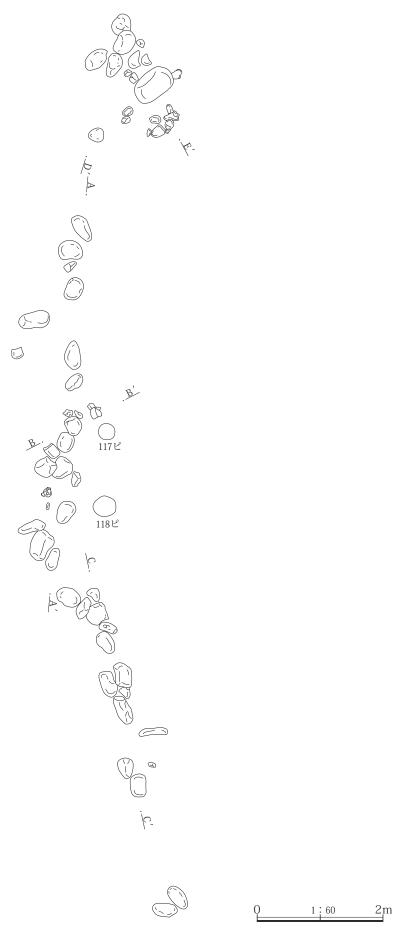
1:40



第547図 4面 G2区2号列石

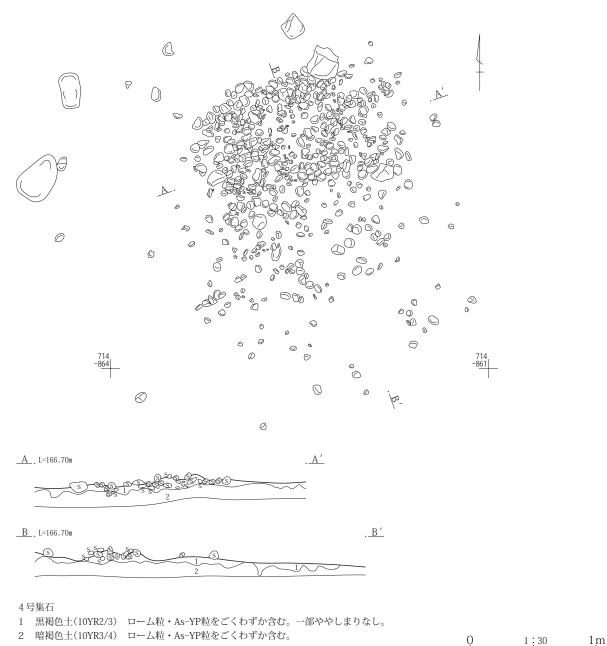


第548図 4面 G2区2号列石北西部

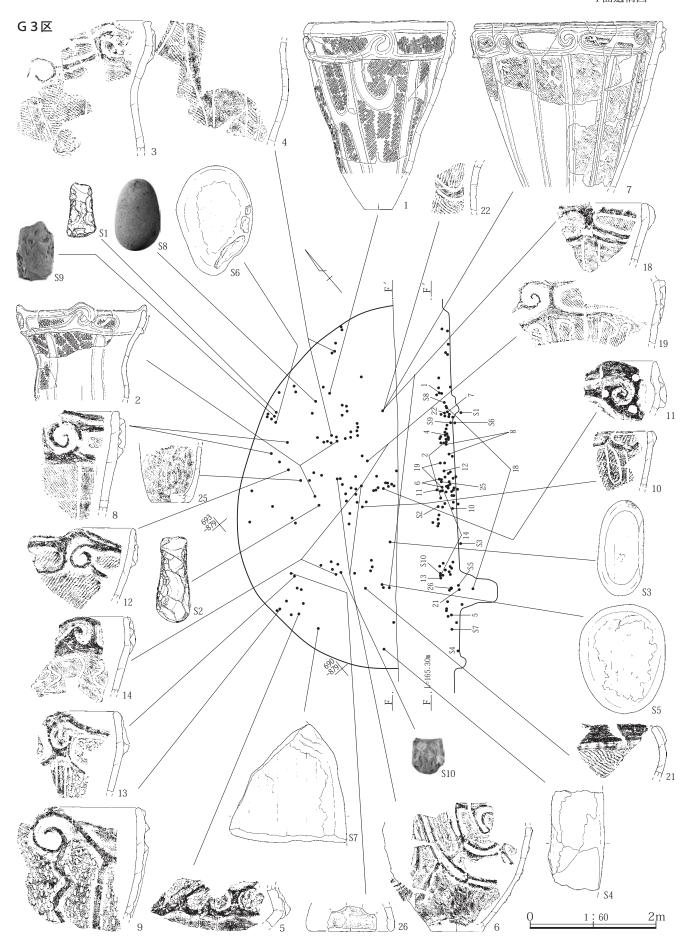


第549図 4面 G2区2号列石南東部

# 4号集石

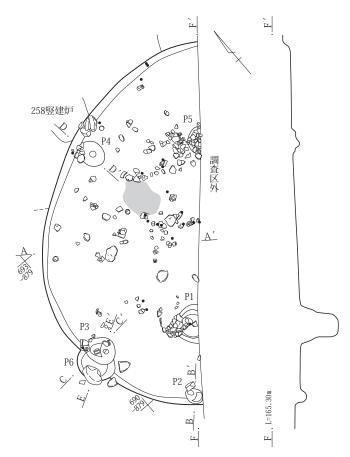


第550図 4面 G2区4号集石



第551図 4面 G3区186号竪穴建物遺物出土状況

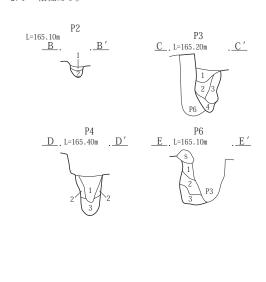
# 186号竪穴建物





### 186号竪穴建物A-A'

- 灰黄褐色土(7.5YR4/2) 焼土小塊・粒多量、遺物を含む。しまり・ 1 粘性あり。
- 灰黄褐色土(7.5YR4/2) 焼土小塊・粒多量、礫と遺物を含む。し
- まり・粘性あり。 黒褐色土(2.5Y3/1) 焼土小塊多量、灰白色粒・焼土粒少量含む。
- しまり・粘性あり。 暗灰色土(2.5Y4/2) ローム約1 cm塊・焼土約5 mm塊少量含む。し まり・粘性あり。



# P 2 B-B'

- 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含む。しまり弱、粘性あり。 にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム約5mm~10cm塊多量、As-YP 少量含む。しまり強、粘性あり。

# P 3 C-C'

- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP少量、ローム小塊・粒を含む。しまり強、粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム約 1 cm塊・As-YP多量含む。 しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒多量、礫を含む。しまり・ 粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-YP多量含む。しまり弱、粘性強。

### P 4 D-D'

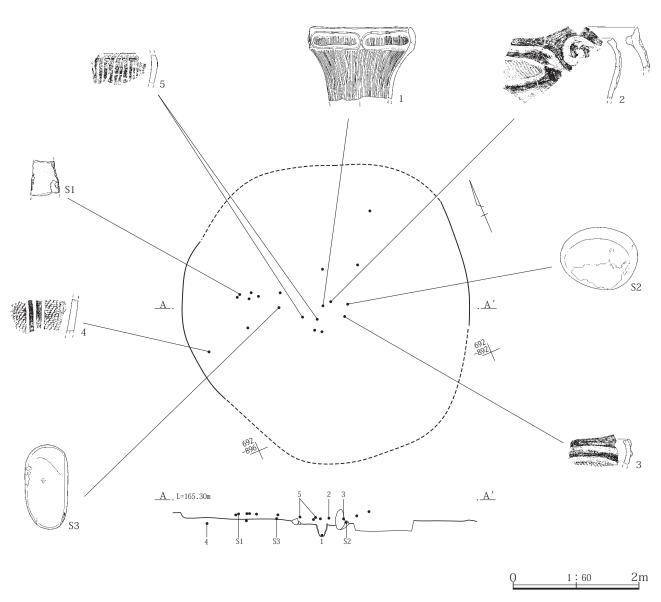
- | D-D | 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・炭化物少量、ローム粒・小礫を含む。 しまりややあり、粘性あり。 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒少量含む。しまり強、粘性あり。 灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP多量、ローム粒を含む。しまり弱、
- 粘性あり。

# P 6 E-E'

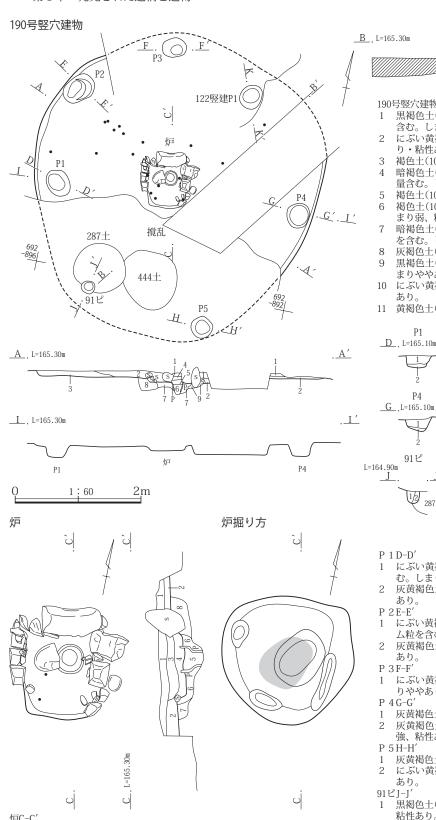
- 黒褐色土(10YR3/2) ローム約3cm塊・にぶい黄橙色粒少量含む。
- しまり・粘性あり。 黒褐色土(10YR3/2) ローム約 1 cm塊多量含む。しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒多量・As-YP少量含む。しま り弱、粘性あり。



第552図 4面 G3区186号竪穴建物



第553図 4面 G 3区190号竪穴建物遺物出土状況



# 炉C-C'

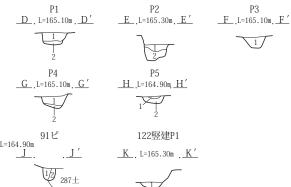
- 黒褐色土(10YR3/2) ローム小塊・明褐色粒少量、礫・遺物を含む。しまり・ 1
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黒褐色土・明褐色土を含む。しまり・粘性あり。 暗褐色土(10YR3/3) 明褐色粒少量、焼土粒微量含む。しまり・粘性あり。 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性あり。

- 梅巴士(10YR4/4) しまり・柏田のり。 褐色土(10YR4/4) 焼土粒下層に少量含む。しまり弱、粘性あり。 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒少量、ローム小塊を含む。しまりあり、粘性弱。 褐灰色土(7.5YR4/1) 炭化物を含む。しまり弱、粘性あり。
- 黒褐色土(10YR2/2) にぶい黄橙色粒少量、褐色土を含む。しまりややあり、 粘性あり。



190号竪穴建物A-A'•B-B'

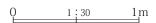
- 黒褐色土(10YR3/2) ローム小塊・明褐色粒少量、礫・遺物を 含む。しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黒褐色土・明褐色土を含む。しま り・粘性あり
- 褐色土(10YR4/4) にぶい黄褐色土を含む。しまり・粘性あり。 暗褐色土(10YR3/3) 炉3層と同じ、明褐色粒少量、焼土粒微 量含む。しまり・粘性あり。
- 褐色土(10YR4/4) 炉4層と同じ、しまり・粘性あり。
- 褐色土(10YR4/4) 炉5層と同じ、焼土粒下層に少量含む。し まり弱、粘性あり。
- 暗褐色土(10YR3/3) 炉6層と同じ、焼土粒少量、ローム小塊 を含む。しまりあり、粘性弱。
- 灰褐色土(7.5YR5/2) 褐色土を含む。しまり・粘性あり。
- 黒褐色土(10YR2/2) にぶい黄橙色粒少量、褐色土を含む。し まりややあり、粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) 灰黄褐色土を含む。しまり・粘性
- 黄褐色土(10YR5/6) ローム小塊多量含む。しまり・粘性あり。

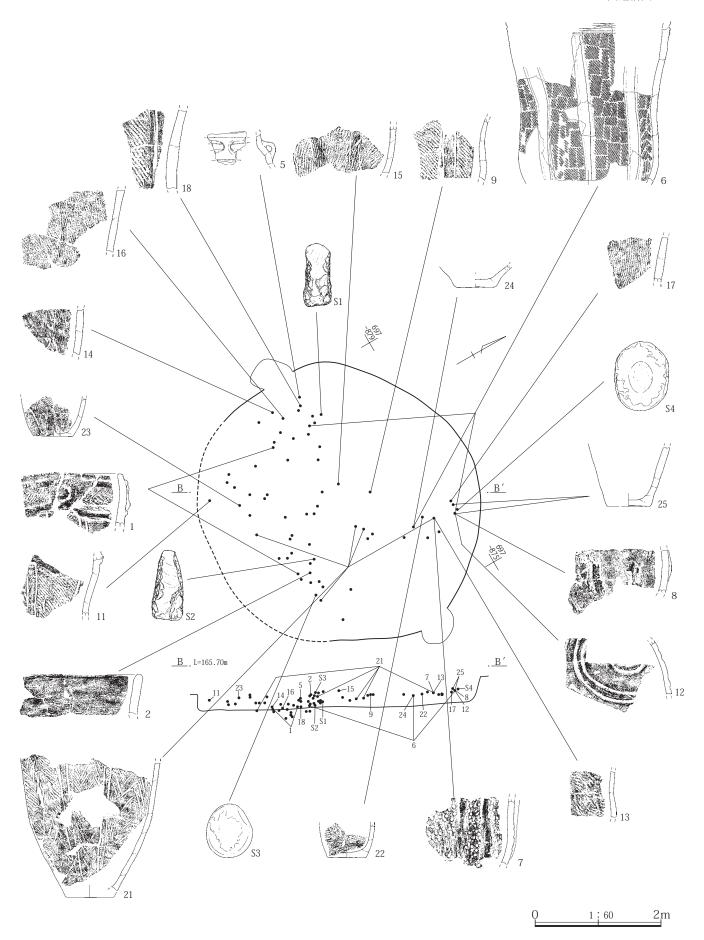


- にぶい黄褐色土(10YR4/3) にぶい黄橙色粒少量、黒色土を含
- む。しまりややあり、粘性あり。 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム小塊少量含む。しまり強、粘性
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) にぶい黄橙色粒少量、黒色土・ロー ム粒を含む。しまりややあり、粘性あり
- 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム小塊少量含む。しまり強、粘性
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊・黒色土を含む。しま りややあり、粘性あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色粒少量含む。しまり・粘性あり。 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム粒・灰白色粒少量含む。しまり
- 強、粘性あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色粒少量含む。しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) 黒褐色土を含む。しまり強、粘性
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・ローム粒少量含む。しまり弱、
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子少量、下層にローム粒を含む。 しまり弱、粘性あり。

# 122竪建P1K-K'

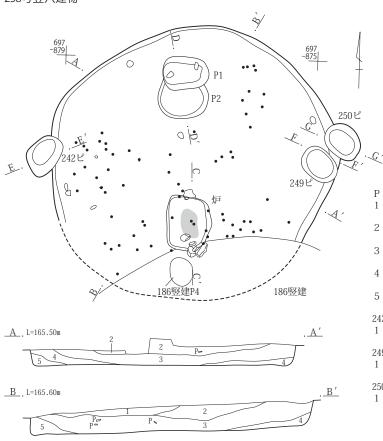
にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土粒を含む。黄褐色土粒を含む。 しまり弱、粘性あり。





第555図 4面 G3区258号竪穴建物遺物出土状況

# 258号竪穴建物



242ピ P1 • P2 D'D L=165.20m E L=165.10m

249ピ F . L=165.10m . F '



Ε′

P 1 • P 2 D-D'

- 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム約  $1 \sim 3$  cm塊・にぶい黄褐色土 1 規を含む。しまり強、粘性弱。 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒多量、As-YP少量含む。しまり
- 強、粘性ややあり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量、As-YP少量含む。しま り強、粘性弱。
- 黄褐色土(10YR5/6) ローム小~大塊多量、As-YP・明黄褐色 粒少量含む。しまり強、粘性弱。 灰黄褐色土(10YR4/2) 4層に類似、粘質土、As-YP少量含む。
- しまり強、粘性あり。

## 242ピE-E'

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・白色粒子・炭化物粒少量、黄褐色塊土若干含む。しまりあり。 1

# 249ピF-F′

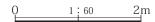
黒褐色土(10YR3/2) As-YP粒多量、黄褐色塊土少量含む。し

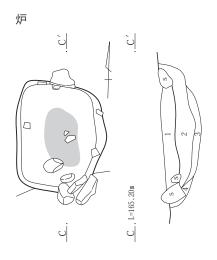
### 250ピG-G'

黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒少量。黄褐色塊 土若干含む。しまりあり。

# 258号竪穴建物A-A' · B-B'

- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子多量、灰白色粒・ローム小塊少量含む。しまり・粘
- 温褐色土(10YR3/2) 白色粒子・ローム粒少量含む。しまり弱、粘性あり。 黒褐色土(10YR3/2) As-YP・白色粒子・焼土粒少量、遺物を含む。しまり・粘性あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒・にぶい黄褐色粒少量含む。しまり強、粘性あり。 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒を含む。しまりややあり、粘性あり。







### 炉C-C'

- 暗褐色土(10YR3/3) にぶい黄橙色粒・焼土粒少量、遺物を含む。しまり弱、粘性あり。 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒多量、As-YP少量含む。しまり強、粘性弱。 にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・焼土粒多量含む。しまり強、粘性弱。

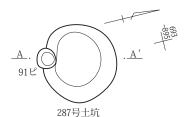
- 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム大塊を含む。しまりややあり、粘性あり。

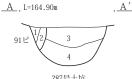
1 m 1;30

A′

. <u>A</u>

### 287号土坑





287号土坑

# 444号土坑 693× .<u>A</u>

\_A\_ L=164.80m .\_A'

- 黒褐色土(10YR3/1) ローム約1cm塊・As-YP少量含む。
  - にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊・粒を含む。しま り強、粘性あり。

### 444号土坑

- しまり強、粘性あり。

### 446号土坑

A L=165.10m

446号土坑

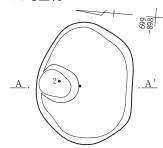
702 -893

黒褐色土(10YR2/2) 白色 粒子多量、黄橙色粒少量、 黄褐色塊土若干含む。しま りあり。

# 287号土坑(91ピ含む)

- 白色粒子・ローム粒少量。しまり弱、粘性あり。(1・2層は91号ピ埋没土) 白色粒子少量、下層にローム粒含む。しまり弱、粘性あり。 白色粒子多量で均質、ローム約5㎜~1㎝塊少量。しまり強、粘性あり。 黒褐色土(10YR2/2)
- 黒褐色土(10YR2/2)
- 黒褐色土(10YR3/2) 暗褐色土(10YR3/3) As-YP多量、3層より白色粒子少量。しまり強、粘性あり。

### 447号土坑



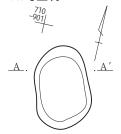
<u>A</u>. L=165.00m



## 447号土坑

- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子 多量、As-YP粒・黄橙色粒少量 含む。しまりあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒
- 大量含む。しまりあり。

# 448号土坑



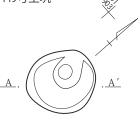
\_A\_.L=165.10m



# 448号土坑

- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒 子・黄橙色粒多量、黄褐色塊 土少量含む。しまりあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP
- 粒多量含む。しまりあり。

# 449号土坑



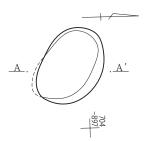
A L=164.90m



449号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒 子・As-YP粒少量。しまりあり。

# 450号土坑



<u>A</u>. L=165.10m

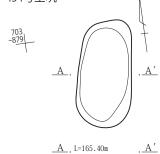


.<u>A</u>

# 450号土坑

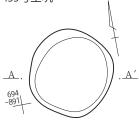
黒褐色土(10YR2/2) As-YP 粒大量、黄褐色塊土少量。しまりあり。

# 454号土坑



- 454号土坑 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・黄褐 色塊土少量、白色粒若干含む。しまり
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒· As-YP粒多量含む。しまりあり。

# 455号土坑

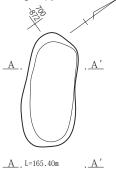


\_A . L=165.00m .<u>A</u>

# 455号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色粒·白 色粒子少量、黄褐色小塊土若干含む。 しまりあり。

# 456号土坑

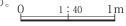


### 456号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色塊土・黄橙色粒 多量、白色粒子若干含む。しまりあり。

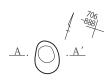
.\_A′

黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、白色粒 子若干含む。しまりあり。



4面 G 3区287・444・446~450・454~456号土坑

### 221号ピット



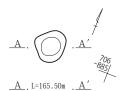
A L=165.40m A



### 221号ピット

- 灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP 少量含む。しまり・粘性あり。 にぶい対象色土(10YR4/3) 明
- 褐色粒少量、ローム粒を含む。 しまり強、粘性あり。

# 222号ピット



1

# 222号ピット

- 灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP

## 223号ピット





<u>A</u> . L=165.50m . <u>A</u> '



### 223号ピット

1 灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP少量含む。しま り・粘性あり。

# 224号ピット



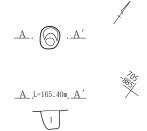
<u>A</u>.L=165.40m .<u>A</u>′



### 224号ピット

- 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白 色粒・As-YP少量含む。しま り強、粘性あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) 1層 よりAs-YP少量含む。しまり・ 粘性あり。

# 225号ピット



# 225号ピット

灰黄褐色土(10YR4/2) 灰 白色粒・As-YP少量含む。 しまり強、粘性あり。

### 226号ピット



A . L=165.40m . A'



# 226号ピット

灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP多量、ローム小塊を含む。 しまり強、 粘性弱。

## 239号ピット



A L=165.10m . A'



# 239号ピット

- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子 少量、黄褐色粒・炭化物粒若干 含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP 粒・白色粒子多量含む。しまり

# 243号ピット



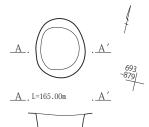
A . L=165.00m . A'



243号ピット

黒褐色土(10YR2/2) 黄橙 色粒・白色粒子・炭化物粒 少量、黄褐色塊土若干含む。 しまりあり。

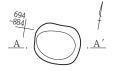
## 244号ピット



# 244号ピット

- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒 多量、黄褐色塊土少量含む。し まりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒 多量含む。しまりあり。

## 245号ピット



.<u>A</u> \_A\_. L=165.00m



# 245号ピット

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒 多量、白色粒子少量、黄褐色塊 土若干含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒 多量含む。しまりあり。

## 246号ピット



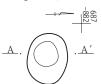
<u>A</u>. L=164.80m . <u>A</u>



# 246号ピット

- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP軽石 多量、黄褐色塊土少量含む。しま りあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP軽石 大量、黄褐色塊土若干含む。しま りあり。

# 247号ピット



.\_A′ <u>A</u>. L=164.80m



# 247号ピット

黒褐色土(10YR2/2) 黄橙 色粒・炭化物粒多量、白色粒 子・焼土粒少量含む。しまり あり。

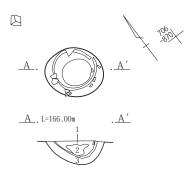
> 1:40 1 m

第558図 4面 G3区221~226・239・243~247号ピット

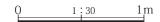
# 3号集石

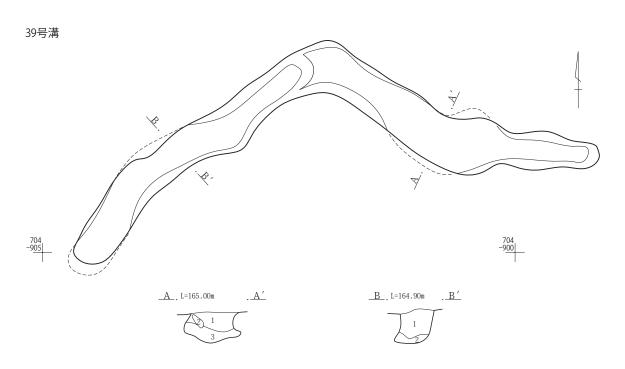
# 108 .\_A′ \_A\_. D <u>A</u>. L=166.10m .<u>A</u>′

# 1号埋設土器



- 1号埋設土器A-A' 1 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物微量、明褐色粒少量含む。しまり・ 粘性あり。
- 黄褐色土(10YR5/6) 灰白色粒少量含む。しまり・粘性あり。 灰黄褐色土(10YR4/2) にぶい黄橙色粒少量含む。しまり強、 粘性弱。



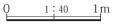


# 39号溝A-A'

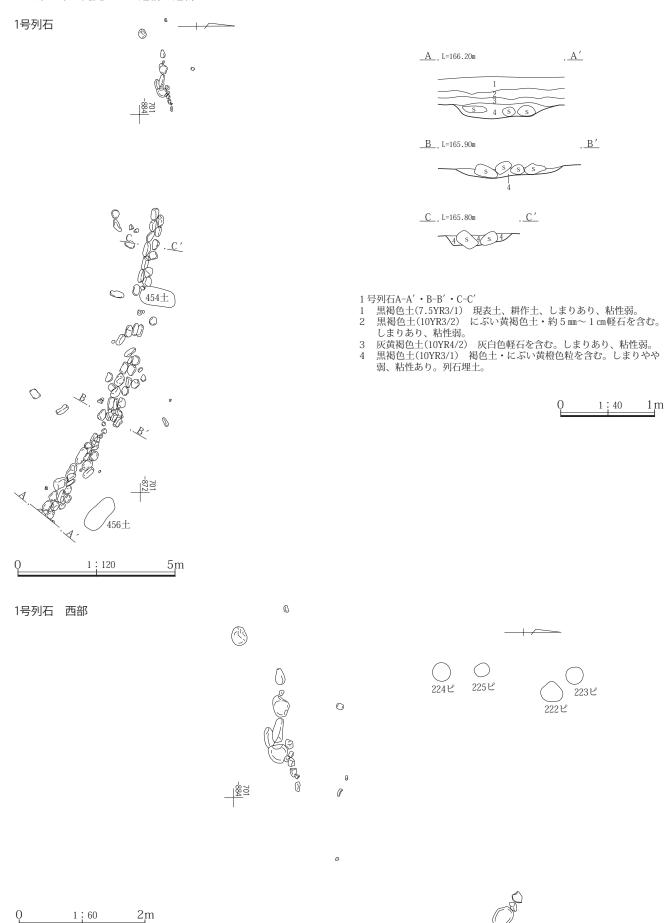
- 1 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量、白色粒子若干含む。しまりあり。 2 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量含む。しまりあり。 3 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、黄褐色塊土若干含む。しまりあり。

# B-B'

- 1 黒褐色土(10YR2/2) As-YP塊・黄褐色塊土・As-YP粒少量含む。しまりあり。 2 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒少量含む。



第559図 4面 G3区3号集石、1号埋設土器、39号溝

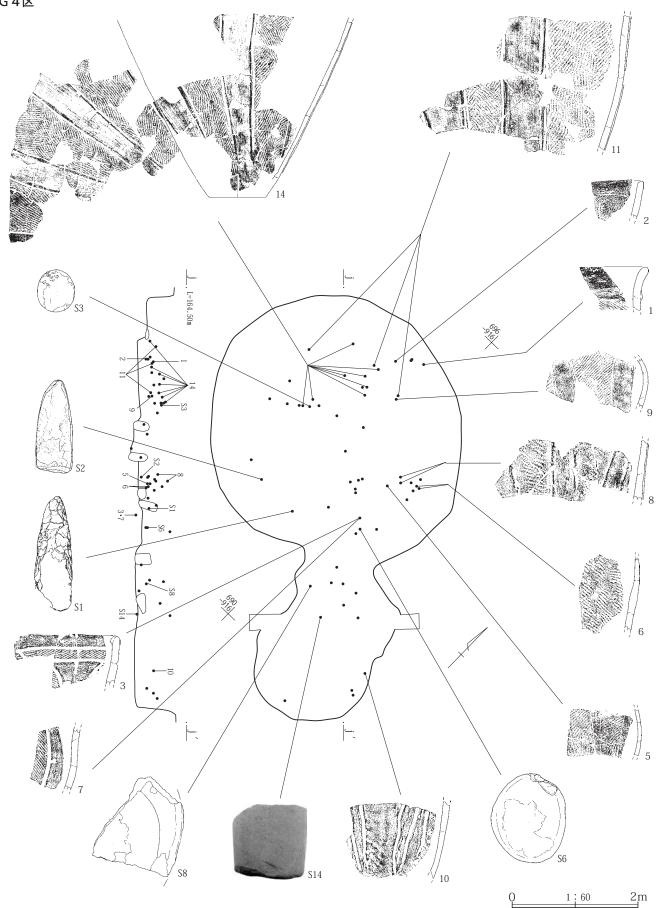


第560図 4面 G3区1号列石

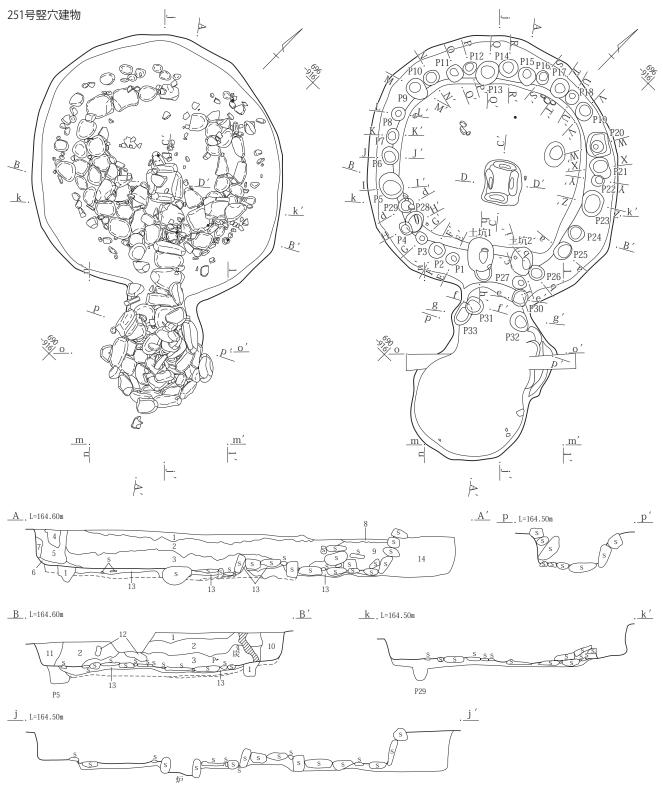


第561図 4面 G3区1号列石東部

## G 4区



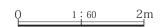
第562図 4面 G4区251号竪穴建物遺物出土状況

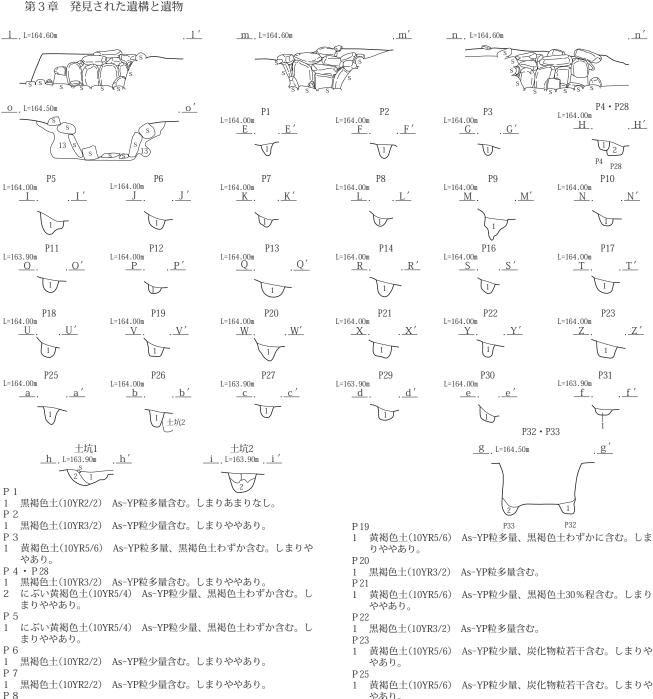


251号竪穴建物A-A' • B-B' • O-O'

- 現場色土(10YR3/2) 白色粒子・黄褐色粒少量含む。しまりややあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、黄褐色塊土・炭化物粒少量含む。し
- まりややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒少量、黄褐色塊土・焼土塊 11 土若干含む。しまりややあり。

- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒少量、黄褐色土20%程含む。しまりややあ 14
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量、白色粒子若干含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子少量含む。しまりあまりなし。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・炭化物粒少量、円礫含む。しまりや 9 やあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・黄褐色塊土多量含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色大塊土・As-YP粒多量含む。しまりあり。 黄褐色(10YR5/6) As-YP粒少量、塊土含む。しまりあり
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒を部分的にまとまって 含む。しまりあまりなし。
- 品も。 現褐色土(10YR2/2) As-YP軽石・黄褐色粒多量、黄褐色塊土少量、 炭化物粒若干含む。しまりあり。





- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒少量含む。しまりややあり。 P 9
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒・炭化物粒少量含む。しまりあ まりなし。 P 10
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量含む。しまりあまりなし。 P11
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量含む。しまりあまりなし。 P 12
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-YP粒多量含む。しまりあまりなし。 P13
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒多量、炭化物粒少量含む。しま 1 りややあり。 P 14
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒少量、黒褐色土わずかに含む。 1 しまりややあり。
- P 16 にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒多量含む。しまりあまりなし。
- P17 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・炭化物粒多量含む。しまりややあり。
- P18 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量含む。しまりややあり

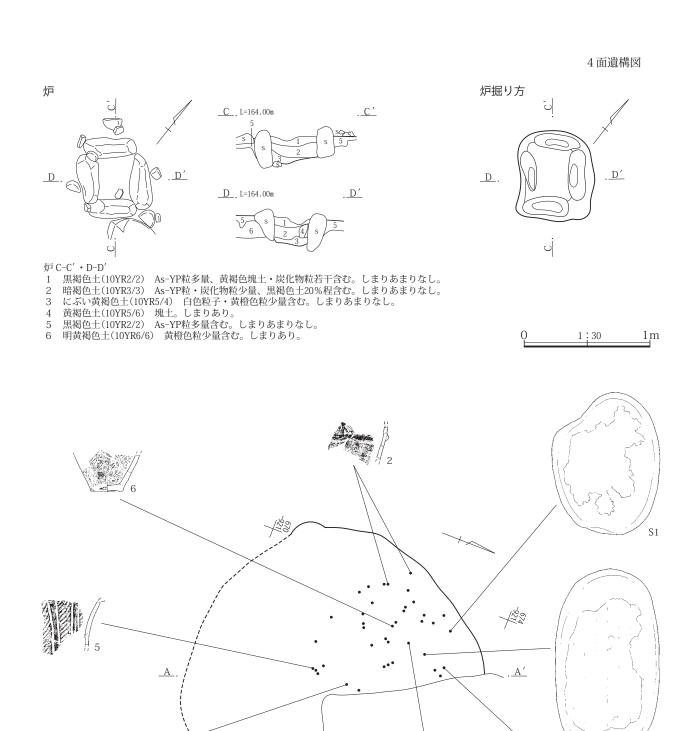
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量、黒褐色土30%程含む。しまり
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量、炭化物粒若干含む。しまりや
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒少量、炭化物粒若干含む。しまりや やあり。 P 26
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒少量含む。
- P 27 にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-YP粒少量含む。
- P 29 にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒少量含む。 P30
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒少量、黒褐色土20%程含む。 P31
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) As-YP粒少量、黒褐色土10%程含む。 P32 • P33
- 褐色土(10YR4/4) As-YP軽石少量、黒褐色土20%程含む。
- 2 褐色土(10YR4/4) As-YP軽石若干含む。 土坑1
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒若干含む。しまりや 1 やあり.
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP軽石少量含む。しまりややあり。 土坑2
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、炭化物粒少量含む。しまりや 1 やあり

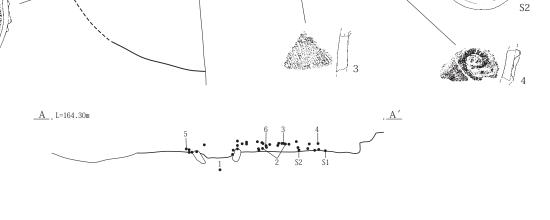
1:60

2m

As-YP粒少量含む。しまりややあり。 黄褐色土(10YR5/6)

4面 G 4区251号竪穴建物 第564図



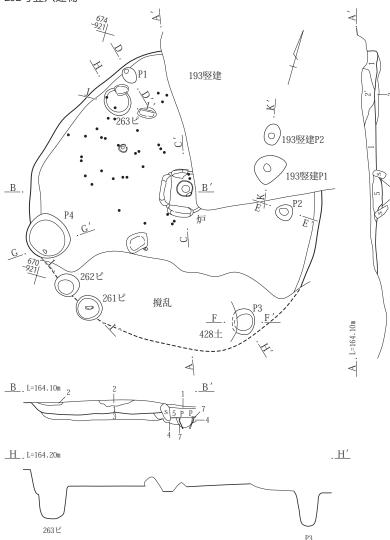


第565図 4面 G4区251号竪穴建物·252号竪穴建物出土状況

2m

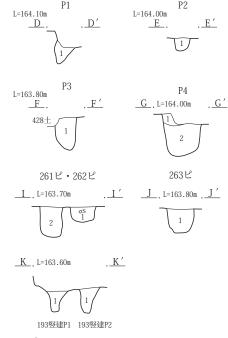
1;60

#### 252号竪穴建物



### 252号竪穴建物A-A' · B-B'

- 暗褐色土(10YR3/3) 黒褐色土20%程、白色粒子・黄橙色粒・炭化物粒若干含む。しまり
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄橙色粒少量含む。しまりあまりなし。
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子多量含む。しまりややあり。 暗褐色土(10YR3/4) 黄褐色塊土少量、白色粒子・黄橙色粒若干含む。しまりややあり。 3
- 黒褐色土(10YRZ/2) 白色粒子・黄楮色粒若干含む。しまりややあり。 黒褐色土(10YRZ/2) 黄褐色粒・白色粒子少量、炭化物粒・焼土粒少量含む。しまりやや
- にぶい黄褐色土(10YR3/4) 黄褐色粒・白色粒子若干含む。しまりあり
- 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・白色粒子・As-YP粒若干含む。しまりあり。



#### P 1 D-D'

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄褐色粒若干含む。 しまりあまりなし。

#### P 2 E-E'

黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土20%程、黄褐色粒若干 含む。しまりあまりなし。

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄橙色粒・黄褐色小 塊土少量含む。しまりあり。

### P 4 G-G

- にぶい黄褐色土(10YR3/4) 白色粒子・黄褐色粒若干 1 含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、白色粒子少量、 黄褐色塊土若干含む。しまりあり。

### 261ピ・262ピI-I

- 黒褐色土(10YR3/2) ローム小塊・遺物を含む。しまり 弱、粘性あり。
- 黒褐色土(10YR2/2) ローム小塊多量含む。しまり弱、 粘性あり。

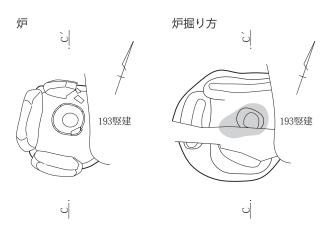
### 263ピJ-J′

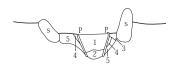
黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子・黄褐色塊土少量、炭 化物粒若干含む。しまりややあり。

黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色粒・As-YP軽石多量含む。









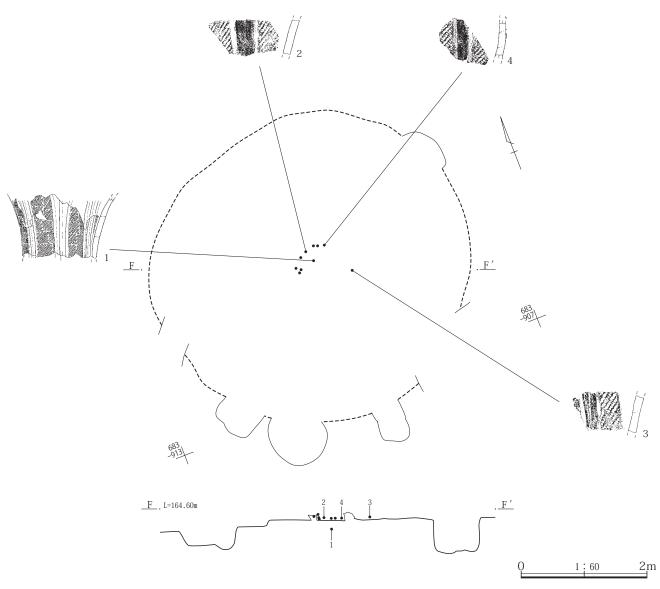
### 炉C-C

若干含む。

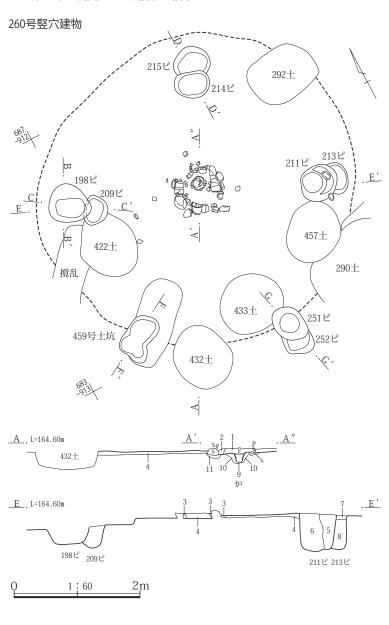
- 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒・黄橙色粒少量、炭化物粒・白色粒子若干含む。 1 しまりあまりなし。
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土粒・黄橙色粒・白色粒子少量含む。しま りあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・白色粒子少量含む。しまりあまりなし。
- 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・白色粒子・As-YP粒若干含む。しまりあり
- にぶい黄褐色土(10YR5/4) 黄橙色粒・白色粒子少量、焼土粒・炭化物粒

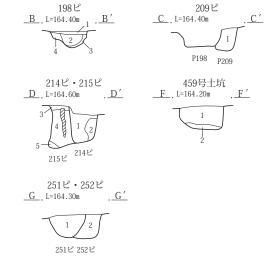
1:30  $1 \,\mathrm{m}$ 

第566図 4面 G4区252号竪穴建物



第567図 4面 G 4区260号竪穴建物遺物出土状況





#### 198ピB-B'

- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子・黄褐色粒若干含む。しま りややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色塊土少量、炭化物粒・焼土粒 若干含む。しまりややあり。
- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子若干含む。しまりややあ
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色塊土多量含む。しまりややあ り。 209ピC-C′

#### 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色塊土少量含む。しまりあり。 214ピ・215ピD-D'

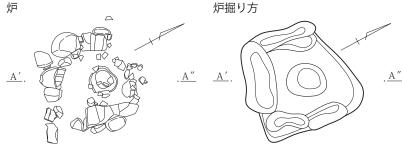
- 1 粒若干含む。しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、黄褐色塊土若干含む。 しまりあり。
- 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒子・黄橙色粒少量含む。しま りややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄橙色粒少量含む。しま りあり
- 5 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量含む。しまりあり。

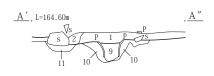
## 459号土坑F-F'

- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP軽石多量、黄褐色塊土少量含 む。しまりあり。
- 黑褐色土(10YR2/2) As-YP軽石多量、黄褐色塊土若干含 む。しまりあり。

### 251ピ・252ピG-G'

- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・黄褐色塊土多量含む。し まりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、黄褐色塊土・白色粒 子少量含む。しまりあり。



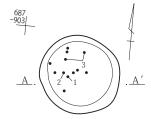


### 260号竪穴建物A-A' • E-E'

- 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色土20%程、黄橙色粒・白色粒子若干含む。しまりややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子若干含む。しまりあまりなし。(撹乱?) 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄褐色粒若干含む。しまりややあり。
- 褐色土(10YR4/4) 白色粒子少量、黄褐色粒若干含む。
- 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄褐色粒少量、炭化物粒若干含む。しまりややあり。(5・6層は211ピ覆土)
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色塊土・As-YP粒少量含む。しまりややあり。
- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP粒少量含む。しまりややあり。(7・8層は213ピ覆土)
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量含む。しまりややあり。
- 黄褐色土(10YR5/6)
- 白色粒子少量、黄橙色粒若干含む。しまりややあり。 白色粒子・黄橙色土・焼土粒若干含む。しまりややあり。 黄褐色土(10YR5/6)
- 黄褐色土(10YR4/3) 白色粒子若干含む。しまりややあり。



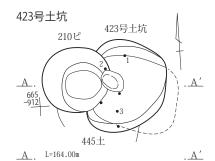
### 417号土坑

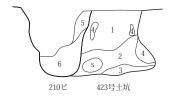




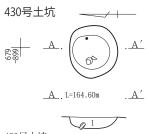
#### 417号土坑

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒多量、黄褐 色粒・白色粒子少量、炭化物粒若干含む。 しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・黄褐色塊 土少量含む。しまりあり。

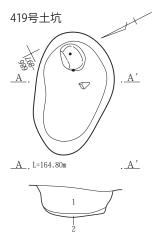




- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、暗褐色塊 土・白色粒子少量、炭化物粒若干含む。しまり ややあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量含む。しま りややあり。
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒大量含む。しま 3 りややあり。
- 黄褐色土(10YR5/6) 塊土。
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黄橙色粒・白色粒 子少量含む。
- 黒褐色十(10YR2/2) As-YP粒多量含む。

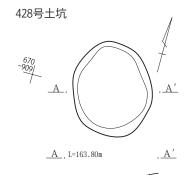


430号土坑 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒若干 含む。しまりややあり。



#### 419号土坑

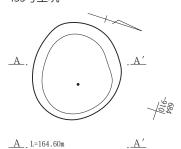
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒多量、黄褐 色粒・白色粒子少量、炭化物粒若干含む。 しまりあり。
- 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・黄褐色塊 土少量含む。しまりあり。

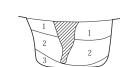


### 428号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子·黄褐色粒· As-YP粒・炭化物粒少量含む。しまりあり。

### 433号土坑

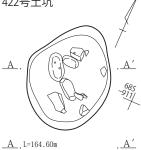




### 433号土坑

- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子少量、黄橙
- 少量、黄褐色塊土若干含む。しまりあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量含む。 しまりあり。

### 422号土坑

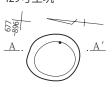




### 422号土坑

- 5-1-51 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒大量、黄 褐色塊土少量含む。しまりややあり。 黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量、黄 褐色塊土若干含む。しまりややあり

### 429号土坑

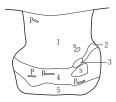




黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄 橙色粒若干含む。しまりややあり。

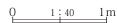
## 434号土坑



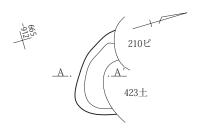


### 434号土坑

- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・炭化物粒 多量、黄褐色塊土・白色粒子少量含む。
- 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒少量含む。 黄褐色土(10YR5/6) 白色粒子少量含む。
- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP粒・炭化物粒 少量含む。
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒・炭化物粒 少量含む。



### 445号土坑



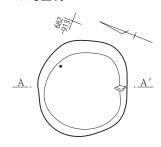
A .L=163.90m. A'



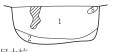
#### 445号土坑

褐灰色土(10YR4/1) 白色粒 子・黄橙色粒・下層に黄褐色塊土少量含む。しまりあり。

### 460号土坑



<u>A</u>.L=164.20m



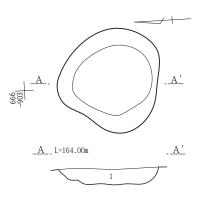
### 460号土坑

黒褐色土(10YR2/2) As-YP軽石多量、黄 橙色粒・黄褐色塊土少量、白色粒子若干含 む。しまりあり。

.\_A′

黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒多量含む。 しまりあり。

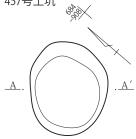
### 463号土坑



### 463号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・黄橙色 粒少量、炭化物粒若干含む。しまりあり。

### 457号土坑



<u>A</u> . L=164.30m

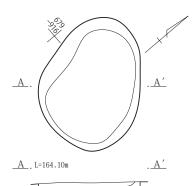


.\_A′

### 457号土坑

黒褐色土(10YR2/2) As-YP軽石 多量、黄褐色塊土若干含む。しまりややあり。

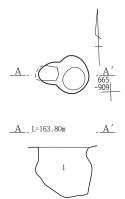
### 461号土坑



### 461号土坑

- ラエ州 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物粒少量、白色粒 子・黄橙色粒若干含む。しまりあり。 黄褐色土(10YR5/6) 白色粒子若干含む。し
- まりあり。
- 黄褐色土(10YR5/6) As-YP粒多量含む。

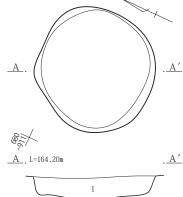
### 464号土坑



## 464号土坑

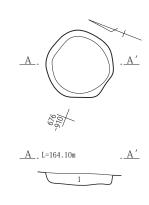
黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・炭化 物粒・白色粒子少量含む。しまりあり。

## 458号土坑



458号土坑 1 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子多量、黄褐色粒・黄褐色塊土少量、 炭化物粒若干。しまりあり。

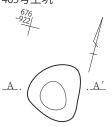
#### 462号土坑



### 462号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 白色粒子・ As-YP粒多量含む。しまりあり。

### 465号土坑

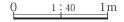


A . L=163.90m .\_A′

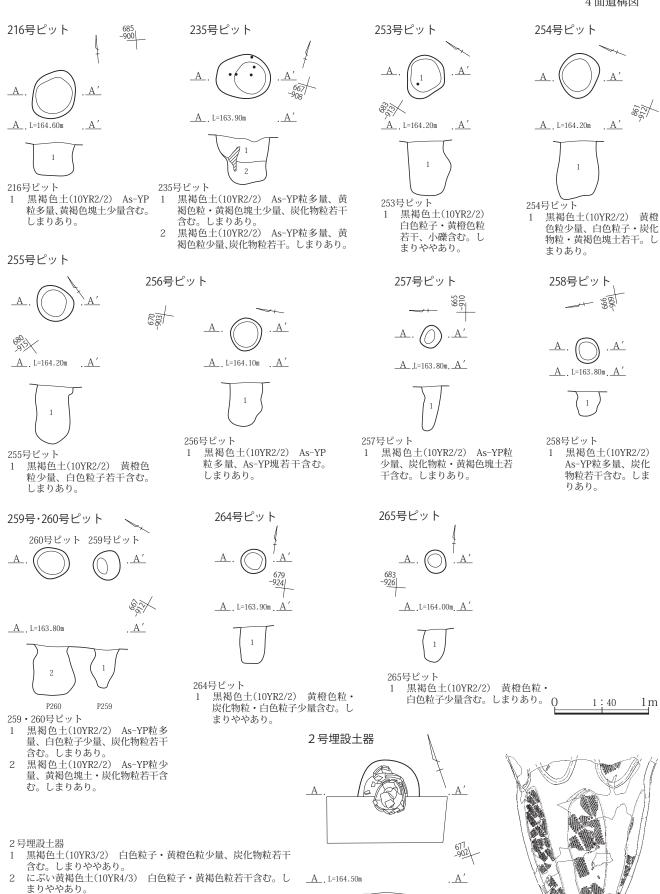


### 465号土坑

黒褐色土(10YR2/2) As-YP粒・黄橙 色粒・白色粒子少量、炭化物粒若干含む。しまりあり。



第570図 4面 G4区445・457・458・460~465号土坑

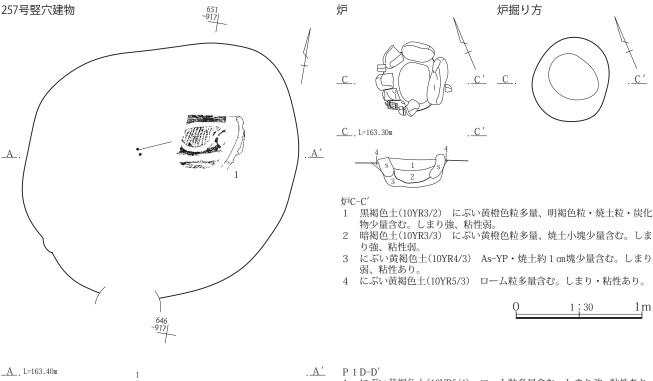


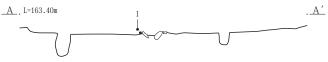
第571図 4面 G4区216・235・253~260・264・265号ピット、2号埋設土器

1:30

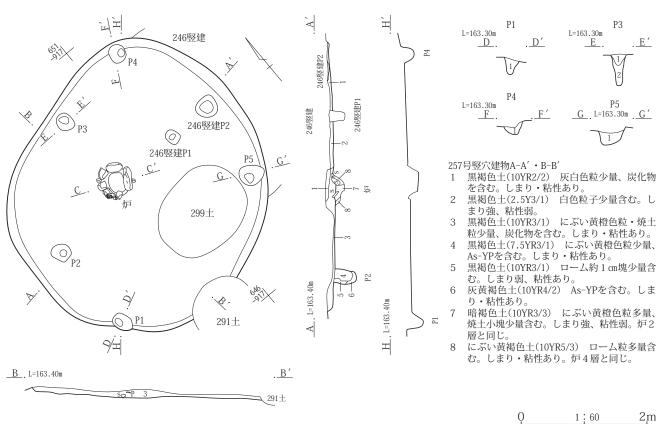
 $1 \, \mathrm{m}$ 

### **G5区**



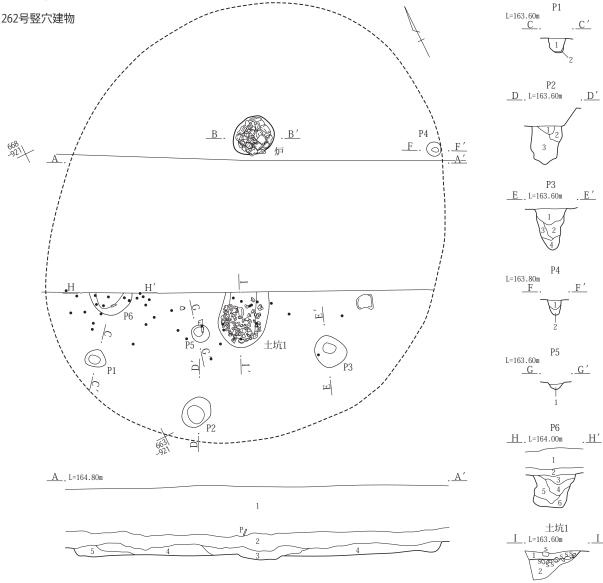


- にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム粒多量含む。しまり強、粘性あり。 P 3 E-E'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 明褐色粒少量含む。しまり強、粘性弱。 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-YP多量含む。しまり弱、粘性あり。
- P 4 F-F'
- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊を含む。しまり弱、粘性あり。 P 5 G-G'
- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊を含む。しまり弱、粘性あり。



第572図 4面 G 5 区257号竪穴建物遺物出土状況、出土遺物

### G 4·5区



### 262号竪穴建物A-A'

- 現表土・圃場整備造成土、As-Bを含む
- 黒褐色土(10YR3/2) 白色粒子多量含む。しまり・粘性あり。 黒褐色土(10YR3/2) ローム約5㎜~1㎝塊・にぶい黄褐色土小塊少 量含む。しまり弱、粘性あり
- 灰黄褐色土(10YR4/2) 明褐色粒約5mm以下・灰白色細粒少量含む。 しまり強、粘性あり。
- 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム小~大塊を含む。しまり・粘性あり。
- P 1 C-C
- 黒褐色土(10YR3/2) ローム小塊・As-YP少量含む。しまり弱、粘性 1 あり
- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP多量含む。しまり強、粘性弱

### P 2 D-D'

- 黒褐色土(10YR3/2) ローム約5mm塊多量含む。しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR5/3) As-YP少量含む。しまり弱、粘性あり。 にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・As-YP多量含む。色味は明る い、しまり弱、粘性あり。 P3E-E'

- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP少量、ローム約5cm塊以上を含む。しま り強、粘性あり。
- 黒褐色土(10YR3/2) As-YP・ローム粒少量含む。しまり強、粘性あり。 にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-YP多量で均質、しまり弱、粘性あり。 褐色土(10YR4/4) ローム粒多量含む。しまり弱、粘性強。

### P 4 F-F'

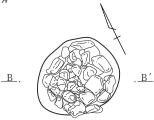
- 黒褐色土(10YR3/1) ローム約1cm塊少量含む。しまりやや弱、粘性 あり
- 灰黄褐色土(10YR4/2) As-YP少量含む。しまりやや弱、粘性あり。 P 5 G-G
- 黒色土(10YR2/1) ローム約3cm塊少量含む。しまり弱、粘性あり。 P 6 H-H'
- 1 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性弱。圃場整備造成土。 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊多量、にぶい黄橙色粒少量含 む。しまり・粘性あり。
- にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム約1cm塊少量、黒褐色土を含む。 しまり強、粘性あり。 黒褐色土(10YR3/1) ローム約5 mm塊・As-YP少量、遺物を含む。し
- まり強、粘性弱。
- 黒褐色土(10YR3/1) 4層に類似、灰白色粒・にぶい黄橙色粒少量含
- 性あり。

### 土坑 1 I-I′

- 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄橙色粒・焼土粒少量、炭化物微量含む。 しまり・粘性あり。 黒色土(10YR3/1) As-YP 多量、にぶい黄橙色粒少量、焼土小塊・粒
- は西壁上層付近に含む。下層から遺物多量。しまり・粘性あり。

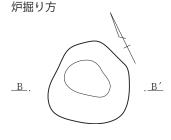


### G 4·5区 262号竪穴建物



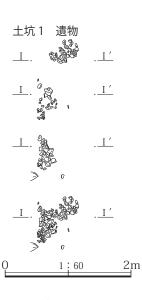
<u>B</u>. L=163.80m .<u>B′</u>

1:30

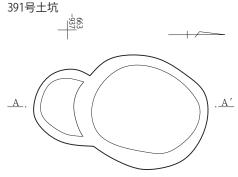


262号竪穴建物炉 B-B'

- 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄橙色粒少量、小礫多量、焼土粒 微量含む。しまり強、粘性弱。
- 黒色土(107R2/1) As-YP・小〜大礫多量、にぶい黄橙色粒少量含む。しまり弱、粘性あり。

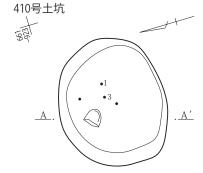




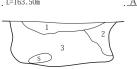


 $1 \, \mathrm{m}$ 

.<u>A</u> \_A\_.L=163.20m



.\_A′ A . L=163.50m

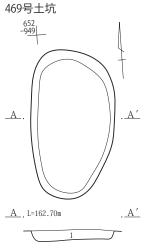


### 391号土坑

黒褐色土(10YR2/2) 径1~4cm程のローム 塊やや多い、径2~10mm程の浅黄・As-YP目 立つ。しまりあり。土器片(縄文:加曾利E期) 含む。

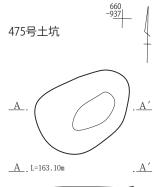
### 410号土坑

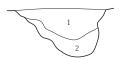
- 3.37 黒褐色土(10YR3/1) ローム約1 cm塊少量、にぶい黄 褐色土を含む。しまり・粘性あり。 黒褐色土(2.5Y3/1) ローム約3 cm塊少量含む。しま 1
- り・粘性あり。
- 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム約10 cm以上塊多量、 As-YPを含む。人為的埋没土、しまり・粘性あり。



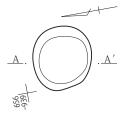
### 469号土坑

灰黄褐色土(10YR4/2) ローム 約5mm塊・黒褐色土少量含む。 しまり強、粘性あり。





### 466号土坑



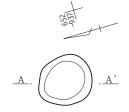
\_A\_.L=163.20m .\_A'

### 466号土坑

黒褐色土(10YR3/1) に ぶい黄橙色粒・灰白色細粒少量含む。しまり・粘 性あり。



### 467号土坑

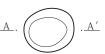


<u>A</u>.L=162.90m . <u>A</u>

467号土坑

黒褐色土(10YR3/2) As-YP 多量、ローム約3cm塊・炭化 物・焼土粒少量含む。しまり・ 粘性あり。

# 468号土坑



<u>A</u>.L=162.90m .\_A′

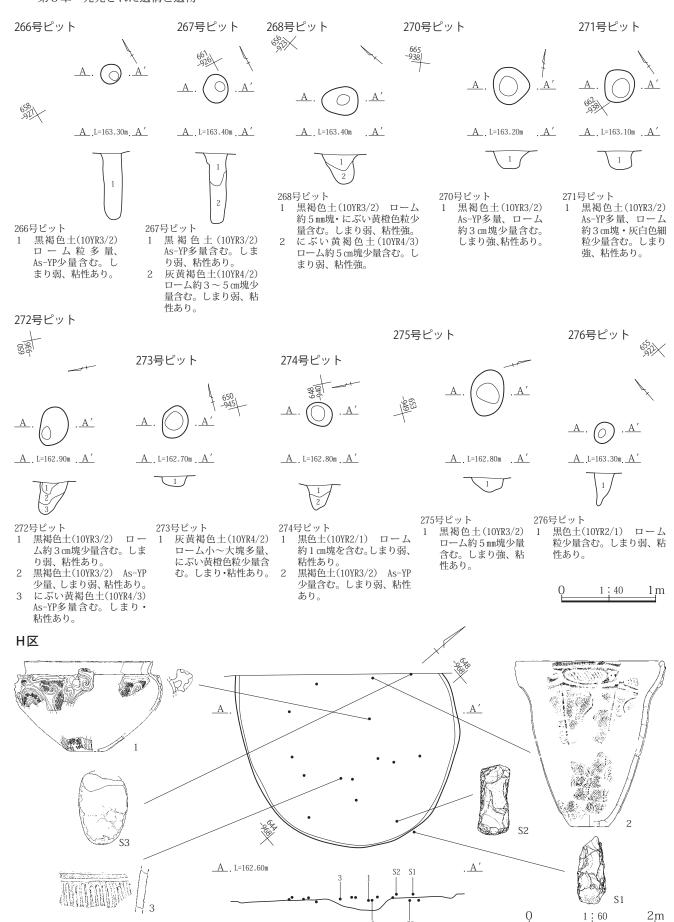
### 468号土坑

明黄褐色土(10YR7/6) 粘 質土、黄褐色土塊少量、灰 黄褐色土を含む。しまりあ り。粘性強。

### 475号土坑

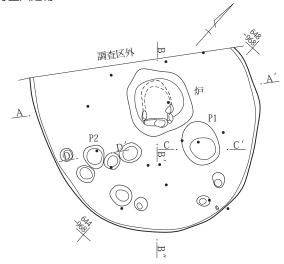
- にぶい黄褐色土(10YR6/4) 黄橙 色約1cm塊少量、黒褐色土を含む。 しまり強、粘性弱。
- 明黄褐色土(10YR7/6) 黄橙色約 5 mm ~ 10 cm 塊少量、As-YPを含む。しまり強、粘性弱。

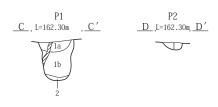




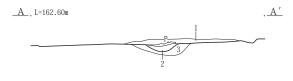
第576図 4面 G 5 区266~268・270~276号ピット、H区172号竪穴建物遺物出土状況

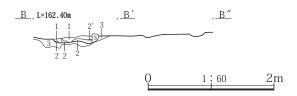
### 172号竪穴建物

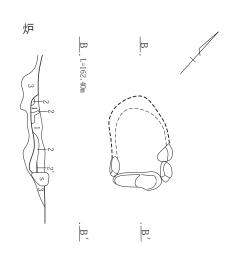


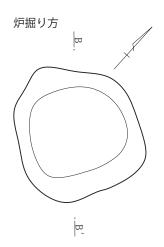


- P 1 C-C'
- 1a 褐色土(10YR4/4) ローム塊含む。
- 1b 1a層よりしまり弱い。
- 2 ローム塊と褐色土の混土ややしまる。
- P 2 D-D'
- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 硬いローム塊少し、径 1 ~ 2 mm程の As-YPわずか含む。しまる。



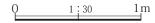




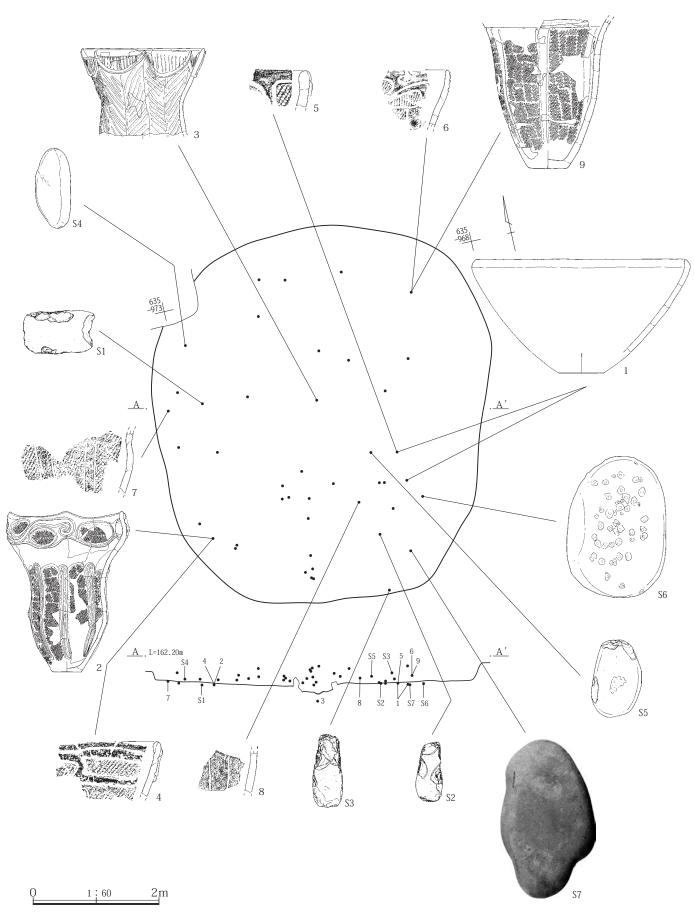


### 172号竪穴建物A-A' • 炉B-B'-B"

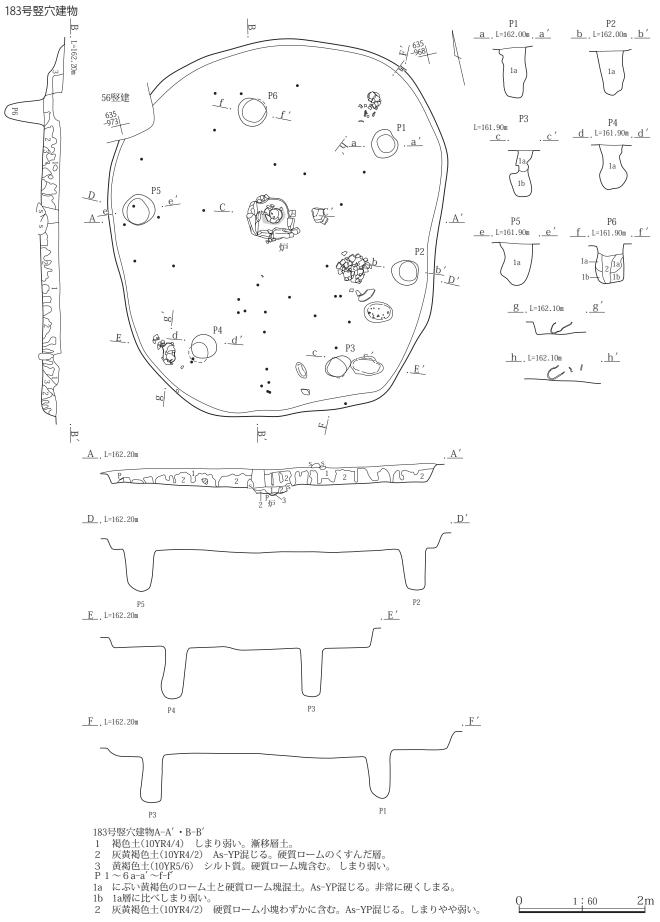
- 17-5号()(足物) A-A・/\*-5-5-5
  1 黒褐色土(10YR3/1) 径 1 ~ 3 mm程のAs-YP少量、径 2 ~ 5 mm程の橙色粒子(微細土器片?)・炭化物・焼土粒・ローム塊わずか含む。しまる。
  2 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊が多く混入する。径 1 ~ 2 mm程の黄色粒子(軽石?) わずか、焼土粒・炭化物ごくわずか含む。硬くしまる。
  2 / 黒褐色土(10YR3/2) 2 層と比して混入するローム塊がやや少ない。硬くしまる。
  3 明黄褐色土(2.5Y6/6) ローム(暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)がわずか、径 1 ~ 2 mm程の黄褐色粒子(軽石?) ごくわずか含む。硬くしまっている。

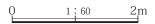


第577図 4面 H区172号竪穴建物

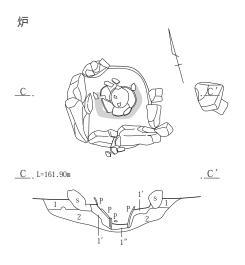


第578図 4面 H区183号竪穴建物遺物出土状況

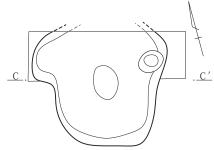




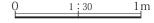
### 第3章 発見された遺構と遺物



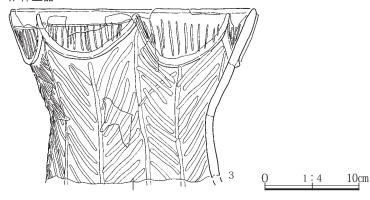
### 炉掘り方



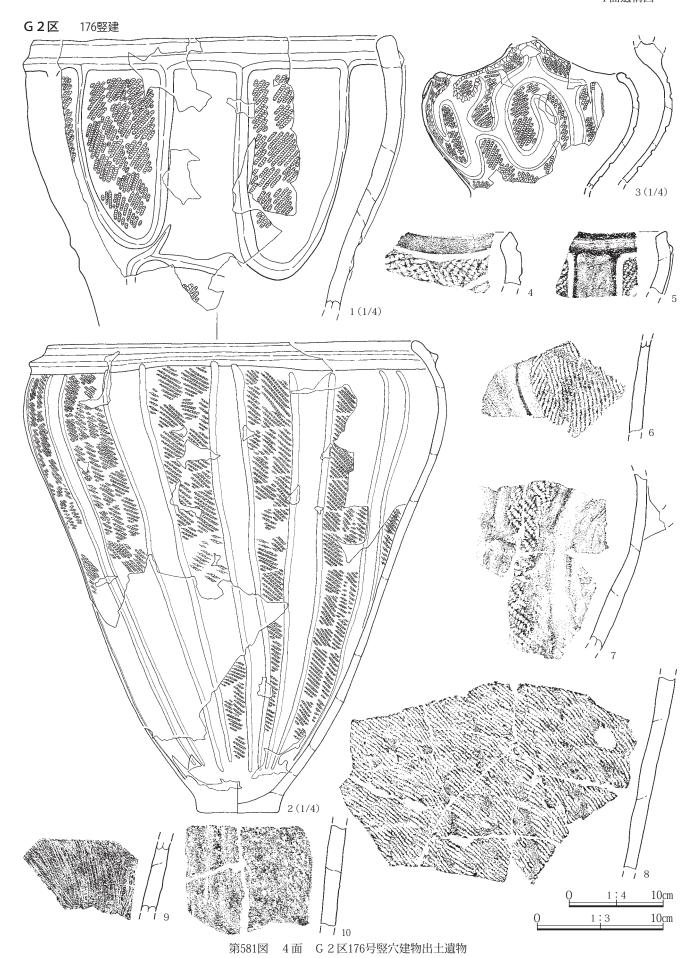
- 炉C-C'
  1 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊やや多い。径 1~2 mm程の橙色粒子わずか。径 1~3 mm程のAs-YP少し見られる。とても硬くしまっている。
  1′暗褐色土(10YR3/3) 焼土塊・焼土粒・粉わずかに混入。
  1″暗褐色土(10YR3/3) 焼土塊・焼土粒・粉少し混入(1層より多い)。
  2 明黄褐色土(10YR6/6) ロームに暗褐色土が混入。径 1~4 mm程の黄褐色軽石少し含む。非常に硬くしまる。



### 炉体土器

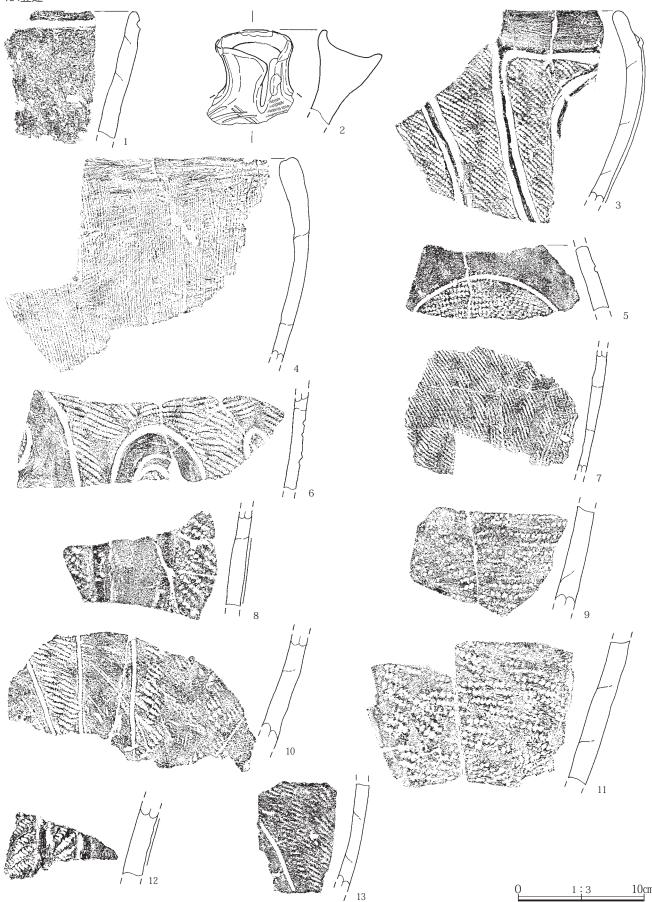


第580図 4面 H区183号竪穴建物、出土遺物

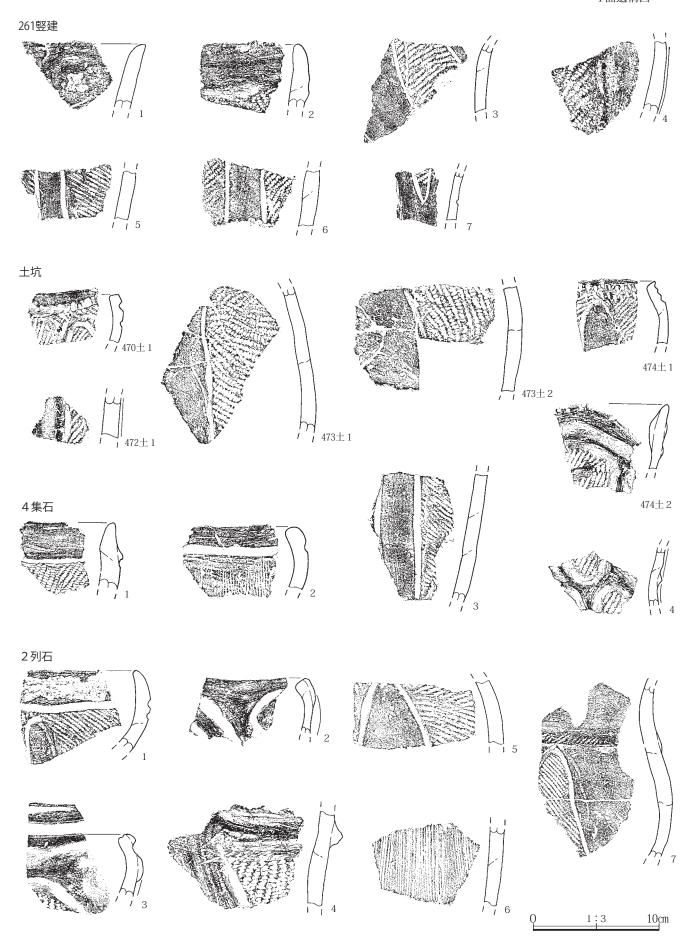


757

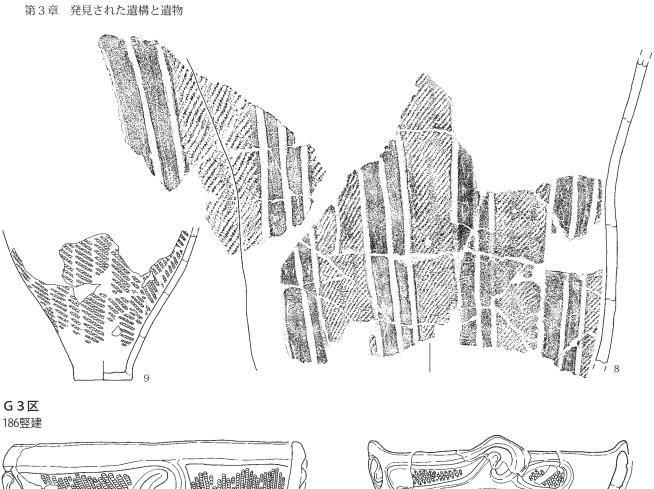
### 184竪建



第582図 4面 G2区184号竪穴建物出土遺物



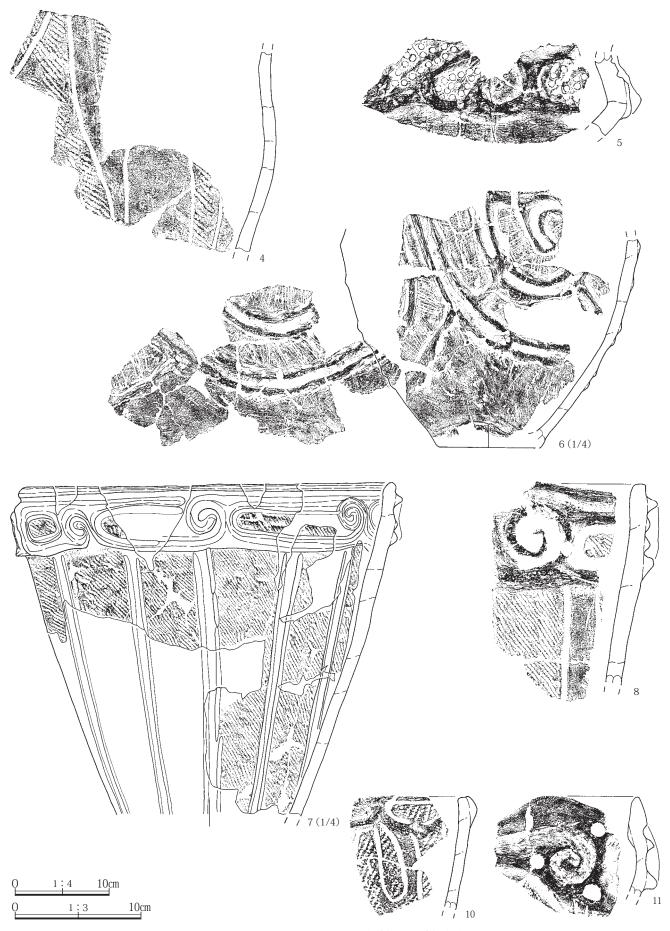
第583図 4面 G 2 区261号竪穴建物出土遺物、470・472~474号土坑、4 号集石、2 号列石出土遺物(1)



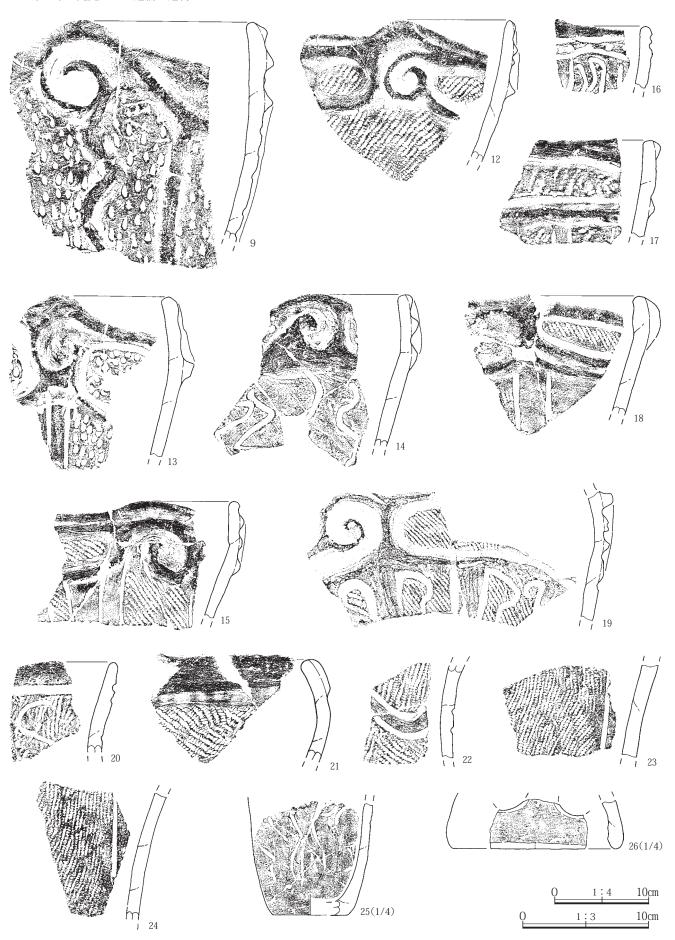
G 3 区 186要建

第584図 4面 G2区2号列石(2)、3区186号竪穴建物出土遺物(1)

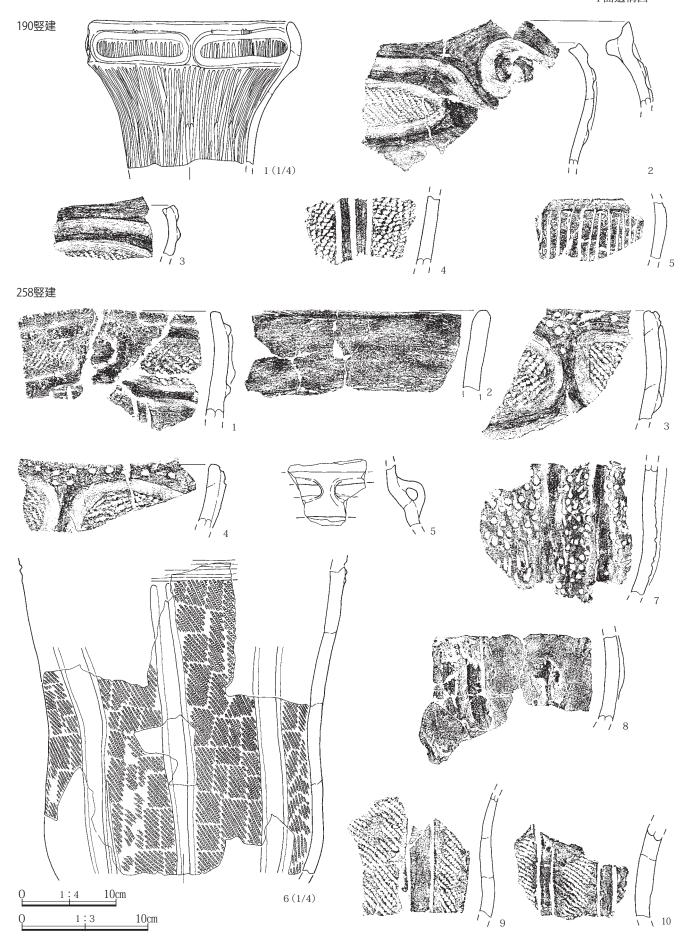
10cm



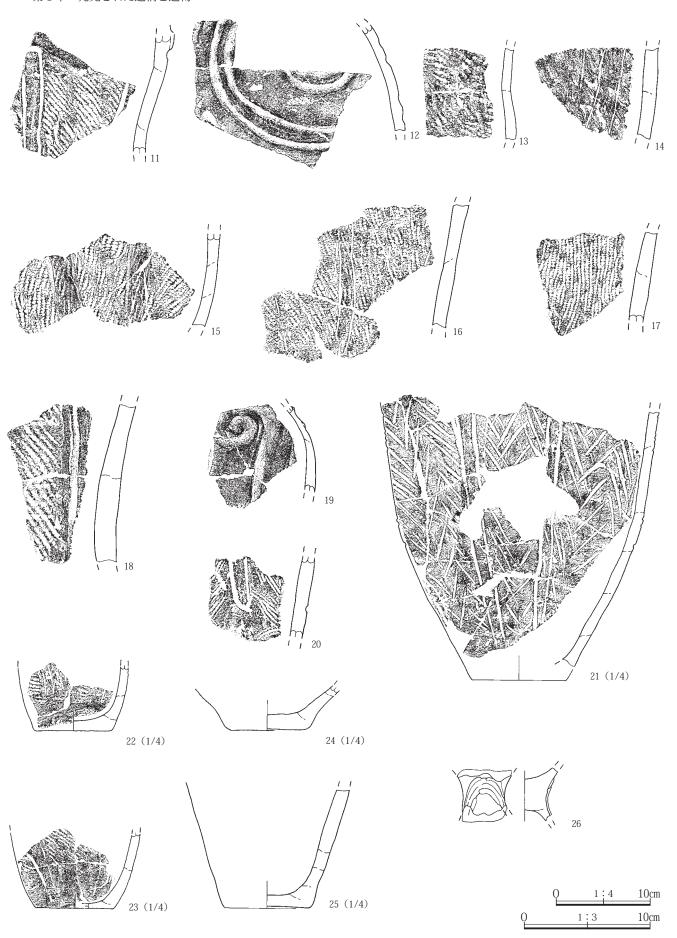
第585図 4面 G3区186号竪穴建物出土遺物(2)



第586図 4面 G3区186号竪穴建物出土遺物(3)



第587図 4面 G3区190号竪穴建物出土遺物・258号竪穴建物出土遺物(1)

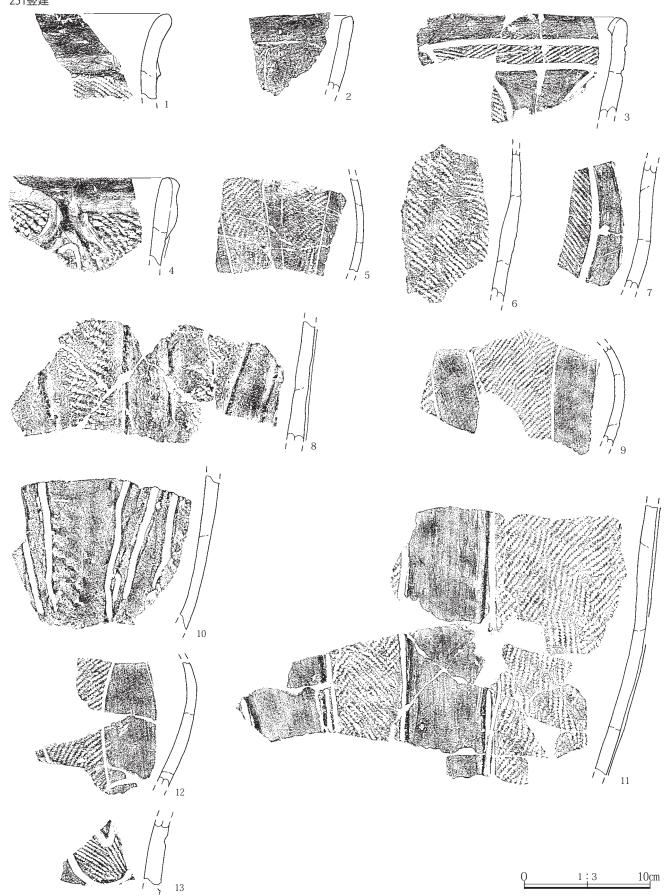


第588図 4面 G3区258号竪穴建物出土遺物(2)

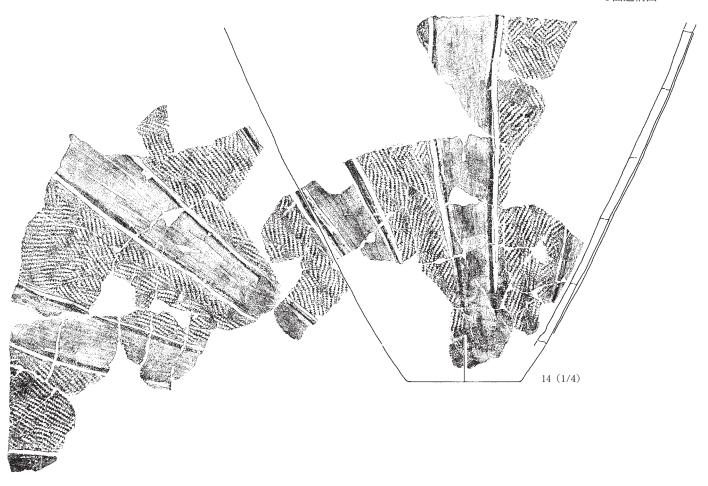
土坑 7 447±2 , 447±.1 ピット 1埋設土器 250ピ2 1 (1/4) 3集石 1列石 10cm 1;3 10cm

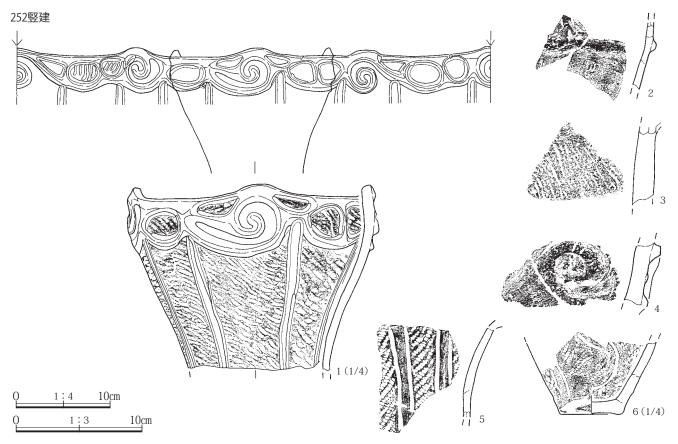
第589図 4面 G 3 区447号土坑、239・242・250・264号ピット、3 号集石、1 号埋設土器、1 号列石出土遺物

**G 4 区** 251竪建

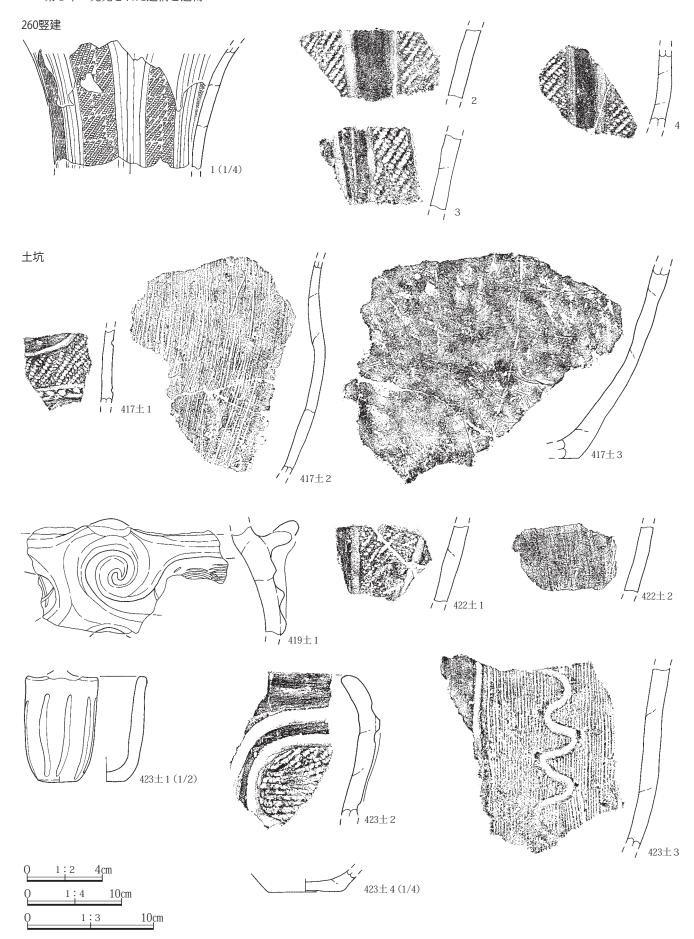


第590図 4面 G4区251号竪穴建物出土遺物(1)

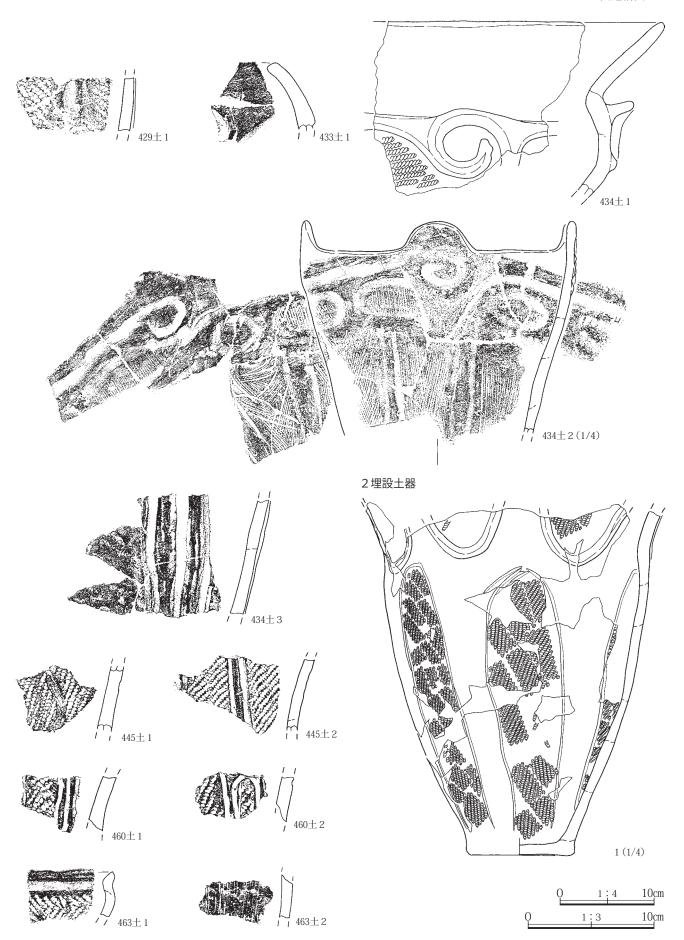




第591図 4面 G4区251号竪穴建物出土遺物(2)·252号竪穴建物出土遺物



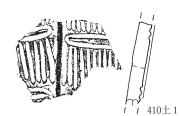
第592図 4面 G4区260号竪穴建物、土坑出土遺物(1)



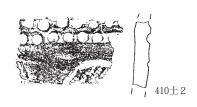
第593図 4面 G4区土坑出土遺物(2)、2号埋設土器出土遺物

## G 5区

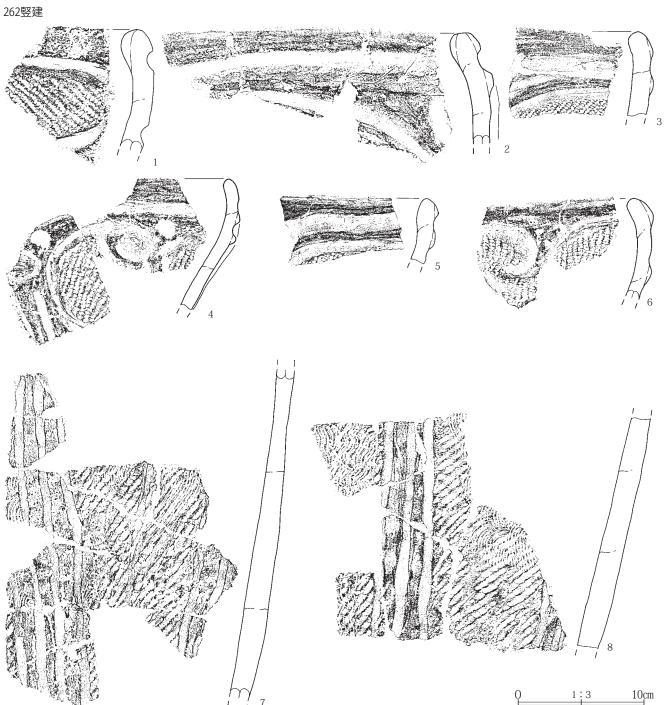
257竪建



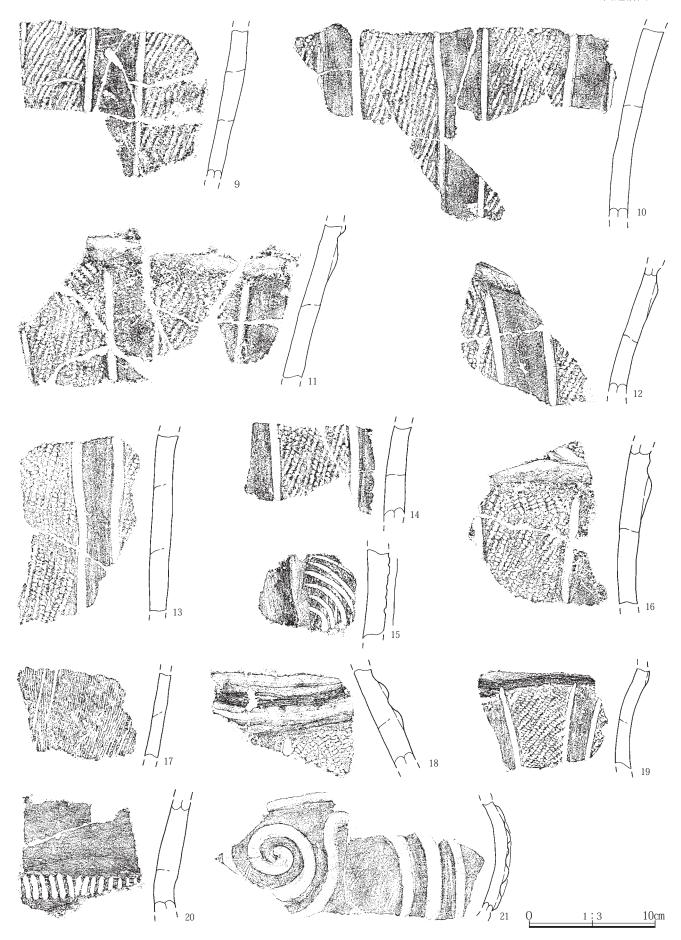
土坑



G 4 · 5区

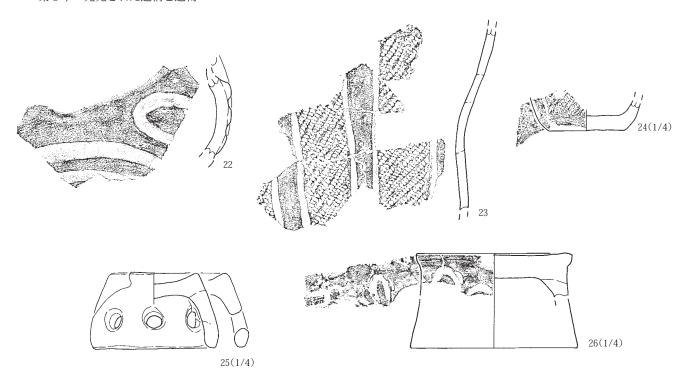


第594図 4面 G 5 区257号竪穴建物・410号土坑・G 4・5 区262号竪穴建物出土遺物(1)



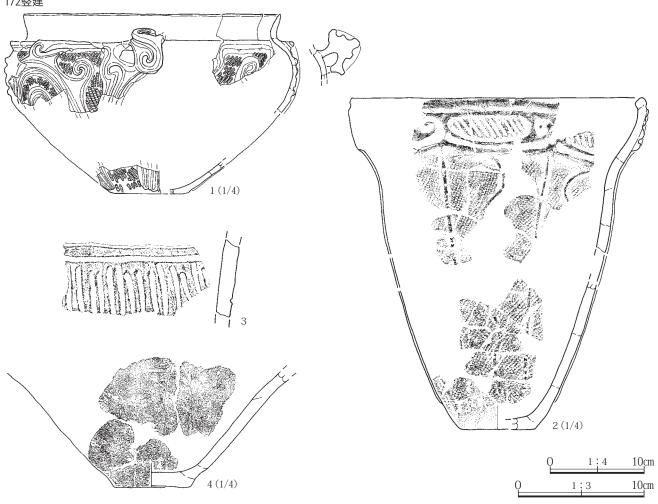
第595図 4面 G4·5区262号竪穴建物出土遺物(2)

### 第3章 発見された遺構と遺物



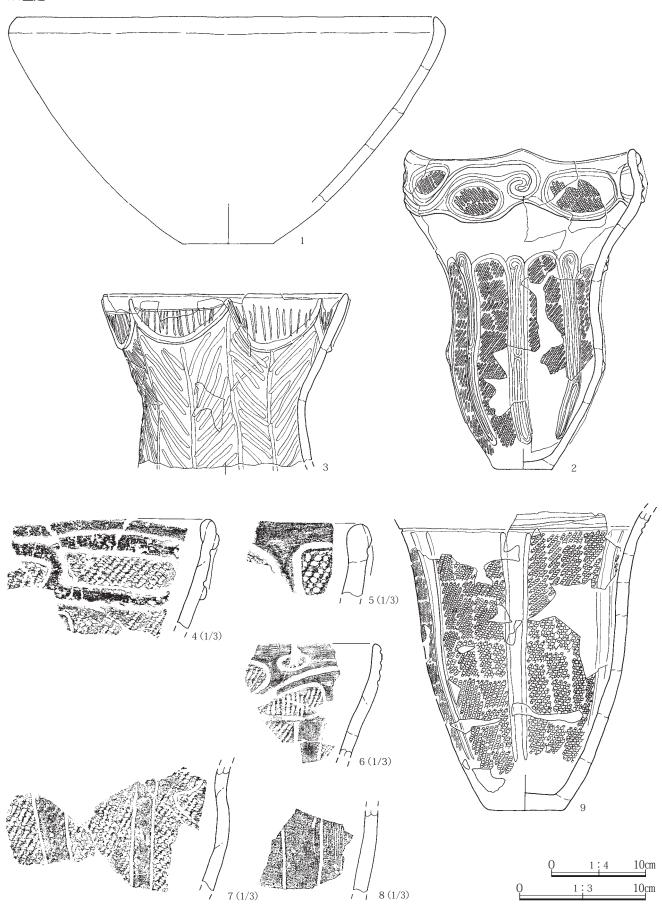
## H $\boxtimes$

## 172竪建



第596図 4面 G4・5区262号竪穴建物出土遺物(3)・H区172号竪穴建物出土遺物





第597図 4面 H区183号竪穴建物出土遺物

### 遺構外

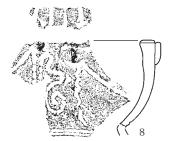
### 前期中葉



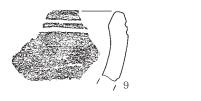
## 前期後葉

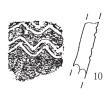


### 中期前葉

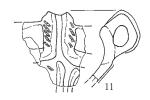


### 中期中葉古





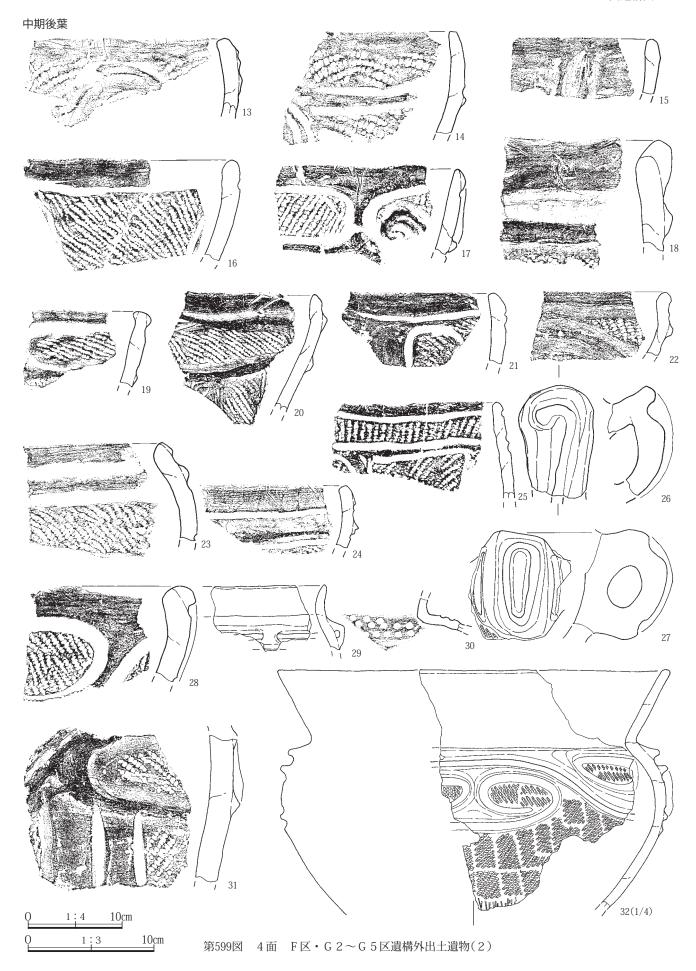
### 中期後葉古







第598図 4面 G1・G3・G4・H区遺構外出土遺物(1)

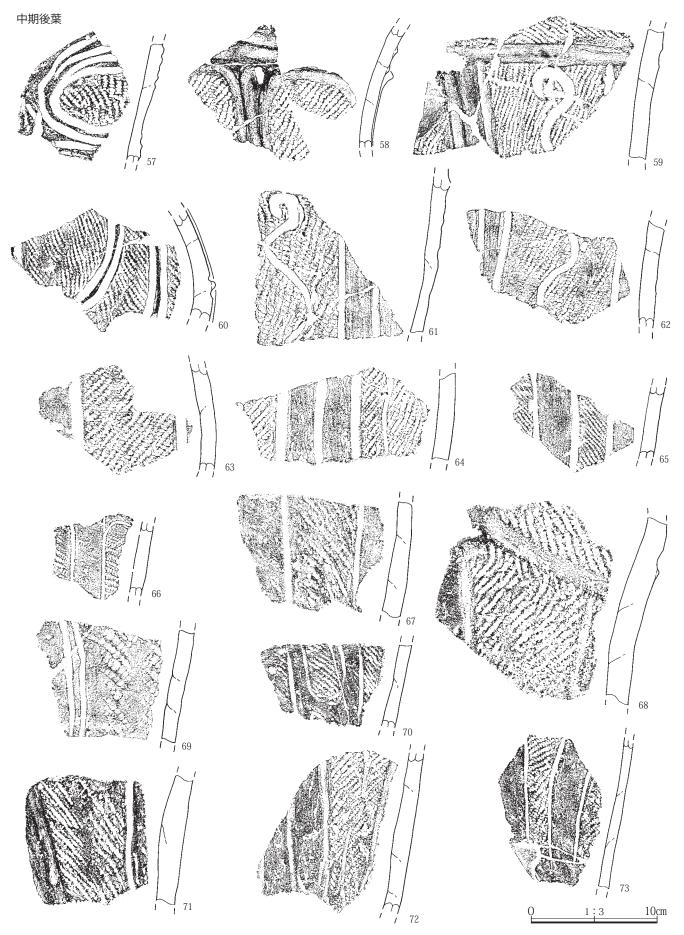


# 第3章 発見された遺構と遺物 中期後葉

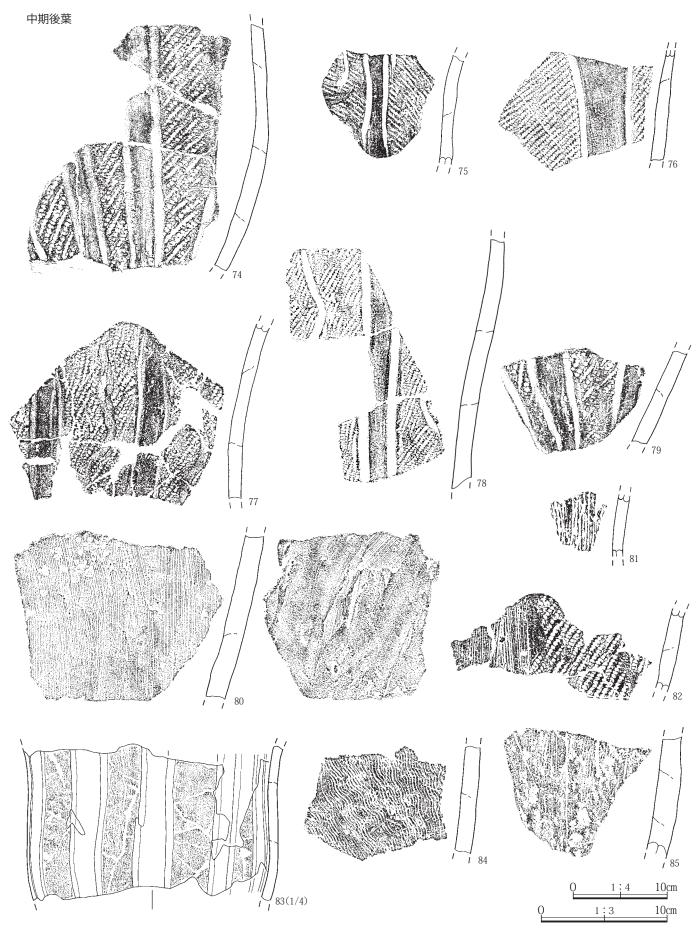
56(1/4)

0 1:3 10cm 第600図 4面 G1~G5区遺構外出土遺物(3)

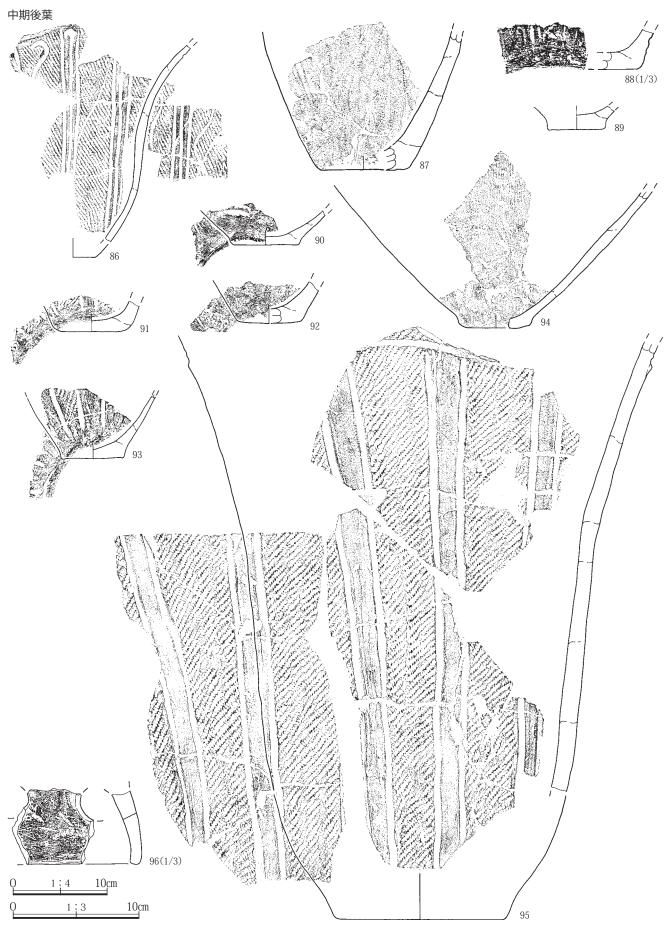
10cm



第601図 4面 G2~G4区遺構外出土遺物(4)

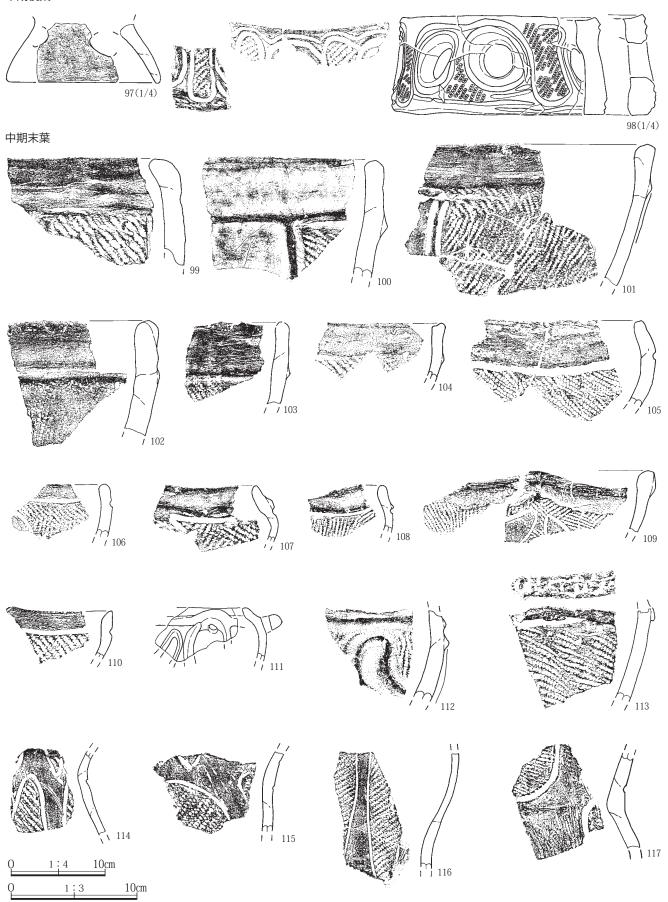


第602図 4面 G4区遺構外出土遺物(5)

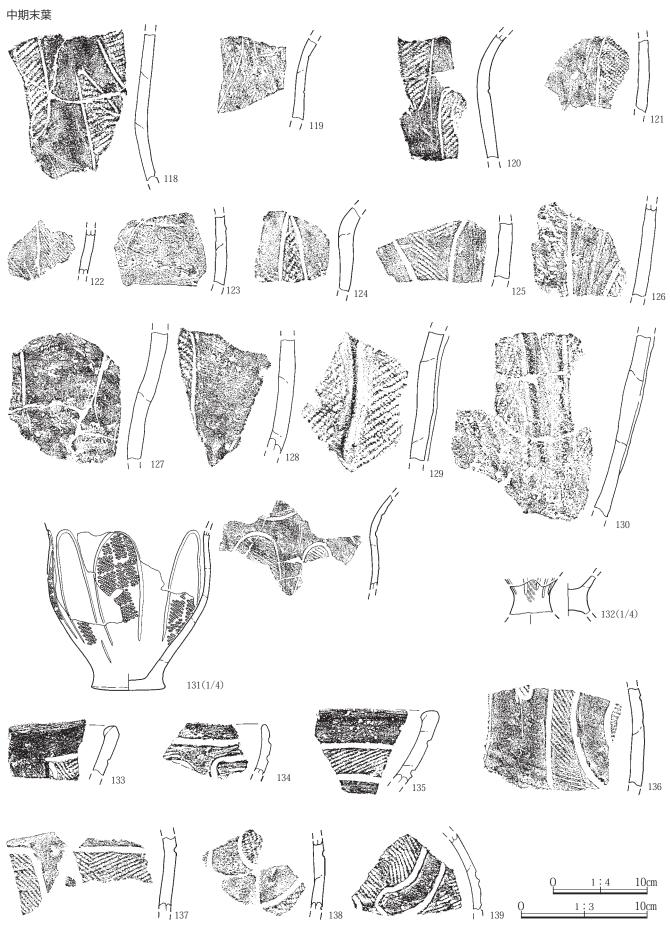


第603図 4面 G2~H区遺構外出土遺物(6)

### 中期後葉



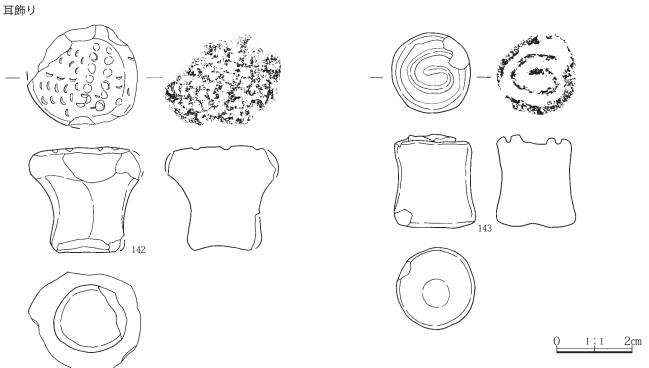
第604図 4面 G3~G5区遺構外出土遺物(7)



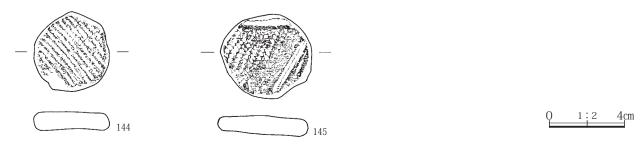
第605図 4面 G2~G5区遺構外出土遺物(8)

### 土製品

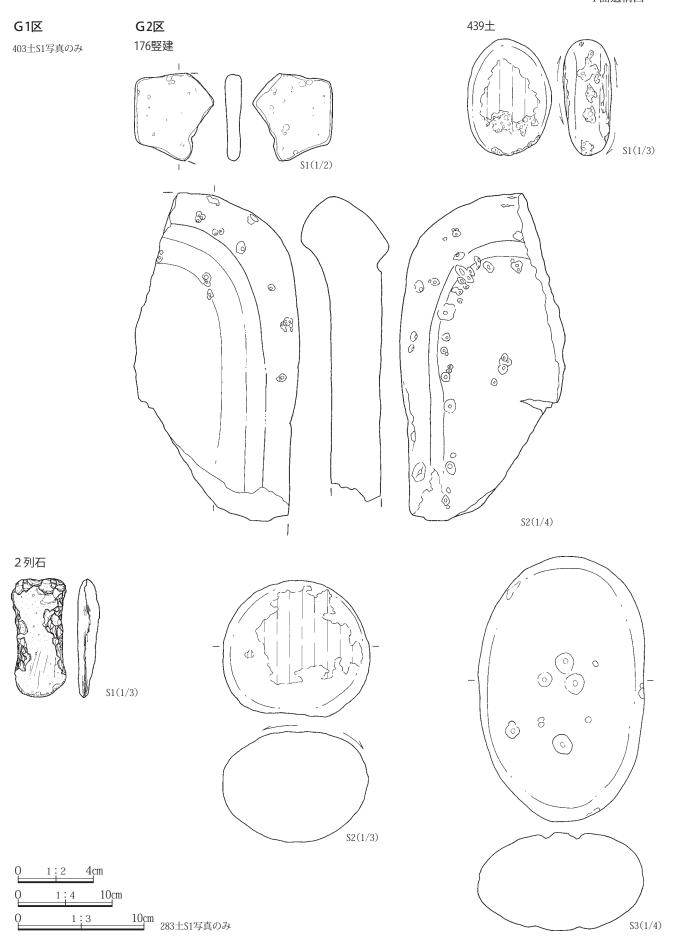




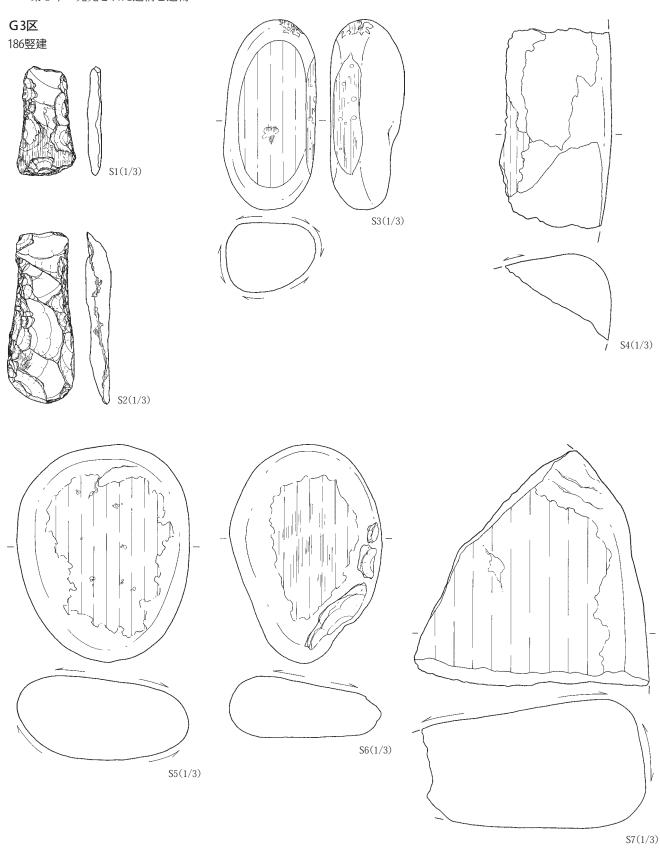
### 土製円板



第606図 4面 G5・H区遺構外出土遺物(9)

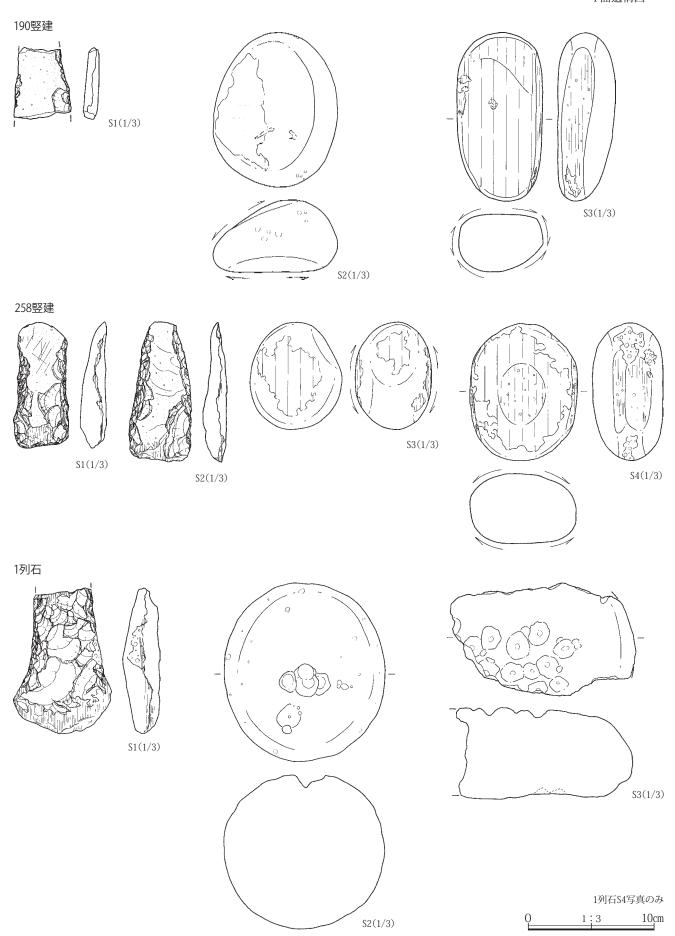


第607図 4面 G2区176号竪穴建物、439号土坑、2号列石出土石器



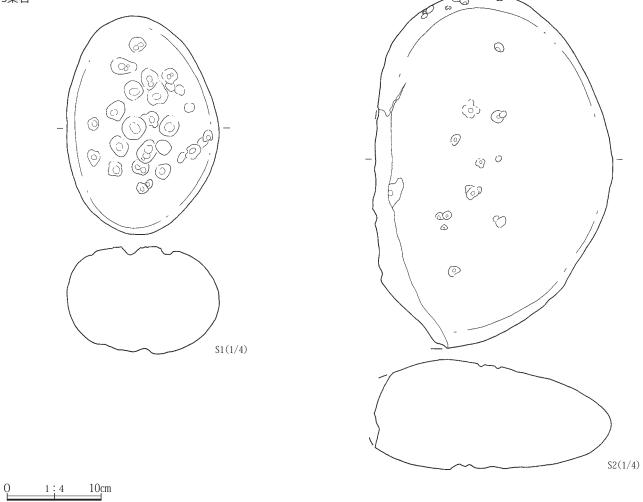
186竪建S8・S9・S10写真のみ 0 1:3 10cm

第608図 4面 G3区186号竪穴建物出土石器

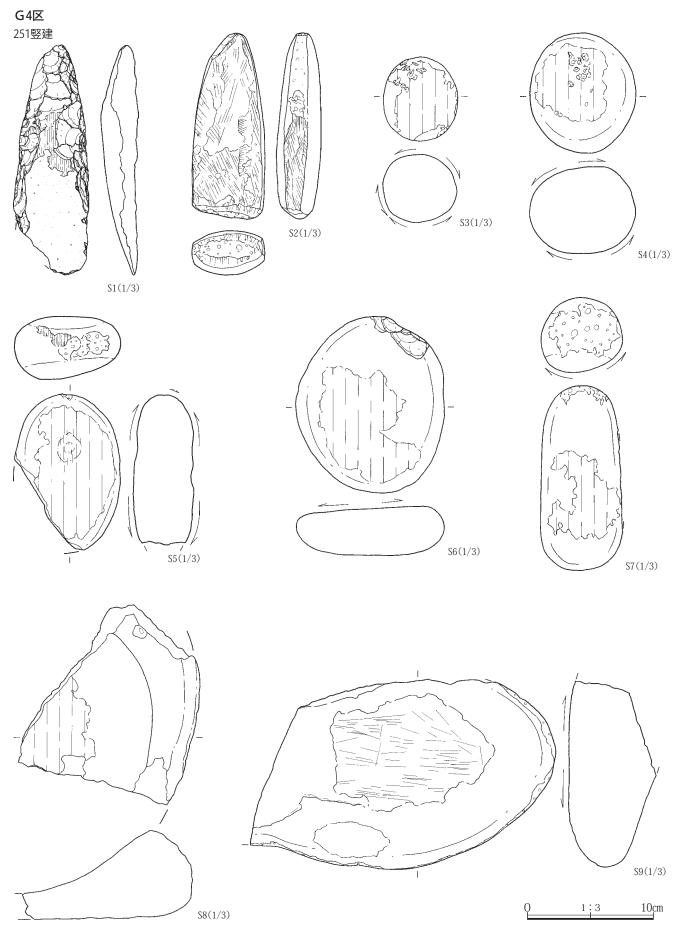


第609図 4面 G 3 区190·258号竪穴建物、1号列石出土石器

### 3集石

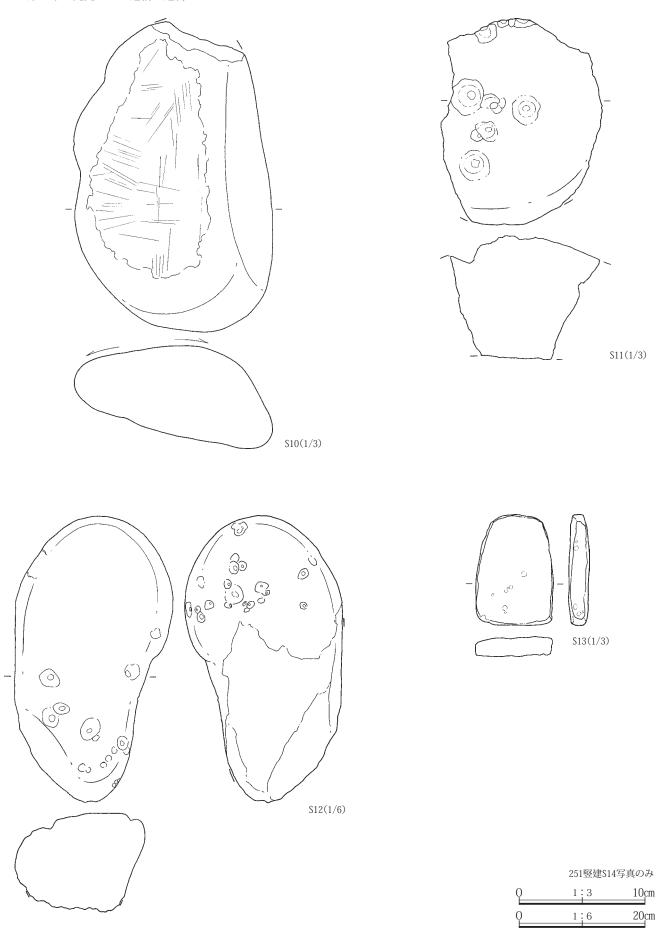


第610図 4面 G3区3号集石出土石器



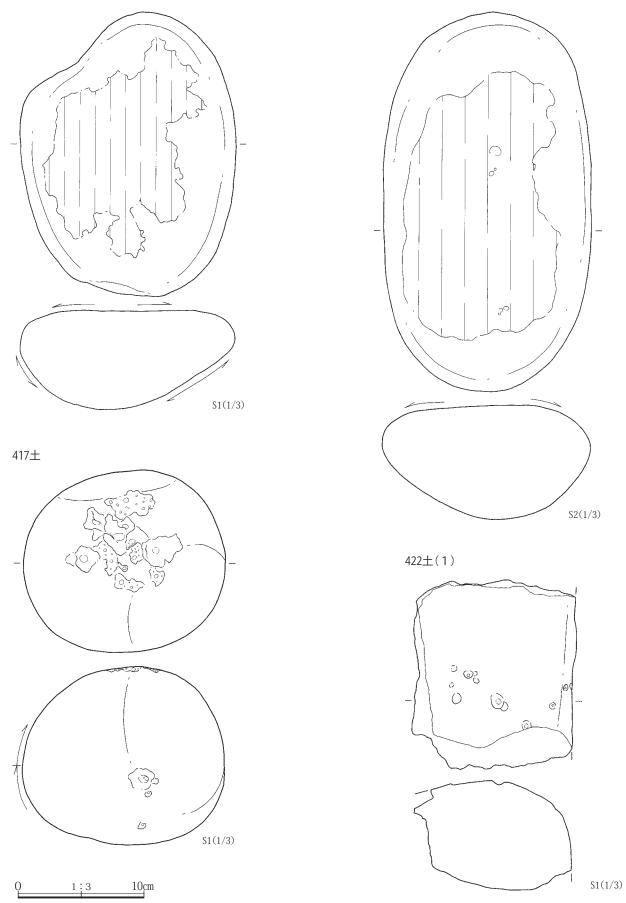
第611図 4面 G4区251号竪穴建物出土石器(1)

第3章 発見された遺構と遺物

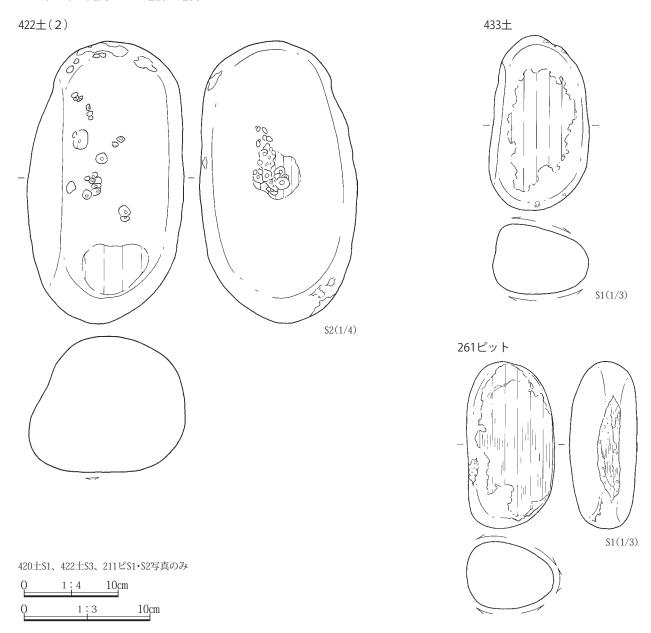


第612図 4面 G4区251号竪穴建物出土石器(2)

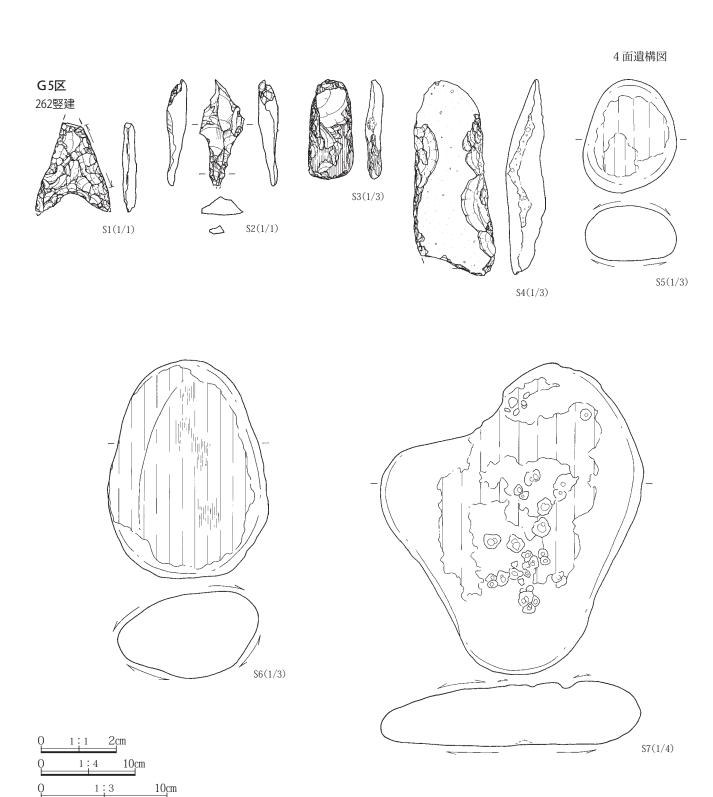
### 252竪建



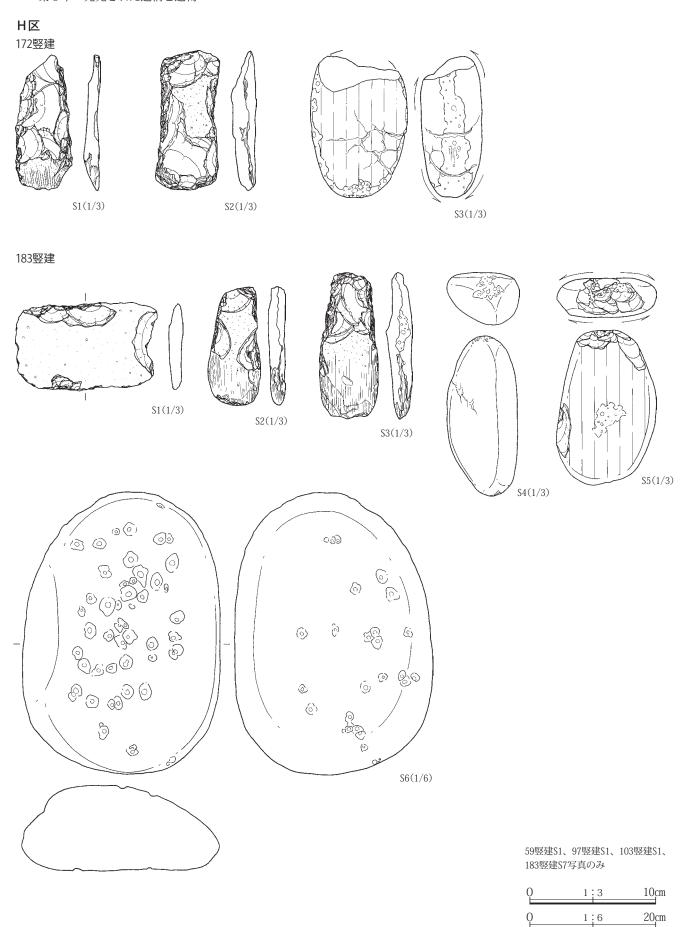
第613図 4面 G4区252号竪穴建物、417号土坑・422号土坑出土石器(1)



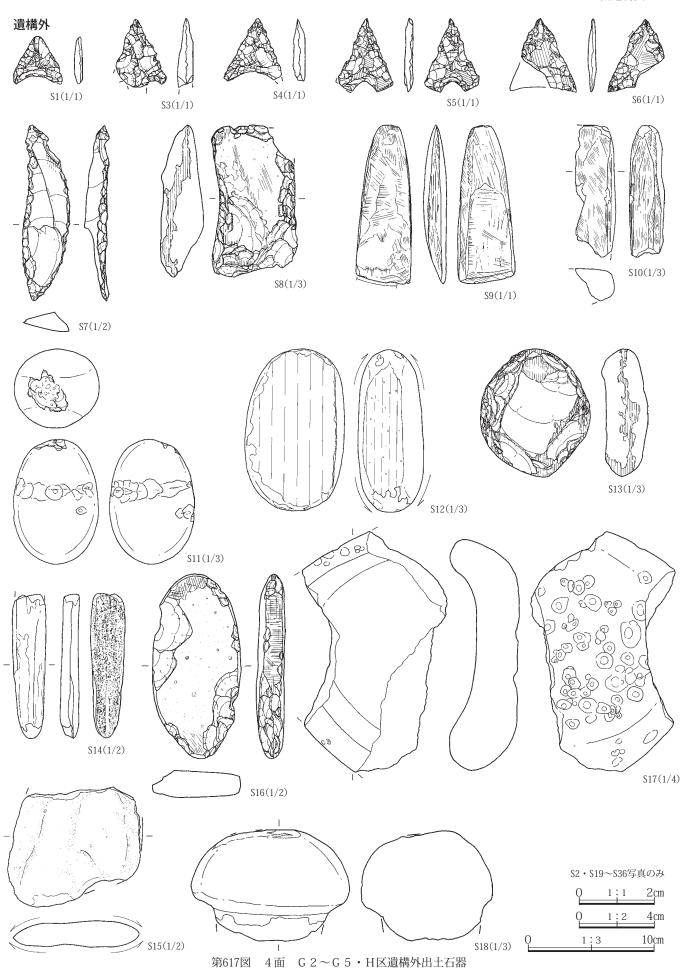
第614図 4面 G4区422号土坑(2)・433号土坑、261号ピット出土石器



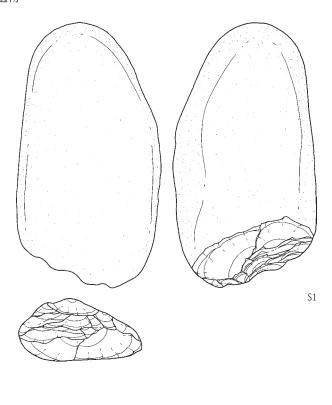
第615図 4面 G 5区262号竪穴建物出土石器

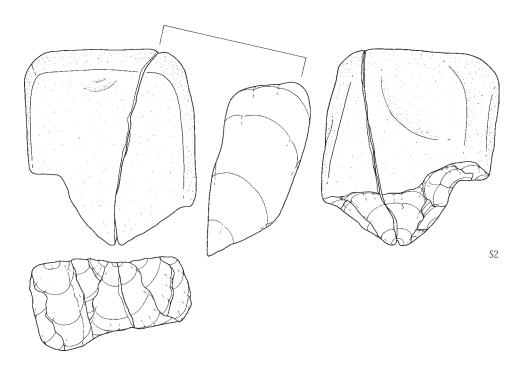


第616図 4面 H区172·183号竪穴建物出土石器



**F区** 旧石器

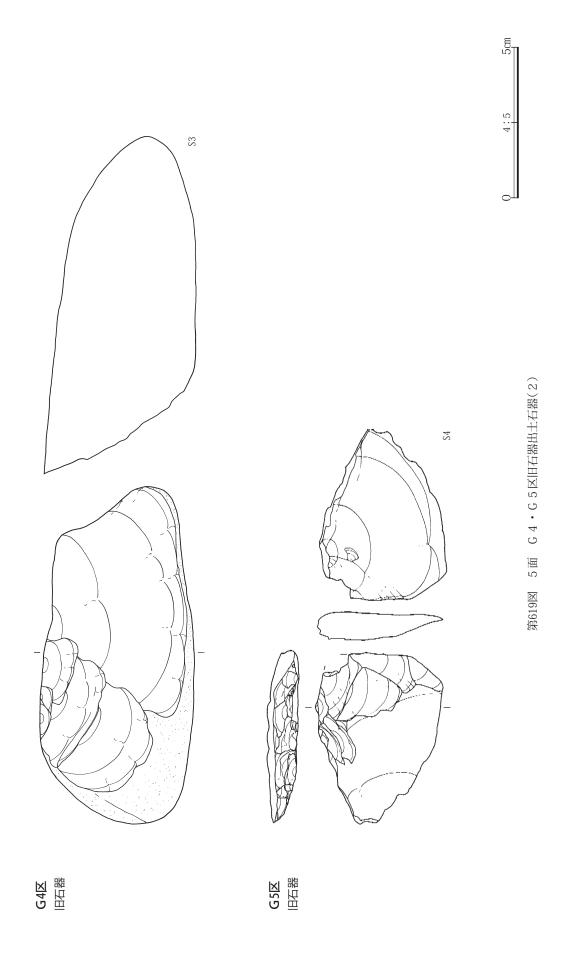




第618図 5面 F区旧石器出土石器(1)

5cm

1:2



# 第4章 自然科学分析

### 第1節 本郷鶴楽遺跡出土人骨分析

2018年に発掘調査を実施した65号墳の周堀の中で隣り合った軸を同じくする土坑墓が2基確認された。1号土坑墓は副葬品が無かったが、2号土坑墓は「井」の墨書がある10世紀代と考えられる須恵器椀などが出土した。それぞれの土坑内から人骨や人歯が検出された。それらの人骨・歯について、その部位や年齢・性別等を特定するために新潟医療福祉大学自然人類学研究所奈良貴史・辰巳晃司・佐伯史子各氏に依頼した。

その結果は、下記のとおりである。

### 本郷鶴楽遺跡から出土した人骨の人類学的報告

### 1. はじめに

群馬県高崎市に所在する本郷鶴楽遺跡の2018年発掘調査において、中世以前に相当する土坑より少なくとも2体の人骨が出土した。本稿はそれらの人類学的報告である。

### 2. 方法

年齢は歯の形成・萌出状況(Smith, 1991; Ubelaker, 1999)に基づいて推定し、性別はBuikstra and Ubelaker (1994)に基づいて判断した。

歯の咬耗度はMolnar(1971)の8段階の分類、歯の齲蝕はWHO(2013)の基準、エナメル質減形成の有無は山本(1988)の基準に従った。同定できた歯は歯式に表記した。歯式の水平線は上下顎の境界、垂直線は左右の境界を表し、向かって左側が個体の右側に対応する。歯式に対応する上下の数字はMolnar(1971)の咬耗度を示す。

### 3. 人骨所見

(1)1号土坑墓人骨(写真図版1-1)

【遺存状況】遺存状態は不良である。右大腿骨骨幹部が確

認できる他は、歯が残存する。上顎は左側切歯〜第2小臼歯、右側切歯・犬歯、右第2小臼歯〜第2大臼歯、下顎は左側切歯〜第2大臼歯、右犬歯〜第2小臼歯・第2大臼歯がそれぞれ1本ずつ、計19本認められる。すべて遊離歯である。歯式は以下の通りである。

4	6	4		4	3	3	4	4	4		
M2	M1	P2		C	I2	I2	C	P1	P2		
110		DO	D.							3.64	3.60
М2		P2	Ρ1	C		I2	C	P1	P2	M1	M2

歯の齲蝕は認められなかった。またエナメル質減形成の有無については、歯の表面の状態が不良のため不明である。

【年齢】上顎右第2大臼歯および下顎左第2大臼歯の歯根が完成していることから12歳以上である。さらに大臼歯部の咬耗状態は、上顎右第1大臼歯が6度、下顎左第1大臼歯が5度、上下顎右第2大臼歯が4度で著しく進行している。以上より、少なくとも成人段階には達していたと考えられるが、詳細は不明である。

【性別】大腿骨骨幹部が華奢なことから女性的な印象を受けるが、性別を明確に判断できる部位が遺存していないため不明である。

### (2)2号土坑墓人骨(写真図版1-2)

【遺存状況】遺存状態は不良である。歯のみ遺存する。上 顎は左第1または第2大臼歯が1本、左右不明の第1ま たは第2小臼歯が2本、下顎は左第1または第2大臼歯が1本、右第1または第2大臼歯が1本の計5本確認さ れた。すべて遊離歯である。歯の咬耗は、下顎左第1ま たは第2大臼歯がMolnarの2度、他の4本はいずれも 同4度を示す。齲蝕はいずれの歯にも認められなかった。 エナメル質減形成の有無については、歯の表面の状態が 不良のため不明である。

【年齢】上顎左右不明の第1または第2小臼歯に咬耗が認められることから、少なくとも12歳前後には達していたと考えられるが、詳細は不明である。

【性別】性別を明確に判断できる部位が出土していないため不明である。

### 4. まとめ

群馬県高崎市本郷鶴楽遺跡の2019年発掘調査において、中世以前に相当する土坑より少なくとも2体の人骨が出土した。人骨の年齢・性別は、成人・女性?が1体、12歳以上・性別不明が1体である。いずれの個体ともに齲蝕は確認されず、エナメル質減形成の有無については歯の表面の状態が不良のため不明である。

### 謝辞

本遺跡出土人骨の整理作業にあたり、新潟医療福祉大 学学生、吉田佳笑氏の協力を得た。記して深謝の意を表 したい。

### 引用文献

Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for data collection from human skeletal remains. Arkansas Archaeological Survey Research Series, 44, Fayetteville, Arkansas.

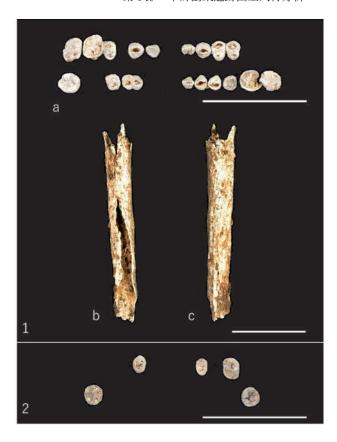
Molnar S. (1971) Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology, 34: 175–190.

Smith B.H. (1991) Standards of human tooth formation and dental age assessment. In: Kelly M.A. and Larsen C.S. (eds.), Advances in Dental Anthropology. Wiley—Liss, New York, pp. 143–168.

Ubelaker D.H. (1999) Human Skeletal Remains, 3rd edition. Taraxacum, Washington DC.

WHO (World Health Organization) (2013) Oral Health Surveys: Basic Methods, 5th edition. Geneva.

山本美代子(1988)日本人古人骨永久歯のエナメル質減形成,人類学雑誌, 96: 417-433.



### 写真図版1

- 1.1号土坑墓人骨:a 歯 b 同右大腿骨前面 c 同右大腿骨 後面。
- 2.2号土坑墓人骨: 歯. スケールバーは5cm

# 第5章 調査成果のまとめ

### 1 平安時代の経筒について

本郷鶴楽遺跡では1点(第620図)出土したが、群馬県 内では他に平安時代後期の経筒は、藤岡市本郷別所の 経塚から銅製のものが2組出土している。堂山古墳(胴 塚)に隣接する首塚と推定されている(唐澤至朗1988「群 馬の経塚―本県ゆかりの経塚と出土品―」群馬県立歴史 博物館紀要第19号)。2組いずれも平蓋で筒身部と底部 を一度に鋳造する一鋳式のものである。本遺跡の経筒に 筒身はなく、蓋のみの出土である。蓋の縁の凹凸は花弁 を表現したもので、かなり数は多いものの蓮弁文をなし ているものと思われる。これだけ花弁数の多い蓋は時代 が下がると似たものはあるが、平安時代ではあまり見か けたことがなく、類例は少ないのではないかと思われ る。しかし、こうした多弁の文様は中国・宋時代の青白 磁合子にはよく見られるもので、花皿などにも見受けら れるものである。本遺跡出土の蓋は外縁が1/4程欠損し ているが、蓋の中心の鈕の部分も欠けているものと思わ れる。しかし、その上面はやや丸味を持ち滑らかになっ ているので、欠けた後に研磨された可能性が高いと考え られる。鈕の形態には「宝珠形」「乳頭形」「塔形」「相輪 形」などがあるが、残存部分から推定すると欠ける以前 は「相輪形」をしていたものと思われる。欠けた部分を研 磨することで短く整えて「宝珠形」の代用としていた可能 性も考えられる。経筒は単に写経した経典を収める入れ 物というだけでなく、鈕の形や銘文などに「宝塔」の文字 が見られることからも塔を意識して作られたものである ことが知られている。その経筒を納めた経塚は末法思想 の影響を受けて起こったものと考えられている。写経さ れた経典を経筒に収め、さらに石製や陶製の外容器に納 め副葬品や除湿剤とともに石室内に安置することが多い ものである。最古の経塚の例は藤原道長が大和国吉野山 の金峯山(現・山上ヶ岳)に直接赴いて自身で書き写した 経典を金銅筒に入れて埋めた金峯山経塚であり、それは 寛弘4(1007)年のことであった。これは江戸時代の元禄 4(1691)年に発見され、現在はその時の遺物は京都国立 博物館に収蔵されている。藤原道長が経塚の造営の最初であり、それを切っ掛けとして同様な事が行われたとすれば他の例もどう早く見積もっても11世紀前半以降である。しかし、京都の北部、下級貴族清原信俊が埋納した鞍馬寺経塚、粉河産土神社1号経塚(三宅敏之1963「平安時代埋経供養の一形態ー清原信俊の埋経を中心として」『日本歴史』181)や花背別所経塚などの造営は道長の埋納からさらに100年以上経た12世紀代であることが分かっている。

藤原道長の金銅経筒は高さ35.8cm、口径15.7cmであり、 それに比べ藤岡市本郷別所の経塚の銅経筒1は高さ22.4 cm、口径11.8cm、銅経筒2は23.3cm、口径11.8cmで高さ も口径も小さい。本郷鶴楽遺跡の蓋は口径9.7cmでさら に小さい。蓋の縁は花弁状の凹凸があり、さらに鈕部分 が相輪になっていたと考えられ、装飾性が高いことが認 められる。道長の経筒や別所の経塚の経筒は平蓋であり、 金銅製で当時は金色に輝いていたかもしれないが、筒は 円筒形で形そのものに装飾性は感じられない。むしろ今 の茶筒の形態に近いシンプルなものと言える。古い形態 のものは形にはあまり装飾性はないのではないかと考え られる。そうであるとすれば、本郷鶴楽遺跡例のように 縁や鈕に装飾性のあるものは新しい要素と捉えることが できるのではなかろうか。京の都で経塚の造営が盛んに なるのが道長の埋納から100年以上経た12世紀代だとす れば京から遠く離れた上野国でも同様なことが行われた のはやはり12世紀代以降と考えるが妥当ではないかと思 われる。

村木二郎1998「<論説>近畿の経塚」史林81 (2)京都 大学や村木二郎2003「東日本の経塚の地域性」国立歴史 民俗博物館研究報告第108集によれば、近畿や九州の銅 鋳製経筒は筒身部に別作りの底板を嵌め込む入底式がほ とんどで、近畿系経筒、平蓋式経筒もすべて同じ入底式 であるということである。東日本、特に関東地方では筒 身部と底部を別作りにせず一度に鋳造する一鋳式経筒が 多く見られる。近畿の経筒の中では播州の経筒である三 段笠蓋式にみられるほかはわずかであり、中国・四国に 若干、九州ではほとんど見られない。しかもほとんどが 外容器を使用しない直納式である。関東の経塚は近畿の 経筒をそのまま模倣しようとせず、埋納法も他ではあま り見られない直納ー無室式がしばしば見られる。日本海 側は船のルートがあり、都の文化が伝わりやすかったと いうこともあろうが、関東地方は経塚という都の文化を 在地で消化し、東日本地域の中でも特徴的な経塚文化を 形成した場所であるということができる。

最後に本郷鶴楽遺跡の経筒の蓋についてまとめておきたい。多弁の蓮華文でその装飾性からも新しいものであり、12世紀代のものではないかと考えられる。県内では他に藤岡市本郷の別所の経塚から銅製のものが2組出土しているのみであり、比較検討資料としてはあまりに少ない。さらに鎌倉時代の経筒・経塚の出土例は県内にはなく、室町時代になると6例と増加するものの決して多いとは言えない。平安時代から鎌倉時代にどのように変化するのか、時代の流れを含め、今後の資料の増加と研究に期待したい。

### 2 小神像について

ここでは本遺跡で出土したような県内出土の平安時代 の銅製小神像について扱うことにしたい。神像は神仏習 合・本地垂迹説などの思想や神像よりも古くからあった 仏像の影響を受けて造られるようになったものであり、 材質や製作技法、外観も含め、様々な類似点が認められ るので、敢えて同じカテゴリーの中で扱うこととしたい。 以下に本郷鶴楽遺跡例をはじめ県内の他遺跡出土例の特 徴を確認しながら見て行きたい。(第620~628図1~11) 1 本郷鶴楽遺跡ではG5区204号竪穴建物から小男神 立像が1点(柱)出土した。北壁手前で頭を北北東に向け た俯せ状態で出土した。器面はあまり荒れておらず、被 熱していないものと考えられる。金色の部分は残ってお らず、金鍍金や金箔の痕跡は確認できなかった。銅製 で全体高が9.7cm、重量221.7gと県内出土例では現段階 では最大重量のものである。台を入れず像高だけで比較 すれば最も背の高い像である。国分寺中間地域遺跡例の 31.6gと重量で比較すると7倍になる。頭部に折烏帽子 状の宝冠を被り、両手は臂を曲げ胸の前で合わせている が、国分寺中間地域遺跡例のように中央に笏状の突出物 は表現されていない。左肩から右腰にかけて条帛を掛け ている。国分寺中間地域遺跡例、剣崎稲荷塚遺跡2号竪穴建物例などに比べて顔の表現は全体として厳しい印象となっている。耳は大きめで眉はかなり吊り上がり、眼尻も上がり、厳しい表現となっている。肩はいかり肩で、衣の袖は腕の下で襞状の表現はない。お尻がかなり外側に迫り出しており、他の神像には無い姿勢となっている。腰から足下にかけて前掛け状の布が垂れ下がっている。足元は2つに割れており、袴を着けているものと思われる。足は袴に隠れて明確には表現されていないが、沓を履いているものと思われる。台座は正面側がやや丸く背面側は直線的の隅丸方形を呈する。下面は凹凸があり、湯口の痕跡は明確ではない。製作時期は同一竪穴建物から出土した土器などから10世紀後半と考えられる。

- 2 国分寺中間地域遺跡((財)群馬県埋蔵文化財調査事 業団1988『上野国分僧寺・尼寺中間地域』)ではD区28号 住付近から小男神立像が1点(柱)出土した。全体に錆化 が認められる。全体に黒く煤けた状態で火中している可 能性がある。頭部に折烏帽子状の宝冠を被り、両手は胸 の前で合わせ、その中央で突出物が表現されている。そ の突出物は笏と考えられる。肩はややなで肩で、判然と しない部分もあるが、実測図からは左肩から斜めに条帛 を掛けているように見える。衣の袖は腕の下で5段の襞 状に表現されている。顔面は精緻には表出されておらず、 顔の左右の表現はやや違うように見える。脚部は裳の下 に輪郭を表出しており沓を履いているものと思われる。 背面側では、腰部に帯による裳のたるみが表出されてい る。金色の部分は、正面側の右袖部にややまとまってお り、全体で所々に残存する。それは鍍金と考えられ、水 銀アマルガム法によるものと推定される。側面にバリが 残存しているのが見えるので鋳造は、前後合わせ型鋳造 と考えられる。内型内に一辺4mm程の四角柱状の鉄芯を 入れており、それが台座裏面に認められる。製作時期は 11世紀前半?と考えられる。
- 3 有馬遺跡((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『有 馬遺跡 I 奈良・平安時代編』)では平安時代遺構確認精査 中に81号住居跡付近より仏像が 1 点(躯)出土した。関根 細ケ沢遺跡例と同様に頭には宝冠を被り、左肩から右腰 にかけて布帛を掛けている可能性がある。報告書では天 部形としているが、観音菩薩で三尊像の脇侍の可能性も 否定できない。吉井町辛科神社北で出土した天部立像に

類似している。右手は屈臂し、左手は垂下しているもの と思われるが、手の形が不明であり、判然としない。衣 文線は右上から左下にかけて斜めに流れているように見 える。下半身は風化が著しく判然としない。足先も出て いるものと思われるが、同様である。身体は反っている。 全体に薄い金色が認められるが、特に顔面や体部前面に は良く残存している。化学分析の結果、水銀はほとんど 見えないので水銀アマルガム法による鍍金ではなく、金 箔押しの可能性が高い(平尾良光1989「非破壊蛍光X線 分析法による有馬遺跡出土天部形立像 群馬県教育委員 会·(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『有馬遺跡 I 奈良・平安時代編』)。背中・足部裏面中央に2カ所の突 起が認められる。光背を止めた枘と報告されており、天 部であるならばその光背は拳身光(火焔光)と考えられ る。側面に合わせ目の線状の痕跡が確認できるので、鋳 造は国分寺中間地域遺跡同様に前後合わせ型鋳造と思わ れる。台座は三重座で、円形の華、敷茄子、下框の三部 からなるものと思われるが、間の敷茄子部分が薄く二重 のようにも見える。台座と本体とも一鋳で造られ、製作 時期は10世紀前半中頃と考えられる。

4 有馬条里遺跡((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『有馬条里遺跡Ⅱ古墳時代~平安時代の集落址の調 査』)では2点(躯)の小像が出土した。32号溝から天王立 像が1点(躯)、218号土坑から地蔵菩薩立像が1点(躯) 出土している。天王立像は頭部に兜(頂部に宝珠形の飾 りを付け、両耳の個所にはそれを覆う形の造り出し?) を被り、目を開き、開口しないが、上歯を剥き出しにす る瞋怒相を表す。体部に甲(襟甲、鰭袖、腰帯、前楯)を 付け、肘の後方に大袖を翻らす。肩は普通肩で、直立し ており反りはない。袴を着け、両足に脚絆を付け、沓を 履く。右手を屈臂し、手を右腰にあて、握った手の上面 に別製持物挿入用の丸い穴が残存するので何かを持って いたものと考えられる。左手は垂下し、別製の柄のよう なもの(剣?)を持っていた。腰を少し左に捻り、岩座上 に立つ。岩座の下に丸枘を造り出す。さてこの像である が、頭頂部の形(兜?)や左手に持っているものが剣?だ とすると右手に持っていたものは何かという疑問が湧い て来る。不動明王や天部の中には剣を持っているものが 多く認められるが、右手に握っている例が多い。左手に 握っているものが剣だとすると右手には三叉戟(鉾)の可 能性がある。また真っ直ぐ正面は向かずにやや腰を捻る像が多い。目を開き、開口しないが、上歯を剥き出しにする瞋怒相を表すことなど、これらの全ての条件を満たすものを天部の中から探すと持国天と報告されているが、増長天の可能性もあるのではないかと思われる。製作時期は11世紀頃と考えられる。

5 地蔵菩薩立像は頭部・顔面などの上半部が火中により一皮むけた状態なので不明な点もあるが、頭頂部の丸い形状や如来形の着衣などから、ほぼ間違いないものと思われる。地蔵菩薩だとすると頭部は元来、円頂の比丘形で、体部上半身に偏衫を付け、大衣を偏袒右肩に纏う。肩はなで肩となっている。下半身には裳を着ける。左手を屈臂し、右手は垂下する。左手に宝珠?右手はまったく不明であるが、地蔵菩薩だとすると錫杖を持っていた可能性がある。両足を揃えて立つ。体部背面中央上方に枘があり、光背用と考えられる。台座は三重座で、円形の華、敷茄子、下框の三部からなる。側面にバリが残るので、前後を合わせる前後合わせ型鋳造と考えられる。製作時期は11世紀頃と考えられる。

剣崎稲荷塚遺跡(高崎市遺跡調査会1998『剣崎稲荷塚 遺跡』宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)では2 点(柱)の小男神像(6・7)が出土した。

- 6 小男神立像 1 点(柱) はやや大形で顔に金色が良く 残っていたものであり、もう 1 点はやや小ぶりのもので あり、顔の金色はあまり残っていないものである。背の 高い像は、頭に折烏帽子状の冠を被り、上半身に衣を着 け左肩から右腰下に布帛を掛け、下半身には袴を着け、 裾はやや広がっているものの、足には沓を履いている。 肩はなで肩で、方形の台座に腰はやや反り気味で立って いる。両手は屈臂して、右手中央には円形の空洞があり、 何かを持っていた可能性もある。左手の空洞はかなり小 さく、何かを持っていた可能性は低いものと考えられる。 腰帯が前面には良く見え、縛った紐の余りが前に垂れて いる。方形の台座の底面に湯口が残る。前後を合わせる 前後合わせ型鋳造と考えられる。製作時期は11世紀代と 考えられる。
- 7 小男神立像 やや背の低い像は、頭に折烏帽子状の 冠を被り、上半身に衣を着けているが、布帛はなく、肩 や腕、前面に細かい襞が表現されている。両手は屈臂し て、前面中央で手を上下で合わせて棒状のもの(笏?)を

持っている。下半身には袴を着け、裾はやや広がってい るものの、足には沓を履いている。肩は若干なで肩気味 ではあるが、普通肩で円形の台座に直立しており、腰の 反りはない。側面に一部バリが残るので前後合わせ型鋳 造と考えられる。背面上部に突起があり、空気抜き孔と 報告されているが、有馬遺跡Ⅰや有馬条里遺跡Ⅱの報告 では光背を付けるための枘と報告されたものである。削 り取ってしまうこともできるのに残してあるのは、光背 を付けるための枘として利用するためと考えられるので はなかろうか。この2体の像の体部前面の衣紋には明確 な違いが認められる。やや背の低い方(7)は東大寺法華 堂の日光菩薩像のように斜め横方向に流れるが、やや背 の高い方(6)は同寺法華堂の月光菩薩像のように縛った 腰紐の余りが前に垂れている。何かの偶然かもしれない が、むしろこの2体の像が対になって置かれていたから と考えることもできないであろうか。製作時期は11世紀 代と考えられる。

8 宇通遺跡(粕川村教育委員会1991『宇通遺跡―発掘 調査報告書資料編一』粕川村文化財報告第13集)では1点 (柱)の小形の女神座像が出土した。これは座っているこ ともあると思われるが、現段階では県内出土の小神像の 中では最も小形である。火中により器面全体が発泡して いるが、写真から辛うじて顔と長い髪の毛が表現されて いるように見える。しかし、細かい顔の表情までは読み 取れない。両臂を曲げて身体の正面で合わせている。着 物(十二単?)を着て裾はふわっと広がっており、足元は 見えない。台座(蓮台?)の上に座っている。座り方はや や反り身である。道場遺跡群例と比べると姿勢の違いは 明確である。台座の裏面側には丸い印が付いているが、 蓮の花弁?を表現したものか。その下に方形の敷茄子、 受皿・方形の框を表現し、下端は欠損しているものと思 われる。製作時期は10~11世紀頃と報告されている。 これらの小神像の姿勢を見ると国分寺中間地域遺跡例 (2)、有馬遺跡Ⅰ例(3)、有馬条里遺跡Ⅱ218号土坑例 (5)、剣崎稲荷塚遺跡2号竪穴住居例のやや背の高い像 (6)、いずれも側面形を見ると身体がやや反っているこ とが分かる。それに対して有馬条里遺跡Ⅱ32号溝例(4) や剣崎稲荷塚遺跡2号竪穴建物やや背の低い像(7)は側 面形を見るとほぼ真っ直ぐに立っており、身体が反って いないことが分かる。本郷鶴楽遺跡例はそうしたものに 比べて真っ直ぐ立っているものの、後ろにお尻を大きく 突き出している。また頭に折烏帽子状のものを被っている国分寺中間地域遺跡例(2)、剣崎稲荷塚遺跡2号竪穴 住居例2点(6・7)と冠り物の表現は極わずかな相違 はあるものの、極めて類似したものと言える。

9 元総社蒼海遺跡群(145)(前橋市教育委員会2021『元 総社蒼海遺跡群(145)』前橋都市計画事業元総社蒼海土地 区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)では1 点(躯)の仏像が出土した。金鍍金や金箔の痕跡は残存し ていない。姿勢は直立している。光背と右手先、左手か ら垂れ下がる天衣と持物の一部が欠損している。頭には 宝冠を被り、頭頂部は山状に膨らむ。額には鉢巻きのよ うに天冠台が2段に巡る。頭上には化仏は見られない。 顔の表現は明瞭ではないが、鼻や口元の雰囲気は穏やか な印象である。耳の表現は明瞭ではないが、耳たぶは首 元、肩口まで及ぶ。両耳の後ろの垂髪が肩まで下がる。 左手は屈臂し持物を握り締めている。持物の上部には膨 らみが表現されている。さてこの持物であるが、報告書 では水瓶も独鈷杵も違うと否定しているが、この姿の観 音菩薩像が手にしているものとして一般的なのはやはり 水瓶ではないかと考えられる。膨らみの部分が水瓶の口 であり、その下の首の部分を手で握り、さらに下の膨ら む体部から底部は欠損しているのではなかろうか。同様 にそこから上の部分も欠損していて、その上には蓮華が 表現されていたのではなかろうかと想像される。右手は 身体に沿って垂下し、手首より先は欠失している。左右 の上腕部には臂釧とみられる腕輪の表現がある。上半身 には衲衣を左肩のみに覆い、斜めに条帛を掛け、右肩を 肩脱ぎにしている。腹部はやや膨らみ、衣文線が表現さ れている。衲衣の上に天衣が掛けられている。天衣は両 肩にまわし、両端を前面に垂らす。垂れ下げられた衣は 膝上で平行するように弧を描き、左右前腕部に掛けられ 外側から蓮華座へ垂れ下がる。左先端は一部欠損。背中 には両肩に掛かる天衣が表現されている。腰上には括れ がある。背中には枘が背中上位とふくらはぎの部分の2 個所に鋳出されている。空気抜きのためのものか、光背 を支持するためのものか、議論は残る。鋳型に十分、細 部まで銅を流し込むためには空気抜きは必要なものの ように思える。しかし、前橋市教育委員会他2020元総社 蒼海遺跡群(75街区)No.2の報告書によればH-7号住居 跡から出土した鋳型を見ると小金銅仏の背面に枘はある ものの、外側まで抜けていないので空気穴ではない。小 品であれば工夫すれば無くても良いものであったようで ある。また、鋳造時にできたその出っ張りは完成してし まえば必要の無いものであり、削り取ってしまえば済む ものである。それをわざわざ残しているのは光背を付け るための枘として利用するためと考えられる。2個所付 いているということは下の方まで光背が来るということ で、それは舟形光背ではないかと考えられる。この像が 観音菩薩像であることが前提であるが。腰には腰紐が巻 かれ、股下から足下まで垂れ下がる。腰よりも下は裳で 包まれ、垂れ下がる衣文線が表現されている。裾は足の 甲の半ばまで覆い、両足は揃えられている。台座上部に は蓮華座を設け、蓮弁は三重の葺き寄せとなっている。 蓮華座の下には華盤が、その下には上框・下框の円形二 段の框座が付く。框座正面には縦方向のヒビ割れが見ら れる。報告書では頭に本地仏を示す小形の仏像である化 仏の表現がないので、天部の可能性もあるということだ が、銅製だけでなく木像も含め宝冠と天冠台のみで化仏 表現の無いものも存在するので、衣文など全ての造形表 現を総合すると観音像であると見るのが妥当ではないか と考えられる。銅製小像は竪穴建物などから出土するこ とが多く、建物が使用されなくなる時の廃絶行為に伴っ て安置(埋納)されることが多く、その建物を焼いて廃絶 する際に一緒に焼かれることもある。しかし、この例は ピット1内から俯せ状態で出土しており、焼けてはいな いが、廃絶に際して安置(埋納)したものと考えられる。 報告書によると周辺には多数のピットがあり、掘立柱建 物があったと思われるが、どの組み合わせで建つのかは まだ確定しておらず、ピット1もそうした建物の柱穴の 一部と考えられるとのことであった。

10 関根細ケ沢遺跡(関晴彦・石守晃2015 『関根細ケ沢遺跡』一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)では1点(躯)の仏像が出土した。金鍍金や金箔の痕跡は認められなかった。ほぼ直立しているが側面の写真を見るとやや反り気味のように見える。頭には宝冠を被るが、頭頂部は山状には膨らまない。むしろ折烏帽子状のものに近い感じがする。額には鉢巻きのように天冠台が2~3段巡る。化仏の表現は見られない。耳は通

常の大きさで元総社蒼海遺跡群(145)例のように強調さ れて表現されていない。顔は整っており、比較的穏やか のようにも見えるが、目と眉はやや吊り上がっているの で、やや厳しい表情に受け取れる。しかし、錆や剥離が あるため然程明瞭ではない。右手は屈臂し、左手は垂下 するが、両手先とも欠損している。他の仏像の腕の動き から持物は、蓮の華を右手で掲げ、左手で押さえていた 可能性はあるものの、不明であると言わざるを得ない。 上半身には衲衣を左肩から覆い、右首元は少し出ている ように見える。腹部はわずかに膨らみ、衣文線が正面と 右手側に数条弧状に表現されている。背面には枘が背中 上位とふくらはぎの2個所に鋳出されている。風化が進 み明確ではないが、山形に鋳出されたままで整形されて いるようには見えない。腰よりも下は裳で包まれ、垂れ 下がる衣文線が表現されている。裾は足の甲の半ばまで 覆い、両足は揃えられ褄先が出ている。台座上部は薄い 板状で、蓮弁は表現されていない。ただ、その下には反 花状の凹凸があるようにも見えるが、明確ではない。そ の下の右側には直径3㎜長さ18㎜の棒状突起部がある。 突起部は意図的に付けた、もしくは残したものと考えら れる。この像で完結するものであれば、突起部が必要な ことはありえない。右手に位置する本尊と繋ぐためのも のか。その下には框座が付くが、底面は平坦に調製され ていない。台座上面を水平になるように置いた他の3面 と違い、右側面は底面を平らに置くと像が前傾してしま

11 元総社蒼海遺跡群(91)(前橋市教育委員会2015『元総社蒼海遺跡群(91)(95)(102)』前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)では1点(躯)の仏像が出土した。全体に金色が良く残っており、分析の結果、美術青銅に金を混ぜた金箔貼であることが確認されている。頭部は円頂の比丘形で、体部上半身に偏衫を付け、図では「U」字の貫頭衣状に表現されているが、大衣を偏袒右肩に纏っているものと思われる。肩はなで肩となっている。下半身には裳を着ける。左手を屈臂し、右手はやや垂下するが曲がっている。左手に宝珠?右手はまったく不明であるが、地蔵菩薩だとすると錫杖を持っていた可能性がある。両足を揃えて立つものと思われるが、明確ではない。体部背面中央上方に枘があり、光背用と考えられる。台座は三重座で、

円形の華、敷茄子、下框の三部からなる。側面にバリが残るので、前後を合わせる前後合わせ型鋳造と考えられる。製作時期は遺物が少なく明確ではないが、10世紀後半から11世紀前半頃と報告されている。造りは有馬条里遺跡 II の218号土坑出土例(5)に極めて類似している。

12 道場遺跡群 A 区 4 トレンチ(高崎市教育委員会1989 『道場遺跡群 昭和61・62・63年度市営土地改良事業道 場地区に伴う埋蔵文化財発掘調査』高崎市文化財調査報 告書第96集)では 1 点(躯)の仏像が出土した。時期は鎌 倉時代13世紀中頃のものと考えられる。平安時代のもの ではないので比較するための資料として扱う。

報告書には写真のみ掲載されている。当時の奈良国立 博物館仏教美術研究室長であった光森正士氏によると、 聖観音菩薩像であること。像高13cm。背面まできちんと 造られているので円板に貼り付けた懸仏ではない。銅製、 臘型鋳造であり、他の小神像のような前後合わせ型鋳造 ではない。臘型であるため前後合わせ型鋳造のものに比 べ非常に丁寧で細かい作りとなっている。腕は失われて いるが、吹寄せ法によるものである。尻の所に枘があり、 台座に固定されていたものと考えられる。眉と目のライ ンの交点に新しい要素を持つ。両耳の上に2個ずつの穴 があるので、冠の垂飾を付けていた可能性がある。また、 首の後ろにも穴があり、頭光を付けていた可能性がある。 鋳造は脚の方に「ス」が入っているので、頭を下にして製 作したものと考えられる。脚部の破損状況から、1,200 度C以上の高熱を受けている事が分かる。胸や腹の厚み があり、安定感がある。などのコメントが報告書に記載 されている。前傾姿勢を取っているので、鎌倉・室町時 代以降の新しい特徴を持っている。その他顔立ちや身体 の作りなども新しい時代の特徴を備えている。神像では なく仏像であった。座像で13cmあり、小神像に比べかな り大きい。顔だけでも5cm近くある。報告書では重量の 記載がなく不明であるが、欠失した腕もあればかなりの 重量感があったものと考えられる。

神像は神道における神(カミ)を模った像である。元々は自然現象や自然にあるものが神(カミ)そのものであり、山や大木、大岩など自然にあるものすべてに神(カミ)が宿る。その後、人間が製作したもの、例えば鏡・勾玉・剣などが神(カミ)の宿る依り代となった。だから三種の神器は八咫鏡・八尺瓊勾玉・草薙剣(天叢雲剣)であった。

奈良時代以降、神仏の関係は次第に緊密化し、平安時代に神仏習合、神も仏も同じものであるという考え方が普及した。仏が仮に神の姿をしてこの世に現れたとする本地垂迹説やその逆の逆本地垂迹説が広まると、9世紀頃には仏教の影響を受けた僧形八幡神像のような見た目は仏の姿をした神像が製作されるようになった。こうした流れを受けて10世紀から12世紀頃にかけてこれまでの仏像とは違った形態の小形の神像が製作されるようになったと考えられる。

ここで、改めて本郷鶴楽遺跡出土の小神像(1)を見る と全体高は10cm弱、像高も9cm超え、身幅も3cm弱、重 量も200g超えとこれまでの県内遺跡出土例では飛び抜 けて大きい。頭には折烏帽子状の冠り物をしているが、 同様の冠り物をしているものは国分寺中間地域遺跡例 (2)、剣崎稲荷塚遺跡 2 例(6・7) など他に 3 例あっ た。顔は眉が吊り上がり、目も吊り目でかなり厳しい顔 立ちとなっている。他に厳しい顔立ちをしているのは有 馬条里遺跡Ⅱの天王立像(4)だけである。佛敵を睨み付 ける姿の増長天あるいは持国天という四天王像であるの で、厳しいのは当然であると考えられる。被熱して表情 の読み取れないものを除き、それ以外のものは笑顔もし くは微笑など穏やかな顔立ちのものが多い。また、本遺 跡例(1)は「いかり肩」であるが、有馬遺跡 I 例(3)を除 き、「普通肩」もしくは「なで肩」である。左肩から掛かる 条帛は本遺跡例以外に国分寺中間地域遺跡例(2)と剣崎 稲荷塚遺跡の1例(7)に見られる。本遺跡例は手に何も 持っていないが、剣崎稲荷塚遺跡の1例(7)と国分寺中 間地域遺跡例(2)は笏状のものを持っている。立ち方、 姿勢は本遺跡例(1)ではお尻を後ろ側に突き出した反り 身であるが、有馬条里遺跡Ⅱの1例(4)と剣崎稲荷塚遺 跡1例(7)の直立姿勢以外はお腹を前に突き出した反り 身となっている。姿勢は概ね、「反り身→直立→前傾の 順に変化し、肩はいかり肩→普通肩→なで肩の順に変化 する。」と一般的に考えられている。しかし、それはあく までも目安であり、同時に存在しても問題はない。剣崎 稲荷塚遺跡2号竪穴建物からは2例の神像(6・7)が 出土したが、やや大きい方(6)はなで肩であるが、姿勢 はやや反り身である。それに対して小さい方(7)は普通 肩であるが、姿勢は直立である。肩では小さい方(7)→ 大きい方(6)の順であるが、姿勢では大きい方(6)→小 さい方(7)の順となり、逆転してしまう。しかも同じ住居からの出土であり、同時期のものと考えられる。このことからその差違は明確な時代差を示していないことが分かる。

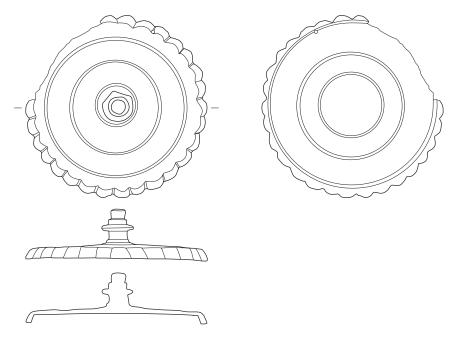
これらの平安時代の小神像の中で、男神像は折烏帽子 状の冠を被った衣冠装束姿が多く、女神像は十二単?を 着用しているものが1例(8)あった。それらの年代につ いては概ね平安時代の10世紀代から11世紀代のもので あった。その中でも有馬遺跡 I 例は10世紀前半中頃、宇 通遺跡例は10~11世紀とやや幅があるものの、鎌倉時代 と推定できる道場遺跡群例を除き、それ以外はほぼすべ て10世紀~11世紀代のものと考えられる。神像は神仏習 合思想の反映をうかがわせるものであり、元々は仏像が 古くから存在し、その仏像の影響を受けて製作されるよ うになったものであり、それは平安時代になってからと 考えられる。林宏一1993「出土金銅仏―関東地方を中心 に一」『甦る光彩―関東の出土金銅仏―』埼玉県立博物館 によれば、奈良時代以前の金銅仏は蝋型鋳造であり、依 頼者の注文を受けて一品一品丁寧に製作していたものと 考えられるが、平安時代11~12世紀頃になると前後合わ せ型によるものが一般化する。この方法によれば一つの 型から複数製作することも可能となる。なぜこのような 変化が生じたかというと広範な階層、広範な地域からの 大量受注を受けてそれに合わせた大量製作が行われたか らと考えられる。それは一方で、それまでの職人の感性 を込めた一点ものから消耗品的な規格化、商品化された ものとなり、簡便・粗放な造りとも受け取られるものが 多くなったとも言える。出土地については寺院や山岳信 仰の聖地としての山が多いが、経塚や古墳からのものも 多くある。群馬県内では竪穴建物内や居館からのものも あるが、その近くには本郷鶴楽遺跡例のように近くに寺 院を伺わせる遺構が存在する例もある。寺院には置かれ ていて当然であろうが、経塚造営に伴って金銅仏を埋納 することは一つの定式であったようで、経筒と共に出土 する例も知られている。また古墳の石室内から出土した 群馬町の保渡田薬師塚古墳例や同八幡塚古墳例などのよ うに後に、恐らく平安時代から鎌倉時代になってから納 められたと考えられるものもある。石室内は経塚として 利用する例もあり、当時の人々は古墳が昔の貴人の墓で あり、少なくともその場所を聖域として認識しており、

そこで仏教的なあるいは神事的な何らかの儀式を行い、 その際に使用した小金銅仏を奉賽品として納めたのでは ないかと考えられる。現在でも古墳の頂上や近くに神社 や寺院、墓地などがあるのは信仰の対象地域、聖域とし て認識しているからに他ならない。

本郷鶴楽遺跡のように経筒や小神像が出土する遺跡例は、平安時代の神仏習合の進展や末法思想の民間への普及と地方への波及との関連が深いものと考えることができる。

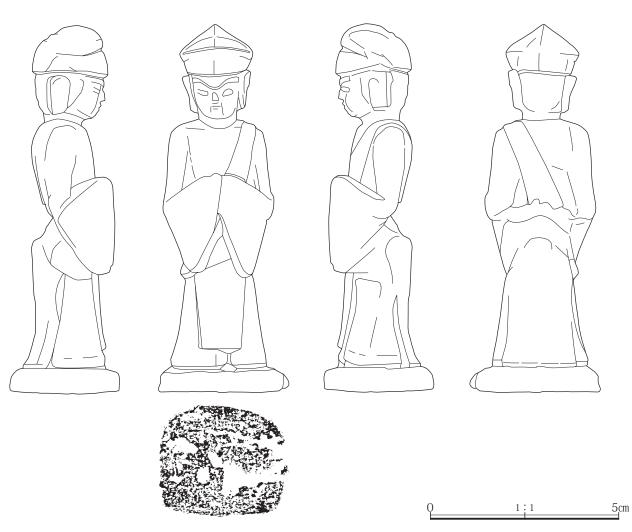
また、今のところ県内の遺跡出土例では銅製のものばかりであったが、現状では県内遺跡からそれ以外の出土例はない。金属であるという材質的なことから残るものが多いと考えられるが、当時は金属製以外のもの、具体的には木製のものなども製作されていたことは否定できない。木像に関しては低湿地等の今後の調査に期待したい。

### 2 小神像について



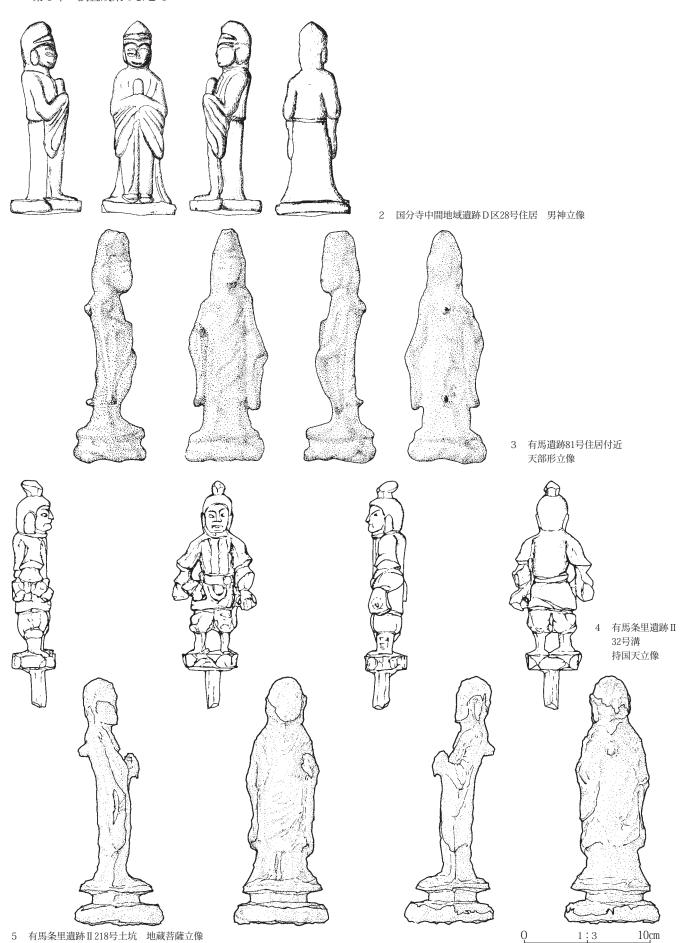
0 1:2 4cm

本郷鶴楽遺跡 G 5 区222号竪穴建物出土 経筒蓋

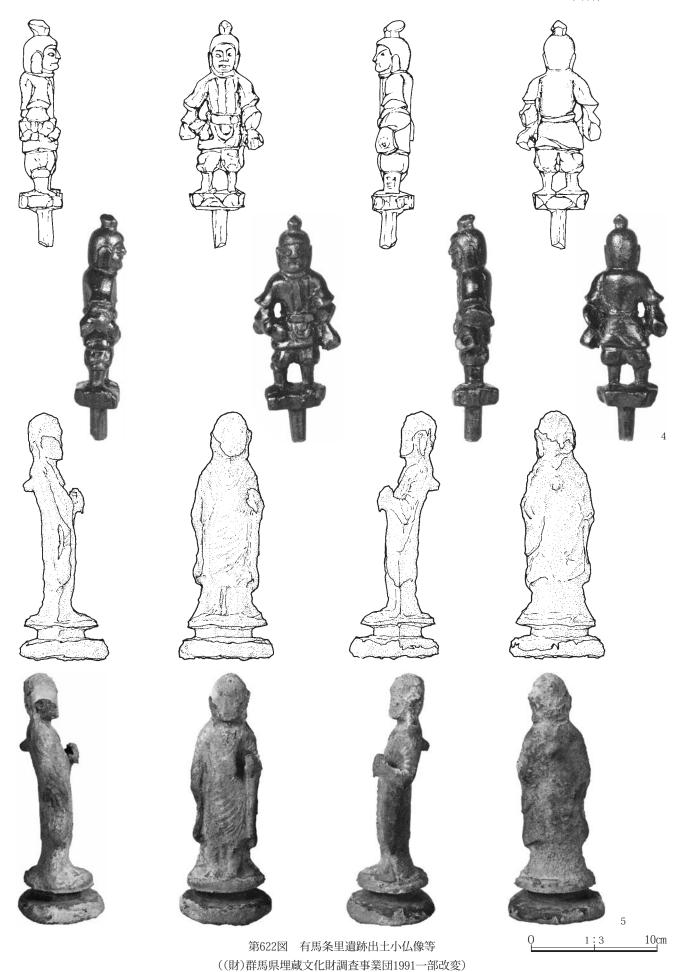


1 本郷鶴楽遺跡 G 5 区 204号竪穴建物出土 小神像

第620図 本郷鶴楽遺跡出土経筒蓋·小神像



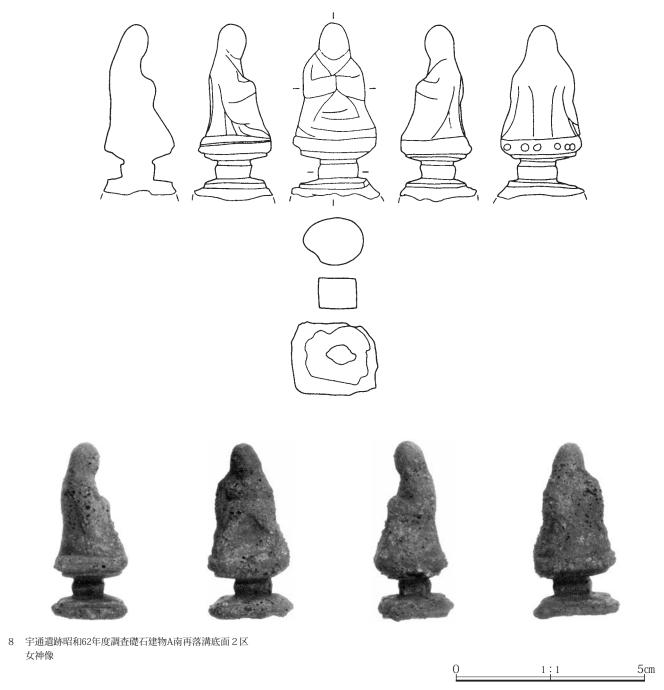
第621図 国分寺中間地域遺跡・有馬遺跡・有馬条里遺跡出土小神像等 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988・1989・1991一部改変)



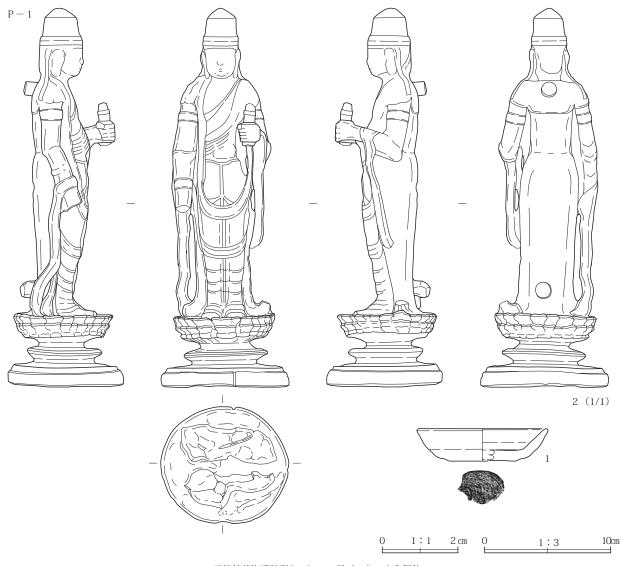
807



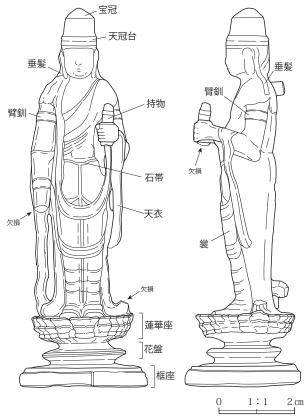
第623図 剣崎稲荷塚遺跡出土小神像(高崎市遺跡調査会1988一部改変)



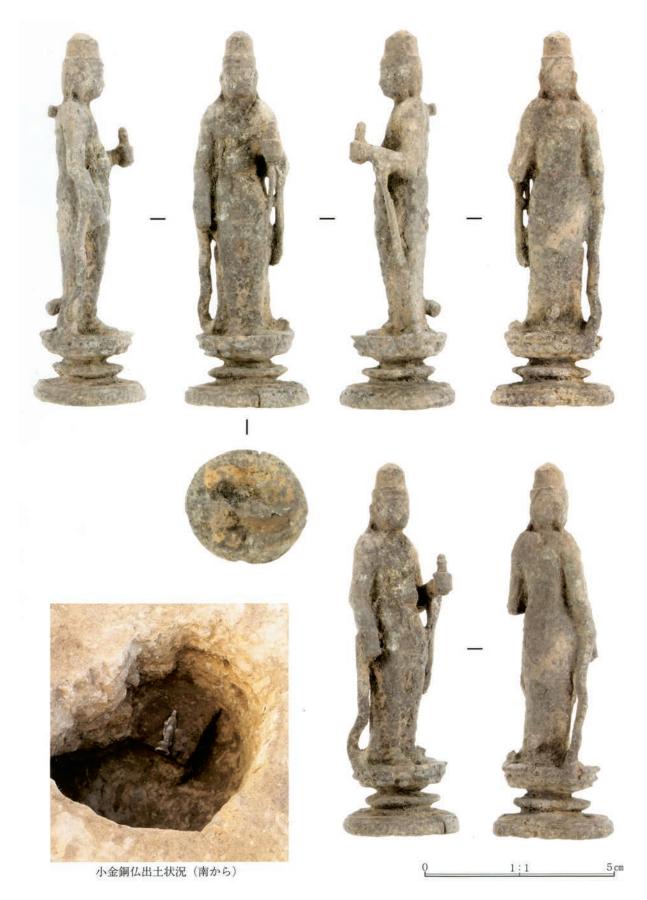
第624図 宇通遺跡出土小女神像(粕川村教育委員会1991一部改変)



9 元総社蒼海遺跡群(145) P-1 号ピット 小金銅仏

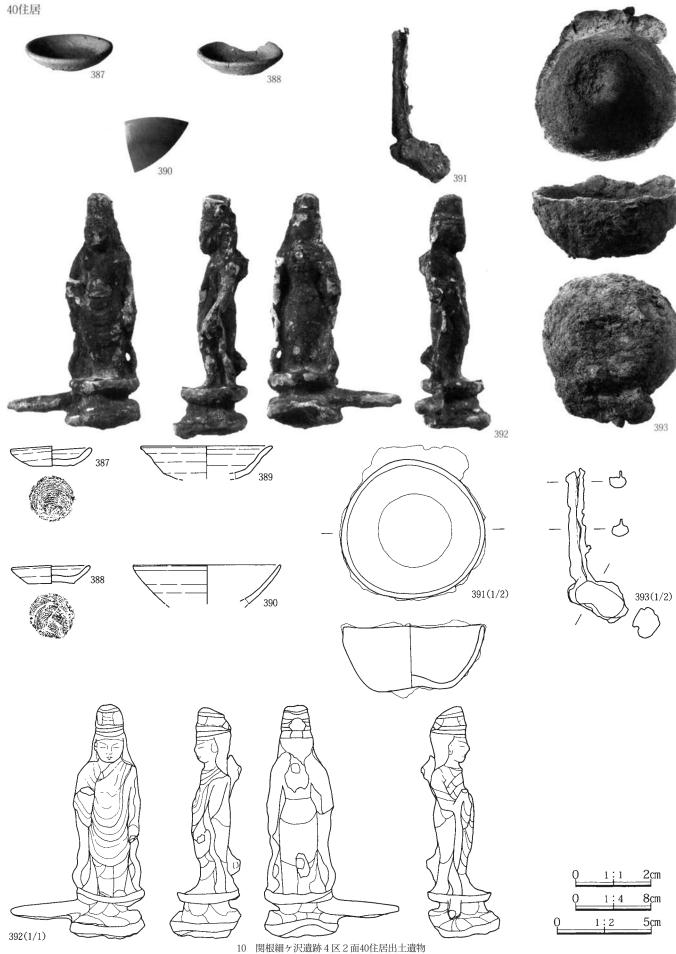


第625図 元総社蒼海遺跡群(145)出土小仏像(前橋市教育委員会2021一部改変)



9 元総社蒼海遺跡群(145) P-1 号ピット 小金銅仏

第626図 元総社蒼海遺跡群(145)出土小仏像(前橋市教育委員会2021一部改変)



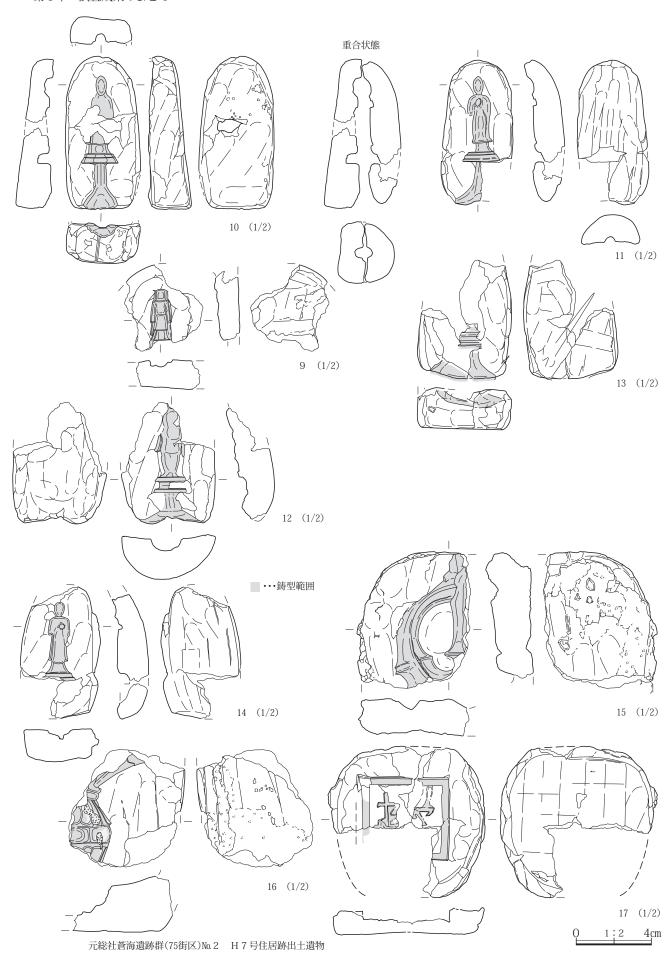
第627図 関根細ケ沢遺跡出土小仏像((公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015一部改変)

# 2 小神像について



11 元総社蒼海遺跡群(91)3号住居跡 小金銅仏

第628図 元総社蒼海遺跡群(91)出土小仏像(前橋市教育委員会2015一部改変)



第629図 元総社蒼海遺跡群(75街区)No.2出土小仏像等鋳型(前橋市教育委員会他2020一部改変)

前後合わせ型 鋳造方法 蝋型 草型 斯型 蘇型 被熱・発泡 被熱 被熱 被熱 やや反り身 やや反り身 左手に宝珠か やや反り身 やや反り身 やや前傾 やや反り 姿勢 反り身 反り身 反り身 反り身 反り身 反り身 反り身 重立 直立 直立 前傾 直立 直立 持物 水瓶か 宝塔か 不遇 不用 不明 無し 不明 不明 不明 無し 不明 不明 不明 不用 不用 無( 毲 愆 人用 条 年 単 不明 有? 乍 無 無 無 神 無 無 無 無 無 無 無 無 恒 無 神 無 無 いかり肩 いかり肩 いかり肩 いかり肩 開運 景通肩 なで肩 なで肩 普通肩 なで肩 普通肩 なで肩 普通肩 普通肩 なで肩 普通肩 なで肩 普通肩 普通肩 開運員 なで肩 眉・吊り目 眉・吊り目 眉・吊り目 日の出みや やや吊り 目? 犚 穏やか 瞋怒相 穏やか 穏やか 瞋怒相 笑顔 微笑 微笑 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 不明 折烏帽子 折烏帽子 折烏帽子 折烏帽子 宝冠? 烏帽子 副 宝冠ら 鬼? 宝冠 無つ 無し 完記 別別 無し 宝冠 鬼? 完別 無し 無つ 無つ 無つ 無し 10世紀後半~11世紀 初め |10世紀後半~11世紀 |前半 43.1 10世紀前半中頃 盘 144.4 11世紀前半か 31.6 11世紀前半? 平安時代後期 221.7 10世紀後半 10~11 甘紀 13世紀中頃 112.6 平安時代か 平安時代 平安時代 平安時代 平安時代 平安時代 平安時代 平安時代 11世紀頃 11世紀頃 65.4 11世紀代 58.2 11世紀代 平安時代 业 58.0 42.2 ± 80 ± ± 80 83. 1.2 1.5 1.6 1.8 1.5 1.2 1.6 1.5 類長 CM 4.64 1.2 2.9 2.5 型 問 2.2 2.0 2.0 2.2 1.8 4.6 2.1 1.7 2.1 参 ほ ほ 4.8 5.6 9.2 5.3 4.6 5.3 6.7 3.6 8.2 5.1 5.8 13.1 6.2 5.5 4.5 4.8 4.3 3.8 3.8 4.8 5.1 7.6 10.0 5.3 5.9 6.2 6.5 6.7 7.2 5.6 0.9 6.0 6.0 6.5 7.0 4.7 6.2 7.2 5.2 全体高 9.7 13.1 8.3 7.1 5.3 群馬県内出土平安時代を中心とする小神像及び仏像一覧表 聖観音菩薩座像 阿弥陀如来坐像 観音菩薩立像 観音菩薩立像 地蔵菩薩立像 地蔵菩薩立像 地蔵菩薩立像 地蔵菩薩立像 **薬師如来立像** 菩薩半跏像 小男神立像 小男神立像 小男神立像 小男神立像 小女神座像 小男神立像 天部立像 天王立像 天王立像 天部立像 平均值 種類 推定南西回廊のやや南付近 榛名神社境内寺院跡平坦面 **高崎市宿大類町字村西** 旧宮城村大字柏倉の畑 旧吉井町神保古墳群 出土位置 旧吉井町片山の畑 旧吉井町片山の畑 A区4トレンチ D区28号住付近 204号竪穴建物 2号竪穴住居 2号竪穴住居 呆渡田古墳群 保渡田古墳群 礎石建物A 81号住付近 218号土坑 3号住居跡 40号住居 ピット1 旧吉井町 32号溝 元総社蒼海遺跡群(145) 元総社蒼海遺跡群(91) 神保112号墳石室内 国分寺中間地域 遺跡名 辛科神社の北 中世の屋敷跡 中世の屋敷跡 有馬条里Ⅱ 関根細ケ沢 薬師塚古墳 有馬条里Ⅱ 剣崎稲荷塚 道場遺跡群 八幡塚古墳 剣崎稲荷塚 白草廃寺 大類城址 山王廃寺 巌山遺跡 本郷鶴楽 有馬I 第2表 18 16 10 15 2 9  $\infty$ 11 12 14 22

前橋市元総社遺跡群(75街区)No.2 H-7号住居跡出土鋳型及び鋳造仏像推定法量一覧表 (前橋市教育委員会他2020一部改変) 第3表

時期	0世紀後半							
量量	Ι			-	-	ı		
額長	0.6	-	1:1	ı	ı	0.7		
少量 CII	2.7 1.1 0.6		7:1 0:0	1.6	ı	1.1		
線高     身幅       cm     cm	2.7			(4.3) $(3.9)$ $1.6$	ı	(4.1) 3.7 1.1 0.7		
全体高	Ι	-	4.1	(4.3)	-	(4.1)		
種類	地蔵菩薩立像	机水桶	₩. X. X.	如来像	如来像	如来像		
出土位置			计格击计级计量	HUMBILLY LMSALMJ				
遺跡名			元総社蒼海遺跡群(75街)2、2	:居跡				
No.	9 10 11 11 13 H- H- H- 14							

			I						
残存状況	鋳型半面。周縁破 損。	鋳型上半面中位一 部欠損。	鋳型下半面4/5残 存。	鋳型半面1/2残存。	鋳型半面1/2残存。	鋳型半面3/4残存。	鋳型半面周縁破 片。	鋳型半面周縁破 片。	鋳型半面3/4残存。
成形・整形等特徴	18.2 型。合わせ面指ナデ。内面鋳型。 合わせ面指ナデ。	手捏ね後篦・指ナデ。内面鏡   56.7 型。合わせ面指ナデ。下面に   湯口。	手捏お後篦・指ナデ。内面鋳38.8型。合わせ面指ナデ。下面に 湯口。像背面上部に楕円孔。	手程ね後篦・指ナデ。内面鏡         45.2 型。合わせ面指ナデ。下面に         湯口。	手捏ね後篦・指ナデ。内面鏡   44.2 型。合わせ面指ナデ。下面に   湯口。	手捏ね後篦・指ナデ。内面鏡   42.6 型。合わせ面指ナデ。像背面   上部に円孔。	81.6 型。合わせ面指ナデ。内面鋳型。	59.4 型、緑青付着。合わせ面指ナデ。	手捏ね後篦・指ナデ。内面鋳  54.3 型、縦4.3cm×横4.5cm方形枠・鋳型半面3/4残存。   文字。合わせ面指ナデ。
事 8									
色調	1.5 だぶい 黄橙	2.2 ば 様 仮	2.0 ば然い 黄橙灰	2.5 ばぶい 黄橙灰	2.0 にぶい 黄橙灰	2.0 にぶい 黄橙灰	黄灰 (2.6) にぶい 黄橙	黄灰 (3.3) にぶい 黄橙	2.1 にぶい 黄橙灰
単いま	1.5	2.2	2.0	2.5	2.0	2.0	(2.6)	(3.3)	2.1
幅cm	(4.1)	3.9	3.9	(4.9)	(4.7)	(4.2)	(0.0)	(6.2)	8.2
長さ㎝	(4.6)	8.1	7.7	(6.4)	(6.3)	(0.7)	(7.2)	(0.0)	(8.0)
種類	小金銅仏鋳型	小金銅仏鋳型	小金銅仏鋳型	小金銅仏鋳型	小金銅仏鋳型	小金銅仏鋳型	三鈷杵鋳型	三鈷杵鋳型	銅印鋳型
出土位置	P-4覆土	P-4覆土	P-4覆土	P-4覆土	P-4覆土	P-4覆土	<b>漫</b> 土	<b>漫</b> 十	3号炉3層
遺跡名					元総社蒼海遺跡群(75街 区)No 2 H-7号住居跡		. "	. "	
No.		0	-	2	8	4	5	9	

# 3 火葬遺構について

火葬遺構と考えられるものはG1区で4基確認され た。105・107・113・114号土坑として調査したものである。 それ以外に G 3 区の200・230号土坑がその可能性があ る。いずれも埋没土に炭化物を多く含む層が確認された。 107・200号土坑を除き、深さ10cm未満の浅いものであり、 そのことにも一部起因していると思われるが、骨片はほ とんど含まれていない。深さが20cm近くある107・200号 土坑さえも拾い上げることができるような小骨片は検出 できなかった。人体を火葬したであろうことは他の類例 から想定されるものであるが、あまりにも少ない。単に 浅いからということだけでなく拾骨方法の違いが大きく 影響しているものと考えられる。拾骨方法には東日本タ イプと西日本タイプの2種類がある。東日本タイプでは、 基本的に小さな骨まで全て拾うために残される骨はほと んどない。それに対し西日本タイプでは一部拾骨であり、 主立った部分だけしか拾わないので多くの骨が火葬場所 に残される。群馬県内では、その両方のタイプの遺構が 見られるが、楢崎修一郎2007「群馬県出土中世火葬遺構」 『研究紀要25』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団や楢崎 修一郎2008「群馬県出土中世火葬遺構出土火葬人骨」『研 究紀要26』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団によれば西 日本タイプは11基(170基の6.5%)のみで非常に少なく、 それ以外の161基(93.5%)は東日本タイプであるという ことである。この数値を見ると東日本に所在する群馬県 には両方あるものの、圧倒的に東日本タイプが多いこと が分かる。本郷鶴楽遺跡例も骨片がほとんど検出されな かったことからすると東日本タイプであることが推定さ れる。また楢崎氏は遺構の形態を、タイプ I (長方形土 坑)、タイプⅡ(長方形土坑+袖)、タイプⅢ(方形土坑)、 タイプⅣ(方形土坑+袖)、タイプV(円形土坑)の5つに 分類した。本郷鶴楽遺跡の土坑をこれに当てはめてみる と105号土坑はタイプIVと考えられる。107号土坑は袖と 推定される北辺中央部分が調査時に151号土坑とされた 2号掘立柱建物の柱穴と重複しているが、それに近い部 分が赤く焼けているが袖は延びない可能性がある。延び ないとするとタイプⅣではなく、タイプⅢの可能性があ る。113号土坑は北東部が3号掘立柱建物の柱穴と重複 しているが、通常県内出土例では長辺のどちらかに付く

袖の張り出し部が確認できなかったので、削平されたこ とにより失われたというよりは最初から無かった可能性 が高いと思われる。113号土坑はやや東西方向が長いが、 方形に近いタイプⅢと考えた。114号土坑は112号土坑に 北西角を切られるが、113号土坑よりも長く、長方形に 近いものと捉えタイプ I とした。本郷鶴楽遺跡では袖(張 り出し部)を有するものとそうでないものの2つに分類 することもできる。また位置関係から105・107号土坑の ように2号掘立柱建物と重複するか、それに近い位置に 存在するものと113・114号土坑のように3号掘立柱建物 と完全に重複するものとの2グループに分けて捉えるこ ともできる。105号土坑以外掘立柱建物と重複しており、 同時期存在とは考えられない。しかし薬師遺跡(大木紳 一郎2022『上大島御伊勢遺跡・薬師遺跡・萬行遺跡』(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団)等の類例からも火葬土坑 と掘立柱建物と何らかの関連はあることは想定される。 具体的には掘立柱建物が御堂に相当し、その建物の近く に火葬場(火葬遺構)や墓地(火葬墓・土坑墓)を設けるこ と等が考えられる。G1区の円形や楕円形の土坑は墓の 可能性も否定できないのではないかと思われる。G1・ 3区いずれの土坑からも炭化物が多く出土しており、そ の場所で焼いたことが想定される。しかし、土坑内から 骨片は出土しなかった。この事実はいずれも拾骨方法が 東日本タイプであるとすれば矛盾するものではない。

また、袖(張り出し部)は何のために付けられたのか、 ということであるが、楢崎2007によれば「この袖は、焚 き口であると想定され、火葬当時、袖がある方向から風 が吹いていたものと推定される。」としており、1点目は 袖が焚き口であること、2点目は火葬の時に袖の方向か ら風が吹いていたであろうことが記されている。これ に対して綿貫邦男1997『下小鳥神戸遺跡』(財)群馬県埋 蔵文化財調査事業団によれば「煙道凸部」と記載されてお り、いわゆる煙道部と捉えている。楢崎2007によればタ イプⅡの袖部付は全体で55基(100%)、その方向は西28 基(50.9%)・東23基(41.8%)・南3基(5.5%)・北1基 (1.8%)、タイプIVの袖部の方向は全体で4基(100%)、 東2基(50%)・西2基(50%)ということであった。タイ プⅡの場合、東西南北の4方向に袖が付くものがあり、 自然の風の方向がその時々でそんなに変化したとは考え にくい。群馬県、特に平野部では赤城山から吹き下ろす

赤城おろしの北風や榛名山と赤城山の間から吹く北西の 風が強いことが多い。風の影響で袖部が西に位置するも のが多いのは納得できるが、北風の強い割に北に袖が付 くものが少な過ぎるし、東風はそんなに吹かない。 袖(張 り出し部)が焚き口であり、それが自然の風向きを示す とは考え難い。たとえそこから風が入ったとしても出て 行く場所がない。むしろ平面的な形態や袖の手前部分が 最も赤く焼けていることなどを考えると手前の広い方が 焚き口で袖の先が風の出口であり、竪穴建物のカマドの 構造に近いのではないかと思われる。通気口、入口より は排気用、つまり煙突のような施設と考えた方が自然で はなかろうか。また、薬師遺跡(大木2022)では軸方向が 同じで袖(張り出し部)がお互いの方を向く43号土坑と45 号土坑が確認された。白石大御堂遺跡(綿貫鋭次郎1991 『白石大御堂遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)で も軸が同じで袖の部分がお互いの方を向く7号火葬跡と 9号火葬跡が確認された。火葬墓ではないが、土坑墓で 下湯原遺跡 A 区(松村和男他2018『下湯原遺跡(1)』(公 財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)のように中世の墓で人 が顔を見合わせるように向き合って埋葬された例があ り、たまたま最初もしくは最後の墓であったのか、ある いは意識的にその2基を入口に配置することで聖域とい う重要な場所を仕切り、守るものとしたと考えたことも あった。薬師遺跡1-6区の墓坑群の配置でも火葬土坑 の43号土坑と45号土坑は最も南側に位置することから同 様な役割があった可能性があると考えることもできるの ではなかろうか。袖の付く位置は必ずしも自然の風向き の影響よりは他の要因が大きいのではなかろうか。他に 火葬場所の制約とか習慣・流儀の違い、死因の違いや身 分や性別の違いなど色々な要因も想定されるので引き続 き検討が必要であろう。

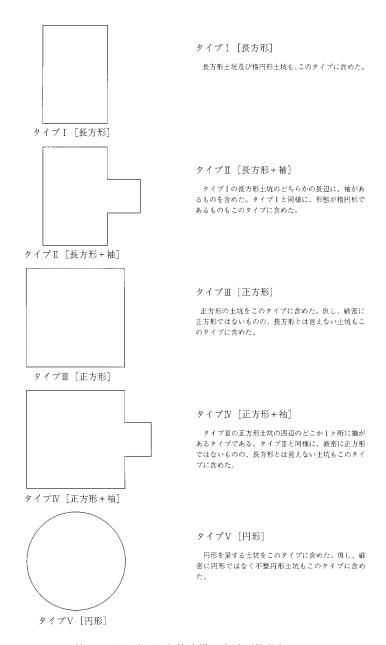
本郷鶴楽遺跡では火葬遺構と考えられるものはG1区の105・107・113・114号土坑の4基とやや形が定形ではないもののG3区で200・230号土坑が確認されたが、その規模は長軸が最大のもので151cm、最小のものは90cmにも満たない。平本嘉助1972「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化」『人類学雑誌』第80巻第3号によると平均身長は、鎌倉時代の男性159.0cm(166.8~153.0cm)、女性は144.9cm(148.6~140.0cm)、室町時代の男性156.8cm(166.3~148.8cm)、女性は146.6cm

(152.9~137.7cm)、江戸時代の男性157.1cm (167.2~ 147.2cm)女性は145.6cm(157.1~137.6cm)であるという。 この数値を参考にすれば全ての時代の男性は、ほとんど の土坑で食み出してしまう。女性ならギリギリ収まるか もしれないが、かなり窮屈であり、食み出してしまう人 も出てしまう。土坑の大きさから考えて土坑墓と同じよ うに伸展位ではなく屈位であった可能性が高いと考えて 良いものと思われる。屈位の死体を骨になるまで焼くに はかなり高温にしなければならない。土坑に直接置いた のでは下まで火が入らずなかなか温度は上がらない。そ こで土坑の中に礫を置いて浮かしているのではないかと 考えられる大御堂第11号火葬跡遺構のような例(綿貫鋭 次郎1991)も認められる。深さは107・200号土坑を除き、 10cm未満の浅いものが多い。炭化物はいずれの土坑から も多く出土したが、浅いこともあり、樹種同定できるよ うな大形の炭化物は無かった。いずれの土坑からも骨片 は出土しなかった。近くには円形や楕円形の土坑もあり、 やはり骨は検出されなかったものの土坑墓の可能性も否 定できない。また3号掘立柱建物は一間の間、半間部分 にやや細い柱が入るもので、単に間仕切りというだけで なく、東隣の2号掘立柱建物などに比べてかなりしっか りした建物構造になっていたことも想像できる。この建 物は特にお寺の建物の一部などになる可能性もあるので ないかと考えている。通常単独の御堂といえば方形の御 堂であるが、方形ということだけであれば5号掘立柱建 物の方が正方形に近い。いずれにしても広島県福山市の 芦田川の中州に造られた草戸千軒町遺跡のように集落の 中で御堂と墓地が一定の場所に纏まる可能性は考えられ る。時代はさらに新しくなるが、同じような例として八ッ 場ダム関連で調査された下湯原遺跡(松村・中沢2018) E 区祭祀の建物と墓地のように礎石建物や掘立柱建物の隣 に墓地が造られていたものもある。本郷鶴楽遺跡の場合 にはG1区の北隣のF区には古墳もあり、中近世に限ら ず、もっと古くから周辺一帯が神聖な場所、兆域として 認識されてきたことが窺える。だからこそ、平安時代以 降になっても墓やその関連施設が造られたのではなかろ うか。

なお、本郷鶴楽遺跡では火葬人骨は検出されなかったが、最後に多少触れておきたい。楢崎2007によれば火葬人骨の分析の結果、64基の土坑の内、63基が1個体で、

1基だけが2個体であった。複数の個体を焼くこともあるが、基本的にはその人のための施設と考えられる。性別は65個体の内男性14体(21.5%)女性16体(24.6%)、不明35体(53.8%)であり、判明した骨では女性がやや多いものの、性別による大きな差はない。死亡年齢は65個体の内何らかの死亡年齢推定が行われたのは37体であり、28体は死亡年齢不明である。年齢区分は成年(16~20歳)・壮年(20~39歳)・熟年(40~59)・老年(60歳以上)とし、これを当てはめると成年(1体)・壮年(33体)・熟年(3体)

であり、壮年が33体(89.2%)で圧倒的に多い。欧米での研究で、性別及び死亡年齢が判明している人骨から死亡年齢を判定した研究では全体的に実年齢と推定年齢との差は8.4歳±6.5歳であるという。ただ若い個体では推定年齢が高く出る傾向があり、老齢個体では推定年齢が低く出る傾向があるという。その点は注意しておく必要はあろう。



第630図 群馬県火葬遺構の土坑形態分類 (楢崎修一郎2007「群馬県出土火葬遺構」『研究紀要25』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)

# 4 竪穴建物の変遷と社会制度変革について

本遺跡では竪穴建物は、214棟調査されたが、その内 時期が判明したものは201棟(100%)あった。10世紀代の ものは175棟(87.1%)、その内前半のもの39棟(19.4%)、 中頃のもの6棟(3.0%)、後半のもの122棟(60.7%)、詳細 な判定ができないもの8棟(4.0%)、11世紀代のものは 10棟(5.0%)であった。それ以外の古墳時代6世紀1棟 (0.5%)・7世紀7棟(3.5%)、合わせて8棟(4.0%)、8世 紀4棟(2.5%)・9世紀4棟(2.0%)、合わせて8棟(4.0%) であった。時期判定できた10世紀代の167棟を100%とし て見ると前半のものは23.4%、中頃のものは3.6%、後半 のものは73.1%となる。遺跡全体の60%以上、10世紀代 の中では70%以上が10世紀後半のものとなり、圧倒的に 後半のものが多いことが分かる。0期の9世紀以前、6・ 7世紀、8・9世紀を比較してもそこまでは各調査区に わずかに散在していた状況が窺えるが、竪穴建物の棟数 にほとんど変化がないことが分かる。それが I 期の10世 紀初めになるとG3区に数棟、その後同世紀前半に10棟 程がまとまっている。重複している部分もあり、必ずし も同時存在ではないが、今までよりも増えていることは 分かる。同前半段階では遺跡全体に満遍なく配置されて いた訳ではなく、F区~G2区及びH区には数棟が散在 するが、G4区とG5区には前半のものは1棟もない。 その段階ではその場所は空き地、少なくとも宅地として は利用されていた痕跡は認められない。それがⅡ期の10 世紀後半になると急激に増大し、遺跡全体に竪穴建物が 分布するようになる。F区とG1区がやや少ないのは、 F区には古墳が、G1区には掘立柱建物があったことが 影響しているものと考えられる。古墳は墓域、聖域とし ての認識があり、掘立柱建物は建物がそのまま残ってい なくともそこにそういう建物があったということは後の 人にも認識されていたからと考えることができるのでは なかろうか。いずれにしても10世紀代に入って本遺跡調 査区外の場所から移住して来た。特に中頃~後半になる と128棟と激増したことが分かる。それがまたⅢ期の11 世紀代になるとG5区に6棟まとまるものの、G4区2 棟、H区2棟の計10棟となり、F区~G3区までは1棟 もなくなってしまう。非常に短期間に急増した竪穴建物 が短期間で激減してしまったことが分かる。当然それに

伴いそこで生活する人間も増減しているものと考えられる。本遺跡に近い遺跡で10世紀後半に竪穴建物が激減する遺跡としては同じ道路事業で調査した北側の本郷満行原遺跡他がある。単純に考えれば北側にいた人々が南側の烏川近くの台地上に移動して来たということであろうか。その理由についてはもう少し後で検討したい。

本遺跡と同様に10世紀後半に竪穴建物が急増する事例 としては前橋伊香保線の道路整備事業で調査された吉岡 町の沼南遺跡(松村和男1999『沼南遺跡』財団法人群馬県 埋蔵文化財調査事業団)でも類似した現象が確認されて いるので、ここで触れておきたい。まず沼南遺跡の周辺 を見てみると北へ130mほどのところにある同じ道路建 設関連で調査された金竹西遺跡では古墳時代後半から平 安時代前半の集落で80棟以上の竪穴建物が調査されてい る。しかし、9世紀代の建物はあるものの、10世紀代の 建物は1棟もない。さらにその遺跡の北に位置する熊野 遺跡でも9世紀末から10世紀初頭になると竪穴建物は激 減し、やがて姿を消してしまう。この時期に周辺から沼 南遺跡に移住してきたということであろう。同遺跡では 平安時代の竪穴建物の時期を大きく3時期に分けて捉え ている。Ⅰ期は10世紀前半、Ⅱ期は10世紀後半、Ⅲ期は 11世紀代である。沼南遺跡で平安時代最初に竪穴建物が 現れるのは I 期10世紀前半と言っても極初期段階のもの は無く、半ばに近い時期である。それ以前の竪穴建物は おろか、掘立柱建物も1棟もない。最初に現れた4棟は まとまることなく、一定の間隔をあけて配置されている ように見える。この遺跡での礎を築いた拠点的な竪穴建 物と考えられる。それが、次のⅡ期10世紀後半になると 竪穴建物が急増する。この時期に属すると考えられる竪 穴建物は31棟である。場所によって多少間隔の開く部分 もあるが、かなり集中する部分もある。7カ所の重複す る部分があり、2~3棟が5カ所、4棟1カ所、8棟以 上1カ所である。この場所は11世紀代の竪穴建物も含め ると13棟以上の重複となる。単純に年代幅を重複棟数で 割ると5~10年で建替していることになる。建替の方向、 動きを見ると西→東、反対に東→西、北→南、南→北と なり、重複の激しい部分ではその二つの動きが重なる部 分もある。Ⅲ期11世紀代になるとややバラける傾向が見 られるものの、依然として重複する部分もある。この時 期に属すると考えられるものは22棟である。Ⅱ期に空白

であった部分にも竪穴建物が出現する。重複する部分は7カ所あり、多いところで4~5棟で2カ所、その他は2~3棟で5カ所である。Ⅱ期で重複の激しかった部分と一部重なるところもある。5棟が少しずつ位置をずらしながらもほとんど同じ場所に建て替えしているところもある。その場所に執着する特別な意味があったものと思われる。場所を東→西にずらしながら建て替えしているところ、北→南に移動しているところもある。こうした選地の動きにはそれぞれ何らかの制約や意味があったと思われる。

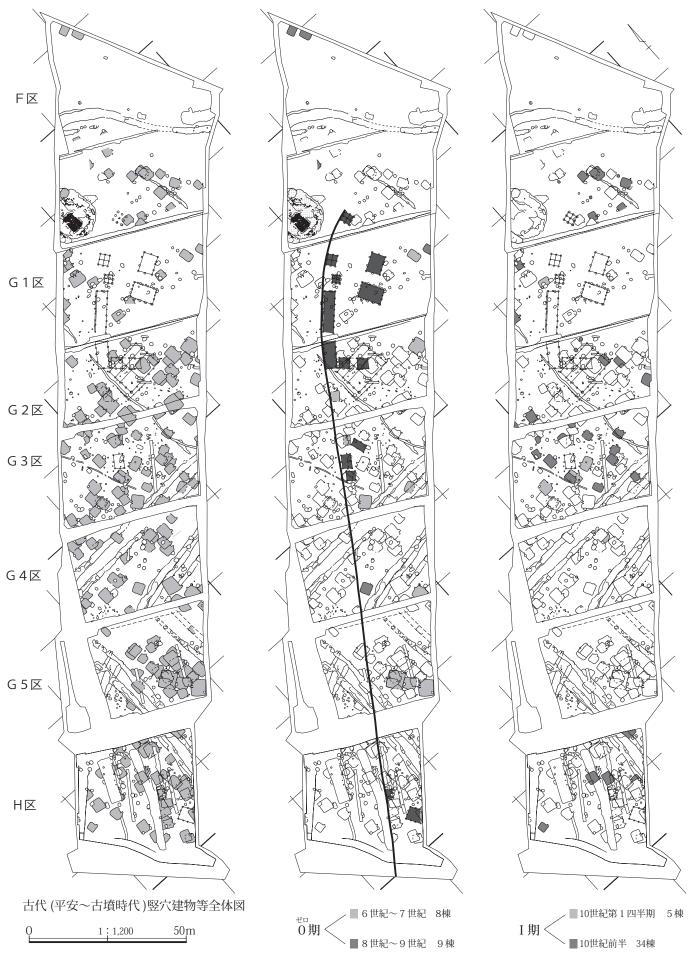
その後12世紀になると竪穴建物は1棟も遺跡内からはなくなってしまう。居住形態も変化するものと考えられ、住まいは竪穴建物ではなくなってしまう可能性があるが、遺構そのものも無くなってしまう。それまで居た人々は別の場所に移動したと考えるのが自然ではなかろうか。10世紀にこの地に移住してきた人々は11世紀末か12世紀にはまた別の場所に移住してしまったということになる。そこに人が集まる、あるいは集められるのは自然ではなく、行政的・政治的な、何か強い力が働いていたからではなかろうかと考えられる。

一般国道17号(前橋渋川バイパス)改築工事で調査された万蔵寺廻り遺跡(大西雅広・安生泰明他2011『阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)でも、竪穴建物はI期の10世紀後半から始まり、II期10世紀後半~11世紀、II期11世紀前半~中葉まで造られたと考えられる。本遺跡と違うのは10世紀前半が1棟も無く、10世紀後半になって突如現れた集落であることが分かる。しかし10世紀後半から11世紀前半の集落であり、その主体が10世紀後半であることは極めて類似している。

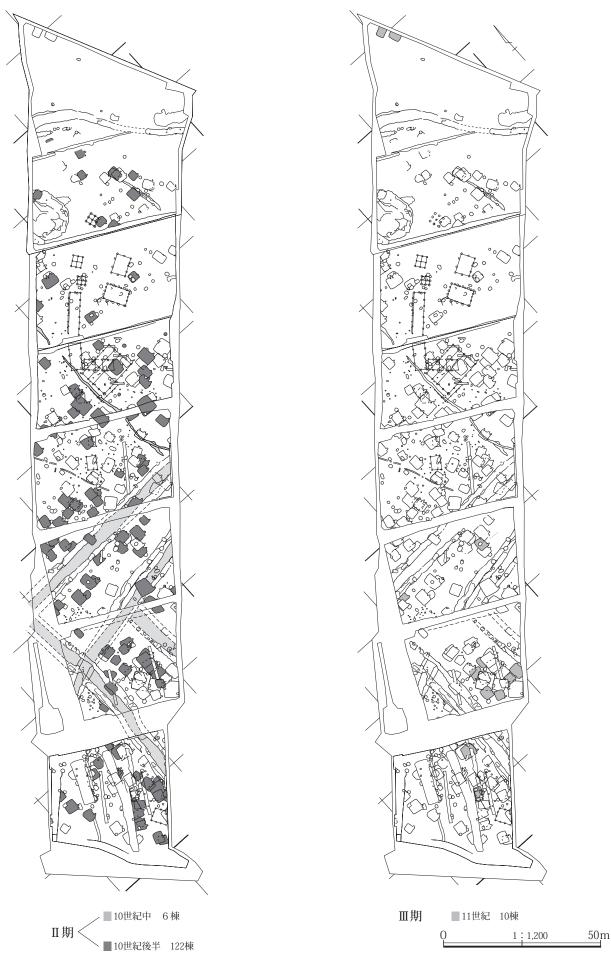
本遺跡でも同様に10世紀代になって多くの人々がやってきたことは先述したとおりである。では、なぜ烏川に近い段丘上という場所が選地されたのであろうか。そこに多くの人々が住む必要があった理由は何であろうか。調査区域内では平安時代の畑や水田は確認されていない。牧の経営や小鍛冶などを行うためという解釈もできなくはないかもしれないが、それにしては建物数が多過ぎる。多くの人々が共同してやる作業と言えば農作業が思い浮かぶ。特に畑の耕作よりも水田耕作が想像される。

畑は1人でも結構広い面積を耕作することはできるし、途中で止めても後で続けてやることもできる。水田はみんなで田植えをしてその後も毎日水の管理をしなければならない。そうした管理にも欠かせない場所、水田には近いけれどもその外にあり、しかも直ぐに行ける場所が本遺跡ではなかろうか。竪穴建物が多いとは言っても重複する部分も多く、重複していなくとも別の家であればある程度の間隔がなければお互いの建物は成立し難い。同時に存在したのはせいぜい2~30棟くらいかもしれない。しかし、それまで居住域として使用されていなかった部分に多くの人々が集まった、集められたことは容易に想像できる。

ここで手元にある日本中の教科書(石井進他2007『詳 説日本史 改訂版』株式会社山川出版社)でその辺りの記 述内容を振り返ってみたい。10世紀の初め、902(延喜2) 年には醍醐天皇が延喜の荘園整理令を出している。これ により班田の励行を行ない令制の再建を目指したが、結 局それが最後の班田の記録となり、戸籍・計帳の制度は 崩れ、班田収受も実施不可能となってしまった。そこで、 朝廷は国司に一定額の税の納入を請け負わせ、そのかわ りに一国内の統治をゆだねるように方針転換をはかっ た。国司に地方支配を任せることになった要因の一つは 他にも9世紀代から頻発した地震を初めとする自然災害 が多発したこともあると考えられている。いずれにして もこれにより国司・国衙の果たす役割は増大し、反対に 郡司・郡家(郡衙)の役割は衰えた。現地に赴任する国司 は受領(ずりょう)といわれ、現地に行かず、収入のみ受 け取ることは遙任といった。受領は必要な税金さえ納め れば後は何をやっても構わないということになり、私腹 を肥やすものが多く、その財力で官職に任命してもらう 成功や国司に重任されるものも出て来るようになった。 『今昔物語集』の信濃守藤原陳忠の話や988 (永延2)年 「尾張国郡司百姓等解」によって訴えられた藤原元命の話 はいかに受領が強欲、あるいは横暴であったかを窺い知 ることができるものである。受領は現地の田堵(有力農 民)に一定の期間田地の耕作を請け負わせ、その土地は 名(みょう)という徴税単位に分けられ、それぞれの名に は、負名(ふみょう)と呼ばれる請負人の名が付けられた。 そうしたなかで、大規模経営を行うものは大名田堵と呼 ばれた。(「田堵」の初見はこの「尾張国郡司百姓等解」で



第631図 第3面(古代)の竪穴建物等遺構配置図(1)



第632図 第3面(古代)の竪穴建物等遺構配置図(2)

ある。)11世紀後半になると受領も交替の時以外は任国に赴任せず、かわりに目代(もくだい)を国衙(留守所)に派遣し、その国の有力者が世襲的に任じられる在庁官人を指揮して政治を行うようになった。11世紀後半の1069(延久元)年後三条天皇は延久の荘園整理令を出したが、中央に記録荘園券契所(記録所)を設け、摂関家の荘園も例外なく整理対象として実施したので、成果を上げた。それ以前の荘園整理令の実施は国司に委ねられていたので、不徹底であった。

これらの記述から窺えることは、社会制度、地方支配 の在り方、徴税の方法、ひいては食料生産方式までいろ いろなことが変換したのが、10~11世紀であると捉える ことができないであろうか。また、10世紀半ば前後は清 和源氏、桓武平氏などが武士団を形成し、平将門や藤原 純友の承平・天慶の乱(935~941)があり、武士が台頭す る時代でもあった。それらの様々な社会の変革が集落の 居住の在り方まで変えたのではなかろうか。もっと端的 に言えば、現地に赴任した国司、つまり受領は自分の任 期の間に必要な租税以外に徴収したものは自分の収入に することができた。国は一定の税収さえあれば良いので あってそれさえ保証すれば後はどれだけ取れるかはその 人次第ということになる。受領になることにより自分の 収益を上げ、その一部を朝廷や神社仏閣に寄進すること によりまた収益の良い仕事に就くことができるのであ る。そのためには限られた任期の中で何とかして耕地面 積を増やして、あるいは効率を上げて収益を増やそうと するのではなかろうか。

これまでのことをまとめてみると、10世紀代になぜそこに集落がつくられたのか。本遺跡の場合、烏川に近い河岸段丘上に多くの人々が移り住んだ、あるいは集められたのは本人以外の誰か他の者にとって都合の良いことがあったからではないかと考えられる。しかし、移り住んだ本人にとってもメリットがあったからと思われる。当時の人々もあまりに取り立てが厳しければ、その土地を捨てて逃げてしまう。浮浪・逃亡は少なくとも8世紀後半にはあった。先述の教科書の中で「有力農民のなかには、経営の拡大をめざして浮浪した」という記述も出てくる。この部分は「有力農民のなかには農業経営の拡大を意図して自分から積極的に、そして計画的に移住(積極的な浮浪)する人々がいた。」ということで、本来

の登録された戸籍地から離れて他の場所に行ってしまう ということからすればこれも「浮浪」に含まれるが、その 中には富豪層を形成し、「富豪浪人」と呼ばれるものも出 てきた。国衙からしても各種の負担を負ってさえもらえ ればその行動を寛容に扱った。ということで、本郷鶴楽 遺跡にもそのような人に雇われた多くの人々が集まった のではなかろうか。川の近くに多くの家があり、多くの 人々がいるということがその栽培には都合が良く、それ が多く収穫されれば実利が大きかったからということで はなかろうか。台地の下の方が水も取り込み易いし、排 水もし易い。その分当然洪水など水の影響も受け易い が、メリットの方が大きかった。水を多く使用する栽培 作物は当然水稲であろう。調査した台地上ではむろん水 田の痕跡は確認できなかったが、台地の下の烏川沿いの 平坦な土地に多くの人々が本遺跡に移り住んだ理由が隠 れているのでないかと思われる。川に近い部分は氾濫時 に水流で削られて分かり難かったり、残っていない部分 も多いかもしれないが、広大な水田があった可能性は十 分あるのではないか。こうした大規模経営は11世紀代ま で続くが、12世紀には竪穴建物や掘立柱建物などの遺構 はほとんどなくなってしまう。丁度その時期、12世紀初 頭の1108 (天仁元)年にAs-Bが降下し、それにより埋没 した水田が多くの場所で確認されているが、その水田の 開始時期はこの頃に再開発・整備されたり、新田開発さ れたものではなかろうかと考えている。厳密にはAs-B 降下堆積物と水田面との間にわずかに堆積層が認められ ることから埋没以前に放棄されていることが分かってい る。As-B下の水田が耕作されなくなった頃とほぼ同時 に人々は他の場所へ移動し、烏川の直ぐ上の本郷鶴楽遺 跡も空白の場所となってしまう。

ところで、11世紀になると経筒を造り経塚に納めることも始まる。本遺跡でも竪穴建物内から経筒の蓋が1点出土している。調査区域外の近くに経塚があった可能性が高いのではないかと考えられる。経塚は寛弘4(1007)年、藤原道長が大和の金峯山山頂に経筒を埋納したのが始めとされる。これ以降経塚を造り経筒を埋納することが全国に広まる。ただその習慣が一般に普及し、事例が急増するのはそれから100年近くも経ってからのことである。11世紀の終わりから12世紀ということになろうか。さらに本遺跡では小男神像が1点出土しているが、こう

した銅製の小神像が見られるようになるのも10世紀代に なってからのことであり、一般的に金銅製の小神像や仏 像などの出土品が多くなるのは10世紀末から11世紀代に なってからのことであり、本遺跡の小神像もその時期の ものと考えられる。10世紀代にこれまで家がほとんどな かったところに突如として大集落が出現し、末法思想の 普及により銅製の小神像や仏像の需要が高まり、経塚が 造られる。これらのことが、全て10世紀~11世紀代のこ とであり、社会制度が変わり、宗教的にも大きな変革が あったのが、平安時代のこの時期と考えられる。地方に も経塚を造営し、小神像を求めることができる者はどの ような人々であったのであろうか。中央との結び付きが ある者で、しかも財力を持った者であり、彼らが現れた 背景にはこうした大規模な水田経営があったと考えられ る。そうした大規模経営を行う者は、はじめ「富豪の輩」、 「富豪浪人」、「浮浪人の長」などとされ、10世紀後半頃に は田堵、大名田堵と言われた有力者達である。彼らがい たからこそ末法思想の普及や経塚の造営、小神像の調達 もできたのではなかろうか。彼らのなかには単なる「浮 浪人」=農民ではなく、郡司一族に出自する在地豪族、 地方に下向した国司や王臣の末裔など土着のものもかな り含まれていたと考えられる。彼らが新しい生産の在り 方を生み出すことによって、律令制そのものを変質させ る力ともなって行ったと考えられる。本郷鶴楽遺跡では 水田そのものは確認できなかったが、10世紀代に多くの 竪穴建物が急増した原因が田堵や大名田堵と呼ばれた有 力者による積極的な水田経営にあった可能性が高いので はないかと考えられる。

# 5 古代の遺物を伴出する土坑等について

本郷鶴楽遺跡では古代のものと考えられる土坑は332 基確認された。その多くは遺物を伴っていないが、埋没 土の状況から遺物を伴うものと同様な時期と判断した。 また、新しい埋没土の中・近世と考えられる土坑から古 代の遺物が出土したものもあり、土坑の時期と遺物の時 期がズレるものもあった。そうした中で埋没土の状況と 遺物の時期に矛盾がないものを伴うものと判断した。し かし、遺物は出土したものの小破片であり、時期的な特 徴を判別ができないものもあった。ある程度時期判定で きる遺物が出土したものは火葬遺構1基を含む51基確認 された。古代の土坑全体の15.4%にあたる。なお、灰釉 陶器については伝世するものも多くあるので、本来なら ば共伴する他の遺物も含めて時期を決めるべきである が、他の遺物がない場合には灰釉陶器のみで判定するし かないので、実際の土坑の時期よりも一段階古くなって しまった可能性は否定できない。大まかな時期判定であ ることは否めないが、それでもある程度全体の傾向を把 握することはできたのではなかろうかと考えられる。以 下に各区の傾向を概観する。

F区では3基、総数51基の5.9%、区内数51基の5.9% にあたる。全体の中で見た場合もF区の中で見た場合で も割合としてはかなり少ない。G1区では15基、総数51 基の29.4%、区内数54基の27.8%にあたる。総数の約3 割、区内数でも3割弱といずれも一番多い。G2区で は5基、総数51基の9.8%、区内数46基の10.9%にあた る。総数の1割弱、区内数の1割強と両者ともほぼ1割 にあたり、F区よりは多いものの少ない方と考えられ る。G3区では13基、総数51基の25.5%、区内数64基の 20.3%にあたる。総数の1/4、区内数の1/5強とやや多い 部類に入る。G4区では4基、総数51基の7.8%、区内 数40基の10.0%にあたる。総数では1割未満、区内数の 1割とやや少ない。G5区では4基、総数51基の7.8%、 区内数24基の16.7%にあたる。総数の1割未満、区内 数の1.5割強とやや少ない。H区では7基、総数51基の 13.7%、区内数53基の13.2%にあたる。総数の1.5割 弱、区内数の1.5割弱とやや少ない。時期的に見ると9 世紀以前は4基、総数の7.8%であり、7世紀前半が2 基、9世紀代が2基である。10世紀前半は21基、総数の 41.2%、10世紀後半は24基、総数の47.1%であり、両者 を足すと10世紀代は45基、総数の88.3%と9割弱となる。 11世紀代は2基、総数の3.9%と非常に少ない。10世紀 代のものが9割近くを占め、その前後が少ないという傾 向が窺えた。区毎に見てみるとF区では3基すべて10世 紀前半のものであり、他の時期のものは無い。竪穴建物 では10世紀前半のものもあるが10世紀後半のものの方が やや多い。土坑の場合には遺物を伴わないものの方が遥 かに多いので、それらの中に10世紀後半のものが含まれ ている可能性は考えられる。G1区では15基のうち7世 紀前半1基、10世紀前半5基、同後半8基、11世紀代1 基である。10世紀代が多く、その中でも10世紀後半が前

# 第5章 調査成果のまとめ

# 第4表 本郷鶴楽遺跡古代の遺物出土土坑・ピット一覧表

区	No.	時期	位置	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	備考	時期等	9世紀 以前	10世紀 前半	10世紀 後半	11世 紀代	土坑数	総数割合	区中の 割合
F区3面	20号土坑	3面	X=775 Y=-838	楕円形	皿型	100	76	17	N -4° -W	須恵器羽釜片	10世紀前半		1					
F区3面	33号土坑	3面	X=765 Y=-834	長方形	鍋型	94	80	22	N -30° - E	須恵器羽釜片	10世紀前半		1					
F区3面	45号土坑	3面	X=764 Y=-823	楕円形	皿型	95	90	11	N -35° - E	須恵器羽釜片	10世紀前半		1			3	5.9%	5.9%
G1区3面	101号土坑	3面	X=736 Y=-837	楕円形	鍋型	139	116	35	N-28°-W	灰釉陶器椀・花瓶片か。	大原2号窯式期10世紀前半・ 9世紀代か		1					
G 1区3面	103号土坑	3面	X=737 Y=-845	楕円形	鍋型	120	95	34	N -84° -W	須恵器杯身片	7世紀前半	1						
G1区3面	104号土坑	3面	X=746 Y=-837	円形	すり鉢型	70	69	51	N -65°-W	灰釉陶器椀・須恵器杯・椀・ 羽釜破片	10世紀代・前半		1					
G 1区3面	106号土坑	3面	X = 742 Y = -864	隅丸長方 形	すり鉢型	113	83	81	N-86°-W	須恵器杯・椀・羽釜片等多数	10世紀後半			1				
G 1区3面	107号土坑	3面	X = 746 Y = -844	隅丸方形 +張出 部?	Ⅲ型	151	112	19	N -87° - E	火葬遺構。灰釉陶器段皿・須 恵器椀片、全面炭化物、火葬 土坑?骨片ほとんど無し。東 日本タイプ	10世紀代・前半		1					
G 1区3面	115号土坑	3面	X = 753 Y = -853	不整形	鍋型	151	84	31	N-10°-E	柱穴?須恵器椀片。	10世紀後半か			1				
G 1区3面	117号土坑	3面	X = 747 Y = -855	円形	鍋型	104	98	23	N -32° - E	須恵器椀片。	11世紀代後半か				1			
G 1区3面	149号土坑	3面	X=747 Y=-866	不整形	鍋型	93	69	23	N -72° - E	須恵器羽釜・灰釉陶器皿片。	10世紀代・前半		1					
G 1区3面	150号土坑	3面	X=754 Y=-864	不整形	すり鉢型	135	(101)	89	N -88° - E	須恵器杯・椀・羽釜片。	10世紀代・後半			1				
G 1区3面	153号土坑	3面	X=741 Y=-866	楕円形	皿型	97	85	21	N -76° - W	須恵器杯片。	10世紀第4四半期			1				
G 1区3面	154号土坑	3面	X = 754 Y = -837	楕円形	皿型	90	85	20	N -36° - E	須恵器壺・椀片等	10世紀前半		1					
G 1区3面	160号土坑	3面	X=754 Y=-866	方形	すり鉢型	122	105	49	N -29° - W	須恵器杯・椀・羽釜・灰釉陶 器椀片多数	虎渓山1号窯式期・10世紀後 半			1				
G1区3面	161号土坑	3面	X=752 Y=-861	楕円形	鍋型	88	75	31	N -46° - E	礫・須恵器椀・羽釜片	10世紀後半			1				
G1区3面	163号土坑	3面	X=741 Y=-866	方形	鍋型	67	63	22	N -63°-W	須恵器椀片。	10世紀後半			1				
G 1区3面	384号土坑	3面	X = 766 Y = -866	長方形	すり鉢型	123	91	85	N -7° - E	須恵器杯か椀片。	10世紀後半			1		15	29.4%	27.8%
G 2区3面	121号土坑	3面	X = 728 Y = -863	楕円形	すり鉢型	120	104	59	N -59° -W	須恵器甕・椀・灰釉陶器椀・ 黒色土器椀片等	虎渓山1号窯式期・10世紀後 半か			1				
G 2区3面	129号土坑	3面	X=733 Y=-870	楕円形	鍋型	121	103	26	N-7°-W	須恵器羽釜・灰釉陶器片。	大原2号窯式期		1					
G 2区3面	130号土坑	3面	X=734 Y=-867	円形	すり鉢型	120	116	47	N -14° - E	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期		1					
G 2区3面	245号土坑	3面	X=731 Y=-863	楕円形	すり鉢型	146	100	54	N-66°-W	緑釉陶器稜椀片。	東海産9世紀代	1						
G 2区1面	271号土坑	1面	X = 723 Y = -852	長方形	すり鉢型	252	61	50	N-47°-W	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期							
G 2区3面	275号土坑	3面	X=716 Y=-861	楕円形	皿型	58	54	13	$N-45^{\circ}-W$	灰釉陶器椀片。	大原2号窯式期		1			5	9.8%	10.9%
G 3区3面	200号土坑	3面	X=700 Y=-890	隅丸長方 形	鍋型	131	96	20	N-3°-W	火葬遺構。120竪穴建物に後出。 灰釉陶器段皿片。	大原2号窯式期		1					
G3区3面	216号土坑	3面	X = 690 Y = -893	楕円形	すり鉢型	85	69	47	N −7° − E	須恵器椀・灰釉陶器椀?皿? 壺or鉢片。	光ヶ丘1号窯式期(古)	1						
G3区3面	217号土坑	3面	X = 702 Y = -910	方形	すり鉢型	70	67	42	N -77° - E	灰釉陶器椀片。	虎渓山1号窯式期か			1				
G3区3面	220号土坑	3面	X = 711 Y = -889	楕円形	皿型	145	80	16	N-4°-E	灰釉陶器椀片。	虎渓山1号窯式期			1				
G3区3面	221号土坑	3面	X=715 Y=-894	方形	皿型	97	94	11	N -78° - E	灰釉陶器椀片。	大原2号窯式期		1					
G3区3面	225号土坑	3面	X=696 Y=-909	楕円形	皿型	97	93	16	N −27° − E	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期		1					
G3区3面	251号土坑	3面	X=697 Y=-891	楕円形	皿型	(88)	(41)	20	N -38° - E	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期		1					
G 3区3面	252号土坑	3面	X=717 Y=-907	楕円形	鍋型	124	101	28	$N-4^{\circ}-W$	須恵器椀・灰釉陶器椀片。	大原2号窯式期		1					
G 3区3面	255号土坑	3面	X=706 Y=-915	楕円形	皿型	92	87	15	N -78° -W	灰釉陶器椀・段皿片。	大原2号~虎渓山1号窯式期			1				
G 3区3面	258号土坑	3面	X=704 Y=-914	楕円形	鍋型	149	104	30	N -76° - E	259土坑に後出。須恵器椀片。	10世紀前半		1					
G 3区3面	259号土坑		X = 705 Y = -915	楕円形	鍋型	125	117	30	N-2°-W	258土坑に先行。須恵器椀・羽 釜・灰釉陶器椀片。	虎渓山1号窯式期・10世紀 代・後半			1				
G 3区3面	262号土坑	3面	X=707 Y=-871	不整形	すり鉢型	(95)	(45)	81	N -83°-W	須恵器羽釜片。	10世紀前半		1					
G 3区3面	284号土坑	3面	X=702 Y=-886	楕円形	鍋型	130	97	32	N −85° − E	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期		1			13	25.5%	20.3%
G 3区3面	286号土坑	3面	X=706 Y=-887	隅丸長方 形	皿型	216	106	13	N -28°-W	須恵器甕・壺片。	平安							

# 5 古代の遺物を伴出する土坑等について

区	No.	時期	位置	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	備考	時期等	9世紀 以前	10世紀 前半	10世紀 後半	11世 紀代	土坑数	総数割合	区中の 割合
G 4区1面	353号土坑	1面	X=680 Y=-924	長方形	すり鉢型	225	64	92	N-42°-W	灰釉陶器皿片。	大原2号窯式期							
G 4区3面	370号土坑	3面	X =685 Y =-925	楕円形	皿型	120	110	20	N-5°-W	土師器杯片。	7世紀前半	1						
G 4区3面	371号土坑	3面	X=695 Y=-926	楕円形	すり鉢型	77	69	40	N - 16° - E	須恵器羽釜片。	10世紀前半		1					
G 4区3面	374号土坑	3面	X=662 Y=-903	楕円形	鍋型	116	102	22	N -83°-	須惠器椀片。	10世紀後半			1				
G 4区3面	404号土坑	3面	X=679 Y=-932	長方形	鍋型	(109)	134	28	N-11°-W	須惠器椀片。	10世紀後半			1		4	7.8%	10.09
G 5区3面	291号土坑	3面	X=646 Y=-917	楕円形	皿型	121	105	17	N -8°-W	35溝に先行	10世紀後半			1				
G 5区3面	400号土坑	3面	X=647 Y=-914	楕円形	皿型	139	(67)	16	N -42° - E	須恵器椀・甕片。	10世紀後半			1				
G 5区3面	412号土坑	3面	X=656 Y=-924	不整形	鍋型	(119)	133	32	N -52°-W	196竪に後出。須恵器無台椀・ 羽釜片。	10世紀後半			1				
G 5区3面	451号土坑	3面	X=646 Y=-927	隅丸長方 形	すり鉢型	105	67	57	N -88° - E	須恵器杯・椀片。高足高台。	10世紀後半か			1		4	7.8%	16.7%
H区3面	95号土坑	3面	X=628 Y=-965	楕円形	皿型	165	85	18	N -9° - E	須恵器杯・羽釜片・灰釉陶器片。	10世紀代・後半			1				
H区3面	98号土坑	3面	X=634 Y=-961	楕円形	鍋型	223	215	37	N-88°-W	小形杯	11世紀代前半				1			
H区3面	181号土坑	3面	X=615 Y=-968	方形	すり鉢型	79	75	51	N-1°-W	貯蔵穴?須恵器椀・瓶片・緑 釉陶器椀片。緑釉陶器は東海 産か。	8・9・10世紀代か							
H区3面	184号土坑	3面	X = 622 Y = -955	楕円形	すり鉢型	117	71	50	N -66°-W	墓坑?須恵器椀片・楕円形礫。	10世紀後半			1				
H区3面	192号土坑	3面	X=629 Y=-938	楕円形	鍋型	119	99	36	N -79° -W	須恵器無台椀・椀片。	9世紀代・10世紀後半			1				
H区3面	194号土坑	3面	X = 625 Y = -939	不整形	皿型	(105)	(53)	18	N -39° - E	須恵器椀底部片。	10世紀前半		1					
H区3面	302号土坑	3面	X=618 Y=-746	楕円形	すり鉢型	98	93	73	N-46°-W	須恵器椀片。	10世紀後半			1				
H区3面	303号土坑	3面	X=630 Y=-963	隅丸方形	鍋型	161	135	29	N-1°-W	須恵器椀・甕片。	10世紀後半			1		7	13.7%	13.29
												4	21	24	2	51	100.0%	
												7.8%	41.2%	47.1%	3.9%	100.0%		

区	No.	調査面	位置	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	備考	時期等
G2区	ピット5	3面	X = 722 Y = -850	楕円形	109	100	37	N -55° - E	黒色土器椀片。	
G 2区	ピット62	3面	X = 708 Y = -865	楕円形	35	28	38	N-21°-W	須恵器椀片。	
G3区	ピット45	3面	X = 719 Y = -900	楕円形	52	45	22	N -57° - E	灰釉陶器椀片。	大原2号~虎渓山1号窯式期
G 3区	ピット48	3面	X = 714 Y = -905	楕円形	40	32	58	N -53° - E	灰釉陶器短頸壺片。	窯式期不明。平安前期。
G 5区	ピット205	3面	X = 661 Y = -932	楕円形	55	46	25	N-12°-W	須恵器椀片。	
G 5⊠	ピット248	3面	X = 645 Y = -926	楕円形	49	37	23	N-18°-E	須恵器椀片。	

半よりも多い。竪穴建物とほぼ同様な傾向が認められた。 G2区では5基のうち、9世紀代1基、10世紀前半3基、 10世紀後半1基である。10世紀前半がやや多い結果になっ たが、他に時期判定できないものが多くあり、その中に 後半のものが多く含まれる可能性も考えられる。G3区 では13基のうち、9世紀代のもの1基、10世紀前半が8 基、同後半が4基である。11世紀代は1基も無い。G3 区は10世紀後半の竪穴建物もあるが、10世紀前半の竪穴 建物が本遺跡の中では特に多く見られる調査区である。 土坑も竪穴建物とほぼ同様な傾向が認められた。 G4区 は4基のうち、7世紀前半1基、10世紀前半1基、同後 半2基である。竪穴建物では10世紀後半が多い調査区で あるが、遺物を伴わない土坑の中に10世紀後半のものが 含まれている可能性が考えられる。G5区では4基全て が10世紀後半である。竪穴建物では10世紀前半もあるが、 10世紀後半が多い調査区であった。竪穴建物と土坑はほ ぼ同様な傾向が認められた。H区では7基のうち、10世 紀前半が1基、同後半5基、11世紀代1基である。竪穴 建物では10世紀後半が多く、竪穴建物と土坑でほぼ同様 な傾向が認められた。

以上のように竪穴建物が多く造られた時期にその時期の土坑が多く造られた可能性が認められた。全てではないが、ある程度竪穴建物と土坑が比較的近くに位置し、セット関係がある可能性も否定できない。土坑の用途としては屋外の貯蔵施設などが一般的に想定されるが、場合によると極一部に墓穴なども含まれている可能性も考えられる。

遺物が伴出した土坑の平面形状は楕円形が多く隅丸方形や隅丸長方形なども含まれるが、一部に張り出しを持つ火葬遺構も含まれている。火葬遺構は土坑番号を付して調査されており、内部が焼けて赤っぽく変色していたり、炭化物の堆積層が認められたものを抽出したので、必ずしも100%抜き出せたとは限らない。隅丸長方形のものの極一部に墓坑が含まれている可能性も否定できない。断面の形状は浅いものが多く、皿形もしくは鍋形を呈するものが多い。上が開く擂鉢形を呈するものもある。必ずしも確認した時点で浅いものが最初から浅かった訳ではなく、後に上側が削平されたために確認した段階では浅くなってしまった可能性が高い。大きさは長軸150cm超え、短軸も130cm超えの大形のものもあるし、長軸

70cm程、短軸70cm以下の比較的小形のものもある。大きさは様々である。深さは10cm程の浅いものから90cm近い深いものまでかなりの幅がある。大きさや深さと遺物の有無に特定の傾向は確認できなかった。

以上遺物が確認された土坑類の傾向をまとめてみると土坑の中には竪穴建物とほぼ同時にセット関係を持って存在した可能性があるものが一定数あることは確認できた。遺物の有無と土坑の形態や規模にはそれほど明確な相関関係は認められなかった。また、時期判定の材料となるものが灰釉陶器しかない土坑も多く含まれており、その場合には灰釉陶器は他の椀や皿よりも大事に使用され、それぞれが伝世していたとすれば遺構の年代観も若干ズレてくる可能性も考えられる。それぞれが25~50年程新しくなるとすればより10世紀後半のものや11世紀代のものが増えてくる可能性も考えられる。竪穴建物よりも時期判定できる遺物が少ないので限界はあったが、10世紀代の土坑が多く、その中でも後半のものが多いという全体の傾向は把握できたのではないかと考えられる。

### 6 墨書土器について

本郷鶴楽遺跡では墨書土器30点、刻書土器2点が確認 された。時期的には9世紀末から11世紀初めまでのもの があるが、判読できたのはほとんどが10世紀代のもので あり、それ以外は9世紀第4四半期~10世紀第1四半期 の1点のみであった。11世紀代のものは判読できなかっ た。9世紀第4四半期~10世紀第1四半期のものはF区 で確認された2号土坑墓で出土した「杯」に書かれた「井」 という文字であった。この土坑墓からは他に10世紀初め の椀も出土しており、遺構としては9世紀末~10世紀初 めのものと考えられる。G3区の竪穴建物からは「清」3 点、「大清」1点、「水」1点が確認された。H区からは「清」 1点が確認された。それらはいずれも10世紀の第1四半 期~第2四半期のものであり、10世紀前半と考えられ る。10世紀前半では「水」に関連するものが多い傾向が窺 える。10世紀後半では、G2区の竪穴建物から「年」1点、 「田」1点、「寺●」の朱墨の墨書1点が、G4区では「吉」 1点、「雲|1点の墨書が、H区からは「水|1点、「田|2 点の墨書が確認された。後半になると水に関連しつつも 「田」や「年」(みのり)など水田の豊作を祈ることに関連 するものが多くなってきているように思える。11世紀に

なると墨書土器はあるものの、判読できたものは無くこうした傾向は不明である。なお、刻書土器は10世紀第3四半期の189号竪穴建物から2点出土したが、その内1点は羽釜の口縁部に「大」、もう1点は羽釜の底部に「十」が刻まれていた。やや様相の異なるものであり、椀や杯の墨書には無い文字であった。

墨書土器の出現と隆盛、衰退と消滅も集落拡大と縮小に伴って変動していることが推定される。10世紀前半では竪穴建物がまとまって出現するG3区から多く確認されたが、後半になるとG3区からの確認は無くなり、G2区・G4区・H区からの確認だけになる。このように集落の拡大と共に多く書かれるようになり、また集落の縮小と共に墨書土器も少なくなっていく。あまり直接的に結び付けることに危険性はあると思うが、書かれている文字は「水」や「田」に関連するものが多く、それはまさにこの集落の性格を明確に表しているように思える。

# 墨書土器一覧

### 竪穴建物

(大)清 5点 10世紀前半

**水?** 2点 10世紀前半1点、後半1点

田 3点 10世紀後半

**年** 1点 10世紀後半

**吉** 1点 10世紀後半

雲 1点 10世紀後半

**寺** 1点 10世紀後半

**尻** 1点

計15点

不明 14点

### 土坑墓

井 1点 9世紀末~10世紀初め

#### 刻書土器

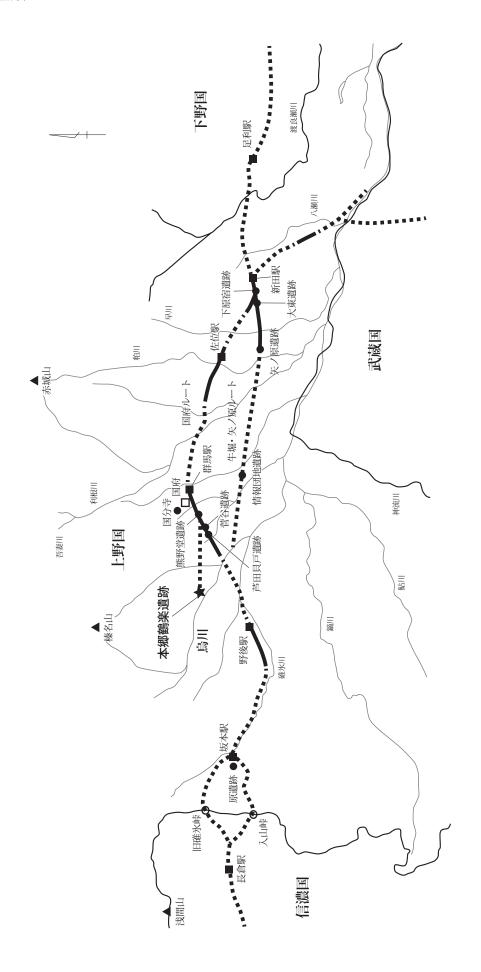
**大** 1点 10世紀後半

**十** 1点 10世紀後半

# 7 道について

 られるが、溝に別の番号がふられていたことと間が途切れることから便宜上別番号を付した。

新村出編1983『広辞苑第三版』岩波書店によれば、み ち「道・路・途」には①人や車などが往来するための所。 通行する所。道路。通路。②目的地に至る途中。③みち のり。距離。④人が考えたり行なったりする事柄の条理。 ⑤特に儒教や仏教などの特定の教義。⑥道理をわきまえ ること。分別。⑦手だて。手法。手段。⑧方面。そのむ き。⑨足場。踏台。などの意味があるという。発掘調査 においてはその場所に残された遺構であるので、この中 では①に当たることは自明の理であろう。しかし、「道」 はただ単に人が往来、通行する所というだけでなく、「物」 を運ぶ所であり、物は人が運び、その人は物を運ぶだけ でなく、物を通して技術や文化を伝え、情報を伝える。 道が物や技術・文化・情報を伝える重要な流通経路であ るということができるのではなかろうか。例えば、灰釉 陶器を考えてみても灰釉陶器を作るためには技術・文 化・情報と共に資源の豊富な場所が必要であり、資源と は陶土(造るための粘土)・森林(焼くための木材)・水資 源である。そういう場所に窯場は造成されていく。それ はむやみやたらに広がっていった訳ではなく、東山道沿 いの地域に伝播していったことが知られている。人々が 新しい情報・文物・技術・習慣・文化を受け入れていく のには道が重要な役割を果たしていたと考えられる。今 のようにインターネットで何でも伝わるのではなく、当 時は中央の情報や文化が地方に伝播し、地方の物が中央 に伝わるには物が運ばれ、人が動いて初めて伝わる。そ の意味では道の存在意義は大きいと言える。群馬県内を 通っていた古代の官道は「東山道」である。東山道には従 来から知られていた「国府ルート」とその後新たに知られ るようになった「牛堀・矢ノ原ルート」の2本の駅路が明 らかになっており、更に後者には約500m北側にほぼ平 行する下新田ルートもあることが分かってきた。「牛堀・ 矢ノ原ルート」については両側溝の心心距離で幅12.6~ 13.7m、平均で12m以上あり、規模の大きい整然と整備 された立派な道と考えられている。しかし、国府を通ら ず、矢ノ原遺跡から情報団地遺跡を通るとすればかなり 南側をバイパスのように直線で西に抜けてしまうことに なる。途中で駅路から外れた国府と駅路を結ぶ支線(支 路)を造って繋げる場合もないことはないが、東山道駅



路は国府と国府を繋ぎ都まで通っていた道とすればその機能を十分果たしていないことになってしまう。また、存続期間が7世紀第3四半期~8世紀第2四半期、つまり7世紀後半~8世紀前半ということは国府が整備され完成する時期には廃絶されていたことになり、国府とは直接関係のない時期に造成された道となってしまう。さらに『群馬町誌通史編上』2001によれば約30里(16キロメートル)ごとに置かれたはずの「駅家も設置されたとは見做しがたいならば、駅路と称することはできないだろう。」とされ、道としては立派なものであるが、駅路としては若干の疑問が残るものである。

「国府ルート」は両側溝を持ち、路面幅は平均4~5m程、心心距離でも幅6~8m前後と「牛堀・矢ノ原ルート」のおよそ半分、存続時期は9世紀中頃~12世紀As-B降下前後頃、場所によると14世紀、中世まで存続するものである。こちらは駅路と想定した場合には、国府を通ることや整備された時期にも矛盾はない。東山道武蔵路の例などから奈良時代の駅路は当初12mと幅広であった道幅が平安時代になると規模が縮小され、9~6mとなったことも確認されている。古いものの方が幅広で、新しいものの方が狭くなっているという点は共通している。当初国内外の人々に朝廷の権力を見せ付けるために幅広の直線道路を造ったという側面は大きかったが、それ程人の往来も頻繁ではなく、管理も大変であることなどから時代とともに実情に見合うものになっていったものと考えられる。

当時地方では「駅路」以外に郡家や主要な集落などを結ぶ「伝路」も整備されたことが知られている。今の道に照らし合わせれば、むろん例外はあるものの「駅路」が一桁・二桁国道(直轄国道、旧一級国道)だとすれば、三桁国道(補助国道、旧二級国道)・県道(都道府県・政令指定都市管理)に相当するのが「伝路」であろうか。本遺跡では「東山道」は確認されていないが、それよりもやや規模の小さい道が確認されている。ほぼ南北に走行する2号道と6号道、ほぼ東西に走行する5号道と東西方向ではあるがやや斜めに走行する3・4号道がある。2号道と5号道は延長すると調査区の直ぐ北側で直交することが想定できる。並走する道は時期的にはあまり大きい差は無いと思われるが、同時に存在したとは考え難く2号道は6号道の、5号道は3・4号道の造り変えと考えられる。

3号道は側溝が3本あり、溝の断面から6m→4mの幅に縮小したことが判明した。これらの溝心心幅4~6mの道は東山道駅路国府ルートには及ばないものの、その次に位置するもので3号道を東に延長すると熊野堂遺跡もしくは菅谷遺跡の辺りで国府ルートに繋がるものと考えられる。一部で全体が確認できていないので明確ではないが、これらのかなり道幅の狭い1号道以外の2~6号の両側溝が付く道が「伝路」に相当する可能性が考えられるのでなかろうか。東山道駅路や伝路を通して経塚を造ることや神像を祭ることなど都の習慣や文物などが伝わった可能性が高いと考えられる。

#### 参考文献

山崎義男1958「上信国境「入山峠」祭祀遺物について」『考古学雑誌』第43巻第1号 群馬県教育委員会1977『十三宝塚遺跡発掘調査概報Ⅲ』

高崎市教育委員会1979『矢島遺跡・御布呂遺跡・圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査概報-』高崎市教育委員会1979『寺ノ内遺跡・圃場整備事業に伴う浜川遺跡群の調査概報(2) -』

新田町教育委員会1981『入谷遺跡-建令期の万葺建築遺構の調査-』

境町教育委員会1981『十三宝塚遺跡発掘調査概報IV』

高崎市教育委員会1982『正観寺遺跡群(IV)-正観寺町諏訪巡り・村北・八本木地区の調査略報-』 軽井沢町教育委員会1983『入山峠』

坂井隆1984「道路状遺構と推定東山道について」『熊野堂遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化 財調査事業団

須田 茂1984「入山峠祭祀遺跡と東山道碓氷峠-山崎義男氏発掘資料の再検討-」『群馬文化』 198号

十三宝塚遺跡発掘調査団1987『十三宝塚遺跡第6次発掘調査』

新田町教育委員会1987『入谷遺跡Ⅲ』

群馬町教育委員会1987『推定東山道-群馬町中泉・福島・菅谷地区を中心とする遺構確認調査-』 群馬町教育委員会1988『西浦南遺跡-群馬町都市計画事業南部土地区画整理事業に伴う発掘 調査の概要-』

小宮俊久1990「新田町市宿通遺跡の古代道路状遺構」『群馬文化』223号

水田 稔1991「群馬県碓氷郡松井田町「原遺跡で発見された掘立柱建物」について」『考古学 ジャーナル』332号

下新田遺跡発掘調査団・新田町教育委員会1992『群馬県新田町下新田遺跡発掘調査報告書』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区』

長井欣次1994「高崎情報団地の古代道路遺構」『古代交通研究』第4号

坂爪久純1995「上野国の古代道路」『古代文化』第47巻第4号

坂爪久純1996「上野国の東山道駅路-最近の発掘調査から-」財団法人古代学研究所東京支所 第1回シンポジウム資料『東山道をさぐる』

坂爪久純1997「上野国の東山道駅路」『古代文化』第49巻第8号

小池浩平2000「東山道駅路に関する一考察 武蔵路の設置意味について」群馬県立歴史博物 館紀要第21号

群馬県立歴史博物館2001第70回企画展図録『古代のみち-たんけん!東山道駅路-』

坂井隆2001「「あづま道」と東山道」『小八木志志貝戸遺跡群 2 小八木志志貝戸遺跡・正観寺西原遺跡・菅谷石塚遺跡 II 古墳時代編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

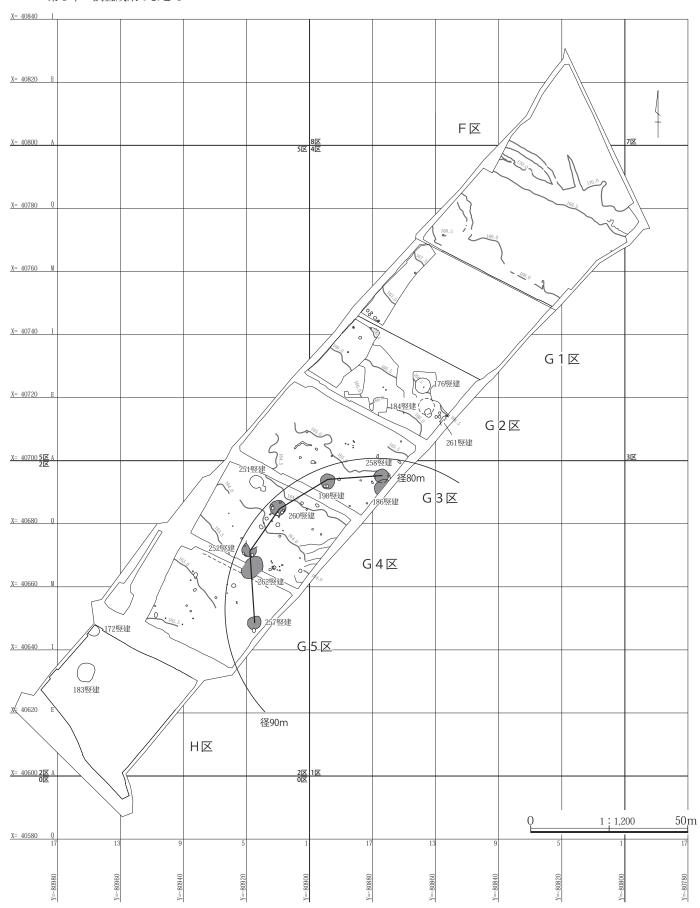
群馬町誌編纂委員会2001『群馬町誌 通史編上 原始古代 中世・近世』

群馬町誌編纂委員会2001『群馬町誌 資料編1 原始古代 中世』

第5表 3面G区2~6号道計測表

2~6号両側溝道							
両側溝道	走行方向	溝幅m	溝深さcm	路面幅m	溝心心幅m		
2号道	N- 1 °-W N- 1 °-E	1.4~2.5	13~36	2.3~3.6	5		
3号道	N-78° -E	1~2	11~31	2.2~2.8	$6 \rightarrow 4$		
4号道	N-70° -E	1~2	6~20	1.9~4.2	4~4.5		
5号道	N-87° -E	1.3~2.4	10~36	2.7~4.4	$4\sim5$		
6号道	N-2°-W	0.5~1.8	6~12	3 ?	5 ?		

第5章 調査成果のまとめ



第634図 縄文時代竪穴建物等遺構配置図

# 8 縄文時代の竪穴建物配置について

本郷鶴楽遺跡では中期後葉~後期初頭の竪穴建物が13 棟確認された。加曽利EⅢ式期を中心にEⅡ式~EⅣ式 期までの幅があった。中でも加曽利 E Ⅲ式期の竪穴建物 は環状もしくは弧状に並ぶことが予想された。縄文時代 中期に於いては環状集落を形成することが一般的に知ら れている。かつて私は沼南遺跡の報告書の中で県内外の 中期の代表的な16遺跡の遺構配置を集成して分析をした ことがある(松村和男1999『沼南遺跡』財団法人群馬県埋 蔵文化財調査事業団)。その中では竪穴建物の配置だけ でなく、地形の特徴を生かした全体の遺構配置や土坑に ついてのまとまりや配置に特徴があることに着目し、そ れぞれの遺跡の特徴について比較検討を加えた。その結 果、加曽利EI式古段階あるいはEI式新段階に環状と なり、最盛期を迎えるのがEII式段階もしくはEIII式段 階で、早いところではEⅢ式段階、遅いところでもEⅣ 式段階には環状ではなくなる。多少のズレはあるものの、 概ね加曽利E式土器の始まりと共に環状集落ができ始 め、加曽利E式土器の終焉と共に環状集落も終わりを迎 えることが分かった。また、土坑は沼南遺跡などのよう にいくつかの土坑が方形や環状のまとまりを呈するもの があることも分かった。しかし、あくまで可能性として ではあるが、全般的な遺構の少なさからすると中央が空 洞になる後者になる可能性の方が高いのかもしれない。 今回の集落の中心をなす竪穴建物であるが、G3~G5 区に配置される7棟の建物によって構成される。G3 区の186・190・258号竪穴建物、G4区の252・260・G4 ~ G 5 区262号竪穴建物、G 5 区の257号竪穴建物であ る。それぞれの建物の中心同士の距離を計測したところ、 186号竪穴建物と190号竪穴建物の間は18m、190号竪穴 建物と258号竪穴建物の間は18m、186号竪穴建物と258 号竪穴建物は重複している。190号竪穴建物と260号竪穴 建物の間は18m、260号竪穴建物と252号竪穴建物の間は 17m、252号竪穴建物と262号竪穴建物の間は無く隣接す る。262号竪穴建物と257号竪穴建物との間は18mである。 竪穴建物同士の間隔は重複または隣接しているところ以 外は20m弱、17~18mであった。それぞれの間はきちん とした一定間隔で保たれており、ほぼ規則正しく並んで いるように見えることが分かった。その外側には G 2 区 では176・184・261号竪穴建物があるが、176号竪穴建物 と184号竪穴建物の間は7m、184号竪穴建物と261号竪 穴建物の間は8mと環状に配置される竪穴建物の間隔と 比べるとかなり近い。G4区では251号竪穴建物が260号 竪穴建物の北西側にあるが、その間隔は10mであり、や はり環状に並ぶ建物の間隔よりも狭い。G2区の3棟の 竪穴建物とG4区1棟の柄鏡形敷石竪穴建物は中心とな る径80~90mの環状線よりも外側に位置するが、径160 mの環状線を引けばその間に入ることが分かる。さらに H区では172号竪穴建物と183号竪穴建物があるが、両者 の間隔は14mであり、やはり環状に並ぶ建物の間隔より もやや狭くなっている。この2棟はさらに外側に径200 mの線を引くと径160mとの間に入ることになる。中心 の環状の外側に2重、3重の環状になるように配されて いた可能性も否定できない。これら6棟はこの環状に並 ぶ一群から外側に外れるものの時期的には加曽利EⅡ式 やEⅢ~EIV式、EIV~称名寺式期であり、やや古いか 反対に新しいかであったり、もしくはEⅢ式期でも炉体 土器に「郷土式」土器が使用されていたりとわずかに時期 や型式など違う要素が含まれるものであった。同じ中期 でも時期や土器系統が微妙に違う竪穴建物の場合には同 じ環状線上に綺麗に並ばない可能性が考えられる。竪穴 建物と土坑・ピット類との配置関係は全体が把握しきれ たとは言い切れていないのが現状ではあるが、それ程極 端に増えることも考え難いので、それらの集中する部分 が径80~90mの中心部に来ることはあっても、外側に来 ることはないと考えられる。また、列石は時期的には大 差ないと考えられるものの、中心となる径80~90mの環 状の外側に位置し、向きは北西-南東で環状というより も直線的な配置であり、竪穴建物と近い部分もあるが、 配置の上からは環状集落との直接的な関係は不明である と言わざるを得ない。

今後環状が想定される東側などの隣接地を調査することがあれば本遺跡の縄文集落の全体構造がより明らかになっていくことが予想される。今後の調査成果に期待したい。

### 9 出土縄文土器について

ここでは、本遺跡より出土した縄文土器を概観してお きたい。 本郷鶴楽遺跡では、縄文時代中期後葉の集落を調査している。竪穴建物13棟、埋設土器2基、列石2条、土坑50基などを数え、大規模集落ではないものの中期後葉の資料を中心にした良好な様相を示している。本遺跡が位置する旧榛名町内では高浜広神遺跡や三ッ子沢中遺跡が中期後葉~末葉の拠点的な集落として知られており、また小規模集落遺跡としては叉倉遺跡や根小屋遺跡などが調査されている。

本遺跡及びその周辺も同様な性格が想定されよう。本 遺跡の縄文時代に比定される出土土器は前期後葉や中期 中葉、後期前葉の土器片が数点見られるが、多くは中期 後葉の加曽利EⅢ式を中心として、中期末葉~後期初頭 までの土器で占められる。

各竪穴建物出土土器のうち幾つかを個体図示した資料の中からやや恣意的に抽出し、第635図と第636図に掲載した。縮尺は1/8を基本とし、器台は1/6とした。

#### (加曽利 E Ⅱ 式段階)

加曽利 E II 式段階の竪穴建物として、172号竪穴建物 1 棟が挙げられる。残存状態も良くなく出土遺物量も少ないため 2 個体を図示したが、大木式の影響を受けた鉢(第635図1)や口縁部下より体部隆線懸垂文が直接派生する深鉢(2)が出土している。大げさな表現だが本遺跡縄文時代最初の居住者と位置付けられよう。

# (加曽利 E Ⅲ式段階)

本遺跡の縄文時代遺構と出土土器で充実する加曽利E Ⅲ式土器であるが、竪穴建物は8棟を数え、そのうち 257号・262号・252号・260号・190号・186号・258号 竪 穴建物が環状配置を示すことが第8節で指摘されてい る。一般に環状配置を示す時期としては、加曽利EⅡ式 段階が知られるが、本遺跡の場合は加曽利EⅢ式段階ま で環状配置が残影化するようである。環状配置は見かけ 上の環状配置のため、時間差も念頭にいれなければなら ず、当該期の意図的な集落設営とまでは断定できない。 その環状配置竪穴建物群には属さないが、172号竪穴建 物と同じH区で検出された183号竪穴建物の出土土器も 加曽利 E Ⅲ式段階に位置付けたい。炉体土器である郷土 式(4)との共伴も注意したい。また深鉢(3)は体部懸垂 文が磨消文ではなく隆線を主描線とする古相を示す一 方、口縁部文様帯の渦巻文と区画文の連接した在り方は 加曽利 E III式の文様構成である。さらに磨消部懸垂文を 配す深鉢(183竪建6)も共伴しており、郷土式と伴に加 曽利 E III式土器組成を具体化する様相である。

加曽利 E III式土器が充実する G 区186号竪穴建物出土土器より幾つかを選んだ。258号竪穴建物と重複しているが新旧関係は不明である。多くの出土土器が 5 のように連接した口縁部渦巻文と区画文構成を呈し、体部は磨消部懸垂文構成を示すようである。その中で、7 の深鉢は体部の磨消部の在り方がH字状と懸架状に単位化しており、懸垂文が多様性を帯びている。口縁部文様帯の在り方は加曽利 E III 式の構成方法であり、体部文様の変化形として注目すべき資料である。また、体部が強く張る6 は大柄の渦巻文構成を示す。「梶山類型」に近い文様構成だが区画内は細条線が充填されており、こちらも変化が窺われよう。その他では深鉢8 は幅狭の磨消部懸垂文が配されており古相と考えられる。また列点刺突文を充填する深鉢口縁部(190竪建7)も伴出しており、土器組成内に若干の時間幅や系統差が見出せよう。

その他の加曽利 E III 式段階の竪穴建物出土土器に190 号竪穴建物の曽利 3 式とみられる深鉢(9)がある。炉内土器であるが、伴出資料に恵まれず加曽利 E III 式土器片が共伴するのみである。先に挙げた183号竪穴建物出土の郷土式と伴に炉に供された異系統の土器として注意したい。郷土式としては258号竪穴建物出土の深鉢(10)が磨消文による懸垂文構成で特徴的である。1号埋設土器(11)も郷土式の体部下半と考えられよう。こちらは隆線による懸垂文構成を示す。

本遺跡は西毛地域にあたることから、信州域の土器群の浸透は容易に推定できよう。本遺跡の郷土式や曽利式はやや客体的な出土量ながら炉体土器や埋設土器に供される傾向を見ると、異系統土器といえども集落内で相応の位置を占める土器群と位置付けられよう。

さて特殊な器形として器台が挙げられる。本遺跡からは破片資料ながら4点が出土している。無文の例が2点(12・13)、有文が2点(14・15)で遺構外出土ながら15は大型品で脚部(体部)全面に沈線文とRLRが施される。残念ながら破片資料のため孔単位などは不明である。15以外は竪穴建物に伴う資料であり、概ね加曽利EⅢ式内部の時間幅で捉えることが可能であろう。

器台は台形土器とも呼ばれ、何らかのものを据える器種として認識されている。多くが東日本に出土が偏り、

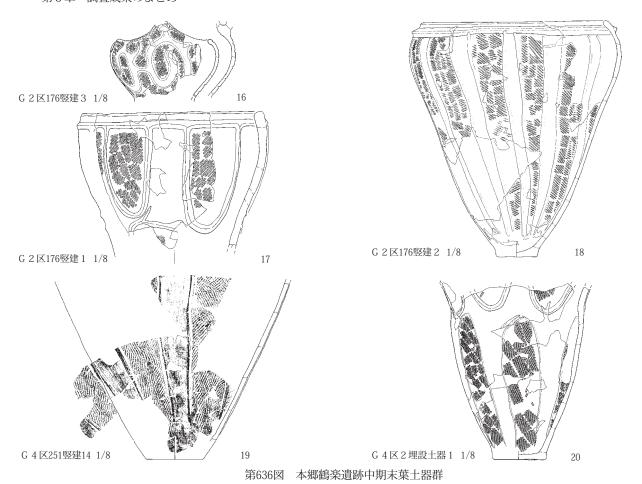
群馬県では中期後半の遺跡より出土が見られ、本遺跡も同様の傾向を見せる。器台の用途として、最近の研究では土器製作時の回転台としての位置付けが知られている。これは上端が広く平坦面ないし凹みが設けられ摩耗痕が見られることから、回転台としての性格が想定されているが、平坦面の確保は土器底部の逆位再利用も想定でき、土器製作回転台の多様性も念頭に置いておきたい。ただし本遺跡で4点とはいえ出土が見られたことから、小規模な集落でも数点が存在する事例として位置付けておきたい。

#### (加曽利EIV式段階)

以上のように本遺跡の縄文時代竪穴建物は加曽利EⅢ 式段階にピークを迎え、環状配置を示すように集落としても安定様相が看取できる。次代の加曽利 E IV式段階になると、竪穴建物数は減り、4軒を数える。本遺跡の敷石住居の事例として、251号竪穴建物と261号竪穴建物を報告したが、まとまった土器の出土量を示す176号竪穴建物出土土器のうち個体図示した3個体を選んだ。第636図16は渦巻状意匠を描く沈線文はやや太く、18の垂下沈線もやや太い。17は太い隆線で主幹文様を描きやや



835



古相を示す。また出土遺構も敷石住居ではなく不整円形を呈す小型竪穴建物である。敷石住居の出土遺物としては251号竪穴建物の大型深鉢(19)が個体図示し得たのみである。細隆線と細沈線による懸垂文構成である。また2号埋設土器(20)は上半が細隆線、下半が細沈線による2帯構成を呈し該期土器資料として位置付けられよう。(敷石住居について)

旧榛名町域では既に高浜広神遺跡や三ッ子沢遺跡で敷石住居が報告されているが、本遺跡の251号竪穴建物は立位の自然石を用いた立体的な出入口部を呈し、他遺跡の敷石住居に比して遜色ない様相を示す。立体的な出入口部はおそらく当時も出入口施設の強調を果たすため、入念な石の配置がなされたものと考えられる。立体的な出入口部の性格として、他者を招き入れる施設として想起され、出入口部を立位の円礫を堅牢に固める様相は他者を強く意識した施設として見ることができよう。

外部からの光線が十分反映する出入口部といえども上屋が存在するはずで、そのため外部からは堅牢な出入口は殆ど窺われずに、他者が内部に入ったとき初めて出入口部の立石の並びを認識できることである。出入口部の

敷石及び立石は他者を招き入れて初めて機能する施設であり、外部からは見ることのできない施設なのである。 検出された敷石住居は視覚的に目立つ遺構であるが、上屋のため外部からは見ることは適わず、居住者にとっては敷石のデザインも堅牢な出入口も来訪者を意識した施設と判断したい。もちろん間取りなどの内的な要因も考えられるが、現代に生きる我々が調査された敷石住居のそのままの姿で当時の居住様相を捉えるのは控えるべきである。

旧榛名町地域には縄文時代遺跡が多く分布する。榛名 山東南麓の縄文遺跡群では屈指の遺跡分布である。本遺 跡は榛名山東南麓域における中期後葉の集落としては小 規模な例ではあるが、本項で述べたように各竪穴建物出 土土器は特徴的で研究上の問題点を多く内包する。周 辺には今後発掘調査や整理調査が見込まれる遺跡が数多 く、それらの資料価値を高める上で、本遺跡の縄文時代 資料が役立つことを切に望む。

# 10 出土施釉陶器について

はじめに

本郷鶴楽遺跡からは緑釉陶器40点、灰釉陶器1,409点 と多くの施釉陶器が出土している。また、施釉陶器の生 産年代と同時期の竪穴建物も多く検出されていることか ら施釉陶器の出土傾向について分析を行うこととした。

緑釉陶器は群間県内での出土は増えてきてはいるが、まだまだ数少ないことから小片でも掲載している。灰釉陶器も可能な限り図示しているが、複数出土している遺構から出土した小片や遺構に伴わない小破片は未掲載としたものがある。分析にあたっては未掲載にした灰釉陶器についても全点について観察し、器種と部位、窯式期の判断を行った。

#### 1 出土した施釉陶器について

施釉陶器は図示できなかった未掲載ものを含めて1,449点が出土している。内訳は緑釉陶器40点、灰釉陶器1,409点である。灰釉陶器は494点を図示し、掲載している。

なお、灰釉陶器で未掲載としたものは、915点である。 **緑釉陶器** 緑釉陶器は、椀・小椀・稜椀・皿の器種が 出土している。各器種の出土量は椀33点、小椀1点、稜 椀2点、皿4点である。生産年代は9世紀代2点、10世 紀代38点である。生産地は京都産1点、東海産37点、近 江産1点、不明1点である。なお、164号竪穴建物から 出土した緑釉陶器椀の9は器面のどこにも施釉された痕 跡がみられないことから素地状態のものと判断した。こ の緑釉陶器素地は極わずかな砂粒を含み、色調は灰白色、 焼成は還元焔であるが軟質な胎土を呈している。形態は 口縁部がわずかに外反し、退化した三日月状の高台であ る。こうした点から東海産、10世紀前半でも中頃に近い 時期の製品とみられる。緑釉陶器素地は南関東の相模で は若干搬入されていることが知られているが、上野では 前橋市田口下田尻・上田尻遺跡から京都産とみられる個 体 1 点注だけである。

灰釉陶器 灰釉陶器は、皿・段皿・輪花皿・折縁皿・耳皿・ 椀・小椀・深椀・輪花椀・稜椀・段椀・短頸壺・長頸壺・ 広口壺小瓶・壺また瓶類・壺蓋など多くの器種<sub>注2</sub>がある。 図示した灰釉陶器では椀類が331点と最も多く、次いで 皿類が124点、瓶類が39点である。未掲載の灰釉陶器では椀類が700点、椀か皿とみられるが明確に区別ができない形態が128点、皿類が39点、瓶類が78点である。

生産地・窯式期別<sub>認</sub>にみると尾張猿投西南麓産は202 号竪穴建物から出土した耳皿だけである。この耳皿は形態から黒笹14号窯式期に比定できる。出土位置は床面から13cmの高さであることから共伴するものと判断したが、202号竪穴建物自体は他の出土土器から10世紀第4四半期から11世紀初頭に比定できる。こうしたことから耳皿は伝世品の可能性もあるが、200年近く伝世している土器・陶器は例が見られない。そのため重複関係にある9世紀代の竪穴建物から混入した可能性も想定される。

この他の灰釉陶器はすべて東濃産とみられるが、光ケ 丘1号窯式期に比定できる個体は掲載した中に9点だけ であった。また、光ケ丘1号窯式期から大原2号窯式期 にかけても掲載12点、未掲載9点とともに0.6%、1.5% とわずかな量であった。掲載した灰釉陶器では大原2号 窯式期が323点と最も多く、次いで虎渓山1号窯式期の 69点、大原2号窯式期か虎渓山1号窯式期かの区分がで きなかった個体の40点、瓶類で胴部片のため窯式期を特 定できない37点、丸石2号窯式期の3点である。未掲載 とした灰釉陶器では体部片など大原2号窯式期と虎渓山 1号窯式期を明確に区分できず大原2号窯式期~虎渓 山1号窯式期としたものが712点、である。以下は大原 2号窯式期の111点、虎渓山1号窯式期の71点、窯式期 の判別ができないものの7点、丸石2号窯式期の2点 である。すなわち大原2号窯式期が30.8%、虎渓山1号 窯式期が9.9%、大原2号窯式期~虎渓山1号窯式期が 53.2%と圧倒的に多くを占めている。

出土遺構 こうした状況は、検出した竪穴建物の変遷に近い推移である。本郷鶴楽遺跡では竪穴建物が214棟検出されている。このうち、時期が判別できたものが201棟ある。古墳時代6世紀から7世紀代が8棟、灰釉陶器の生産が始まる以前の8世紀代が4棟、灰釉陶器の生産が開始される9世紀から、終焉の11世紀前半代にかけてのものが189棟と圧倒的多数を占めている。そのうち、灰釉陶器を出土している竪穴建物は6世紀から8世紀代の混入とみられる竪穴建物を除くと142棟である。さらに9世紀代は前記の黒笹14号窯式期の耳皿1点と光

が丘1号窯式期の12点が7棟の竪穴建物と1基の土坑、遺構外から出土している。しかし、光ケ丘1号窯式期を出土した竪穴建物は後の混入と判断できる7世紀後半代の174号竪穴建物以外は10世紀代のものである。さら伝世した可能性があるのは10世紀前半代の116号竪穴建物1棟だけで、残りの5棟は10世紀後半から11世紀にかけてであり、どのような経緯で持ち込まれたか判然としない点がある。大原2号窯式期は101棟の竪穴建物から出土しているが、10世紀代が97棟と共伴にほとんど齟齬がない。さらに虎渓山1号窯式期では出土した73点のうち47点が竪穴建物からで、10世紀後半が32棟、11世紀前半が1棟と共伴関係に矛盾が生じていない。丸石2号窯式期も6点が出土しており、そのうち2点が竪穴建物からで2棟とも11世紀代で共伴関係に矛盾はない。

#### 2 他の遺跡との比較

周辺遺跡との比較 本郷鶴楽遺跡の周辺では本郷満行原遺跡<sub>注4</sub>や中里見原遺跡<sub>注5</sub>から多くの施釉陶器が出土しており、この2遺跡と比較を行う。北東に接して位置する本郷満行原遺跡は68棟の竪穴建物のほかに礎石をもつ建物や八稜鏡を埋納した土坑が検出され、古代寺院の一部と想定されている。竪穴建物は6世紀から11世紀にかけての時期のもので、施釉陶器を伴う9世紀以降では35棟が存在し、施釉陶器は緑釉陶器9点、灰釉陶器223点が出土している。

鳥川を挟んだ対岸に位置する中里見原遺跡は基壇建物や8世紀から10世紀にかけての竪穴建物57棟、掘立柱建物が検出されている。基壇建物の周囲からは多くの瓦も出土しており、その年代観から8世紀末から9世紀前半に建立されたことがわかっているが、廃絶の時期は不明である。基壇建物はその後、掘立柱建物に建て替えられたとみられ、一定期間存続していたことが想定できる。竪穴建物57棟のうち、9世紀以降のものは47棟が確認できる。施釉陶器は緑釉陶器8点、灰釉陶器69点が出土している。

本郷満行原遺跡や中里見原遺跡のように礎石建物や基 壇建物など寺院を構成する建物が存在する遺跡において も施釉陶器の出土量は本郷鶴楽遺跡に比較すると少ない 状態である。ただし、出土量をそのまま比較しても適正 な比較にならないのは明らかであることから調査面積 100㎡当たりの出土量で比較することとした。その表が第6表である。ここに示したように本郷鶴楽遺跡11.89に対して本郷満行原遺跡1.99、中里見原遺跡0.53と本郷鶴楽遺跡はこの地域では圧倒的な量を有していることになる。

同規模遺跡との比較 次に本郷鶴楽遺跡と同様に平安 時代に集落規模を拡大した遺跡で灰釉陶器を一定量以上 出土、面積比で同様な値を示した遺跡と比較した。なお、ここでは灰釉陶器に主眼を当てた分析であるため第6表 に掲載してある遺跡を対象とする。

平安時代に集落規模を拡大または新たに開発された集落遺跡には吉岡町清里陣場遺跡<sub>注6</sub>、十日市遺跡<sub>注7</sub>、高崎市下芝五反田遺跡<sub>注8</sub>、沼田市戸神諏訪遺跡<sub>注9</sub>などがある。なお、清里陣場遺跡、十日市遺跡、下芝五反田遺跡は古代群馬郡、戸神諏訪遺跡は古代利根郡に所在する。これらの遺跡は8世紀代の竪穴建物が数棟検出されている遺跡もあるが、竪穴建物の棟数が増大するのは9世紀以降である。

この中では清里陣場遺跡が緑釉陶器、灰釉陶器の出土量が多い。緑釉陶器は出土点数では前橋市田口下田尻・上田尻遺跡、天神遺跡に次ぐ量であるが、100㎡当たりの値では天神遺跡の6.54に次ぐ4.1と群を抜いて高い値を示している。灰釉陶器でも数量的には本郷鶴楽遺跡より若干少ない量であるが、100㎡当たりの値は29.9と本郷鶴楽遺跡の2.5倍である。清里陣場遺跡は圃場整備に伴う発掘調査のため道水路が対象であったが、遺跡全体ではこの数倍の量に及んだ可能性が窺え、さらに海老錠や海老錠の一部部位の出土もみられ、倉庫群が存在していたことが想定でき、この地域を開発した集団のなかでも開発を主導した階層が存在していた拠点的な集落と想定できる。

これに対して清里陣場遺跡の北西1.5kmに位置する十日市遺跡は73棟の竪穴建物が検出されているが、灰釉陶器はわずか36点しか出土しておらず、清里陣場遺跡との格差が大きく、一般農民だけでなく本貫地からの浮浪、逃亡した農民を囲い込んだ集落の可能性が窺える。こうした点から施釉陶器の出土量も少なかったとみられる。

下芝五反田遺跡は榛名山南麓に立地する遺跡である。 遺跡地は6世紀前半の榛名山噴火に伴う土石流が厚く堆 積しており、噴火以降は不毛の地と化したが、用水路掘 削の技術が向上したことによって開発が進んだものとみられる。緑釉陶器は本郷鶴楽遺跡よりやや少ない24点、100㎡当たりの値が0.27であるが、灰釉陶器は5,438点、100㎡当たりの値60.1と4倍近くになる。この背景には出土遺物に「犬甘」の銅印や円面硯が出土しており、編集者の松村の指摘する田堵など開発地を主導した富豪の輩や富豪農民の存在が窺える。

戸神諏訪遺跡は県北部の三峰山系戸神山南麓に立地す る遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて繁栄 した集落であるが、古墳時代前期末に忽然と姿を消し、 8世紀後半に4棟の竪穴建物が散発的に構築された。そ の後、9世紀~10世紀に規模を10倍近く増加させ、10 世紀後半まで継続する集落である。この集落の北東部に は9世紀後半に1町近い範囲を区画した内部に3~5棟 の建物が配置される小規模な寺院が建立されている。こ の寺院は出土墨書土器から「宮田寺」と呼称されていたこ とが想定されている。灰釉陶器の出土は23点と少ないが、 隣接する町田十二原遺跡16号竪穴建物※10からは図示さ れているもが12点、さらに図示されていないものが多数 出土している。町田十二原遺跡16号竪穴建物は10世紀後 半に比定される竪穴建物で、出土した灰釉陶器には小瓶 1、椀7、皿1、段皿4点がある。このようなまとまっ た出土は密教法具の飲食具を彷彿させるもの注いで、本 来は金属器が当てられるものであるが、施釉陶器によっ て代用されていたものの一部が残ったとみられる。すな わち、灰釉陶器の出土量は少ないが、祭祀具などに必要 な量は調達されていたとみられる。

遺構の変遷が近い様相を示す遺跡を取り上げたが、遺跡の様相によって灰釉陶器の出土傾向は大きく異なることが分かる。本郷鶴楽遺跡は地域の中では群を向いて多くの灰釉陶器が搬入されているが、開発集落と想定できる集落の中では中規模な様相を示している。

#### 3 本郷鶴楽遺跡からの施釉陶器出土の背景

祭祀具として 本郷鶴楽遺跡から出土した灰釉陶器は 椀が圧倒的な比率を占めているが、椀以外では段皿が比較的多くみられる。段皿と椀で想像させられるのは、前記の沼田市十二原遺跡16号竪穴建物から出土した小瓶と 椀、段皿の組み合わせによる密教法具飲食具としての使用方法である。こうした使用方法は本郷鶴楽遺跡の北西

1.6kmに所在する高崎市神戸宮山遺跡<sub>注12</sub>の8号竪穴建物から出土した灰釉陶器でも見ることができる。神戸宮山遺跡8号竪穴建物からは灰釉陶器の花瓶、小瓶各1、椀4、段皿3があり、これらの灰釉陶器は密教法具での飲食具を構成していたものと想定できる。

本郷鶴楽遺跡でも多くの竪穴建物から椀皿を中心に多くの灰釉陶器が出土しているが、その中でも79号竪穴建物や80号竪穴建物、85号竪穴建物、98号竪穴建物、113号竪穴建物からは20点以上の灰釉陶器が出土しており、神戸宮山遺跡8号竪穴建物に近い組み合わせで灰釉陶器を所有していた可能性が窺える。

また、204号竪穴建物からは銅製小男神立像が出土しており、榛名木戸神社周辺では古瓦の散布から寺院跡<sub>注13</sub>が想定されているので、この寺院に属する僧侶が竪穴建物に居住していた可能性が窺える。

10世紀代の仏教祭祀具は、9世紀代に奈良三彩が多く用いられているのに対して緑釉陶器や灰釉陶器に変化していることが上原十二原遺跡や神戸宮山遺跡の灰釉陶器出土状態からわかる。さらに天禄四(973)年に焼失した薬師寺注14では僧坊では小金銅仏とともに奈良三彩が祭祀具としてして使用されていたことがわかっているが、真言宗の請雨祈雨の修法に緑釉陶器が使用される注15など施釉陶器が祭祀に使用されていた例が知られている。地方では都城ほど緑釉陶器の入手が容易ではなかったとみられることから灰釉陶器が緑釉陶器の代用とされたことは町田十二原遺跡や神戸宮山遺跡の例から明らかであり、本郷鶴楽遺跡でも寺院や僧侶が使用していた祭祀具が分散してしまった可能性がある。

再分配について 本郷鶴楽遺跡では6世紀から7世紀にかけて長堂や総柱の掘立柱建物が方向を同じか直交するように配置されている。この掘立柱建物群は奥原古墳群を造った家長層の中でも上位の階層の居宅と想定できる。こうした居宅の豪族が古墳造営の規制が行われるなかで寺院を創建し、集落を拡大していったと想定できる。

しかし、10世紀代には奥原古墳群の墓域にも竪穴建物が進出しており、掘立柱建物群の居宅を本拠地とする豪族から編集者が想定する富豪層に支配層が変化したことが窺える。こうした富豪層の代替えは郡司の任用方法の変化からも読み取れる。特に弘仁三(812)年に郡司の採用が国司へ移管<sub>注6</sub>されて以降、従来の譜第の名のもと

に郡司を輩出していた伝統的な豪族氏族による在地支配 から後退していったことが明らかにされている。こうし た譜第豪族は郡内に複数存在していており、本郷鶴楽遺 跡に居館を構えていた豪族もその一人であった可能性は 高い。また、郡司クラスの豪族ではなくても従来の勢力 はいろいろと在地に影響力があることから、国司からは 疎まれた存在であったことは想像に容易い。こうしたこ とから国司としては新たな地域開発の担い手に富豪の輩 など新興勢力を配置したことが分かっている。こうした、 新興勢力は国司と結びつくことによって奢侈品である施 釉陶器を容易かつ多く入手できたことが想定できる。そ の結果、農繁期に田夫を雇傭するため魚酒を提供し労働 力を確保したのと同様に奢侈品である灰釉陶器を配下の 多くの農民に与える再配分によって多くの竪穴建物から 出土していることや10世紀後半の竪穴建物から竪穴建物 の時期と生産年代に差のある大原2号窯式期の製品が多 く出土していることに結びついているとことが窺える。 以上のようなことから本郷鶴楽遺跡では多くの竪穴建物 から灰釉陶器が出土する結果になったのではないだろう か。

#### おわりに

今回、施釉陶器の出土について考察する中で背景については状況証拠的な要素も多くあるが、奥原古墳群の造営、古代寺院建立、そして集落の拡大、さらに墓域への集落進出など広範囲に発掘調査が行われたこの地域では様々な成果が得られたことから、想定したことは大きな違和感はないと考える。今後、9世紀以降の豪族居宅などの発見によって更なる確証が得らえるものと考える。

注

注1 前橋市田口下田尻遺跡XII区16号竪穴建物 4 ・5 が緑釉陶器素地、(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『田口下田尻遺跡』

注2 猿投山古窯跡群産の灰釉陶器の器種や編年については城ケ谷和広 2015「編年論」『愛知県史 別編 古代猿投系 窯業1』、古代の土器研究 会1994『古代の土器研究―律令的土器様式の東・西3施釉陶器―』、

東海土器研究会2015 『第3回東海土器研究会 灰釉陶器生産における地方 窯の成立と展開』を参照した。

注3 注2と同じ

注4 現在、整理作業中、2023年3月に刊行予定。

注5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『中里見遺跡群』に掲載されている中里見原遺跡から抽出した。

注6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1981『清里陣場遺跡』による。

注7 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『十日市遺跡・住遺跡・千 代開南遺跡・千代開北遺跡』による。

注8 拙稿1999「V考察2.出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡―奈良・

平安時代以降編― (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』による。

注9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『戸神諏訪遺跡』による。

注10 沼田市教育委員会1993『沼田北部地区遺跡群Ⅱ(町田十二原遺跡)』 による。

注11 神谷佳明2001「緑釉陶器にみる古代上野国」『研究紀要』19号(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団にて指摘。

注12 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『高浜向原遺跡・神戸宮山遺跡・神戸岩下遺跡』による。

注13 奥原古墳群の東に所在する榛名木戸神社の南東では古瓦の散布が確認されており、『榛名町誌』では寺院跡を想定している。榛名町誌編さん員会2011『榛名町誌 通史編上巻 原始古代・中世』による。

注14 森 郁夫・吉田恵二・巽淳三郎・山崎信二1987「第VI章 考察 2.土器」『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所による。

注15 桐原 健1976「土壙出土の緑釉陶器の性格」『信濃』第38巻9号信濃 史学会による。

注16 『日本後記』による。

#### 引用・参考文献

古代の土器研究会1994『古代の土器研究―律令的土器様式の東・西3施釉 陶器―』

東海土器研究会2015 『第3回東海土器研究会 灰釉陶器生産における地方 窒の成立と展開 』

愛知県史編さん委員会2015『愛知県史 別編窯業 1 古代 猿投系』 愛規 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1981『清里陣場遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下東西清水上遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『下芝五反田遺跡―奈良・平安時代 以降編―』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『波志江中野面遺跡(1)』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『波志江西屋敷遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『稲荷台道東遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『下原遺跡Ⅱ』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『楡木Ⅱ遺跡(1)』

前橋市教育委員会2012『山王廃寺一平成22年度調査報告一』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『新屋敷遺跡・上西根遺跡・関遺跡(1)』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『十日市遺跡・住遺跡・千代開南遺跡・千代開北遺跡』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『関根細ケ沢遺跡』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『日輪寺観音前遺跡』

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『田口下田尻遺跡』

高崎市教育委員会2001『保渡田徳昌寺遺跡・三ツ寺大下IV遺跡』

前橋市教育委員会·前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987『天神遺跡』・、1989『天神 Ⅱ遺跡』

前橋市教育委員会2008『天神Ⅲ遺跡』

三浦京子1988「群馬県における平安時代後期の土器様相―灰釉陶器を中心として―」『群馬の考古学 創立十周年記念論集』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信1992「群馬における施釉陶器の様相について(1)」『研究紀要』9(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

神谷佳明1999「V考察2.出土施釉陶器について」『下芝五反田遺跡―奈良・ 平安時代以降編―(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』

神谷佳明2017「田口下田尻遺跡出土の施釉陶器について」『田口下田尻遺跡』 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

神谷佳明2022「第5章糸井宮ノ前遺跡出土の灰釉陶器について」『糸井宮 ノ前遺跡』昭和村教育委員会

第6表 群馬県内の施釉陶器出土遺跡の比較

						緑釉	陶器	灰釉	陶器	
郡	遺跡名	所在地	性格	時 代	調査面積	出土 点数	100㎡ あたり の出土 点数	出土 点数	100㎡ あたり の出土 点数	備考
	本郷鶴楽遺跡	高崎市本郷町	本郷満行原遺跡 寺院に関連する 集落	平安時代中心	11,855	40	0.337	1,409	11.89	小男神立像、経筒蓋他
	本郷満行原遺跡	高崎市本郷町	寺院、集落	古墳時代~平安時代	11,205	9	0.080	223	1.99	寺院は7世紀末創建 か。銅鏡を埋設した 土坑
	本郷上ノ台遺跡	高崎市本郷町	集落	古代	1,076	1	0.093	4	0.37	
	本郷広神遺跡	高崎市本郷町	集落	古代	1,864	0		7	0.38	
	本郷鴫上遺跡	高崎市本郷町	集落	古代	2,462	0	0.047	15	0.61	8号竪穴建物から10
	本郷萱原遺跡	高崎市本郷町	集落	古代	2,130	1	0.047	128	6.01	点出土
	本郷大カサ遺跡 神戸宮山遺跡	高崎市本郷町 高崎市神戸町	集落	古代古代	5,322 3,076	2	0.038	124 11	0.02	礎石建物、瓦
	中里見原遺跡	高崎市中里見町	寺院・集落	古代	12,930	8	0.062	69	0.53	
	元総社寺田遺跡	前橋市元総社町	国府域の祭祀	古墳時代~平安時代	4,550	11	0.24	547	12.0	
	天神遺跡(Ⅱ・Ⅲを 含む)	前橋市元総社町	国府域の祭祀、 集落	古墳時代~平安時代	2,722	178	6.54	1,965	72.2	
	百07   稲荷塚道東遺跡	前橋市総社町	国府周縁の集落	平安時代	6,500	0	0	223	3.4	
群馬	山王廃寺	前橋市総社町	寺院	飛鳥時代創建(白鳳寺 院)	1,431	36	2.5			
	下東西・清水上遺跡	前橋市青梨子町	集落・富豪層の 居宅	飛鳥~平安時代	8,225	51	0.6	1,162	14.1	居宅は飛鳥時代末
	沼南遺跡	吉岡町大久保	開発集落	縄文時代、平安時代 (10C.後半~)	4,125			23	0.6	当該期竪穴建物68棟
	清里・陣場遺跡	吉岡町陣場	空間地開発の拠 点集落	平安時代	4,130	168	4.1	1,234	29.9	
	前橋市0107遺跡		清里・陣場遺跡 の周縁部か	古墳時代後期・平安時 代	6,945	3	0.043	133	1.915	
	中御所遺跡	吉岡町陣場	清里・陣場遺跡 の周縁部か	平安時代	1,978	1	0.051	65	3.286	
	十日市遺跡	吉岡町南下	空閑地開発の集 落	平安時代	13,170	0	0	36	0.003	
	阿久津遺跡・万蔵寺 廻り遺跡	吉岡町漆原	空閑地開発の集 落	平安時代(10C.後半~)				23		当該期竪穴建物47棟
	石原東遺跡	渋川市石原	集落・富豪層の 居宅、鉄生産	飛鳥~平安時代	4,970	5	0.101	546	11.0	
	三ツ寺大下Ⅳ遺跡	高崎市三ツ寺	拠点集落	平安時代	3,700	116	3.1	82	2.2	区画施設
	下芝五反田遺跡	高崎市下芝町	空閑地開発の集 落	平安時代	9,050	24	0.27	5,436	60.1	
	米山遺跡	安中市安中	郡家周辺の集落	古墳時代~平安時代	9,677	47	0.5	1,124	11.6	須恵器の流通拠点か
碓氷	松井田工業団地遺跡	安中市松井田町 人見	集落	古墳時代~平安時代	92,960	1	0.000	47	0.001	
	仁田遺跡	安中市松井田町 入山	集落	縄文時代・平安時代	約600	-	_	95	15.8	入山峠の麓、交通の 拠点。
	田口下田尻遺跡遺 跡、 田口上田尻・下田尻 遺跡	前橋市田口町	集落	古墳時代、飛鳥~平安 時代	31,115	195	0.63	3,288	10.6	
	関根細ケ沢遺跡	前橋市関根町	集落	平安時代	9,303	20	0.215	109	1.2	
	日輪寺観音前遺跡	前橋市日輪寺町	集落	平安時代	9,207	7	0.076	568	6.2	
那波	福島曲戸遺跡	玉村町福島	集落、富豪層の 居宅	平安時代	11,399	117	1.03	2,011	17.6	
	関遺跡・上西根遺跡	伊勢崎市本関町 他 田勢崎市波志江	集落 空閑地開発の集	古墳時代~平安時代	5,669	0	0	16	0.003	
佐位	波志江中野面遺跡	伊勢崎市波志江 町	落	平安時代	20,954	4	0.000	24	0.001	
	波志江西屋敷遺跡	伊勢崎市波志江 町	空閑地開発の集落	平安時代	18,215	0	0	25	0.001	
	戸神諏訪遺跡	沼田市町田町	落、寺院	弥生~古墳前期、平安 時代	31,500			32	0.102	当該期竪穴建物85棟
利根	町田十二原遺跡	沼田市町田町	空閑地開発の集 落	平安時代	3,050			18	0.590	当該期竪穴建物47棟
	後田遺跡	みなかみ町師	集落	縄文時代、古墳~平安 時代	20,302			65	0.320	当該期竪穴建物28棟
吾妻	下原遺跡	長野原町林	山間地開発の集 落・交通路の祭 祀	平安時代	15,495	0	0	144	0.9	当該期竪穴建物2棟
	楡木Ⅱ遺跡 斜数字は報告書に掲載	長野原町林	山間地開発の集 落	平安時代	13,000	0	0	183	1.4	当該期竪穴建物31棟

斜数字は報告書に掲載されている個体のみ、未掲載分を含まない。

# 報告書抄録

書名ふりがな	ほんごうかくらいせき							
書名	本郷鶴楽遺跡							
副書名	西毛広域幹線道路(高崎西工区)社会資本総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書							
シリーズ番号	723集							
編著者名	松村和男/神谷佳明/山口逸弘/奈良貴史							
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団							
発行年月日	20230320							
作成法人 ID	21005							
郵便番号	377-8555							
電話番号	0279-52-2511							
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2							
遺跡名ふりがな	ほんごうかくらいせき							
遺跡名	本郷鶴楽遺跡							
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしほんごうまち							
遺跡所在地	群馬県高崎市本郷町							
市町村コード	10202							
遺跡番号	H082E							
北緯(世界測地系)	36° 36′ 35″ 8							
東経(世界測地系)	138° 93′ 26″ 3							
調査期間	20180101-20180331 20180801-20190228							
調査面積	11,855.0							
調査原因	道路建設							
種別	集落/墓/畑							
主な時代	中・近世 / 平安 / 古墳 / 縄文							
遺跡概要	中・近世-道1+溝14+土坑39+土坑墓1+畑3-陶磁器/平安-道6+溝10+竪穴建物202+竪穴 状遺構1+掘立柱建物1+土坑339+土坑墓2+火葬遺構6+ピット列5+ピット197-土器+石 製品+金属器/古墳-古墳1+竪穴建物12-土器+石製品+金属器/縄文-竪穴建物14+溝1+土坑 49+ピット65+埋甕2+集石2+列石2-土器+石器							
特記事項	縄文時代中期後葉の柄鏡形竪穴建物や土坑、古代の掘立柱建物群、平安時代10~11世紀 の道や竪穴建物など。平安時代の竪穴建物から小男神像や経筒の蓋、石帯などが出土した。							
要約	縄文時代の集落は中期後葉のものであり、柄鏡形竪穴建物や土坑、古代の掘立柱建物はほぼ東西南北を向くものと斜め45度を向く一群があり、前者には平安時代10~11世紀の道や竪穴建物などが伴い、後者には建物の並びからその北側に沿うように道があった可能性が考えられる。両側側溝の道は東西走向と南北走向のものがあり、両者は調査区外で直交するか直角に曲がるものである。両者ともややズレた位置にほぼ平行もしくはやや斜めに走る別の道があり、造り直されているものと考えられる。平安時代末期の竪穴建物から銅製の小男神像や経筒の蓋などの宗教的な遺物が出土した。							

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調查事業団調査報告書 第723集

本郷鶴楽遺跡 - 第2分冊・本文編2-

西毛広域幹線道路(高崎西工区)社会資本総合整備事業に伴う 埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

令和5(2023)年3月15日 印刷 令和5(2023)年3月20日 発行

編集・発行/公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2 電話(0279)52-2511(代表) ホームページアドレス http://www.gunmaibun.org/

印刷/上武印刷株式会社

